

2017（平成 29）年度 人間発達環境学研究科・発達科学部
年 次 報 告 書

神戸大学大学院人間発達環境学研究科・発達科学部

はじめに

本年次報告書は、人間発達環境学研究科・発達科学部における平成29年度の教育・研究・社会貢献等の活動の記録や取り組み内容が記載されたものである。

平成29年度における研究科に関わる大きなトピックは、国際人間科学部の第一期生を迎えたことである。本年度より発達科学部と国際文化学部の再編統合によって設置した国際人間科学部が始動したことは、研究科においても非常に意義深いものといえる。

また、平成29年度の重要な取り組みとして、5年振りに本研究科に対する外部評価を受けたことがあげられる。その評価では、学際系の研究科として、教育・研究・社会的活動の成果を着実に蓄積していること、またそれらの活動は5年間で大きく発展・深化していること、正課外の活動を研究との関わりのなかで実践的に取り組んでいること、発達支援インスティテュートにおいて展開されている多様な社会的活動の成果が論文だけでなく、社会に還元されていること、地域の課題に対して、その地域の人々を取り込む形で、研究と教育と社会活動を一体のものとして展開していること、及び高齢化、貧困、環境、共生社会などといったグローバルな課題に関する国際共同研究の推進やそれらの研究に学生を参画させる多様な取り組みが実施されていることなどが高く評価されている。

その一方で、本研究科が取り組んでいる多様な活動を将来にわたって継続・発展させていくために解決しなければならない組織、研究、教育等に関する課題も指摘された。すなわち、研究科の規模に応じた学際研究・文理融合研究のアウトプットの必要性、多くの環境系教員が参画できるための枠組みづくりの必要性、多種多様な社会的活動を展開・維持していくために不可欠な大型の外部資金の獲得の必要性、及び優秀な留学生の積極的獲得の必要性などである。

平成26年4月に公表された本研究科に対するミッションの再定義の最後には「今後、人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉えるため、異なる専門分野間の連携等に重点的に取り組むなど、総合的な研究を組織的に推進することや、我が国社会の課題解決、文化の発展に貢献することをめざすことが期待される」と締めくくられている。

外部評価の結果は、本研究科がこれまで標榜してきた、研究科の「知」のアイデンティティを守るべく、着実に教育・研究・社会貢献に係る実績を重ねてきたことを示す証左であるとともに、ミッションの再定義で記された研究科に対する期待に応えるものである。

このような数々の成果を生み出すことができたのも、教職員の方々のご協力とご尽力の賜物であり、ここに深く感謝する次第である。

今後は、外部評価で指摘された課題の解決をめざすだけでなく、研究科を取り巻く様々な状況の変化を踏まえながら、受容性と柔軟性のある対応を図りたいと考えている。

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一)

2017(平成29)年度
人間発達環境学研究科・発達科学部 年次報告書 目次

はじめに

目次

1.平成29年度の取り組みの概要	1
1.1.神戸大学の施策に関わる取り組み	1
1.2.部局としての取り組み	3
1.3.外部評価	5
2.学部・大学院運営	6
2.1.学部・大学院運営組織	6
2.2.管理運営	7
2.2.1.学域人事委員会	7
2.2.2.研究科運営委員会	10
2.2.3.教員活動評価委員会	12
2.2.4.中期計画推進委員会	13
2.2.5.自己評価委員会	13
2.2.6.安全衛生委員会	14
2.3.予算	15
2.3.1.予算に関する特記事項	15
2.3.2.予算関係の審議等の状況	16
2.3.3.外部資金獲得状況(教員及び学生)	16
2.4.広報及び情報公開	17
2.4.1.パンフレット, ウェブサイト等	17
2.4.2.人間発達環境学研究科 オープン・らぼ	18
2.4.3.ホームカミングデイ	18
2.5.環境設備	20
2.5.1.教育・学習環境の整備	20
2.5.2.交流ルーム・アゴラ	22
2.6.教員研修	23
2.6.1.FD	23
2.6.2.初任者研修	23
3.入試	23
3.1.一般選抜入試	23
3.1.1.入学試験委員会	23
3.1.2.一般選抜入試に係る総括と課題	24
3.2.特色ある入試	25
3.2.1.3年次編入学試験	25

4. 国際交流活動	25
4.1. 学術交流協定	25
4.2. 留学生	26
4.3. ダブルディグリー	28
4.4. Innovative Asia	28
4.5. 学生・教員・職員の海外派遣	28
4.6. 海外研究者等の招聘・訪問	31
4.7. 「英語による授業の実践－ESD 研究」	31
4.8. スタディツアー	32
5. 教育	35
5.1. 教育課程	35
5.1.1. 今年度の特徴	35
5.1.2. 研究科，専攻共通科目	36
5.1.3. 教職教育	38
5.1.4. 博物館学芸員資格	40
5.1.5. ESD サブコース	42
5.1.6. ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント	43
5.1.7. 神戸グローバルチャレンジプログラム	43
5.2. 各学科等の教育	44
5.2.1. 人間形成学科	44
5.2.2. 人間行動学科	46
5.2.3. 人間表現学科	48
5.2.4. 人間環境学科	53
5.2.5. 発達支援論コース	54
5.3. 各専攻講座の教育	55
5.3.1. 人間発達専攻	55
5.3.2. 人間環境学専攻	59
6. 進路	60
6.1. キャリア形成支援	60
6.1.1. キャリアサポートセンター	60
6.1.2. 学振特別研究員申請支援	72
6.2. 卒業・修了後の進路	72
7. 研究	73
7.1. 今年度の特徴	73
7.1.1. 研究動向	73
7.1.2. 学生の受賞	74
7.2. 学術 WEEKS	77
7.2.1. 学術 WEEKS の各事業・セミナー	78
7.3. 研究科支援プロジェクト研究	95
7.4. 高度教員養成プログラム	99

7.5.研究推進	100
7.5.1.研究推進委員会	100
7.5.2.研究倫理審査委員会	102
7.5.3.紀要編集委員会	102
7.6.各専攻の研究	102
7.6.1.人間発達専攻	102
7.6.2.人間環境学専攻	139
8.産官学共同・地域連携による教育・研究活動	149
8.1.産官学共同プロジェクト	149
8.2.地域連携プロジェクト	154
8.3.高大連携	157
9.社会的活動・震災復興支援	158
9.1.メンタルケア関係	158
9.2.災害地への支援活動	159
10.附属施設	160
10.1.発達支援インスティテュート	160
10.1.1.発達支援インスティテュート運営委員会	160
10.1.2.心理教育相談室	162
10.1.3.ヒューマン・コミュニティ創成研究センター	163
10.1.4.のびやかスペースあーち	175
10.1.5.サイエンスショップ	185
10.1.6.教育連携推進室	192
10.1.7.アクティブエイジング研究センター	192
10.2.実習観察園の運営利用状況	198

1. 平成 29 年度の取り組みの概要

1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み

1.1.1. 神戸大学機能強化改革

(1) 神戸大学ビジョンの実現に向けた戦略

平成 28 年度から第 3 期中期目標・中期計画期間が始まった。神戸大学は、第 3 期中期目標・中期計画期間（H28 年度～H33 年度）における神戸大学の機能強化改革として、平成 27 年 4 月に神戸大学ビジョンとして、先端研究・文理融合研究で輝く卓越研究大学をかかげ、平成 27 年 6 月に文部科学省「国立大学経営力戦略」の 3 つの重点支援の枠組みの重点支援③「海外大学と伍して、全学的に卓越した教育研究，社会実装を推進する取組を中核とする国立大学」を選択した。

第 3 期中期目標・中期計画期間におけるビジョンの実現に向けて、以下の 5 つの戦略が実施されている。

- ・戦略 1：先端研究の推進
- ・戦略 2：社会課題を解決する文理融合研究の推進
- ・戦略 3：先導的研究成果の社会実装への取組み
- ・戦略 4：世界で活躍できる人材の育成
- ・戦略 5：大学運営基盤の改革

なお、国際人間科学部の設置は戦略 4「世界で活躍できる人材の育成」に位置づくものである。

(2) 神戸大学ビジョンを支える新たな教員組織・人事システム

平成 28 年 5 月 19 日開催の教育研究評議会において「神戸大学ビジョンを支える新たな教育組織・人事システム（案）」が承認された。この教員組織・人事システムは、教員の流動性の向上，組織間の教員配置の最適化，柔軟な改組の実現，教員数及び若手ポストの増加をねらいとし，教員の教育研究組織からの分離，ポイント制の導入及び学長裁量戦略枠の設定などを柱としたものである。

平成 28 年 10 月から教員組織と教育研究組織の分離が実施され，当研究科教員の全員が人間発達環境学域の所属となった。また，同時に教員人事委員会が設置され，教授人事の審査，及び採用・昇任人事に伴うポイントの管理が行われることになった。そして，平成 29 年 4 月にポイント制が正式導入された。

1.1.2. 教職課程再課程認定

平成 28 年 11 月に教育職員免許法が改訂された。この背景には，社会環境の急速な変化と学習指導要領の改訂を踏まえ，教職課程において，より実践力のある教員を育成する必要

性の高まりがあるとされる。改定の趣旨としては、①教職科目区分の大括り化（従来の「教科に関する科目」「教職に関する科目」を大括り化した「教科及び教科の指導法に関する科目」の設定など）、②新たな教育課題に対応できる科目の新設（「特別の支援を必要とする幼児、児童生徒に対する理解」、「総合的な学習の時間の指導法」、小学校「外国語」指導法など）、③履修内容の充実（「コアカリキュラム」に基づく授業内容構成の要請）が挙げられる。この免許法改訂を受け、教員養成課程を持つすべての大学、学部等、並びに専修免許課程を持つすべての大学院が再課程認定を受けることとなった。

本学では、すでに国際人間科学部発足に際して平成 28 年度に課程認定を受けていたが、このたび、改めて全学規模で再課程認定の申請に臨むこととなった。

以下、この課題に係る、いわゆる発達系（国際人間科学部のグローバル文化学科を除く 3 学科および人間発達環境学研究科）における本年度の動きを時系列で整理する。

○平成 29 年 7 月 21 日（金）

文部科学省による教職課程再課程認定説明会が岡山大学で開催された。（学務部職員が出席）

○平成 29 年 7 月 25 日（火）

学内で関係部局を対象に教職課程再課程認定説明会が開催された。

○平成 29 年 8 月 2 日（水）

発達系での再課程認定への対応と書類作成についての打ち合わせのため会合が持たれ、同時に、人間発達環境学研究科・発達科学部教職課程認定WGが発足した。再課程認定が必要な免許種、教科としては、次のようになった。

幼一種

小一種

中一種（保健体育・音楽・美術・理科・数学・家庭・社会）

高一種（保健体育・音楽・美術・理科・数学・家庭・地理歴史・公民）

幼専修

小専修

中専修（保健体育・音楽・美術・理科・数学・家庭・社会）

高専修（保健体育・音楽・美術・理科・数学・家庭・地理歴史・公民）

○平成 29 年 9 月～10 月

新旧対照表、教職課程コアカリキュラム対応表、外国語（英語）コアカリキュラム対応表、対応する学部規則の作成がなされ、集約された。全学の申請書類が一括され、文部科学省に仮申請がなされた。

○平成 29 年 11 月 17 日（金）

教職課程専門委員会委員長および学務部による文部科学省での事前相談を行った。

○平成 30 年 1 月末まで

文部科学省からの指摘事項の対応と、提出が必要なシラバス・履歴書・業績書の作成が

なされた。

○平成 30 年 3 月 20 日（火）

学務部から文部科学省へ再課程認定の書類を提出した。

（人間発達環境学研究科・発達科学部 教職課程認定 WG 主査 吉永 潤）

1.1.3. 附属中等教育学校を活用した高大接続研究

「神戸大学－附属中等教育学校高大接続研究」

神戸大学が、「グローバルキャリア人の育成」を教育目標に掲げる附属中等教育学校を活用した高大連携・接続の在り方に関して行う研究に対し、多数の発達科学部（人間発達環境学研究科）の教員が積極的に協力した。具体的な連携事業としては、学部が実施するグローバルな課題に関するアクティブ・ラーニングに対して、附属中等学校生徒に参画してもらう「グローバル・アクション・プログラム」や、附属中等教育学校生徒が卒業研究として取り組む研究に大学教員が指導・助言を行う「課題研究」などがある。前者については、平成 29 年度の附属中等教育学校からの参加者は 29 名であったが、そのうち 14 名が発達科学部教員の協力するプログラムに参画した。後者の課題研究については、教育研究アドバイザーである発達科学部（人間発達環境学研究科）教員が、附属中等教育学校 4 年生から 6 年生の生徒に対して、研究の進め方や分析のしかたについての講義や、発表会での講評などを行った。

（神戸大学附属中等教育学校 教育研究アドバイザー 林 創）

1.2. 部局としての取り組み

1.2.1 平成 31 年度概算要求

神戸大学ビジョンの実現に向けた戦略のなかに「戦略2：社会課題を解決する文理融合研究の推進」が挙げられる。その戦略のなかの取組として、「取組4：都市レジリエンスから未来世紀都市学へ」がある。

平成30年度の概算要求において、この取組の拡充として、「コミュニティにおける社会的連携やネットワークなどの社会関係資本の構築に資するプログラム開発」を提案し、平成30年度概算要求学内ヒアリングにおいて説明を行ったところ、本研究科案が平成30年度に取り込まれることになった。平成30年度に拡充する内容は、次のように記されている。前年度までの学内組織の整備を得て、未来世紀都市学の高度化をはかる。すなわち、1)学外機関との共同研究を加速する、さらに、2)未来世紀都市を支える多様な人々のwell-being（人々の安全・安心の確保と豊かで質の高い生活）を実現するために、『well-being研究拠点』を新たに設置し、その下で、多様化するアジア諸国の保健衛生課題の解決を目指す「アジア健康科学研究ユニット」、並びに、都市における人々の社会的連携や協調を実現させるプログラムの構築を目指す「社会関係資本研究ユニット」を設置する。これらによって、ハードとソフトの両面から、人々を主体とした未来世紀都市学を具現化し、国内外への社会実装を推進する。

特に本研究科に関わる内容としては、「都市における人々の社会的連携（結束力、絆）やネットワーク等の社会関係資本を重視した持続可能なコミュニティ形成および環境形成プログラムを考究し、社会実装できるように、『社会関係資本研究ユニット』を設置する」という内容である。

平成30年度の概算要求は、戦略「社会課題を解決する文理融合研究の推進」を念頭に置きながら、主として人間発達専攻の強みを出すような要求案を考えた。

そこで、平成31年度の概算要求を考えるにあたり、人間環境学専攻の特色を示すような要求案について、丑丸敦史教授、片桐恵子准教授、佐藤真行准教授、野中哲士准教授、副研究科長、研究科長のメンバーで検討を重ね、「大都市化・高齢化時代における持続的環境共生社会のデザインー環境・生態系の個人的認識を社会的意思決定につなぐコミュニティの役割ー」という取組名を考えた。この取組の概要は、「都市の巨大化に伴い、人間のWell-Beingに不可欠な生態系サービスを供給する環境の劣化が進んでいる。同時に、高齢化などの人口構造の変化及び生態系サービスの需要側のライフスタイル等の変化が生じ、環境保全の再考が求められている。本取組では、都市環境・生態系に対する個人の認識を社会的な意思決定（評価と保全）につなぐコミュニティの役割を総合的に研究することにより、持続的環境共生社会をデザインする。」というものである。なお、実施主体は、人間発達環境学研究科であり、人文学研究科、国際文化学研究科、経済学研究科、工学研究科及び農学研究科に対し協力をお願いし、了解を得た。

（人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一）

1.2.2. 外部との連携

第40回国立大学法人大学院環境科学関係研究科長等会議

7月7日、新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」にて、新潟大学大学院自然科学研究科がホスト校を勤める第40回国立大学法人大学院環境科学関係研究科長等会議が開催された。本研究科としては3度目の参加となった。本年度は、環境省自然環境局野生生物課から「トキの保護に関する取組」および新潟大学の教員により「北極海氷減少と、その気候学的影響」、「森からの警告ー野生動物の生態と被害の現状ー」の講演が行われた。また、各研究科等における環境関連の研究教育の取組みについて、1)外国人留学生への支援内容・体制の整備、留学生を受け入れやすい環境づくり、英語による授業科目の開講状況などについて、および2)環境科学人材の輩出について、という協議題について意見交換を行った。

（会議出席者 副研究科長 青木茂樹）

1.2.3. F棟改修（平成28年度国立大学法人等施設整備実施事業）

F棟の改修が平成28年度国立大学法人等施設整備実施事業に係る平成28年度補正予算「事業名『神戸大学（鶴甲2）総合研究棟改修』」により行われた。改修後のF棟の2階にはGSP（グローバル・スタディーズ・プログラム）オフィス分室、国際交流ルーム（グロー

バル サイエンス カフェ), ラーニングcommons, アクティブラーニング対応の講義室などが配置され, 1階には5つのアクティブラーニングルーム, ラーニングcommons, 電子情報閲覧室 (RIE), 会議室などが配置されている。

F棟改修にあたっては, F棟改修検討WGを設置し, 関係者との意見交換を重ねながら, スムーズな改修が行われた。WGメンバーの河辺章子教授, 岸本吉弘准教授, 長坂耕作准教授に感謝したい。

改修工事は, 平成29年11月6日に完了し, その後, 11月16日~11月21日に什器の搬入や教員研究室の引っ越しが行われ, 12月6日にすべての部屋の使用が開始された。

平成29年11月30日には, F棟改修完了の見学会が開催された。武田学長をはじめ, 水谷理事, 吉井理事・事務局長, 正司学長顧問, 岡田国際人間科学部長, 大月同副学部長, 櫻井国際文化学研究科長, 西谷同副研究科長, 上野同副研究科長, 宮嶋紫陽会会長, 小紫事務部長, 佐々木鶴一事務課長, 川端鶴二事務課長の出席のもと, 岡田人間発達環境学研究科長の説明により, F棟の見学を行った。

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一)

1.3 外部評価

人間発達環境学研究科は, 平成25年4月より, 『人間発達専攻(「心身発達専攻」「教育・学習専攻」「人間行動専攻」「人間表現専攻」の4専攻を改組統合)』と『人間環境学専攻』からなる2専攻体制となった。また, この研究科改組とほぼ歩調を合わせて「ミッション再定義」の策定作業が進められ, その結果, 本研究科は学際分野としての評価を受け, 今後, 「人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉えるため, 異なる専門分野間の連携等に重点的に取り組むなど, 総合的な教育研究を組織的に推進すること」が社会的役割(ミッション)として要請された(平成26年4月公表)。

このような状況を踏まえ, 平成24年度から平成28年度に至る本研究科の教育・研究の取組みを, ミッションとの関わりにおいて客観的に点検評価するために, 外部の識者(外部評価委員)による外部評価を受けた。外部評価の資料として, 『人間発達環境学研究科 自己評価報告書 研究・教育の現状と課題 2012(平成24)年度~2016(平成28)年度』を作成するとともに, 加藤佳子自己評価委員長のもと, 外部評価のための関連資料として, 本研究科の修了生を対象としたアンケート調査を実施し, 『神戸大学大学院人間発達環境学研究科 修了生アンケート結果報告書』を作成した。

外部評価のための公開ヒアリングは, 平成29年11月6日(月), 人間発達環境学研究科大会議室において行われ, 外部評価委員長は杉万敏夫氏(九州産業大学国際文化学部教授), 外部評価委員は小川正賢氏(東京理科大学科学教育研究科教授)及び中静透氏(総合地球環境学研究所特任教授)に務めて頂いた。なお, 公開ヒアリングは, 台風接近のため, 当初予定の平成29年10月23日から急遽同年11月6日に延期された。それにより中静透委員が

欠席されたため、岡田修一研究科長及び青木，小高両副研究科長が，同年 12 月 22 日に総合地球環境学研究所に中静透委員をお訪ねして本研究科の活動の概要をご報告し，インタビュー形式にてご意見・ご指摘を頂いた。公開ヒアリングの詳細は、『神戸大学大学院人間発達環境学研究科外部評価実施報告書』を参照されたい。

* 発達科学部と国際文化学部の統合により，平成 29 年度から「国際人間科学部」が発足した。このため，今回の外部評価は人間発達環境学研究科を対象とした。

(外部評価実行委員長 小高直樹)

2. 学部・大学院運営

2.1. 学部・大学院運営組織

神戸大学大学院人間発達環境学研究科及び発達科学部は，以下の組織により運営されている。

<教授会等>

人間発達環境学域会議，大学院人間発達環境学研究科教授会，発達科学部教授会

以下に委員会等の組織を列記する。その際，大学院に関係する組織については，その前に付される研究科名「大学院人間発達環境学研究科」を省略し，学部に関係する組織については，「発達科学部」とした。

<管理運営>

学域人事委員会，教員活動評価委員会，研究科運営委員会，予算委員会，学舎検討委員会，中期計画推進委員会，自己評価委員会，交流ルーム運営委員会，安全衛生委員会，ハラスメント防止委員会，専攻運営会議

<研究>

研究推進委員会，研究紀要編集委員会，研究倫理審査委員会

<教務・学生>

教務委員会，学生委員会，博物館学芸員資格専門委員会

<入試>

入学試験委員会，発達科学部編入学試験専門委員会，学生委員会（編入学入学者の募集及び選考に関わる事務）

<国際交流>

国際交流委員会，学術 WEEKS ワーキンググループ

<広報>

情報メディア委員会, 研究科案内作成ワーキンググループ

<附属施設等>

図書委員会, 実習観察園運営委員会, キャリアサポートセンター運営委員会, 発達支援インスティテュート運営委員会, 心理教育相談室運営委員会, ヒューマン・コミュニティ創成研究センター運営委員会, のびやかスペースあーち運営委員会, サイエンスショップ運営委員会, 教育連携推進室, アクティブエイジング研究センター運営委員会

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一)

2.2. 管理運営

2.2.1. 学域人事委員会

学域人事委員会は、教員の採用及び昇任等、ポイントの管理・運用及び教育研究組織への配置に関して、学域会議に発議する原案を審議する委員会である。学域人事委員会の構成は、学域長、副学域長、人間発達環境学研究科専攻長、国際人間科学部学科長（グローバル文化学科長を除く）、及び発達科学部学科長であり、今年度の委員は岡田修一学域長（委員長）、青木茂樹副学域長、小高直樹副学域長、稲垣成哲人間発達専攻長・発達科学部人間形成学科長、平山洋介人間環境学専攻長・発達科学部人間環境学科長、河辺章子発達科学部人間行動学科長、梅宮弘光発達科学部表現学科長、並びに吉田圭吾国際人間科学部発達コミュニティ学科長、木下孝司国際人間科学部子ども教育学科長の9名である。

学域人事委員会の開催日及び検討事項については、以下に記す。

	検討事項
第1回(4月7日)	1. 学域人事委員会について 2. テニユアトラック制による特命助教の任期の定めのない専任教員への切り替え人事（平成30年4月1日以降採用）について 3. 教授等昇任人事（平成30年4月1日以降昇任）に係る手続きについて 4. 平成30年度人事方針について 5. その他：人事に係る今後の課題について
第2回(4月28日)	1. 教授昇任人事（平成30年4月1日以降昇任）について 2. テニユアトラック制による特命助教の任期の定めのない専任教員への切り替え人事（平成30年4月1日以降採用）について 3. 公募を行わない採用人事について 4. 今後の教授等昇任人事の検討について

<p>第3回 (6月2日)</p>	<p>5. その他 : 教員人事方針申請書作成にあたっての留意点について</p> <p>1. 教授昇任人事に係る「学域教員人事方針申請書」について</p> <p>2. 特命助教の任期の定めのない専任教員への切り替え人事について : 人事選考委員会設置</p> <p>3. 公募を行わない特命教員採用人事について</p> <p>4. 教授等昇任人事及びテニユアトラック制による特命助教の任期の定めのない専任教員への切り替え人事の検討について</p> <p>5. 第3期中期目標期間における若手教員の比率を踏まえた人事シミュレーションについて</p>
<p>第4回 (7月7日)</p>	<p>1. 採用人事 (特命助教) について : 人事選考委員会報告</p> <p>2. 教授昇任人事について : 人事選考委員会設置</p> <p>3. 人間発達環境学研究科における若手教員比率に関する試算について</p> <p>4. 若手教員活躍促進 WG ヒアリング (2017年6月27日) について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 内部教授昇任候補者の業績と外部 (研究科以外) の教員の業績比較 ・ 承継ポストを用いた任期付き若手教員の採用 ・ マルチリソースポイント・システムの活用 <p>5. 今後の教授等昇任人事及び採用人事の検討について</p>
<p>第5回 (9月1日)</p>	<p>1. 人事に係る方針について</p> <p>(1) 平成29年3月19日教授会「平成29年度人間発達環境学域人事方針について」</p> <p>1) 特命助教のテニユアトラックからテニユアへの切り替え人事を進める (平成30年4月1日以降採用)。</p> <p>2) 人間発達環境学研究科教授昇任人事のためのガイドライン (2016年4月15日研究科教授会承認) に則り、教授昇任人事を進める (平成30年4月1日以降昇任)。</p> <p>(2) 人事計画の基本的方針について</p> <p>ポイント制のもとで、「教授昇任人事と若手教員の採用人事のバランス」及び「研究科の機能強化の方向性」を踏まえて計画的、戦略的に進める。</p> <p>2. 今後の教授等昇任人事の検討について</p> <p>3. 今後の採用人事の検討について</p>
<p>第6回 (10月6日)</p>	<p>1. 教員の早期退職について</p> <p>2. 平成30年4月1日～平成32年4月1日 教授昇任数案及び採用数案について</p>

	<ul style="list-style-type: none"> 3. 今後の教授等昇任人事の検討について 4. 今後の採用人事の検討について
第7回(10月27日)	<ul style="list-style-type: none"> 1. 教授昇任人事について：人事選考委員会報告 2. テニユアトラック制による特命助教の任期の定めのない専任教員への切り替え人事について：人事選考委員会報告 3. 人間発達環境学域人事配置案について 4. 教授昇任人事に係る「学域教員人事方針申請書」について 5. 准教授昇任人事について：人事選考委員会の設置 6. テニユアトラック制による特命助教の任期の定めのない専任教員への切り替え人事について：人事選考委員会の設置 7. 今後の教授昇任人事の検討について 8. 今後の採用人事の検討について
第8回(12月1日)	<ul style="list-style-type: none"> 1. 平成34年4月1日までの人間発達環境学域のポイントの推移（見込み）について 2. 教授昇任人事について 3. 今後の教授昇任人事の検討について 4. 今後の採用人事の検討について 5. 若手教員活躍促進WG検討結果について 6. その他：課程認定（音楽）申請への文科省からの指摘について
第9回(1月5日)	<ul style="list-style-type: none"> 1. 平成34年4月1日までの人間発達環境学域のポイントの推移（見込み）について 2. 教授昇任人事について：12月21日 教員人事委員会報告 3. 教授昇任人事に係る人事選考委員会の設置について 4. 教授昇任人事について 5. 今後の教授昇任人事の検討について 6. 今後の採用人事（若手教員）の検討について
第10回(1月26日)	<ul style="list-style-type: none"> 1. 准教授昇任人事について：人事選考委員会報告 2. テニユアトラック制による特命助教の任期の定めのない専任教員への切り替え人事について：人事選考委員会報告 3. 教授昇任人事に係る「学域教員人事方針申請書」について 4. 専攻における採用人事（若手教員）の検討結果について 5. 今後の教授昇任人事の検討について 6. その他 <ul style="list-style-type: none"> ・助教の修士論文・博士論文に係る指導教員、審査委員の担当について ・助教の前期課程及び博士課程における授業担当について

第 11 回 (3 月 9 日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 教授昇任人事に係る「学域教員人事方針申請書」について 2. 専攻における採用人事（若手教員）の検討結果について 3. 平成 30 年度人事方針について 4. 平成 30 年 4 月 1 日の人間発達環境学域人事配置案について 5. 今後の教授昇任人事の検討について 6. その他：今年度の総括及び次年度の検討課題について
------------------	--

(人事委員会委員長 岡田修一)

2.2.2. 研究科運営委員会

研究科運営委員会は、研究科長、副研究科長、専攻長（2名、ただし2名は学科長を兼ねる）、発達科学部学科長（4名）の7名体制で運営した。本委員会は、研究科等の管理を円滑に行うために組織及び運営に関し包括的な事項を扱ってきた。検討事項は、以下のとおりである。

	検討事項
第 1 回 (4 月 7 日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 予備審査委員会委員候補者について 2. 内見委員会委員候補者について 3. 平成 29 年度研究科外部評価の実施について 4. 平成 29 年度博士前期課程入学者数について 5. 奨学金について
第 2 回 (4 月 28 日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 平成 29 年度 JST-CREST・さきがけへの応募について 2. 平成 29 年度ピアレビューの実施について 3. 奨学金について
第 3 回 (6 月 2 日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 平成 30 年度若手教員長期海外派遣の面接結果について 2. 平成 29 年度日本学術振興会「特別研究員」採用結果について 3. 在学年限を越えて学籍している学生について 4. 研究科の将来構想について 5. 年次報告書の見直しについて 6. 奨学金について 7. その他：平成 29 年度社会教育主事講習（19 日間）（7 月 15 日～8 月 19 日：神戸大学）について
第 4 回 (7 月 7 日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 研究科の将来構想について 2. 平成 29 年 9 月修了予定者に係る博士学位論文審査委員候補者（案）について 3. 博士課程を経ない者の学位論文審査に係る論文審査委員候補者（案）について

第5回(9月1日)	<p>4. 平成30年度教員サバティカル制度適用教員について</p> <p>1. 平成30年度博士課程前期課程の入学志願者数状況について</p> <p>2. 今後の博士課程前期課程の入学者募集について</p> <p>3. 10月23日(月)外部評価実施について</p> <p>4. 奨学寄附金について</p>
第6回(10月6日)	<p>1. 博士論文予備審査委員会候補者(案)について</p> <p>2. 10月23日(月)外部評価について</p> <p>3. イノベーティブ・アジア事業について</p> <p>4. 10月28日(土)部局ホームカミングデイについて</p> <p>5. 奨学寄附金について</p>
第7回(10月27日)	<p>1. 外部評価について(開催日時:11月6日(月)13時15分)</p> <p>2. 10月28日(土)部局ホームカミングデイについて</p> <p>3. 人間発達環境学研究科-理学研究科との教育コースの設置について</p>
第8回(12月1日)	<p>1. 研究科における公認心理師の受験資格を得るための対応について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・臨床心理学コースで開講している科目と公認心理師科目との読み替え ・ホームページ上での公開 ・新規2科目の設定(犯罪心理・産業心理関係科目)→非常勤講師の採用 ・11月28日関係書類を厚労省へ送付 <p>2. 【神戸大学機能強化構想】専門教育を示した資料のブラッシュアップについて</p> <p>3. 学生の論文の公表について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生委員会において、学生の受賞と査読付き論文について掲載希望について集約する。 ・集約された情報を研究科長に渡し、研究科運営委員会にて掲載について判断する。 ・掲載対象となった情報を広報委員会により研究科HPに掲載する。 <p>4. 奨学寄附金について</p>
第9回(1月5日)	<p>1. 博士学位論文審査委員候補者案について</p> <p>2. 平成30年度科研応募状況について</p> <p>3. 12月14日(水)平成29年度部局年次計画ヒアリングについて</p> <p>4. 研究科の教育の特色について</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・【神戸大学機能強化構想】専門教育を示した資料（ポンチ絵）のブラッシュアップ 5. 平成 31 年度概算要求案について <ul style="list-style-type: none"> ・大都市化・高齢化時代における環境共生社会のデザイン －環境・生態系の個人的認識と社会的意思決定（評価と保全）へつなげるコミュニティの役割－ 6. 寄附金について
第 10 回(1月 26 日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 研究科 研究員の称号付与について 2. 平成 31 年度概算要求について <ul style="list-style-type: none"> ・大都市化・高齢化時代における持続的環境共生社会のデザイン ・本部ヒアリング：平成 30 年 1 月 29 日（月）13 時 10 分～40 分 3. 文部科学省補助事業 平成 30 年度「地域イノベーション・エコシステム形成プログラム」の学内公募への応募について 4. 奨学寄附金について
第 11 回(3月 9 日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 平成 30 年度神戸大学若手教員長期海外派遣制度による派遣教員の推薦について 2. 研究科 研究員の称号付与に関する内規の改正について 3. 定年後の継続雇用者に係る特例措置の要望書について 4. 奨学寄附金について

(研究科運営委員会委員長 岡田修一)

2.2.3. 教員活動評価委員会

神戸大学教員活動評価が実施されて 4 年目となる。昨年度と同様、教員活動評価委員会内規第 3 条に基づき、研究科長、副研究科長、専攻長に、その他研究科長が必要と認めた者として発達科学部学科長及び国際人間科学部学科長（グローバル文化学科長を除く）を加えた、9 名体制で臨んだ。

また、昨年度、相当の時間を使って合意した評価の方法や基準等を基本的に踏襲しつつ、その都度問題がないか慎重に判断しながら、手続を進めた。「教員活動評価結果通知書」配布後、「意見の申出」はなかった。

教員活動評価に係る委員会は、6 月 2 日、7 月 7 日、7 月 28 日、10 月 6 日に開催し、10 月 6 日の委員会にて総括を行い、研究業績欄の増加、学会発表者の詳細等、次年度の教員活動評価書の改善点について確認・検討を行った。

また、今年度は教員評価に向けた国際通用性を見据えた評価指標の設定に係る検討を行うため、平成 30 年 1 月 4 日、1 月 26 日及び 3 月 9 日に教員活動評価委員会を開催し検討を行った。そこで審議された評価指標の学域案については、1 月 30 日に forum にて学域所属

教員から意見聴取を行い、3月19日の学域会議にて報告し、確認を行った。

(教員活動評価委員会委員長 岡田修一)

2.2.4. 中期計画推進委員会

今年度は、研究科長(委員長・岡田修一)、副研究科長(青木茂樹、小高直樹)、研究推進委員会委員長(岡田修一)、教務委員会委員長(渡邊隆信)、学生委員会委員長(中村晴信)、国際交流委員会委員長(近藤徳彦)、入学試験委員会委員長(高見和至)、キャリアサポートセンター長(澤宗則)、情報メディア委員会委員長(宮田任寿)、自己評価委員会委員長(加藤佳子)、事務課長(川端清文)の構成員に加え、総務係長(西田望智子)が出席し、月1回の定例会議を開催した(計11回)。

「中期目標の遂行、見直しに関する事項」を所掌する本委員会では、毎回、研究科長から部局年次計画に関わる全体的な状況が説明された。その後、各委員会等からそれぞれの活動内容が報告され、年次計画の進捗状況を確認し合うとともに、各委員会における計画実施の促進、ならびに委員会相互の情報の共有と連携可能性について検討した。

また、「第二期中期目標・中期計画管理表」における平成29年度実績について各委員会に対し回答を求め、それらを踏まえたうえで本研究科の年次計画管理表の再確認を行った。

(中期計画推進委員会委員長 岡田修一)

2.2.5. 自己評価委員会

本年度は、研究科長(岡田修一)、副研究科長(青木茂樹、小高直樹)、委員長(加藤佳子)、副委員長(田畑暁生)、委員(片桐恵子、大野朋子、津田英二、宮田任寿)、事務課長(川端清文)の10名の構成員ならびに総務係長(西田望智子)が出席し、11回の委員会の開催とメール回議(4回)を行い、以下の事について取り組んだ。

(1) 授業のピアレビュー

学内教員が学び合うことを目的として行う取り組みとして、学部・大学院の授業を対象にピアレビューを実施した。各学科から前期1科目、後期1科目、それぞれの専攻から前期1科目が選定され、選定された授業の参観および授業担当者と参観者との意見交換や授業実践報告会が行われ、14科目の授業を対象に延べ47名の教員が参加した。授業の概要、授業において優れた点・工夫がみられた点、次年度の授業改善に向けて強化できる点がピアレビューレポートとして報告された。

(2) ファカルティ・ディベロップメント

大学教員としての能力開発に関する組織的な取組として、7回のファカルティ・ディベロップメントを実施した(資料集を参照)。参加者の延べ人数は、教員540名、職員等40名、合計580名であった。

(3)Voice Box

Voice Box に 5 件の投稿があった。これらの投稿について関連委員会への検討を依頼するとともに事務部と連携し、教育の改善を図った。また、Web で投稿への回答を行った。

(4)各種アンケートの検討

学修の記録，入学・進学時アンケート，授業振り返りアンケート，卒業・修了時アンケートの結果について分析を行い，関連委員会や事務部と連携し改善を図った。特に，回収率の向上は中心的な課題とされたが，取り組みの結果，一定の効果がみられた。

(5)教育研究懇談会

人間発達専攻前期課程 1 名，人間環境学専攻後期課程 1 名が選出され教育研究懇談会に出席した。懇談会の結果が開示され，教育環境の改善について検討した。

(6)研究科修了時アンケートの実施

研究科前期課程修了時アンケートを実施し，その報告書を作成した。また，結果について検討した。

(7)研究科修了生アンケートの実施

研究科修了生を対象としたアンケートを実施し，その報告書を作成した。また，結果について検討した。

(8)外部評価資料の作成と報告

研究科を対象とした外部評価が開催され，研究科の教育活動および修了生アンケートの結果について報告した。

(9)「教育の質向上のための評価指標」

「教育の質向上のための評価指標」に基づいて，本学部・本研究科の教育について点検・評価を行った。

(10)平成 29 年度年次報告書の作成

平成 29 年度の本学部・研究科における教育・研究活動を集約し，年次報告書としてまとめた。

(自己評価委員会委員長 加藤佳子)

2.2.6. 安全衛生委員会

1) 平成 29 年度委員

委員長 (秋元忍)，委員 (浅野慎一，齊藤誠一，白杉直子，谷篤史，平芳裕子，川端清文 (事務課長)，西田望智子 (総務係長)，笠原夕美 (人間科学図書館情報サービス係長))

2) 委員会の開催

5 月 29 日，11 月 16 日，2 月 19 日に委員会を開催した。

3) 委員会の業務

- ・点検事項報告とその対策の検討
- ・その他改善を要する点の検討

- ・全学安全衛生委員会の報告

- ・その他

4) 定期点検

委員による学舎内共用部点検を月に一回実施し、各委員が担当場所の点検報告を行った。

5) 本年度の実施事項

- ・発達グラウンド・部室等の産業医巡視（昨年度実施分）に係る改善結果を、全学安全衛生委員会において報告した（5月）。

- ・「節電に関するご協力について（お願い）」を配付し、教職員及び学生に節電対策の理解と協力を呼びかけた。また各教室に節電ポスターを貼付し、エアコン温度を夏場 28 度、冬場 20 度に設定するよう依頼した（6月）。

- ・プール・体育館等の産業医巡視（昨年度実施分）に係る改善結果と、D 棟の衛生管理者巡視結果を、全学安全衛生委員会において報告した（7月）。

- ・蚊の大量発生への対策費用の見積もりを依頼した（11月）。次年度予算にて対策を実施することとし、平成 30 年度委員会経費請求に、見積り額約 266,000 円を含めた（2月）。

- ・安全管理マニュアルの改訂を行った（2月）。

- ・各委員巡視時の問題箇所の改善依頼を当該箇所管理者の先生に依頼し、改善を進めた（A 棟 4 階、A 棟 7 階、D 棟 1 階、G 棟 1 階）（2月、3月）。

6) 課題

- ・共有スペースにおける不要物の撤去依頼を継続する。

- ・省エネへの協力依頼を継続する。

- ・次年度予算により、蚊の大量発生への対策を夏前に実施する。

（安全衛生委員会委員長 秋元 忍）

2.3. 予算

2.3.1. 予算に関する特記事項

(1) 予算追加配分

本年度は予備費及び科研費等間接経費の増分等を財源として、予算追加配分を下記のとおり行った。

1 平成 28 年度に引き続き外部資金獲得者に対しインセンティブ配分を行った。

2 収入確保インセンティブ経費に含まれているアゴラの売り上げより、カフェ運営経費を例年通り配分した。

3 科研費の他大学分担者の間接経費分を送金のために配分した。

4 F 棟改修工事に関わる移転作業費が当初の見込み額より大幅に増加したことからネットワーク・AV 機器の取り付け、取り外しなどにより移転費用が増額したため、移転費用として配分した。

5 研究科配分経費のプロジェクト経費は機能強化費用として用途が限定されているため、F

棟のアクティブラーニング関係設備に充当した。

(2)平成 30 年度当初予算配分

平成 30 年度当初予算配分案作成にあたり，教育研究基盤経費(既定経費)が平成 29 年度当初予算配分より 13,106 千円減額され，非常に厳しい予算配分となった。

1 管理的経費については，前年度までに削減可能な経費は見直しをしておりこれ以上は削減できない状況である。

2 教育費については，学生当たり経費 1,2 年生分および 1,2 年生向け講義の学生実験実習経費，ティーチングアシスタント経費などが国際人間科学部に移行したためその分削減した。非常勤講師人件費については，新学部向けの授業など開講が必要な科目が多いため削減はできなかった。

3 研究経費については，教員研究経費を是年度より 2 万円減の教員一人当たり 28 万円とし，研究支援経費も 2.8%を減額して配分した。

4 附属施設経費および政策経費の各委員会予算については，前年度 2 割減で配分した。

なお，翌年度以降も予算の減額が予定されており，収入増の方法を探るとともに予算の配分についても今後根本的な見直しが必要である。

(予算委員会委員長 高橋 真)

2.3.2. 予算関係の審議等の状況

(1)平成 28 年度決算

平成 29 年 5 月 17 日の予算委員会で審議し，5 月 19 日の教授会において承認された。

(2)平成 29 年度当初予算再配分

平成 29 年 3 月 17 日の教授会において承認された平成 29 年度当初予算について平成 29 年 5 月 1 日現在での各専攻，学科，コース等の学生実員数に基づいて学生当経費の再配分の修正を行い，5 月 17 日の予算委員会にて審議し，5 月 19 日の教授会において承認された。

(3)平成 29 年度予算追加配分

予算追加配分について，平成 29 年 12 月 8 日開催の予算委員会にて審議し，12 月 15 日の教授会において審議・承認された。

(4)平成 30 年度当初予算配分

平成 30 年度当初予算配分案は平成 30 年 3 月 16 日開催の予算委員会にて審議し，3 月 19 日の教授会において審議・承認された。なお，学生当経費は平成 30 年 5 月 1 日の学生実員数に基づいて修正を加え 5 月開催の教授会にて審議することとした。

(予算委員会委員長 高橋 真)

2.3.3. 外部資金獲得状況(教員及び学生)

外部資金の獲得状況については，その詳細を資料編(特に「11-3-1~5」参照)に掲載し

ているため、ここでは特徴的な点を指摘するにとどめる。

平成 29 年度科学研究費補助金の獲得は、49 件（新規：26 件）、総額 178,600 千円であった。内訳は、基盤研究(S)：1 件（新規：1 件）、基盤研究(A)：1 件（新規：0 件）、基盤研究(B)：10 件（新規：7 件）、基盤研究(C)：17 件（新規：13 件）、挑戦的研究(萌芽)：1 件、挑戦的萌芽研究：継続 15 件、若手研究(A)：1 件（新規：1 件）、若手研究(B)：4 件（新規：2 件）、国際共同研究加速基金：継続 2 件、となっている。平成 28 年度科学研究費補助金の獲得は 48 件（新規：24 件）、総額 127,485 千円であることから、今年度は採択件数では微増であるが、総額は約 40%の大きな増加がみられた。特に、昨年度と比較すると、今年度は基盤研究(S)の採択、及び基盤研究(C)の採択の増加が特徴的である。

昨年度からの研究推進委員会及びFDにおいて科学研究費補助金の獲得に向けての様々な取り組みの効果が現れていることが考えられる。

日本学術振興会特別研究員については、本年度 DC5 名（新規：3 名）、PD1 名（新規：0 名）が採用されている。昨年度の DC4 名（新規：2 名）、PD1 名（新規：0 名）と比較すると微増にはあるものの、学生委員会を中心とした申請に係る説明会の継続的な開催により、今後の申請数及び採用数の増加への効果が現れることを期待したい。

受託研究については、14 件、総額 7,401 万円となっており、件数及び総額ともに昨年度を大きく上回った（平成 28 年度 11 件、総額 6,272 万円）。

共同研究については、10 件、総額 1,096 万円となっており、件数及び総額ともに昨年度を上回った（平成 28 年度 8 件、総額 842 万円）。

（人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一）

2.4. 広報及び情報公開

2.4.1. パンフレット、ウェブサイト等

(1) 研究科案内（パンフレット）

2018 年 4 月入学者向け研究科案内（研究科案内 2018）は、2017 年 6 月に発行した。さらに、2019 年 4 月入学者向け研究科案内案内の編集を行った。研究科案内 2018 は 28 ページで構成され、研究科の教育、研究、国際学術交流、社会貢献、各専攻に関する特色について掲載した。2018 年から発達科学部の学生募集は停止されているため、発達科学部入学者向けの学部案内は作成していない（国際人間科学部案内は 2017 年 6 月に発行した）。

(2) 研究科ウェブサイト

研究科ウェブサイト (<http://www.h.kobe-u.ac.jp>) は 2011 年度に導入された高機能 CMS（コンテンツ管理システム）によって運用されており、すべての情報を一元的に管理・公開し、アクセサビリティ、作業の効率性、安全性の向上を図っている。研究科ウェブサイトは、受験生や一般向けの広報媒体として、また、在学生や教職員向けの広報媒体としての役割をもつ。2017 年度においては、受験生や一般向けの情報として、とくに、入試情報や国際学術交流に関する情報を充実させた。入試情報に関しては、ウェブ掲載する手順をマニュアル

としてまとめ、安全対策を行った。また、学術 Weeks として開催されたシンポジウムやセミナーなど、研究科の組織が主催するほぼすべてのイベントの情報をウェブ上に掲載した。在学生向けの情報として、基本的な教務学生情報（学生便覧、時間割表など）の他、キャリアサポートセンターが主催するセミナー情報、ESD 関係の授業情報、留学に関する情報を掲載し、学科や専攻を超えた学術交流を支援するため、各コースが主催する卒業論文・修士論文発表会プログラムも公開した。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

2.4.2 人間発達環境学研究科 オープン・らぼ

人間発達環境学研究科主催の「オープン・らぼ」は、平成 28 年度より「オープンらぼウィークス」なる研究室訪問期間を設け、参加希望者が予め個別に教員に連絡して面談の予約をとり、「オープンらぼウィークス」の期間中の任意の日時に面談を行うという方式がとられている。

昨年度、面談申し込み期間や研究室訪問期間が短いという指摘があったことから、平成 29 年度は、申込み受付期間を 5 月 22 日から 6 月 9 日まで、また、研究室訪問期間を 6 月 12 日から 7 月 7 日までと、それぞれ昨年より大幅に延長して実施した。その結果、人間発達専攻の研究室訪問者は 7 名(昨年度は 19 名)、人間環境学専攻の研究室訪問者は 4 名(昨年度は 6 名)であった。

「オープン・らぼ」開催の趣旨は、人間発達環境学研究科の理念や特徴、養成しようとする人材像等を広く発信するとともに、ひいては大学院の受験生を増加させることにあり、この目的の達成に向けて実効性のある方法を試行錯誤してきたのだが、研究室訪問者数は、上述の通り大きく減少した。

ここ数年の大学院の志願者や入学者数減少の傾向に対しては、昨年からは試行的に外部の大学院進学情報サイトに登録して広報を強化したり、あるいは CS（キャリアサポート）センターを通じて、発達科学部の低学年生に対する働きかけ（キャリアパスの選択肢としての大学院進学）などの対策を講じてはいるが、少子化の進行や昨今の経済状況の好転などにより、受験生の確保は構造的に難しくなっているのかもしれない。大学のグローバル化や社会人のリカレント教育が求められるなか、受験生を確保するためにも、現役社会人や優秀な留学生の受け入れをこれまで以上に積極的に推進する時期が来ているのではないだろうか。

(人間発達環境学研究科 オープン・らぼ WG 主査 小高直樹)

2.4.3. ホームカミングデイ

本年度のホームカミングデイ（第 12 回）は 10 月 28 日（土）に次の内容で開催された。

13 時 00 分～14 時 00 分

受付（発達科学部 A 棟正面玄関）

14:00～14:30 学内探検ツアー、懐かしいあの場所は今（キャンパスツアー）

14:45～15:00

「鶴甲へおかえりなさい！」(大会議室)

発達科学部長，紫陽会会長挨拶

15:00～15:15

紫陽会賞受賞式(昨年度活躍された卒業生，現役生に対する表彰)(大会議室)

15:20～16:20

発達科学部生が語る「ここが凄いぞ発達科学部！」(大会議室)

現役学生多数による発達科学部の紹介

16:30～18:00

懐かしの生協食堂で，先輩，同級生，後輩，そして現役学生達と語ろう！(懇親会)

(参加費：3,000円)

ホームカミングデイの招待年

昭和32年卒(4年制の方のみ)

昭和37年卒

昭和42年卒

昭和47年卒

昭和52年卒

昭和57年卒

平成4年卒

平成14～17年卒

参加者の卒年

昭和28年卒 1名

昭和34年卒 2名

昭和35年卒 1名

昭和36年卒 1名

昭和43年卒 1名

昭和46年卒 1名

昭和51年卒 1名

昭和52年卒 2名

昭和53年卒 1名

平成8年修了 1名

平成12年卒 1名

平成13年卒 1名

合計 14名

昨年度の年次報告書のホームカミングデイの項最後に「現役学生の参加増加は、今後のホームカミングデイ活性化の鍵のひとつだと感じた。」とあり、また過去の参加者アンケート結果からも現役生との交流を通じて教育学部から改組された発達科学部を知りたいと希望される方が多かったことから、今年は発達科学部全学科全コースから学科コースでの学生生活、教育・研究内容等をプレゼンテーションしてくれる学生に参加をお願いした。学生の人選に当たっては学科長コース主任にお願いし、留学生1名を含む12名の学部学生・院生が参加した。学生と私で数回のミーティングを持ち、発表内容等の確認を行った。当日は、司会進行から全て学生が行い、参加者からは発達科学部のことがよく解ったと好評であったが、学生企画内容の事前告知にも関わらず、参加申込および参加者は低調であった。

これまでホームカミングデイに関わってきた経験から、どんなに大学側が良い企画を提案しても、参加者にとっては同級生や恩師の誰が来るのかわからないこのやり方には限界があると考えます。幸い、今回参加してくれた学生たちは卒業生との交流や同級生の交流に関心がある学生たちであった。このことから私は彼らに10年後のホームカミングデイで卒業10周年の同窓会を学生が主体になってホームカミングデイで行って欲しいとの提案を行ったところ快諾してくれた。10年後のホームカミングデイが非常に楽しみになった。もし今年も私が委員長を務めるのなら、今年卒業10周年に当たる学生に声をかけて同級生への声かけや恩師への声かけをお願いして、ホームカミングデイを卒業生がプロデュースする同窓会を企画したい。

おわりに、準備過程から実施当日まで当企画に参加・協力いただいたすべての方々、特に私の要望に答えて素晴らしいプレゼンテーションを行ってくれた学生諸君にお礼申し上げ、本年度の報告としたい。

(第12回発達科学部ホームカミングデイ・プロジェクト委員会委員長 高田義弘)

2.5. 環境設備

2.5.1. 教育・学習環境の整備

(1) 各種施設・設備

(1) F棟の改修

昨年度から、学生の教育環境を充実させるため、F棟1階と2階部分にアクティブ・ラーニングや遠隔授業等が行える多機能な施設を設置する改修計画を作成し、施設部と設計の細部について協議を進めてきた。工事期間は、平成29年3月29日から平成29年10月31日までの7か月間で、11月から使用を開始した。主な施設としては、1階には、ラーニングコモンズルーム1室及びアクティブ・ラーニングルーム2室を、2階には、中教室1室、教室やアクティブ・ラーニングルームとしても使用出来る多機能ルーム1室、ラーニングコモンズルーム1室及びGlobal Human Science Café1室を設置した。中教室と多機能ルームでは、相方向での遠隔授業が可能となる設備も完備した。

また、1階玄関ホールには、学生の芸術作品を展示するギャラリースペース（ギャラリー虹）も設けた。

（事務課長 川端清文）

(2) キャンパス内ネットワーク環境整備

本研究科では、部局の広報用に独自のウェブサーバを管理運営している。2015年度に、研究科広報用ウェブサーバをリプレースし、2016度には、国際人間科学部広報用ウェブサーバを導入している。

本研究科で利用できる無線LANは、神戸大学情報基盤センターが管理する全学用無線LANと、本研究科が独自に管理するものが存在する。部局内建物の主要な場所において無線LANの利用が可能となっているが、部分的に電波が届きにくい場所などが報告されている。全学的なネットワーク設備の変更（KHAN2017への移行）に伴い、部局内での対応も行った。

情報教育設備室の準備室にはスタッフが常駐し、60台の教育用端末のサポートの他、学生や教職員向けに、コンピュータやネットワーク利用に対する技術支援も行っている。

本研究科では、在学生への広報手段の1つとして、学生向けメーリングリストの運用を行っている。メーリングリストは学生が所属する公式組織（コースなど）単位で構成され、教務、学生生活、キャリアサポートに関する情報などが提供された。

（情報メディア委員会委員長 宮田任寿）

(3) 図書館運営・整備

本学研究科・学部 に 附 設 さ れ た 人 間 科 学 図 書 館 は、 下 記 の 活 動 を 実 施 し た。

新入生ガイダンスで図書館利用の意義・方法を案内した（「図書館利用のすすめ」）。利用方法を説明する「春の図書館ツアー」を4月6～12日に実施し、4月中は要望に応じて適時実施した。

学生用資料の整備充実に努め、平成29年度において、学生用推薦図書（専攻推薦図書）、学生希望図書など、1,253冊（総額4,787,739円）の図書を購入して開架した（表1）。附属図書館からの予算が約18%削減され、かつ部局からの配分図書費も約10%削減されたため、学生用推薦図書、シラバス図書および学生希望図書を減額せざるをえなかった。また、平成28年度購入学生用図書の平成29年1月～12月までの利用実績は、全体の貸出率で47.84%、回転率で129.91%であり、いずれの図書とも概ねよく利用されていた。

スペースの有効活用の観点から、古い資料・重複資料を2,704点（12,272,432円）、処分した。

予算的観点から、継続購読中の学生用雑誌について見直しを行うため、学科ごとに意向調査を行った。集約後の購読中止誌の選定は、30年度の継続審議事項とした。

教員の退職・転出に伴う返却図書について、当該教員より譲渡ならびに返還申請のあった資料の審議・決定をした。またWeb上で利用できる他大学紀要などの受入中止とバ

ックナンバーの廃棄および学内重複などで保存の必要のない製本和雑誌の廃棄を審議・決定した。

修士論文の利用については、著者の許諾を得ることとし、許諾を得るための手続きについて審議・決定した。

本年度は、メール会議を含めて3回の委員会を開催した。全学の附属図書館運営委員会には、4回出席した。

(図書委員会委員長 近江戸伸子)

2.5.2. 交流ルーム・アゴラ

体制

開設10年目をスタッフ5名、実習生1名の体制でスタートした。今年度から、附属特別支援学校の卒業生を新たなスタッフとして迎え入れることができた。そのスタッフを含め、スタッフ5名のうち3名に知的障害がある。

活動状況

- ・六甲アイランド高校の福祉専攻の生徒たちが、前期月に1回のペースで実習を行った。
- ・11月に神戸市立夢野中学校からトライやる・ウィークの中学生を1名受け入れた。
- ・前期毎週1回、大学院の授業が哲学カフェ、サイエンスカフェ形式で実施された。
- ・8月10日・11日のオープンキャンパスには、スタッフ5名と学生アルバイト6名が対応し、ランチ等を提供した。メニューは、カレー、パウンドケーキ、コーヒー、リンゴジュース、レモンスカッシュであった。また、実習生が構内でクッキーを売り歩いた。
- ・知的障害のあるスタッフのうち1名は、交流ルームでの業務の他に、会議室や教室の清掃に従事した。
- ・スタッフと実習生が、教員ボックスへの郵便物の配達、クッキー販売を行った。

展示

年間を通して、発達科学部学部学生が図画工作の授業で制作した版画による「木版画展」を開催した。7月及びオープンキャンパス期間は、「生きづらさ」をかかえ「発達障がい」と診断されるが、一発描きの絵を描くことを現実と向き合う支えとして作家活動を行うAjuさんの展覧会「Aju展」を開催した。

その他

- ・寄付金の受け入れがあり、それをもとに実習生1名の週3時間雇用を行った。
- ・飲料、食品ともに昨年度よりも売り上げが伸びた。

(交流ルーム運営委員会委員 赤木和重)

2.6. 教員研修

2.6.1. FD

教授会の開催にあわせて FD を実施した。以下、本年度に扱ったテーマ及び講師を記す。

- (1)平成 29 年 4 月 21 日「戦略的創造研究推進事業 (JST-CREST・さきがけ), 革新的先端研究開発支援事業 (AMED-CREST・PRIME) の本学の現状」(研究担当 小川真人理事)
- (2)平成 29 年 6 月 16 日「ハラスメント研修」(京都大学保健管理センター・センター長 杉原保史教授)
- (3)平成 29 年 7 月 14 日「国際人間科学部の進捗状況等」(国際人間科学部執行部等)
- (4)平成 29 年 7 月 21 日「平成 30 年度科研費制度改革について」(研究担当 小川真人理事他)
- (5)平成 29 年 9 月 8 日「科研費制度改革をふまえた研究計画調書作成にむけて～若手研究, 基盤研究 (B) 及び (C) への対策～」(学術研究推進機構学術・産業イノベーション創造本部 吉田一特命教授, 城谷和代特命講師)
- (6)平成 29 年 11 月 10 日「国際人間科学部の進捗状況等」(国際人間科学部執行部等)
- (7)平成 29 年 12 月 15 日「大学経営をめぐる政策展開と研究・教育組織の課題」(山下晃一准教授)
- (8)平成 30 年 1 月 19 日「次期学内ネットワーク (KHAN2017) の導入説明会 - 大幅変更予定の使用方法やルールについて -」(長坂耕作准教授)
- (9)平成 30 年 2 月 16 日「文部科学省事業「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業 (COC+) について」(地域連携推進室 佐々木和子准教授)

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一)

2.6.2. 初任者研修

情報メディア委員会では、毎年、着任した教員に対して研修会を主催している。2017 年度は 10 月に 2 名の教員が赴任されており、これら 2 名の教員と国際人間科学部 GSP オフィスの教職員に対して、2017 年 10 月 20 日に研修会を開催した。神戸大学における情報セキュリティポリシーと個人情報保護に関する説明をはじめ、部局が独自に提供する ICT 関係のサービス (IP アドレス管理システム, 無線 LAN, 学生へのメール配信システム, 技術サポートなど), 神戸大学が提供する ICT 関係のサービス, 学外 ASP サービス利用の注意点などについて説明を行った。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

3. 入試

3.1. 一般選抜入試

3.1.1. 入学試験委員会

本研究科及び発達科学部が関係する入学試験全体を所管する入学試験委員会は、研究科長, 副研究科長, 専攻長, 学生委員会委員長の計 8 名で構成し, 平成 29 年度委員長を高見

和至教授が務めた。なお、学部1年生の入学試験は国際人間科学部の入試となり、最終的な審議・決定は当該学部の入学試験委員会となる。

今年度の審議概要（日程と議題）は以下のとおり。

- ・第1回（4月20日）
 1. 平成30年度大学院学生募集要項について
 2. 平成30年度入学者に係る入試日程について
- ・第2回（9月1日）
 1. 平成30年度博士課程後期課程人間環境学専攻（第I期）入学試験・進学者選考試験合格者の判定について
- ・第3回（9月27日）
 1. 平成30年度博士課程前期課程入学試験合格者の判定について
 2. 今後の博士前期課程入試について
- ・持ち回り（12月5日）
 1. 平成30年度大学院・学部（第3年次編入学試験）の入試情報開示基準について
- ・第4回（1月17日）
 1. 平成30年度博士課程前期課程人間発達専攻1年履修コース入学試験合格者の判定について
 2. 平成31年度入学試験に係る入学試験日程について
- ・第5回（3月6日）
 1. 平成30年度博士課程後期課程入学試験・進学者選考試験合格者の判定について
(入学試験委員会委員長 高見和至)

3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題

今年度の発達科学部にて実施された大学入試センター試験、3年次編入学試験及び人間発達環境学研究科の一般選抜入試に関する業務は、学生委員会をはじめ関係各位の尽力により大過なく遂行された。

平成28年度から導入された博士課程前期課程の英語外部試験は本年度も継続されて、合否判定に有効に活用されている。人間発達環境学研究科博士課程前期課程の学生定員に関しては、平成28年度より人間発達専攻は52名から51名に人間環境学専攻は40名から36名に削減され、研究科全体としては92名から5名減の87名という定員となっている。

入学試験結果は、人間発達専攻で、入学定員51名に対し、志願者数76名（志願倍率1.49倍）、受験者数72名、合格者数57名、入学者数53名であり、定員充足率は1.04倍となった。また、人間環境学専攻で、入学定員36名に対し、志願者数42名（志願倍率1.17倍）、受験者数40名、合格者数39名、入学者数39名で、定員充足率は1.08倍であった。外数（定員4名）としている人間発達専攻（一年履修コース）の入学者数4名を加え、研究科全

体として捉えれば、定員 91 名に対し入学者数 96 名、定員充足率は 1.05 倍となった。

また、博士課程後期課程については、人間発達専攻が、入学定員 11 名に対し、志願者数 15 名（志願倍率 1.36 倍）、受験者数 15 名、合格者数 11 名、入学者数 11 名であり、定員充足率は 1.00 倍となった。また、人間環境学専攻では、定員 6 名に対し、志願者数 7 名（志願倍率 1.17 倍）、受験者数 7 名、合格者数 6 名、入学者数 5 名であり、定員充足率は 0.83 倍となった（第Ⅰ期と第Ⅱ期の合計）。研究科全体としては、定員 17 名に対し入学者数 16 名、定員充足率 0.94 倍となっている。合格後の入学辞退者が人間環境学専攻で 1 名発生したために定員充足率が 1.00 を下回る事態となったが、研究科全体としての入学状況は適性範囲の下限となっている。

学部の 3 年次編入学試験も含めて、いずれについても詳細な数字は『資料編』に掲載する。

（入学試験委員会委員長 高見和至）

3.2. 特色ある入試

3.2.1. 3 年次編入学試験

平成 30 年度 3 年次編入学試験は、4 学科 9 コースと発達支援論コースを加えた 10 コースで実施した。募集人員は 10 名で、選抜方法はこれまでと変更なく、いずれのコースも、英語、専門科目、口頭試問であった。出願期間は平成 29 年 8 月 18 日から 8 月 24 日、試験実施は 10 月 7 日、合格発表は 10 月 24 日であった。

結果は、志願者数 68 名（志願倍率 6.8 倍）、受験者数 58 名、合格者数 10 名、入学者 7 名（人間形成学科 1 名、人間行動学科 2 名、人間表現学科 2 名、人間環境学科 1 名、発達支援論コース 1 名）であった。

（編入学試験専門委員会委員長 中村晴信）

4. 国際交流活動

今年度はあらたな海外協定校を開拓し、ダブルディグリー・プログラム実現可能性の高い海外協定校と具体的な検討を進め、Erasmus+による交流拡大をポイントとして、活動を行った。

4.1. 学術交流協定

(1) 新規

新たに以下の大学との交流協定を締結した。

- ・EWA WOMANS UNIVERSITY, EWA INSTITUTE FOR AGE INTEGRATION RESEARCH（梨花女子大学）との学術交流協定（2018.1）
- ・LEONARDO-OFFICE SAXONY（ドレスデン工科大学）とのインターンシップに係る覚書（2018.1）
- ・中央大学校社会科学大学との学術交流協定及び学生交流細則（2017.11）
- ・ウェスタン大学との学術交流協定（2017.10）

・濟州大学との学術交流協定及び学生交流細則（2017.9）

(2) 更新

以下の大学との交流協定を更新した.

- ・北京師範大学（2017.7）
- ・華東師範大学（2017.7）
- ・ナザレ大学(2018.3)

4.2. 留学生

本年度、本研究科で学んだ留学生は70名、概要（性別・国籍別・学年別・専攻・学科別・国費/私費別）は別表の通りである。

(1) 交流協定校との留学生の交換

受入：ドレスデン工科大学2名（Erasmus+）、華東師範大学1名、西オーストリア大学1名、ヴェネツィア大学1名（H29年度前期まで在籍していたが、受入はH28年度）

派遣：北京師範大学1名、キール大学1名、ボローニャ大学1名、ドレスデン工科大学1名（Erasmus+）、ヤゲウォ大学1名、グラーツ大学1名、クイーンズランド大学1名

(2) 留学生懇親会

5月31日(水)、C棟講義室にて、本学部・研究科の留学生を対象とした懇親会を開催した。51名（留学生31名、日本人学生1名、事務職員9名、留学生担当専門教育教員1名、指導教員6名、研究科長1名、副研究科長1名、国際交流委員長1名）の参加を得て、親睦を深めた。教員による音楽演奏や、留学生による歌や踊りなど、さまざまなパフォーマンスに盛り上がり、交流を深めた。

(3) 留学生見学旅行

10月21日(土)、京都太秦映画村、箸置き作り体験を含む見学旅行を実施した。30名（留学生29名、引率教職員2名）の参加があり、日本の名勝見学、日本の文化の体験を通して日本理解を深めた。

(4) 留学生説明会及びチューター説明会

4月と10月に留学生説明会を行い、基本的なこと及び諸注意を与えた。チューター説明会は3月と9月の2回行い、チューターに仕事の説明と諸注意を与えた。特に仕事内容について情報を共有し周知徹底できた。

(5) 派遣留学生報告書の閲覧

教務学生係において、過去の交換留学生の報告書をファイルにまとめ学生を対象に閲覧を

継続している。

(6) 留学生向け就活ガイダンス

10月、1年間の就職活動を経て、企業から内定を得た留学生を招待し、就職活動体験談を披露してもらった。実際の具体的な就職活動体験は、非常に有益であった。

(7) 留学生茶話会

第4週の月曜日 17時～18時半に月1回で行っている。参加者は10名前後である。研究室の行事に自分だけ声がかからずさみしいなど、留学生からの生の声を聞き取る場になっている。解決が必要ならチューターと連絡を取るなどしているが、留学生相互のアドバイスで解決することも多く、ピアカウンセリングが有効な場であることがわかった。

(8) メーリングリストの利用

留学生のメーリングリストを作成し、就活セミナーや旅行やイベントなどについて一斉メールで案内を送付した。

(9) 来年度に向けて

Erasmus+に参加できるのは、非常に有益なことであるので引き続き押し進めたい。しかし、同時に、専門能力や意欲などを慎重に吟味の上学生を派遣する必要性もある。

別表 留学生在籍状況

		前期	後期	計
性別	女性	39	44	47
	男性	18	20	23
	計	57	64	70

		前期	後期	計
国籍	中国	48	56	58
	韓国	2	3	3
	インドネシア	2	2	2
	ベトナム	0	1	1
	バングラディッシュ	1	1	1
	ドイツ	2	0	2
	イタリア	1	0	1
	コロンビア	0	1	1
	オーストラリア	1	0	1
	計	57	64	70

		前期	後期	計
学年	D3	3	3	3
	D2	2	2	2
	D1	3	3	3
	M2	9	9	9

学年	M1	12	13	13
	学部生3回生	1	1	1
	D 研究生	1	2	2
	M 研究生	15	26	26
	学部研究生	5	4	5
	学部特別聴講生	1	0	1
	大学院特別聴講生	4	0	4
	教育研修生	1	1	1
計	57	64	70	

		前期	後期	計
専攻・学科	人間発達	22	26	28
	人間環境学	28	33	35
	人間形成	1	1	1
	人間行動	1	0	1
	人間表現	4	3	4
	人間環境	1	1	1
	計	57	64	70

		前期	後期	計
国費/私費	国費	1	1	1
	私費	56	63	69
	計	57	64	70

4.3. ダブルディグリー

School of Medical and Health Sciences, Edith Cowan University との間で、博士課程におけるダブルディグリーの可能性を検討した。まずは、学術交流・学生交流細則の締結に向け、準備を進める。

4.4. Innovative Asia

2017 年度より実施されている国際協力機構の Innovative Asia(イノベーティブ・アジア)事業の 2018 年度申請に神戸大学が取り組むことになり、本研究科もこの事業に参加するため、申請を行った。なお、このプログラムは、アジア諸国にて産業開発を担う優秀な若手人材を外国人留学生(以下、長期研修員)として日本へ受入れ、本邦大学における英語による修士課程教育と、企業・研究機関への見学及びインターンシップを実施するものである。

4.5. 学生・教員・職員の海外派遣

(1) 国際交流運営資金

学生の国際学会発表への援助事業助成

2017 年 6 月:人間環境学専攻(2017) 1 名 カナダ 9th International Conference on Advanced Vibrational Spectroscopy

2017 年 6 月:人間環境学専攻(2015) 1 名 香港 ISA-RC43:Housing and the Built Environment Conference

2017年7月:人間発達専攻(2014) 1名 韓国 The 9th International Conference on Perception and Action (第19回知覚と行為の国際会議)

2017年8~9月:人間発達専攻(2016) 1名 イタリア European Early Childhood Education Research Association

2017年8月:人間環境学専攻(2016) 1名 シンガポール the Seventh Congress of the East Asian Association of Environmental and Resource Economics

国際交流運営資金で学会発表の助成以外のもの

交流協定及び外国の大学への留学生派遣事業

2018年2月~:人間環境学専攻(2016) 1名 ヤケヴォ大学(ポーランド)

外国の大学との学生交流事業

2017年11月:加藤佳子 Well-being スタディツアー(ハンガリー)

2017年12月:北野幸子 オーストラリアと日本の乳幼児教育学習・交流プロジェクト

外国の大学との研究者交流事業

2017年6月:近藤徳彦 Seminar for applied human physiology, Dr. Mundel (School of Sport and Exercise, Massey University, ニュージーランド)

2018年3月:近江戸伸子 環境持続性国際シンポジウム, Thomas Schmidt 教授(ドレスデン工科大学, ドイツ)

国際学会開催への援助事業

2017年11月:近藤徳彦 第17回環境人間工学国際会議(The 17th International Conference on Environmental Ergonomics)

(2) 教員・職員派遣

期日	氏名	国	訪問先	内容
2017年7月 ~8月	坂東 肇	チェコ	サマーアカデミー AMEROPA, ミュージック キャンププラハ	サマーアカデミーAMEROPA及び ミュージックキャンププラハに 学生引率, Horn Class 視察
2017年8月	佐藤 春実	アメリカ	ワシントン大学, ボー ーイング社エベレット 工場, 兵庫県ワシ ントン事務所	JST GSC 受講生引率のための視 察

2017年8月 ～9月	津田 英二	アメリカ	St.Cloud State University, University of Minnesota	スタディツアー引率, 合意書協 議, 調査・研究交流
	源 利文	中国	上海交通大学	神戸グローバルチャレンジプロ グラムにかかる引率, 現地視 察, 打ち合わせ
	北野 幸子	イタリア	ボローニャ大学等	新学部における国際交流校開 拓, 国際学会における保育施設 見学, 研究成果の発表, 各国の 保育改革に関する情報収集
2017年11月	加藤 佳子	ハンガリー	Eotvos Lorand University	共同研究の打合せ, スタディツ アーの引率
2017年12月	太田 和宏	フィリピン	フィリピン大学セブ 校, セブ市内戦跡, セブ郊外戦跡	GSPプログラムにおけるフィリ ピンとの共同学生研究プロジェ クトの実施
2018年1月	田村 文生	中国	上海大学 音楽学院	講演, グローバススタディーズ プログラム開発に向けてのミー ティング
2018年2月	谷 正人	ドバイ	international center for persian studies kanoon Music Institute	GSPにかかる調査
	坂東 肇	イタリア	カサヴェルディ	GSPの海外研修受け入れ先開拓 の一環

3) 紫陽会グローバル人材育成資金

期日	氏名	授業科目等	渡航先・学生等
2017年4月21日 ～30日	長ヶ原誠	スタディツアー	ニュージーランド 学生7名
2017年8月20日 ～31日	古川文美子	インドネシア・リアウ大学研修 (海外実習B)	インドネシア 学生1名
2018年2月13日 ～16日	片桐恵子	エイジング論演習・卒業研究	韓国 学生5名
2018年2月15日 ～18日	岡崎香奈	特別研究IV	イギリス 学生1名

4.6 海外研究者等の招聘・訪問

期日	氏名	国名	所属・職名	受入者
2017年				
2017/8/11	朴 巨用	韓国	祥明大学校師範大学 ・教授	渡部 昭男
2017/9/22	Axel Gehrmann	ドイツ	ドレスデン工科大学 ・教授	渡邊 隆信
2017/9/23	Sabine Pankofer	ドイツ	ミュヘン社会福祉大学 ・教授	齊藤 誠一
2017/9/24～ 10/2	Abdulhamid Saleh Haryono	インドネシア	リアウ大学・講師	古川 文美子
2017/9/25～ 10/5	Kirmizi Bin Untung Ritonga	インドネシア	リアウ大学・教授	古川 文美子
2017/11/12～17	Lee Kai Wei Jason	シンガポ ール	シンガポール国立学, 防衛医療環境学研究所	近藤 徳彦
2017/11/12～17	Ahmad Munir Che Muhamed	マレーシア	マレーシアサイنز大学 ・上級講師	近藤 徳彦
2017/11/18～20	Padfield Deborah Gay	英国	ロンドン・スレイド美術学校 ・研究員	稲原 美苗
2018年				
2017/3/1	Zachary J. Schlader	アメリカ	ニューヨーク州立大学 バッファロー校・助教	近藤 徳彦
2017/3/8～10	Soondool Chung	韓国	梨花女子大学・教授	片桐 恵子
2018/3/14～18	Yung Liao	台湾	国立台湾師範大学	原田 和弘
2018/3/18～23	Teo How Chee	マレーシア	マラヤ大学・講師	近江戸 伸子

※学術 WEEKS での招聘についてはその項を参照
(国際交流委員会委員長 近藤徳彦)

4.7. 「英語による授業の実践—ESD 研究」

大学のグローバル化に対応して、英語で行われる授業を増やしていくことが期待されている。実態としては、英語の授業に対する学生からのニーズは乏しいものの、ESD（持続可能な開発のための教育）が地球規模での実践的な学際的交流を求めるものであることから、

大学院に開設された ESD サブコースの授業科目のうち、「ESD 研究 1・2 (ESD study1・2)」を、すべて英語で行うこととした。

本研究科の教員 9 名（太田和宏、松岡広路、津田英二、清野未恵子、古川文美子、伊藤真之、岡崎香奈、源利文、赤木和重）が各専門に応じて英語でレクチャーを行い、各授業の終わりにはミニディスカッションをする。一切日本語を使わないことがルールとされた。参加院生（6 名：うち 5 名は留学生：ドイツ 3 名、中国 2 名）は、英語で質問するだけでなく、授業後のコメントも英語で記入し、最終レポートも英語で行う。教員・院生共に試行錯誤であったが、参加院生からは、「自分の専門意義の討議を日本ですることができた」「国際舞台での発表を意識することができた」との意見もあれば、日本人学生からは、「英語でのコミュニケーションの面白さを体感できた」との感想も得た。

夜間ということもあってか、履修院生数は少なく、とりわけ、日本人学生の履修が少なかった。次年度は、本学カリキュラムにおいて定着的に発展するために、本研究科だけではなく、全学的に本授業の存在をアピールし、履修院生の拡大とともに、英語による授業の大切さを広めてゆくつもりである。

（人間発達専攻 松岡広路）

4.8. スタディツアー

(1) 歴史意識に関する日本とフィリピンの比較研究

2018 年 12 月 2 日から 10 日にかけてフィリピン大学セブ校教養学部教員および学生と共同で「戦争に関する歴史意識」に関する討論、検討を行った。神戸大学からの参加学生は 7 名（発達科学部生 2 名、国際人間科学部生 5 名）であった。フィリピン大学学生、神戸大学学生がそれぞれ事前に先の大戦に関する意識調査などを行い、それを報告しあう形で意見交換を行った。また日本占領期を経験した元兵士、市民への聞き取り、博物館、戦跡巡りをフィリピン大学の学生らとともにに行った。帰国後、学生らは事前のアンケート調査結果、フィリピン滞在中に得られた情報、意見交換の状況を整理し研究報告としてまとめる作業を続けている。参加した神戸大学学生らにとって、フィリピン人との意識の違いを認識するだけでなく、共通の課題に対して同じ視線をもって取り組むことの重要性を認識する好機となり、のちの勉学意欲の昂進につながった。

（人間環境学専攻 太田和宏）

(2) 大韓民国ソウル市でのフィールドワーク及び梨花女子大学の研究者や学生との研究交流

2017 年度は梨花女子大学との国際共同研究及び国際交流を実施した。本学の学部生 5 名と研究生 1 名（行動発達論コース）が参加した。日程は 2018 年 1 月 24 日から 26 日の 3 日間であった。

24 日はソウル市の街中にて、高齢者がどのくらい歩いているか、歩行環境は高齢者に

やさしいかどうかなどのフィールドワークを行った。25日は梨花女子大学を訪問し、学生間の研究課題についての討議、同大学のコミュニティーセンターを訪問し、活動の様子を見学、梨花女子大学の研究者及び学生と交流を行った。

学生は韓国と高齢者の状況を比較する視点を得、日本が高齢先進国であることを理解し、日本と韓国における age-friendly な街かどうかというインフラの違い、高齢者の違いなど、高齢化にかかわる様々な問題の一端を理解したと思われる。

本プログラムは 同窓会紫陽会グローバル人材育成基金の助成金により実施された。

(人間発達専攻 片桐恵子)

(3) ワールドマスターズゲームズ 2017 オークランド大会調査

2017年4月17日から5月1日の期間で開催された第9回ワールドマスターズゲームズ・オークランド大会における現地調査を目的として、主に硬式野球大会の運営状況を中心にマスターズ甲子園事務局に関わる院生・学部生が中心となってフィールドワークを実施し、第10回ワールドマスターズゲームズ 2021 関西大会に向けての参考情報を幅広く収集すると共に、開催準備に関する具体的な大会プロモーションの方向性と課題を集約した。

大会では、30競技に及ぶ全会場での英語による視察調査と共に、選手やボランティアに対する会場インタビュー調査、開閉会式・文化関連行事でのインタビュー・映像収集調査、さらには、硬式野球競技大会審判、大会スコアラー、メディアサポートメンバーのスタッフ登録および大会ボランティア登録により、大会競技へ直接参加することで運営サポートの実務的経験に関わる情報を収集した。

滞在中にインタビュー動画の文字おこしを行い、参加者が大会で得られる便益を分析し、マスターズスポーツ振興支援室が作成した Quality of Sports Life 指標を基にマスターズスポーツ参与の質的側面を抽出した。

インタビュー情報は、インタビュー動画の日本語の字幕付けを行い、動画掲載用の Facebook ページ「マスターズスポーツ応援プロジェクト」に掲載し、大会プロモーション情報（大会前の主催団体による準備状況）、大会オペレーション情報（大会中の主催団体による運営状況）、大会ボランティアマネジメント情報（大会参加ボランティアの運営状況）、大会フォローアップ情報（大会後の主催団体によるケア状況）の4部構成による大会調査報告書を作成した。

(人間発達専攻 長ヶ原誠)

(4) リアウ学生プログラム

Orang Laut 海の民と出会う旅（インドネシア・リアウ州インドラギリヒル県）

サゴヤシ栽培を中心とした住民の生活と泥炭地保全（インドネシア・リアウ州メランテイ県）

本年度は8月から9月にかけて、リアウ大学、総合地球環境研究所、及びNPO まなびとのサポートを頂き、インドネシア、リアウ州インドラギリヒル県とメランティ県において、泥炭地環境問題およびインドネシアにおける少数民族の教育環境に関する2つの学生プログラムを企画し、日本の大学生11名（神戸大・甲南大・関西学院大学）とリアウ大学の学生5名が参加した。

8月20日から8月30日に実施した「海の民(Orang Laut)と出会う旅」では、独自の言語をもち、海上で生活しながら生計を立ててきた海の民(Orang Laut)の教育や文化に焦点を当てたプログラムを企画した。インドネシアは、何千もの島々から成り、多様な民族が共存して一つの国家を作り上げている。しかし、インドネシアの独立後、国家として体裁を整えていく中で、海の民は陸上での定住生活を強制されてきた。そして近年まで、その生活様式の違いや教育程度の違いから、差別対象とされてきた現状がある。現在でも教育水準は、まだまだ低く、学校の教員の数も十分ではない。今回のプログラムでは、インドラギリヒル県チョンチョン地区の海上集落で、ホームステイをしながら、現地の小学校・中学校・高校を訪ね、学生主体の交流会を行った。そして、様々な文化体験やフィールドワークを通して、多民族が共存する日常を肌で感じ、国や地域をこえた多民族共生問題に対して、普段とはちがった少数民族の視点で世界を見ることを試みた。

また、9月2日から9月12日に実施した「サゴヤシ栽培を中心とした住民の生活と泥炭地保全」では、現在、地球規模の環境問題になっている泥炭地開発をテーマに企画した。リアウ州では、パルプ用材の植林やオイルパーム農園による泥炭湿地開発が原因で泥炭地火災問題が深刻化している。本プログラムでは、特に泥炭地を保全しつつ生計を成り立たせようとする地域住民の取り組みに注目した。プログラム前半では、村の経済状況を把握するためにインタビュー調査や火災跡地やアブラヤシ・サゴ植林地などの視察を行った。そして、後半では、住民が泥炭地保全の一環として進めているパイナップル栽培を現金収入と結びつけるために住民グループと共にパイナップルジャム作りを試行錯誤した。本プログラムを通して、私達が日常利用している紙やパーム油の資源が生み出される現場で起こっている現状を肌で感じてもらった。

(人間環境学専攻 古川文美子)

(5) アメリカの障害者権利擁護運動に接する旅

現代アメリカの障害者権利擁護運動の動向を学び、その中で非言語コミュニケーション（特に音楽活動）が果たす役割・機能に焦点を当てたプログラムを実施した。期間は8月23日～8月31日で、訪問先はミネソタ州。Minnesota University及びSt. Cloud State Universityでセルフ・アドボカシーの現在についてのレクチャー、障害と音楽の関係についてのレクチャーを受け、MacPhail（音楽をビジネスとする企業体）で音楽療法を含めた障害者の音楽活動支援の多様な展開について学び、The TAP（地元のセルフ・アドボカシーグループ）やInteract Center for the Visual and Performing Arts（障害者アートの

プロフェッショナル集団)で音楽やアートを介した権利擁護運動を体験するなどした。参加者は人間発達環境学研究院院生3名、発達科学部学生1名であり、事前学習も含めて熱心に深い学びの機会となった。

(人間発達専攻 津田英二)

(6)Well-being スタディツアー

ハンガリーでWell-being スタディツアーを実施した。11月10日から11月23日に、ハンガリーのブタペストに滞在し、エトベシュローランド大学(ELTE)の学生と交流を行った。交流プログラムでは、相互の研究発表、討論、フィールド観察を行った。また、ELTEの協力を得て、Well-being, Sense of Coherence および親子関係に関する国際比較調査もを行い、その調査結果を発表した。

本プログラムに参加した学生は、博士課程前期の学生1名、学部生3名の4名であった。そして参加した学生は、研究科が運営する国際交流運営資金による援助事業より支援を受けた。

(人間発達専攻 加藤佳子)

5. 教育

5.1 教育課程

5.1.1 今年度の特徴

平成29年度に新たに開始した取り組みや、本年度特記すべき事項などは以下のとおりである。

(1)発達科学部と国際人間科学部との授業科目の同時開講

平成29年4月より、これまでの発達科学部と国際文化学部が統合して新たに国際人間科学部が設置された。それにともない、発達科学部と国際人間科学部で同一内容の授業科目については、平成29年度より順次、同時開講することとした。

その際、いくつかの教職科目において発達科学部と国際人間科学部の授業科目で1対1対応していないものが存在することから、年度当初に2回、発達科学部生を集めて履修指導を行った。

(2)発達科学部学生への履修指導の充実に向けた内規の作成

国際人間科学部への移行にともない、発達科学部の時間割が複雑化していることから、平成30年度より、発達科学部生(3,4年次)を対象に、学生の履修状況と休学履歴を資料として、コース単位でより丁寧な履修指導を行うこととした。

- ・平成27年度以前入学生(平成30年度に4年次)

4年次4月上旬と4年次9月下旬の2回、履修状況の確認と指導

- ・平成28年度入学生(平成30年度に3年次)

3年次4月上旬、3年次9月下旬、4年次4月上旬、4年次9月下旬の4回、履修状況の確認と指導

(3) 「高度教養科目」の新設

平成 28 年度学部入学生より「高度教養科目」(4 単位)が必修化されたが、他学部開講の高度教養科目は抽選登録のため、より確実に発達科学部生が卒業までに当該科目を 4 単位分修得できるように、発達科学部生が平成 30 年度から履修可能な自学部開講の高度教養科目を 3 科目新設する準備を行った。

(4) 「発達科学部及び人間発達環境学研究科の試験等における不正行為等に関する取扱い」の施行

平成 29 年度より、試験におけるカンニング等に加え、レポート等に関しても剽窃等の不正行為が処罰の対象になることから、年度当初に各種ガイダンスやメール等において、表記取扱いの施行と他者の著作を引用する際の留意点について注意喚起を行った。

(5) 学生の海外活動に関する授業科目の単位認定

①学部における「海外実習 A」「海外実習 B」「外国語実習」「海外インターンシップ実習」の単位認定の実績は以下のとおり。「海外実習 A」0 名、「海外実習 B」5 名、「外国語実習」3 名、「海外インターンシップ実習」0 名。

②平成 29 年度より、大学院における「海外実習 A」「海外実習 B」「外国語実習」の単位認定を開始した。実績は以下のとおり。「海外実習 A」0 名、「海外実習 B」1 名、「外国語実習」0 名。

③学部及び大学院における海外の大学又は短期大学において履修した授業科目について単位認定を行った学生数は、学部 1 名、大学院前期課程 3 名、大学院後期課程 0 名であった。

(6) 外国語による授業の充実に向けた取り組み

英語使用、または英語によるコミュニケーションを取り入れた授業を、学部で 6 科目、大学院で 8 科目実施した(平成 28 年度は学部 4 科目、大学院 4 科目)。また、さらなる授業の拡大にむけて部局の全教員に改めて趣旨説明を行い、今後英語を取り入れることの可能な授業として、今年度実施の科目に加えて学部 5 科目、大学院 11 科目の見通しを立てた。

(7) 英語外部試験 (TOEIC-IP)

表記試験の受験者数は、3 年生 300 人中、52 名であった。

(教務委員会委員長 渡邊隆信)

5.1.2. 研究科，専攻共通科目

(1) 人間発達総合研究 I

人間発達総合研究 I は前期課程の共通科目として、人間発達専攻の学生が学問領域を超えた問題意識を共有することを目的としており、専攻内における多様な研究関心とテーマの広がりを見据える内容となっている。人間発達総合研究 I および人間発達関連研究の運営を充実させるため、共通科目運営委員会が組織されており、人間発達専攻各系講座より 1 名ずつ委員を担当している。前年度の受講生のアンケートや評価をもとに、改善点を抽出

し、受講生の声を反映させた科目運営を行った。

(人間発達総合研究主担当 野中哲士)

(2)人間発達総合研究 II

本講義は、人間発達専攻の博士課程後期課程学生の必修であり、今年度は、平成 29 年 7 月 14 日（金）に、大会議室において、博士論文構想発表会として実施した。参加は 12 名であった。一人発表 20 分、質疑 10 分の設定であり、質疑では、活発な意見交換がなされた。学際的な研究科専攻として、多様なテーマによる博士論文構想発表会の合同実施は、後期課程学生の教育・研究上有意義なものであることが今年もまた認識された。

なお、本構想発表会のプログラムは、以下の研究科 HP に掲載、公表されている。

<http://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/4755#0>

(人間発達総合研究主担当 稲垣成哲)

(3)人間発達相関研究

人間発達相関研究は、人間発達専攻の前期課程の学生がみずからの修士論文の構想をポスター発表し、互いの研究領域の問題を学び、切磋琢磨することを目的としている。今年度も、例年通りポスター発表がなされ、活発な議論が行われた。

(人間発達相関研究主担当 野中哲士)

(4)人間環境学相関研究

人間環境学相関研究は、人間環境学専攻の前期課程共通科目として実施されてきたが、学生の要望も踏まえて 2016 年度より授業の設計を大幅に変更した。今年度は設計変更後の 2 年度目にあたる。

人間環境学専攻の多様な専門性を活かすべく、この授業は学生の研究プレゼンテーションに基づく多分野間の学際的な対話を行うことを目的としている。具体的には、今年度は 4 教育研究分野 33 名の学生が、それぞれプレゼンテーションとコメント・ファシリテーションの役割を分担して相互に意見を交わし、さらに全員がプレゼンテーションに対する評価基準を自ら設定しながら各プレゼンテーションの評価を行った。その上で、担当教員が各プレゼンテーションとコメント・ファシリテーション、および毎回のフロアでの発言および評価レポートを評価することとした。これら多分野間の議論・意見交換と相互評価を通じ、自らの研究に対する異分野からの評価による気づきや自明視していた前提の再検討の契機を得るとともに、修士論文に向けた自らの研究の深化をはかることができた。

(人間環境学相関研究 主担当教員 橋本直人)

(5)ヒューマン・コミュニティ創成研究

本授業は、人間発達環境学研究科の研究科共通科目であり、人間発達専攻、人間環境専

攻の教員、学生が共同して構成・実施する前期2単位の授業である。今年度は、ヒューマン・コミュニティ創成の核心を構成する多様な人たちの間に成り立つべき「対話」を正面から扱った。「対話」とは何かといった議論から始まり、「哲学対話」の実践について理解を深めるとともに、受講者が中心となって「哲学カフェ」の試行を行った。その後、「サイエンス・カフェ」への関心を深め、科学者の市民との対話の現代的意義や困難や方法について議論した。授業には原則として毎回、伊藤真之教授、稲原美苗准教授、津田が出席し、授業をコーディネートした。受講生は、人間発達専攻、人間環境専攻双方にわたり、多様な専門性を背景にした議論を行うことができた。また、授業を交流ルーム（カフェ・アゴラ）で実施することで、和やかな対話的空間を演出した。

（ヒューマン・コミュニティ創成研究 主担当 津田英二）

5.1.3 教職教育

(1) 教育実習

教育実習の履修者(単位認定者)数は、幼稚園 14(14)、小学校 36(36)、中学校 19(19)、高等学校 21(21)、中等教育学校 31(30)、特別支援学校 13(13)であった。中等実習履修者数を教科別にみると、国語 0、数学 12、英語 4、理科 23、社会 5、地理歴史 4、公民 0、保健体育 0、音楽 9、美術 2、家庭 3、であった。

平成 30 年 3 月 6 日に附属校園との実習反省会を行った。以下のような意見や検討課題が出された。

○3名の学生がインターンシップに来てくれて良かった。(幼稚園)。

○大学教員が参加しての反省会が充実していた。(幼稚園)。

○実習生は、熱心かつ積極的に取り組んでいた。1,2名の実習生が指導案作成に苦慮していたが、何とかやりとげることができてよかった。(小学校)

○実習受入人数も適当であった。本実習は夏休み明けの日程であったが、特に問題なかった。(小学校)

○事前指導を欠席した学生が 3,4 名いた。当該学生の指導についての反省文の教員コメント欄が未記入であった。(中等教育学校)

○一部の実習生が教材研究や指導案作成に苦労していたが、全体的に良かった。(特別支援学校)。

○実習生が給食をとることから、事前アンケートを実施し、食物アレルギー等がないかどうか調査した。また学生の研究テーマ等も事前に把握しておくことができた。(特別支援学校)

(2) 教員免許取得状況

本年度の教員免許取得状況は以下のようであった。

①平成 29 年度卒業生の教員免許取状況(一種免許状)

区分	幼稚園	小学校	特別支援学校	中学校						
				理科	家庭	社会	数学	音楽	美術	保健体育
計	24	25	8	15	2	9	12	6	6	5
高等学校										
区分	理科	家庭	地理歴史	公民	数学	音楽	美術	保健体育		
計	18	2	7	5	15	6	8	7		

*実取得人数 95 名

②平成 29 年度大学院修了生の教員免許取状況(専修免許状)

	幼稚園	小学校	特別支援学校	中学校						
				理科	家庭	社会	数学	音楽	美術	保健体育
計	2	4	0	4	0	2	2	2	0	0
高等学校										
区分	理科	家庭	地理歴史	公民	数学	音楽	美術	保健体育		
計	7	0	0	2	2	3	0	0		

*実取得人数 13 名

(3) 教職実践演習

本年度の幼小「教職実践演習」の授業スケジュールは以下のとおりであった。

回・セッション	日 程	テーマ	担当教員と人数	授業内容
1	10月6日 5限	オリエンテーションとグループ編成	学部教員	
2・3 I	10月13日 5・6限	教職の使命感や責任感, 教育的愛情等	附属小学校, 1名	講話, グループディスカッション等 ※感想・レポートの提出
4・5 II	11月10日 5・6限	社会性や対人関係能力	附属小学校, 1名	講話, グループディスカッション等 ※感想・レポートの提出

6・7 Ⅲ	11月17日 5・6限	児童理解, 学級経営等 教科内容等の指導力 まとめ	附属小学校, 1名	講話, グループディスカッション等 ※感想・レポートの提出
8	11月24日 5限	新任教員の果たす役割 ——卒業生講話	本学部卒若手教員	講話, 質疑応答等演習等
9・10 Ⅳ	12月8日 5・6限	幼児教育について, 幼児理 解に基づく教師のかかわ り, 教師の使命感・責任 感・教育的愛情等	附属幼稚園, 1名	講話, グループディスカッション等 ※感想・レポートの提出
11・12 Ⅴ	12月15日 5・6限	幼児教育について, 幼児理 解に基づく教師のかかわ り, 教師の使命感・責任 感・教育的愛情等	附属幼稚園, 1名	講話, グループディスカッション等 ※感想・レポートの提出
13・14 Ⅵ	12月22日 5・6限	特別支援教育について	附属特支学校, 2名	※感想・レポートの提出
15	1月26日 5限	「まとめレポート」に基づ く総括ディスカッション	学部教員	※感想・レポート等の集積に よる省察

○グループディスカッション, ロールプレイ, 模擬授業, 事例研究などを行う。

○10/13, 11/10, 11/17, 12/8, 12/15, 12/22は「5・6限の2コマ続き」で実施。

○10/20, 10/27, 11/3, 12/1, 1/5, 1/12, 1/19は休講。

(教務委員会委員長 渡邊隆信)

5.1.4. 博物館学芸員資格

博物館学芸員資格専門委員会は, これまで発達科学部の学芸員養成課程における博物館実習の運営と単位認定を行ってきた。平成29年度も, 当委員会は, 発達科学部の2年生以上の履修生に対して, 従来通りのスケジュールに則って, 博物館実習の説明会・学内実習運営を実施するとともに, 履修を終えた3年生以上に単位認定を行った。これらの活動に関連して, 3回の委員会を開催した。

一方で, 発達科学部と国際文化学部の再編統合により開設された国際人間科学部の新入生が入学した年度でもあった。国際人間科学部にも学芸員養成課程は引き継がれるため, 今年度より, 両学部の同委員会委員の一部が合流する形で国際人間科学部の同委員会を発足させた。そこでの特筆すべき活動は, 発達科学部と国際文化学部の同委員会のプログラム内容の特色や違いを再検討し, 統一し, より合理的で充実したプログラムに完成させたことにある。

1) 平成 29 年度博物館実習説明会と各実習の実施

① 全体事前指導（7月7日）：3年生を対象として、博物館実習全体のカリキュラムについての説明を行った。

② 見学実習（夏期）：3年生を対象として、博物館・美術館・科学館等での見学実習を実施した。

③ 学内施設「あーち」における実務実習（2回）

・前期（9月26～30日、10月3～5日）：学内施設「あーち」において、例年通り、講師に脇谷紘先生（版画家・舞台芸術家）をお招きし、社会福祉法人たんぼぼと連携して、空間アートの展示・解説を行った。今年度の空間アートのテーマは「Bird」であった。（履修者数7名）

・後期（2月27日～3月1～3日、6～8日）：学内施設「あーち」において、勅使河原君江講師、大田美佐子准教授、稲原美苗准教授、津田英二教授の指導のもと、平和をイメージする造形写真の制作と展示を行い、平和展「対話が生まれる空間」を実施した。（履修者数6名）

④ 全体・館園事後指導ならびに館園実習前事前指導（12月8日）：昨年度と同様に、3年生以上を対象とした全体・館園事後指導と、2年生以上を対象とした館園実習前事前指導を合同で実施した。目的は、事後指導対象の実習生が行う、学外での博物館・美術館における館園実習の体験談や問題意識の口頭報告を、これから実習に赴く下級生たちが事前指導の一つとして聴くことにより共有することにある。この報告会における質疑応答も含めて、事後指導履修生は博物館実習全体の総括を行った。事前指導履修生には別途、学外実習先の説明ならびに館園実習に向けての諸注意を行った。

2) 平成 28・29 年度の博物館実習単位認定：博物館実習単位は2年間をかけて取得する。3年生 8名、4年生 4名、大学院前期課程 2年生 1名、計13名に対して博物館実習の単位認定を行った。

3) 国際人間科学部の学芸員養成課程におけるプログラムの完成

本報告は本来、発達科学部の当委員会における活動報告をするものであるが、新学部の学芸員養成課程のプログラム作成の経過についても触れておく。前年度からの課題であった国際文化学部との統合により開設された新学部における、学芸員養成課程の統合・改編を進めるため、今年度は、発達科学部の当委員会と国際文化学部の同委員会より一部の委員が国際人間科学部の同委員会の委員を兼任することで、情報交換を円滑に行った。すなわち、発達科学部より白杉直子委員長と、津田英二委員、勅使河原君江委員が、国際文化学部より板倉史明委員が副委員長として国際人間科学部の同委員会のメンバーとなり、国際文化学部の同委員会の吉田典子委員長ほか委員の先生方からの情報提供の協力も得ながら、統合への作業を進めた。この際、前年度より発達科学部で実施された、学芸員資格取得に関するカリキュラムを従来の3年生対象から、1年前倒しし、2年生から履修できるようにしたしくみは、学生の履修の機会を増やすとともに、国際文化学部との統合において両学部のカリキ

ュラムの親和性を特にスケジュールの点から高めることにもつながった。見学実習においては、国際文化学部と同委員会が従来実施していた、教員が学生を引率して美術館または博物館を見学する実習を1回取り入れることとし、発達科学部の当委員会が実施してきた人間発達環境学研究科附属施設「あーち」における実務実習についても継続することとなった。両学部のそれぞれの特徴を生かした博物館実習プログラムにつなげることができた。

4) 今後の課題

発達科学部においても、博物館実習に履修生の就職活動が重なるなどの個別の問題が発生していたが、国際人間科学部では、GSPにおける海外等でのプログラムとの時期的なバッティングがますます増えることが予想される。博物館学芸員資格取得を希望する学生が、履修登録や実習参加の機会を逃さないように、学生向けMLによるメールでのアナウンスの適切な活用などが必須となってくる。

(博物館学芸員資格専門委員会委員長 白杉直子)

5.1.5. ESD サブコース

ESD (Education for Sustainable Development=持続可能な開発のための教育) をテーマとするこのコースは、学部を超えた領域横断型のコースとして、2008年度より開講されている。2015年度より授業運営を担うESD 教育部会(部会長:松岡広路)は、国際教養教育院に設置されたが、中核となっているのは、人間発達環境学研究科である。全学に配置されている同コース運営委員会の委員長は、伊藤真之(人間環境学専攻教授)、副委員長は松岡広路(人間発達専攻教授)となっている。また、実務的には、松岡のみならず、総合コーディネーターの鴨谷真(学術研究員)や清野未恵子(人間発達専攻准教授)が、神戸大学の新しい教育モデル「ESD コース」の運営に当たっている。

今年度は、従来の「ESD 基礎 A・B」「ESD 論 A・B」「ESD ボランティア論」に加えて、「ESD 生涯学習論 A・B」を新設した。全学の ESD 関係教員の協力を得て、アクティヴ・ラーニングを基軸とした授業を展開している。それらの基幹にあるのは、本研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターが実務を担当する「ESD スタディツアープログラム」である。阪神間の 20 以上の ESD 関係の団体に活動を提供してもらい、そこに学生が参加し気づきを持ち帰り、共有することで、ESD の世界の実像に触れることが意図されている。上記の ESD 基礎科目群と、各学部で開講されている関連科目を履修したのち、ESD 演習で、学びの総合化・交流を行うという学びの流れをもつ ESD コースは、新しいサービス・ラーニングのモデルにもなりえるであろう。参加部局が全部局に広がり、いよいよ全学部参加のコースとして本格的に動き始めた。本コースの運営の母体であるヒューマン・コミュニティ創成研究センターの役割は大きく、全学にその存在感を示すことが求められている。

(ESD サブコース運営委員会委員 松岡広路)

5.1.6 ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント

(1) ゲストスピーカー

授業科目の内容をより充実できるよう、担当教員の企画主体で1 Semester 授業中に1回ないし2回、1 クォーター授業中に1回の外部からのゲストスピーカーを招聘している。平成29年度は、72万円（1件につき1万円）の予算配分のもとで、前期27件、後期40件の計67件が実施された。提出された実施報告書の点検を通じて、受講学生、招聘講師、担当教員のいずれからも良好な評価が得られており、高い教育効果を生んでいることが確認できた。

平成30年度は計23件のゲストスピーカーを招聘できるよう予算措置している。そのうち10件については、高度の学術的知見ないしは高度の職業経験を有する大学院博士課程後期課程学生の登用を想定したものとしており、博士課程後期課程学生のキャリアアップないし業績形成に資することを期している。

(2) ティーチングアシスタント

優秀な大学院学生及び学部学生に対し、教育的配慮のもと教育補助業務を行わせ、学部教育におけるきめ細かい指導の実現や学生に将来教員・研究者等の職に就くためのトレーニングの機会を提供し、これに対する手当支給により、学生の処遇の改善の一助とするためにティーチングアシスタント制度を設けている。昨年度に引き続き、学部学生をスチューデントアシスタント（SA—時給900円）、大学院前期課程学生をティーチングアシスタント（TA—時給1200円）、同後期課程学生をシニアティーチングアシスタント（STA—時給1500円）とし、従事可能な業務内容につき差別化を行ったうえで任用した後期課程学生をTAとして任用することも可能—時給1400円）。実施報告書（学生用・教員用）からは、担当教員・学生のどちらからも高い評価を得ていることが確認できた。

今年度から国際人間科学部が新たに設置され、発達科学部と同時開講の科目に関するティーチングアシスタントは国際人間科学部の予算でまかなわれた。そのため、発達科学部における平成29年度の予算配分は約476万円（4,760,875円）であり、昨年度比で86.56%であった。任用学生数は以下のとおりである。

前期 SA	9名	TA	87名	STA	5名	計	101名
後期 SA	10名	TA	72名	STA	4名	計	86名

（教務委員会委員長 渡邊隆信）

5.1.7. 神戸グローバルチャレンジプログラム

神戸大学全学で実施する「神戸グローバルチャレンジプログラム」（文部科学省「大学教育再生加速プログラム」として平成27年度採択）の一環として、発達科学部として「アジア・フィールドワークコース」を平成28年度より実施している。

「神戸グローバルチャレンジプログラム」は、学部の1, 2年生を対象とする教育プログ

ラムで、学生が国際的なフィールドで行う主体的な学修活動を通じて、「神戸スタンダード」の必要性を体感し、高学年次の学修に向けた学びの動機づけを得ることを目的とする。各学部が提供する多様なコースの学修成果に対して、総合教養科目「グローバルチャレンジ実習」として単位が認定される。

発達科学部の「アジア・フィールドワークコース」は、アジアでのフィールドワークを通して、異文化環境の下での自らの体験に基づいて、グローバル人材として必要な「課題発見・解決能力」の必要性に気づき、学びの動機づけを得ること、また、実践型グローバル人材として成長するための基盤となる3つの能力（「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」）を修得することを目的とし、全学の学生に開かれたコースとして実施している。

平成29年度は、「グローバルチャレンジ実習」として複数の学部から計5名の学生が参加した。神戸大学での事前学修を行った上で、学外学修として、8月25日から9月5日にかけて、中国・上海および近郊の都市圏および富栄養化の進む代表的な湖沼である太湖において、環境問題にかかるフィールドワークを行った。学外学修の期間中は原則としてカウンターパートである上海交通大学の大学院生と行動をとにし、英語でコミュニケーションをとった。最終日には学外学修で学んだことについてのプレゼンテーションを上海交通大学で行い、先方の大学教員及び大学院生とその内容に関するディスカッションを行った。これらの経験は国際コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の向上に資すると考えられる。事後学修では学外学修について振り返り、太湖の水質問題や上海近郊における生活様式など学んだことに関するまとめを行った。

現地を訪れ、現地の雰囲気を感じるということをテーマとして学外学習を行ったが、学生のリフレクションシートからは、それまで持っていた中国という国や人々に対する誤解を解くことができるなど、一定の成果があったことが伺えた。また、学生のルーブリック評価からは、多くの学生が、「学内外への活動へ参加し、自分の役割を担う」という点が向上したと自己評価した。「得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する」についても半数の学生が向上したと評価した。これらのことから、グローバル人材として成長するための基盤となる能力の向上が見られたと評価された。

(人間環境学専攻 源 利文, 古川文美子, 伊藤真之)

5.2. 各学科等の教育

5.2.1 人間形成学科

①運営

人間形成学科は、心理発達論コース、子ども発達論コース、教育科学論コース、学校教育論コースにより構成されている。日常的な運営は、主にコース単位で実施しているコース会議ないしはコース運営会議で行っている。学科全体の予算、教育、入試等の議案やコース間の役割分担等については、学科長とコース主任による学科運営会議において適宜連絡・協議し、調整を図りながら運営した。しかしながら、新学部設置以降は、これらの業務は、新学

部の側に移行しつつある。

②予算

予算は大学院の各専攻講座に配分されている。よって、学部学科独自の予算はない。大学院と学部のコースが対応しているところでは、一括して予算執行されている。ただし、大学院との対応がない学校教育論コースについては、子ども発達論コースと教育科学論コースを構成する教員組織への予算配分から共通経費を捻出し、共同の運営としている。その他、実験・実習経費を得ている。なお、学科共通経費は計上していない。

③入試

最後の第3年次編入学試験が例年通り行われ、実施運営においてはとくに問題はなかった。その他の入試は、新学部に移行している。

④教育

年度当初に新入生ガイダンスを実施した。2年次におけるコース振り分けは、2017年2月14日に実施され、全員の所属が確定した。例年、希望コースの偏在が顕著であるために、1年生のときから、学生に対して必要な情報を適宜アナウンスすると同時に、その時点でのコース希望調査を実施し、結果を公表してきた。このように準備と周知を徹底したこともあり、特に大きな問題は発生しなかった。3年生のゼミ分けでは、教員・ゼミ紹介パンフレットの作成、各指導教員との面談、既ゼミ生との面談機会を設定し、ゼミへの所属決定過程において、個人の研究志向とゼミの最適化をするように図った。

教員の授業改善の試みとしては、「子ども発達論」「初等社会科教育論」など2科目においてピアレビューを実施した。また、「心理検査法」「教育相談」「心理学入門」「子ども教育論」「幼児教育内容論」「教育学概論」「教職論」「教育政策」「自然教育論」「学習指導論」など多数の講義にTAを配置して授業の充実を図った。さらに、「障害児発達論」「発達障害臨床学1」「教育政策」「教育行政」「初等社会科教育論」「教育方法学」「道徳教育論」「理科教育方法論」「幼児人間関係指導法」「幼児教育内容論」等の授業にゲストスピーカーを招き、講義内容を深化させた。

なお、コース別の特記事項は以下の通りであった。

心理発達論コースでは、学びが書物の上だけになってしまわないように、各種の実験、実習を行い、実践的な側面からも学びが充実したものになるよう心がけた。また、外部でのボランティアなども推奨し、学びが社会とのつながりの中で体験され、実感されることを目指した。

子ども発達論コースでは、グローバルな視点から子どもの発達を多角的にとらえ、子どもをめぐる諸問題を、社会の形成者一員として当事者意識をもってとらえ、個々の範疇でその解決に向けて行動できる力量を形成するために、学際的実践的な教育・研究を目指した。

具体的には、ノルウェー、オーストラリア、韓国、シンガポール等の研究者による講話、各国の院生、学生との共同授業や共同フィールドワーク、附属および地域の幼稚園・小学校における授業や卒業研究の実施を積極的に行った。

学校教育論コースでは、例年通り9月に西はりま天文台で合宿研修を実施し、20名の参加を得た。

教育科学論コースでは、例年通り、卒業研究において副査制度を導入し、卒業研究の質の保証に取り組んできた。また、コース内で、教員・大学院生との共同で、『教育科学論集』の発行を行ってきている。これらの試みは、所属学生の卒業研究への取り組みに対して、効果的な影響を与えたと考えられる。

その他、正課外では、外部講師の招聘による学術講演会を3件開催し（テーマは、いじめ問題、発達障害、理科教育）、人の発達や教育についての関心と知見を深める機会を提供してきた。各ゼミあるいはゼミ合同単位では多数の合宿研修（淡路等）がなされており、教育研究の推進と教員・学生の交流について成果が上がっている。

(人間形成学科長 稲垣成哲)

5.2.2. 人間行動学科

(1) 運営及び入試

本年度4月に国際人間科学部が設立され、発達科学部の募集は停止されているため、人間行動学科の在学学生は2年次以上である。健康発達論コース（教員4名）、行動発達論コース（教員5名）、身体行動論コース（教員8名）によって、それぞれのコースの運営にあたった。日常的な運営は基本的にコース単位で行い、コース間の役割分担等については、学科長とコース主任によって適宜連絡・協議し、学科全体に関わる教務・学生、入試等に関する重要議案については、学科会議において審議・決定した。

(2) 予算

予算は大学院の各専攻・系講座に配分されており、学部独自の予算はない。学部学生当経費の扱いに関しては各コースの指導学生数に応じて配分した。コースによって若干の配分の仕方に違いがあるが、概ね、3・4年次学生分は指導学生数に応じて配分し、1・2年次分については教員数で均等割、もしくは共通経費として扱った。

(3) 入試

平成29年度における入試は、国際人間科学の設立に伴い発達科学部の学生募集が停止された。発達科学部として実施した入試は、3年次編入学入試（学部として若干名の募集）のみであった。志願者数は行動発達論コース2名（受験者2名）、身体行動論コース5名（受験者4名）であった。試験の結果、行動発達論コースは2名、身体行動論コース1名が合格となった。

(4) 教育

各学年における学生指導は、2年次生はコース主任、3・4年次生はゼミ教員が中心となって指導にあたっている。学生の教育研究活動が円滑かつ効果的に進むよう、学科として下記の行事を実施した。

4月 4日	新2年生ガイダンス及びコース別ガイダンス
9月 下旬	卒業研究中間発表会（2～4年生の参加，コース別）
10月 初旬～中旬	研究室配属に関するガイダンス（コース別開催）
2月 5日	行動発達論コース卒業研究発表会
2月 9日	身体行動論コース卒業研究発表会
2月 14日	健康発達論コース卒業研究発表会

1) 研究室配属

3年次の各研究室への配属の方法は、履修コースによって若干異なる。健康発達論コースは学生の希望が最優先で決定された。行動発達論コースにおいては、各研究室2名を最低人数とし、コース主任と学生との綿密な話し合いにより、研究室が決定された。身体行動論コースでは、基本的には各研究室の配属学生数の上限を4名程度とし、学生の希望を優先しつつ、希望に偏りが生じる場合には、教員の指定する授業科目の成績により振り分けた。

研究室の配属について、2年生に複数回ガイダンスを行うとともに希望調査を行い、できるだけ学生間で調整できるよう配慮した。身体行動論コースでは、本年度は学生による調整がうまく進み、成績による振り分けは行わなかった。

2) 卒業研究指導

履修コースにより卒業研究指導のスケジュールが若干異なるが、最も多数の学生がいる身体行動論コースでは、5月に卒業研究届を提出したのち、9月29日に中間発表会を開催し、口頭発表を行った。12月22日に卒業論文をコース内提出した。コースでは各卒論の主査（指導教員）と副査を決め、翌年1月中旬に主査・副査のもと、口頭試問を実施し審査を行った。口頭試問等で指摘された箇所を加筆・修正した後、1月31日に教務学生係へ提出した。その後、2月9日開催の卒業研究発表会で口頭発表し、教員が最終合否判定を行った。他の2コースでも、ほぼ同様な手順での卒業研究指導が行われた。

3) 学生の受賞

人間行動学科では、体育・スポーツ科学が教育・研究の大きな分野であるため、スポーツ活動において優秀な成績を残す学生も多い。本年度は本学科の下記3名が平成29年度の学生表彰を受け、3月13日に表彰式が行われた。

堀庭裕平（空手道部） 発達科学部人間行動学科 3年

第72回国民体育大会・空手道競技。成年男子形（かた）の部に於いて準優勝、また、第61回全日本学生空手道選手権大会男子個人形（かた）の部第3位の成績を収めた。

北山菜生（女子タッチフットボール部） 発達科学部人間行動学科 4年

昨年度3年次に同部主将、選手としてプリンセスボウルとさくらボウル3連覇に導

き、今年度も両大会 4 連覇に貢献した。

多田羅光樹（カヌー部）発達科学部人間行動学科 4 年

過去 3 年連続で学生表彰を受けており、長距離種目で全国規模の大会で好成績を残しており、特に 3 年次にはカヌーマラソン世界選手権大会に出場した実績をもち、4 年次には主将を務め後輩の指導や部の運営に努めた。

(5) 広報

平成 29 年度高大連携事業として、下記日時に模擬授業を行った。

実施日：平成 29 年 10 月 27 日（金）午前 10 時～12 時

高校名：兵庫県立星陵高等学校

対応教員：前田正登・秋元忍

（人間行動学科長 河辺章子）

5.2.3. 人間表現学科

1. 運営

人間表現学科（発達科学部）は人間発達専攻表現系（人間発達環境学研究科）の構成員と同一のため、学科に関する意思決定は、構成員全員による学科／系講座会議として行った。今年度は同会議を 8 回開催し、適宜メール審議を加えて、予算、入試、教務、学生、将来構想等に関わる案件を審議・決定した。このうち人事を含む将来構想についてはワーキンググループを設置して学科／系講座会議に先立ち論点の整理を行い、学科／系講座会議の審議の充実を図った。

また、研究科人間発達専攻運営委員会は系講座主任を兼務する学科長が構成員であり、同運営委員会での報告事項・審議事項については、メール連絡および学科／系講座会議を通して、時期を逸することなく情報共有を図った。

なお、人間表現学科は 1 学科 1 コース（人間表現論コース）であるため、学科長がコース主任を兼務している。ただ、3 コース制（表現創造論、表現文化論、臨床・感性表現論）の過年度性が若干名あるため、これに対応する 3 名のコース主任を置いている。

2. 予算

当学科の予算は大学院人間発達専攻表現系として措置され、年度初めに一定の共通経費を確保し、学部分については等分、博士課程前期課程と同後期課程については主指導担当学生数に応じて比例配分している。学科共通経費は年度初めに複写・印刷代の予算を確保しておき、年度末にその実支出を差し引き、加えて必要に応じて学科として共通に使用する教育機器の修理、整備にあて、残額を構成員に等しく追加配分した。

3. 入試

一般入試、AO 入試、社会人入試は国際人間科学部入試となるため、発達科学部として実

施されたのは第3年次編入学試験のみである。同入学試験において、人間表現学科の受験者は8名（志願者は9名）、うち合格者2名で全員が入学した。なお、次年度は国際人間科学部の1期生が3年次を迎えるため、発達科学部として実施する第3年次編入学試験は、今年度が最後である。

4. 教育

4.1. 指導体制

発達科学部に入学した学生は、本年度2年次を迎えた（1年生は国際人間科学部生）。発達科学部人間表現学科では3年次にゼミ配属を行っている。したがって学生指導態勢は、2年生は学科長が対応し、3・4年生はゼミ担当教員が中心となり対応している。第3年次編入学生については、入学時のガイダンス（4月5日）に先立ち、既修得単位の認定作業を行うことになっている。この手続きは入学後の履修計画とも関わるため、編入学生の配属希望ゼミの担当教員が履修指導を含めて行うこととしている。なお、在学状況（休学、履修状況、単位修得状況、卒業研究資格、卒業仮判定等）・学生動向については、教務学生係との連携のもと、学科内で情報共有し、適切に対応した。

4.2. ゼミ配属

2年次生ガイダンス（平成29年4月4日）において、次年度のゼミ配属にむけて、ゼミ訪問、志望書提出（平成30年1月19日期限）、配属決定（平成30年2月中～下旬）の方法を説明した。配属を希望するゼミの決定については、約10カ月の熟考期間を設け、ゼミを訪問して実際に行われているゼミの見学／参加を行い、ゼミ担当教員との面談を経て、第3希望までを志望理由を付して提出することになっている。

結果として、第1希望数が多いゼミでは9名、少ないゼミでは1名と大きな開きがあったが、検討の結果、学生の希望、教員の意向を尊重して、全学生が第1希望のゼミに配属されることとなった。

4.3. 卒業研究指導

カリキュラム上の「卒業研究」は4年次開講（10単位）だが、人間表現学科では実質的に3年次から始まるゼミにおいて2年間を通して指導する。その総決算である卒業論文は、平成30年2月9日に「卒業研究審査会」として行われ、人間表現論コース生19名、臨床・感性表現論コース1名が発表し、全員が合格となった。

4.4. ゲストスピーカー

4.4.1. 音楽療法論1, 2（岡崎香奈准教授）：沼田里衣（大阪市立大学都市研究プラザテニユアトラック特任准教授、音遊びの会代表、おとあそび工房主宰）

4.4.2. 身体表現論（関典子准教授）：いいむろなおき（マイム俳優）、鞍掛綾子（舞踊家・振付家・acdaスタジオ主宰）

4.4.3. 舞踊表現（関典子准教授）：サイトウマコト（舞踊家・振付家・斉藤DANCE工房主宰）、村本すみれ（舞踊家・振付家・MOKK主宰）

- 4.4.4. エスノミュージコロジー2 (谷正人准教授) : 松平勇二 : (国立民族学博物館), 2017年12月18日
- 4.4.5. 音文化論 (谷正人准教授) : 新井孝弘 (サントゥール奏者), 2017年5月22日
音楽民族学 (谷正人准教授) : 宮下節雄 (インドサントゥール奏者), 2017年12月4日
- 4.5. 正課外授業等
- 4.5.1. 特別授業「ジャズの掟」(2017年11月13日) : 講師 : 金谷こうすけ (ピアニスト・作曲家・ラジオパーソナリティー), (大田美佐子准教授)
- 4.5.2. 特別授業「板東俘虜収容所の活動と第九初演」(2017年11月6日) 講師 : 岩井正浩 (神戸大学名誉教授, 音楽学), 主催 : 大田美佐子研究室
- 4.5.3. 大学院ゲスト講演「音楽ジェントリフィケーションと移民音楽家のキャリア形成 : オスロでのエスノグラフィー研究を通して」(2017年4月17日), 講師 : 原真理子 (ノルウェーインランド大学研究員), 主催 : 大田美佐子研究室
- 4.5.4. 大学院ゲスト講演「カール・ボアマンの音楽と講師 : 大田麻佐子 (ドイツ在住ピアニスト, 現代音楽家), 主催 : 大田美佐子研究室
- 4.5.5. 大学院ゲスト講演「対話型鑑賞の可能性」(2017年5月22日), 講師 : 三重野一(日能研講師・フリーキュレーター), 主催 : 大田美佐子研究室
- 4.5.6. 大学院ゲスト講演「ハンス・アイスラーと亡命」(2017年6月26日), 講師 : 和田ちはる (明治学院大学准教授), 主催 : 大田美佐子研究室
- 4.5.7. 特別講演会 「外国語劇の可能性 ハンブルク大学ドイツ人学生たちによる日本語劇『少年口伝隊一九四五』」(2017年7月26日), 講師 : 原サチコ, (神戸大学大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター, 大田美佐子研究室合同開催)
- 4.5.8. 特別コメンテーター 「西洋音楽文化論演習」(学部授業科目, 2018年1月23日, 30日), コメンテーター : 鈴木崇司 (ABC朝日放送ディレクター), 主催 : 大田美佐子研究室
- 4.5.9. シンポジウム「芸術家の肖像 - 文化的記憶・評伝・映画」(2018年2月20日), 講師 : 高岡智子 (龍谷大学), 尾鼻崇 (中部大学), 小田智美, 五十棲渉, 山村磨喜子, 肥山紗智子 (以上, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科学生), 主催 : 大田美佐子研究室
- 4.5.10. 「表現コンサート」(人間表現学科学生主体の地域に開かれたコンサート), 発達科学部C棟ホール, 通年開催
- 4.6. 学術 WEEKS
- 4.6.1. 演奏付き講演会「17世紀後半のウィーンイエズス会ドラマ『Mulier Fortis』気丈な婦人細川ガラシャの起源—その音楽と歴史的背景」(2017年10月10日), 講師 : アンジェラ・ロマニョーリ (パヴィア大学教授), 新山カリツキ富美子 (ウィーン在住音楽学者), ピエトロ・プロッサー (テオルバ・ラウテ奏者), 主催 : 大田美佐子

研究室

- 4.6.2. 「関典子×竹谷嘉人 dance×paint workshop [ピク。]」竹谷嘉人 (絵描き), 主催: 関典子研究室
- 4.6.3. 「アレクサンダー・テクニークの実践と研究 バジル・クリツァー氏を招いて」 (2018年3月21日), 主催: 谷正人研究室
- 4.7. 学生の学会発表, 課外活動 (卒業生を含む)
 - 4.7.1. 小田智美 (博士課程前期課程1年) 「藤原義江 -浅草オペラから藤原歌劇団へ」, 教育研究プロジェクト2017 シンポジウム「芸術家の肖像 - 文化的記憶・評伝・映画」2018年2月20日 (神戸大学)
 - 4.7.2. 肥山紗智子 (博士課程後期課程3年) 「戦後日本におけるアルフレッド・ヒッチコックの受容 - そのイメージの変遷をめぐって」教育研究プロジェクト2017 シンポジウム「芸術家の肖像 - 文化的記憶・評伝・映画」2018年2月20日 (神戸大学鶴甲第2キャンパス F152 教室)
 - 4.7.3. 木本麻希子 (博士課程後期課程修了 (大田美佐子研究室), 元神戸大学研究支援推進員) 「S. プロコフィエフの音の暗号化と芸術的理念 - 《ピアノ・ソナタ》におけるコード略号の音型分析」2018年10月28日, 日本音楽学会第68回全国大会 (京都教育大学2号館3階D2)
 - 4.7.4. 井手佑佳子 (卒業生, ケルン在住) 「ドイツの音楽プログラム『Jedem Kind ein Instrument』を対象としたアンサンブルにおける相互行為と音楽の変容過程の調査」2018年10月29日, 日本音楽学会第68回全国大会 (京都教育大学)
 - 4.7.5. 木本麻希子 (博士課程後期課程修了, 神戸大学研究支援員) 国際共同研究 “Marian Anderson in Japan” (ハーバード大学音楽学部教授 キャロル・オジャ教授, ハーバード大学ライシャワー日本研究所) 参加 (2018年2月5~14日)
 - 4.7.6. 能勢晶子 (博士課程前期課程1年) “Songwriting Focusing on Process and its Implications for the Clients as a Social Being” The 15th World Congress of Music Therapy, 2017年7月5日, つくば国際会議場
 - 4.7.7. 妹尾輝枝 (博士課程前期課程3年) “Music Therapy for Dementia: Therapeutic Use of Lyric Writing to Reconstruct Self-esteem” The 15th World Congress of Music Therapy, 2017年7月6日, つくば国際会議場
 - 4.7.8. 石原興子 (博士課程後期課程2年) “How are Changes in Repetitive Drumming Patterns Experienced in Psychiatric Music Therapy?” The 15th World Congress of Music Therapy, 2017年7月7日, つくば国際会議場
 - 4.7.9. 石原興子 (博士課程後期課程2年) “The Use of Japanese Calligraphy and Percussion Improvisation in Psychiatric Music Therapy : Focusing on Expressive Qualities of 'Simplicity' ” British Association for Music Therapy Conference 2018, 2018. 2. 17, The Barbican Centre, London UK

- 4.7.10. 発達科学部 ピアノ演奏1受講生(学部2年, 3年, 4年生)によるベートーヴェンピアノソナタ及びJ.S.バッハ平均律クラヴィーア曲集I FUGA アンサンブル発表会, 2018年1月24日, C111ホール
- 4.7.11. 発達科学部 室内楽受講生(学部3年, 4年生)による室内楽コンサート, C111ホール, 2018年1月31日
- 4.7.12. 発達科学部生(学部2年, 3年, 4年生), J.S.バッハ平均律クラヴィーア曲集Iピアノコンサート, 2018年2月7日, C111ホール
- 4.7.13. ミュージアムコンサート「音楽への旅II～神戸大学発達科学部・大学院表現系講座ピアノ演奏・室内楽研究室坂東ゼミによる～」和泉市久保惣記念美術館久保惣Eiホール, 2018年3月3日
- 4.7.14. 横石雄紀(学部2年生)「第5回あおによし音楽コンクール奈良受賞者演奏会」, いかるがホール 大ホール, 2018年3月17日
- 4.7.15. 絵画ゼミ3, 4年生計8名「I l o t o l I (イロトリ)」展(ゼミ展, 卒業制作展), 2018年2月21～26日, 神戸アートヴィレッジセンター展示室
- 4.7.16. 絵画ゼミ4年生「卒業制作展」, 2018年3月1～19日, F棟ギャラリースペース「ギャラリー虹」
- 4.7.17. 川原百合恵(4年生)「気鋭展2017」, 個展, 海岸通りギャラリーCASOスペースC, 2017年12月12～24日
- 4.7.18. 藤村陽(3年生)「第17回環境人間工学国際会議」(生田神社会館, 2017年11月12日～18日) ロゴマーク
- 4.7.19. 山本法子(博士課程前期課程2年)「個展 コーカサスの虜」, ギャラリー花六甲(2017年11月28日～12月3日)
- 4.8. 学生の受賞(卒業生を含む)
- 4.8.1. 横石 雄紀(学部2年生), 第5回あおによし音楽コンクール奈良アマチュアSectionピアノ一般部門第1位, 2017年11月19日, 大和高田さざんかホール
- 4.8.2. 川原百合恵(4年生), 兵庫県展洋画部門入選

5. 広報

平成29年8月10日, 11日の2日間, 神戸大学オープンキャンパスの一環として, 国際人間科学部においてもオープンキャンパスを実施し, 全体説明, 学生による留学体験発表, 学科別相談会等が行われた。これは国際人間科学部に関心を寄せる高校生を対象にしたものだが, 同学部の本年度在学学生は未だ1年生のみのため, 学部生活を説明できる立場にない。したがって, 学生スタッフとして実質的に活動したのは発達科学部生および人間発達環境学研究科の院生であった。

国際人間科学部発達コミュニティ学科の全体説明会において, 留学体験を発表したのは人間表現学科3年生と大学院博士課程後期課程表現系院生であった。また, 個別相談ブース

における高校生とその父兄への対応でも活躍し、参加者アンケートでも好評を博した。

6. その他

本年度の人間表現学科におけるトピックとして、F棟改修工事についてふれておきたい。

人間表現学科教員の研究室全13のうち8室がF棟にあり、関連する演習室および専門科目の授業で用いる教室、会議室等もF棟4階、5階に多い。このF棟全体の改修工事が本年度に実施された。4月前半の移転作業を経て11月半ばまで工事が行われ、工事完了後に再びF棟が利用できるようになったのは11月末であった。この間、仮移転先でのゼミ、通常とは異なる教室での授業が行われることになったが、教職員の協力、在学生の理解を得て、支障なく教育を継続することができたことに感謝したい。

改修後のF棟は室配置や用途に変更はあるものの、施設利用の継続性は保証されている。一新された内装と拡充された什器によって、教育施設としての強化がはかられ、1階吹き抜け部にはギャラリー利用を想定した設備が整えられたことなどは喜ばしいことであった。工事期間中には発達科学部生諸氏にも負担を強いることになったが、残された在学期間中、この環境を活用し、充実した学生生活に役立ててもらいたい。

(人間表現学科長 梅宮弘光)

5.2.4. 人間環境学科

(1) 運営

学科に関する意思決定は、例年どおり、人間環境学科運営会議において行った。本運営会議は、学科長と各コースの主任の計5名から構成される。今年度は、定例会議を13回開催し、予算配分、人事、入試、教務等に関わる重要案件を審議・決定した。なお、今年度から、新しい国際人間科学部の環境共生学科の運営についても、同メンバーで審議することとなった。

(2) 教育

今年度以降、新しい学生は入ってこない（環境共生学科に転換したため）。したがって、本学科は、今年度は2年生以上、来年度は3年生以上についての教育を担うことになる。この条件のもとで、4月4日、新2年生に向けてコース配属のためのガイダンスを行った。今年度のコース別配属人数は、以下のとおり。自然環境論コース：30名、数理情報環境論コース：17名、生活環境論コース：24名、社会環境論コース：30名。

(人間環境学科長 平山洋介)

5.2.5. 発達支援論コース

◇ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの「プロジェクトと連動したコース」

本コースは、人間発達環境学研究科及び発達科学部における「実践性」を特徴とした研究と社会貢献を展開するヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下、「HC センター」と略）の多様なプロジェクトと連動して運営されている教育コースである。学部教育における大きな特徴は、本コースで学びたい学生は、3年生になる時に4学科いずれからも編入できる点にある。編入してきた学生は、主に「子ども・家庭支援部門」「社会教育・サービスラーニング支援部門」「インクルーシヴ社会支援部門」「ジェンダー・コミュニティ支援部門」「自然共生地域支援部門」が取り組んでいる実践的研究に携わりながら、地域・行政・企業・NPOとの協働のあり方を実際に学んだり、現代的課題を解決する研究の原理と方法を修得したりできる。学生が携わることのできる各部門の主な研究プロジェクトは次の通りである：HCセンターのサテライト施設である「のびやかスペースあーち」における社会的実践、「みのり」プロジェクト、「つむぎ」プロジェクト、ESD ボランティアぼらぼん事業、大船渡 ESD プロジェクト（震災復興支援）、ESD 推進拠点の創造（「RCE 兵庫 - 神戸」の実質化）プロジェクト、「哲学対話（哲学カフェ）」プロジェクト、イノシシ調査プロジェクト、自然共生社会づくり（篠山市）プロジェクトなど。

◇「多様な志向性・専門性」をもった学習共同体

2017年度の編入生は10名であり、出身学科・コースは、人間形成・教育科学論（1名）、人間形成・学校教育論（1名）、人間表現・人間表現論（3名）、人間環境・数理情報環境論（2名）、人間環境・社会環境論（2名）、人間環境・生活環境論（1名）である。昨年度の編入生（16名）と合わせると学部生は26名になるが、彼らの2年次までの所属コース数は8となる。このように、どの学科からも3年次から編入可能な本コースは、学生の集団に多様性や異質性が内包されていることが特徴である。また、本コースは、基本的に学部生の大学院進学あるいは大学院生と共に学ぶスタイルを推奨しており、大学院在籍者を含めると46名となる。つまり、本コースは「多様な専門性をもった学習共同体」であると言える。ちなみに、今年度において、発達支援論コースと直接つながっている大学院（人間発達専攻学び系C）在籍者は、博士課程前期課程8名、同課程1年制履修コース4名、博士課程後期課程8名である。

◇「教師と学生の共同作業」としての学習プログラムづくり

本コースは、2年次まで所属していた学科・コースのカリキュラム（3年次以降）に束縛されることなく、学生自らの研究テーマに応じて自由に履修科目を選択する（学習プログラムを作り上げる）ことができるという特徴もある。学生の問題意識・関心と最新の学問的 이슈が交差するように、教員と学生が共同して学習プログラムを作成する。教員と学生の学習や研究に対するアプローチをいかに対話的に構築するかという課題が残るが、学生

にとっては「自らの学習過程を自ら創造する」という体験を通して、学習支援の本質を理解することとなる。卒業論文・修士論文・博士論文は、そのような学習と研究の集約である。これら論文の具体的な研究テーマは、ウェブページ「発達支援論コース 卒業論文発表会／人間発達専攻 発達支援 修士論文発表会 [2017 年度] (<http://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/5000>) を参照されたい。

◇多様な社会領域での「ヒューマンキャピタル・ソーシャルキャピタル創成者」

2017 年度学部卒業生（4 年生）の進路は、大学院進学，地方公務員，社会福祉施設，製造業勤務，学校教員などで，博士課程（前期）修了者は，博士後期課程進学，学校教員，ソーシャルワーカーなどとなっている。発達科学部・人間発達環境学研究科の全体的な傾向同様，本コースの卒業生・修了生も，多様な社会領域に進出しているといえる。しかし，とりわけ，学部・領域横断的かつ実践主義的な本コースで学んだ彼らには，現実社会の輻輳した問題を解決に導くヒューマンキャピタル（人的資本）・ソーシャルキャピタル（社会関係資本）を，より豊かにしていく実践者として，各領域において活躍してもらうことを期待するものである。

（発達支援論コース主任：伊藤篤）

5.3. 各専攻講座の教育

5.3.1. 人間発達専攻

（1）運営

各教員は，4つの系講座（こころ系，からだ系，表現系，学び系）に所属している。専攻の運営は，基本的に，この各系講座を中心に行われている。運営にあたっては，専攻長と各系講座の主任より構成された人間発達専攻運営会議を組織し，月1回の定例会議のほか，適宜臨時の会議を開いて，専攻に関わる重要案件（人事，予算，入試，共通科目運営，共通備品運用等）に関わる審議等を行った。また，人事については，人事委員会メンバーである新学部の発達コミュニティ学科長と子ども教育学科長にも参加を依頼し，拡大専攻運営会議として開催した。

（2）予算

予算は，専攻に配分されたものを各系講座に振り分けた。共通経費は設定していないが，大型プリンタ運用経費については，各系講座より予算の一部を拠出している。また，この大型プリンタの経費については，その用途が共通必修科目におけるポスター発表に集中しているため，専攻長が実験・実習等に要する経費を申請して対応している。なお，本大型プリンタの運用では，2017年度は学び系講座が担当であり，原則的に，利用者には無料で使用させたが，予算的には問題は発生していない。2018年度からは，大型プリンタの設置場所が確定（F棟）したので，毎年の移設設置の手間が大幅に削減される。

(3) 入試

前期課程入試については、学び系の一部の受験区分において応募者が少なく、また、合格辞退者（臨床心理、学び系）も頻出して、結果的に定員を下まわったことが大きな課題である。合格辞退の理由は、他大学院への合格、就職などである。来年度以降の前期課程入試について、広報活動等の強化が喫緊の課題となってきた。一方、後期課程については、問題なく定員を充足することができた。

(4) 教育

共通必修科目として、人間発達総合研究I/II、及び人間発達相関研究が設定されている。人間発達総合研究Iは、専攻内における多様な研究関心とテーマの広がり共有できる内容である。一方、修士論文の構想発表の場である人間発達相関研究では、例年通り、ポスター発表がなされ、活発な議論が行われた。この科目については、受講生からの評価が良好である。さらに、博士論文の構想発表会を兼ねる人間発達総合研究IIでは、口頭発表によって、それぞれの博士論文構想並びに進捗状況が発表され、充実したものとなっている。この講義についても、ドクター院生からの評価は極めて高い。

大学院生への教育は修士論文・博士論文の作成を大きな目標として学修しつつ、研究を進めていくことが中心であり、指導はそれぞれの主指導教員や副指導教員がその役割を担っている。前期課程から学会発表（後期課程では国際学会での発表を奨励）や研究論文の学術誌への投稿を勧めている。

以下、系別の特色ある活動について記載する。

●こころ系：博士課程前期課程科目である「人間発達研究（こころ系）」では、学会発表を行うことを念頭に、自らの研究内容について大型ポスターを用いた発表を行った。これによりプレゼンテーション能力の向上だけでなく、こころ系における各研究領域を超えた検討を深めることができ、院生の複眼的視点の育成を図ること等ができ研究水準の向上にも貢献した。今年はさらに発表者同士が十分にディスカッション出来るような工夫をした。また、幅広い見識を得るために、適宜ゲストスピーカーを招聘している（発達障害臨床学特論演習 2017年10月5日（木）18:00-20:00 奥村智人氏（大阪医大LDセンター）「発達障害の子どもの臨床と視機能」）。また2018年2月2日（金）山田剛史氏（岡山大学）「統計的思考の有用性と教育評価の最新事情」も開催した。

さらに、人間発達相関研究の授業で参加が課題となっている学術Weeksの一環で、2017年10月13日（金）川田学氏（北海道大学大学院）・伊藤崇氏（北海道大学大学院）「同年齢」保育・教育をちょっと疑ってみる：異年齢保育・教育&多世代交流の可能性」、2017年10月27日（金）「アリを食べてみる：環境教育・ESD・子どもの発達を問いなおす」（清野未恵子教員との共催）、2017年12月21日（木）鈴木大裕氏「アメリカの教育から

考える日本の教育」, 2017年12月1日(金) 瀧澤悠氏(クイーンズランド大学)・松本拓真氏(岐阜大学)「脳神経科学と心理療法の対話」を開催し, ころ系から人間発達専攻での教育の充実に寄与した。

●からだ系: 多数の大学院生が, 系講座の教員が携わっている「マスターズ甲子園」や2012年に開催される関西ワールドマスターズゲームズの世界大会の招致にも関与し, 開催に向けてマスターズスポーツ推進を通じた社会貢献活動と共に教育と研究のフィールドを開発した。また, 2013年から継続して行っている「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」などの活動に積極的にかかわり, それらの運営を補助する役割を担っている。本年度は第26回鶴甲わいわいパーク(2017年7月9日実施)を大学院生が企画・準備・運営を行った。さらに, 下記に示した国際セミナーを開催し, 教員とともに大学院生も参加してさらに学びを深めた。

【身体適応に関する国際研究セミナー】(第1回)

日時: 2017年6月23日(金) 15:00~17:00

1. 講演

Dr. Toby Mündel (School of Sport and Exercise, Massey University, New Zealand)

Sex, sweating and sports performance (性差, 汗, スポーツパフォーマンス)

2. 研究発表

1) Dr Nicola Gerrett (JSPS Research Fellow, Kobe University)

Factors influencing ion reabsorption in human sweat glands

(ヒトにおける汗腺のイオン再吸収に影響を及ぼす要因)

2) Dr Dai Okushima (Research Fellow, Kobe Design University)

High intensity interval training induces the greater magnitude of muscle deoxygenation during ramp incremental exercise

(高強度インターバルトレーニングは筋の酸素化状態を改善する)

3) Dr Tatsuro Amano (Associate Professor, Faculty of Education, Niigata University)

Mechanism of sweat gland adaptation to habitual exercise training: roles of nitric oxide, cyclooxygenase, and beta-adrenaline

(日常的な運動トレーニングへの汗腺の適応機構)

【身体適応に関する国際研究セミナー】(第2回)

日時: 2017年9月25日(月) 15:00~17:00

研究発表

1) Dr Narihiko Kondo (Kobe University)

A new perspective for thermoregulation research in humans

(ヒトの体温調節研究における新たな見解)

2) Mr Danilo Lannetta (PhD Candidate, University of Calgary, Faculty of Kinesiology, Health and Exercise Physiology)

Muscle oxygen extraction and ramp incremental cycling exercise. What do we know?

(筋での酸素の抜き取りとランプ負荷自転車運動。我々は何を知っているのか?)

3) Dr Dai Okushima (Research Fellow, Kobe Design University)

High intensity interval training induces the greater magnitude of muscle deoxygenation during ramp incremental exercise

(高強度インターバルトレーニングは筋の酸素化状態を改善する)

【からだの仕組みに関する講演会】

日時：2018年1月24日(水) 15:30~17:00

講演者：Dr Tae Wook Kim (KBS institute of the sports, Arts and Science)

タイトル：Effect of caffeine as an ergogenic aid and metabolic response

【身体適応に関する国際研究セミナー】(第3回)

日時：2018年3月1日(木) 14:00~17:00

1. 講演

Dr. Zachary J. Schlader (Assistant Professor, University at Buffalo, The State University of New York, School of Public Health and Health Professions)

Behavioral temperature regulation in humans (ヒトの行動性体温調節)

2. 発表

1) Dr Nicola Gerrett (JSPS Research Fellow, Kobe University)

Factors influencing ion reabsorption in human sweat glands

(ヒトにおける汗腺のイオン再吸収に影響を及ぼす要因)

2) Mr Masashi Fujiwara (Undergraduate Student, Kobe University)

The influence of differences in maximal oxygen uptake on sweating efficiency during exercise in a hot environment

(最大酸素摂取量の違いが高温下における運動時の発汗効率に及ぼす影響)

3) Dr Shunsaku Koga (Professor, Kobe Design University)

Introduction of Near-Infrared Spectroscopy about skeletal muscle during exercise

(運動中の活動筋に関する近赤外分光法の紹介)

4) Dr Dai Okushima (JSPS Research Fellow, Kobe Design University)

Effect of exercise mode on muscle oxy- and deoxygenated responses

(運動様式が活動筋の酸素化および脱酸素化応答に及ぼす影響)

●表現系：大学院教育においては、学生の学位論文指導を軸にしながら、その周辺に関連する学術情報・知的活動を配置することに努力している。具体的には、学外で進行中の興味深い研究活動の学内への紹介・導入や、各内で進められてきた研究の発信機会を提供することである。今年度の主な成果は次のとおりである。

【学外研究者を招いての講演・シンポジウム等】

1. 講演「音楽ジェントリフィケーションと移民音楽家のキャリア形成：オスロでのエスノグラフィー研究を通して」（2017年4月17日）、講師：原真理子（ノルウェーインランド大学研究員）
2. 講演「カール・ボアマンの音楽と講師：大田麻佐子（ドイツ在住ピアニスト、現代音楽家）
講演「対話型鑑賞の可能性」（2017年5月22日）、講師：三重野一（日能研講師・フリーキュレーター）
3. 講演「ハンス・アイスラーと亡命」（2017年6月26日）、講師：和田ちはる（明治学院大学准教授）
4. 特別コメンテーター「西洋音楽文化論演習」（学部授業科目、2018年1月23日、30日）、コメンテーター：鈴木崇司（ABC朝日放送ディレクター）
（以上、大田美佐子研究室）
5. 「アレクサンダー・テクニークの実践と研究 バジル・クリッツァー氏を招いて」
2018年3月21日（谷正人研究室）
6. 神戸文化支援基金による共同「神戸大学KIITOプロジェクト：大学のアトリソースの地域連携活用に関する実践研究」（関典子研究室）
7. シンポジウム「芸術家の肖像 - 文化的記憶・評伝・映画」（2018年2月20日）、講師：高岡智子（龍谷大学）、尾鼻崇（中部大学）、小田智美、五十棲渉、山村磨喜子、肥山紗智子（以上、神戸大学大学院人間発達環境学研究科学生）、主催：大田美佐子研究室

●学び系：学び系としては、特筆すべき教育研究活動として、教育基礎研究道場を挙げる事ができる。この道場では、多様なテーマに関する18件の特別講義が企画、実施され、院生の研究能力の向上に役立っている。また、高度教員養成プログラムも実施されている（詳細は、別に掲載）。さらに、講義内容の充実のために、ゲストスピーカー制度を活用し、受講生が幅広い専門家からの知見を得ることができるようにしている。

（人間発達専攻長 稲垣成哲）

5.3.2. 人間環境学専攻

(1) 運営

専攻に関する意思決定は、例年どおり、人間環境学専攻運営会議において行った。本運営会議は、専攻長と各コースの主任の計5名から構成される。今年度は、定例会議を13回開

催し、予算配分、人事、入試、教務等に関わる重要案件を審議・決定した。なお、本専攻運営会議は、人間環境学科学科運営会議、環境共生学科運営会議と同日開催である。

今年度の人事として、教授昇任2件に関する人事を進めた。うち1件は、学域会議での審議・承認となり、もう1件は、学域会議において人事選考委員会の設置を認められた。また、若手教員を増やす学域方針に沿って、専攻としての人事方針を立てるための議論を重ねた（学科会議1回、拡大専攻運営会議3回）。

(2) 予算

特命助教人件費専攻負担分を考慮して予算を配分した。

(3) 入試

博士課程後期課程入試に関し、「受験生のプレゼンテーションに対し、主論文等審査委員と論文等審査委員が所見を述べ、各コースから1名ずつの口述試験委員が採点する」という方式を引き続き採用した。

(4) 教育

院生は修士論文・博士論文の作成を中心目標として勉学・研究を進めることから、彼らに対する指導はそれぞれの指導教員に負うところが大きい。一方、とくに博士前期課程に関して、専攻共通教育のあり方をどのように考えるべきかが検討課題となっている。この点について、一昨年度に開始した専攻共通科目「人間環境学相関研究」のあり方を昨年度見直し、新しい内容として再スタートさせた。その成果・要改善点などについて検証する必要がある。

(5) 広報

修士課程受験検討者に対し、オープンラボの期間が設けられ、4名の受験相談を行った。

(人間環境学専攻長 平山洋介)

6. 進路

6.1. キャリア形成支援

6.1.1. キャリアサポートセンター

キャリアサポートセンターは、学部の1年生から大学院生にいたるすべての学生を対象として、学生のキャリア形成を実践的にサポートすることを目的としている。狭義の就職活動の支援はもとより、生涯にわたるキャリア形成を視野に入れた支援活動を提供している。

就職活動中の学生を対象にしてはセミナー・説明会・ワークショップ等の集团的イベント及び個別的なカウンセリングを行い、より広範囲の学生を対象に、大学で学ぶことや働くことの意義を自分で考え、自分の人生をどう生きるかという課題と早い段階から真剣に向き合うように働きかけている。

どのような仕事に就くかを決め、自分の希望する職をどのようにして得るのかを考えることは学生にとって大きな転機である。この課題に向き合うとき、当面の目標を越えて、個人が生涯にわたって仕事や社会とどのように関わりつながって生きていくかという長期的な視点に立つように訴えている。

当センターが企画・実施するイベントの多くは人間発達環境学研究科及び発達科学部の学生のみならず神戸大学のすべての学生に対して開放されている。現在当センターは、大学院進学を含む包括的なキャリア形成支援、就職活動支援全般の充実、大学院生へのキャリア支援の充実、留学生へのキャリア支援の充実、に重点的に取り組んでいる。以下に、これらの面における今年度の活動を報告する。また最後に、今年度実施した就職対策セミナーの一覧を載せる。

(1) 包括的なキャリア形成支援

当センターは、希望する職に就くために必要な知識と技能を伝達することを越えて、大学院進学を含んだ包括的に長期的な視野から各自の将来の設計に取り組んでもらうべく働きかけている。各自のキャリア設計における包括的・長期的視野の重要性は、全学生・全教職員が共有すべきことであると考えている。

具体的な活動としては、主に授業内でのキャリアガイダンスを当センターのキャリアアドバイザーが担当した。授業の一環としてのキャリアガイダンスは、ここ数年継続して実施している。キャリア形成における長期的な視野の重要性をなるべく多くの学生になるだけ早い段階に認識してもらうことをめざし、広範囲の1年次生を対象とする概論的授業科目において行っている。

(2) 就職活動支援全般の充実

民間企業就職希望者、公務員志望者、及び教職志望者に分けて、既に定着しているタイプの実践的な支援活動を精力的に実施した。

民間企業就職希望者に対しては、業界・企業の動向に関するセミナー、エントリーシート対策講座、グループディスカッション練習会、インターンシップセミナー、内定者・合格者との座談会、マナー講座を実施した。公務員志望者に対しては、職種・試験制度等に関する全般的なガイダンス及び採用試験対策セミナーを開催した。教職志望者に対しては、各地の教育委員会による説明会、個別の高等学校による説明会、私学教員についてのセミナー、採用試験対策セミナー、採用試験合格者との座談会等を企画した。またそれぞれの進路ごとに、就職活動を終えた学生と、これからスタートする学生との座談会を進路別に開催した。後輩へ自身の就職活動の経験を伝えると共に、就職活動を振り返り、再評価することで今後のキャリア形成へ繋げることを目的としている。上記のセミナー、講座の開催に加えて、キャリア形成全般あるいは現在直面している具体的な就職活動について学生が抱える多様なニーズ（自己分析、自己PR、業界・企業の選択、エントリーシートの作成、面接対策、内定辞退

の方法等)に伝えるべく、キャリアカウンセラーによる個別のカウンセリングを恒常的に実施した。いくつかの件についてさらに詳しく報告する。

①全般的な内容のセミナー

間もなく本格的な就職活動を開始する3年次生を対象とする全般的な内容のセミナーを多数開催した。就職活動のスケジュール、インターンシップ、企業の探し方等この段階のすべての学生にぜひ心得ておいてほしい基礎知識を伝達することを意図した。当センターのキャリアアドバイザーあるいは外部からの講師が担当した。外部講師によるセミナーでは、就職戦線の動向、仕事研究の仕方、プレゼンテーションのスキルアップ等の面で貴重な内容が扱われた。

②セミナー開催の学生への周知

昨今の売り手市場と言われる就職戦線の影響と、One-day インターンシップの普及に伴い、学内で開催される就活関連セミナーへの参加学生数が減ってきている状況を鑑み、当センターが主催するセミナーの学生への周知を強化することに務めた。具体的には、従来のwebや掲示板への掲載に加え、キャリアサポートセンター運営委員会の皆様による各学科の教員、学生への周知、当センターによる学生への一斉メールの配信、B棟内にポスター掲示板的追加等の対策を講じた。

③グループディスカッション勉強会

多くの企業が採用活動の一環として実施するグループディスカッションでは、複数の参加者が与えられたテーマについて自由に討議することが求められる。大学・学部・専攻も違えば考え方・性格なども異なる様々なバックグラウンドを持つ学生と初めて会って一緒に討議するのであるから、戸惑うのが普通である。従い、前もって模擬体験をしておくことが望ましいが、一方、学生が個別に準備するのが難しいことを考慮し、当センターでは、特にグループディスカッションが苦手な学生を対象に、練習の場を提供し、場数を踏ませるために、合計4回の練習会を開催した。参加学生は、当学部・当研究科が中心ではあるが、他学部からの参加もあり、参加学生には非常に好評であった。

④私立学校へのヒアリング

私立学校への教員を目指す学生の支援のために、私立学校が求める新卒教員の人物像、選考過程、教員としてのキャリアパス等をより理解することを目的に、神戸学院大附属高校と神戸野田高校を訪問し、ヒアリングを行った。

⑤他大学のキャリアセンターへのヒアリング

当センターの取り組みをさらに充実させることを目的に、他大学のキャリアセンターの活動状況を知るため、立命館大学BKCキャンパスのキャリアセンターを訪問し、ヒアリングを行った。大学の体制等が神戸大学と異なり短絡的な比較はできないが、学ぶべきところは多々あったと考える。今後の当センターの運営の参考にしたい。

(3) 大学院生へのキャリア支援の充実

① 大学院生による就職座談会

主として修了までまだ時間のある大学院生及び大学院進学を考えている学部学生を対象として、既に就職先から内定を確保した当研究科の大学院生との座談会を開いた。院生としての学術活動と就職活動をどう折り合いをつけるのか、就職活動において大学院生としての強みをどう伝えるのか、といったことをめぐって、既に体験した学生とこれから体験しようとする学生の間に対話の機会を提供した。学生の状況についての情報を集め、参加者の生の声によるきめの細かい質疑応答を可能にする座談会形式は、当センターが好んで採用するセミナーフォーマットである。

② 理系教員選考会への協力

日本物理学会キャリア支援センター及び神戸大学キャリアセンターの主催による「私立中高理系教員選考会」が、2017年1月21日神戸大学において開催された。理科・数学・情報の教員免許取得者・取得見込者を対象とする私立中高の採用面接会を軸とするイベントであった。当センターも実務面で協力した。

(4) 留学生へのキャリア支援の充実

留学生のための就活支援として留学生を対象とする全学レベルのガイダンスグローバルジョブセミナーにブース参加し留学生の採用に特に意欲的な企業の選び方、自己PRの考え方など具体的な支援を行った。また、人間環境学研究科の留学生への支援を強化するため、留学生担当教員の奥山講師と連携し、就職活動支援セミナーを2回開催した。恒常的に実施している個別のカウンセリングにおいても留学生を理解し、よりきめの細かいキャリアサポートを提供することを目指している。

(5) 就職対策セミナー

就職活動を支援するためのセミナーを数多く企画し実施した。今年度実施したイベントの一覧を記す。

① 開催セミナー一覧

平成 29 年度 教員採用対策セミナー

第 1 回	4 月 11 日 (火) 12:20~13:20 D-Room	神戸市教育委員会からの説明会 【講師】神戸市教育委員会 参加者 19 名
第 2 回	4 月 11 日 (火) 13:30~14:30 D-Room	大阪府豊能地区教職員人事協議会からの説明会 【講師】大阪府豊能地区教職員人事協議会 参加者 2 名

第3回	4月25日(火) 13:30~14:30 D-Room	和歌山県教育委員会からの説明会 【講師】和歌山県教育委員会 参加者 9名
第4回	5月9日(火) 13:20~16:00 大会議室	2017年夏受験対策 教員採用セミナー 【講師】東京アカデミー 参加者 36名
第5回	5月10日(水) 13:20~14:50 D-Room	京都府教育委員会からの説明会 【講師】京都府教育委員会 参加者 4名
第6回	5月11日(火) 13:20~14:50 D-Room	兵庫県教育委員会からの説明会 【講師】兵庫県教育委員会 参加者 16名
第7回	5月16日(火) 13:20~16:00 大会議室	2017年夏受験対策 教員採用セミナー 【講師】東京アカデミー 参加者 30名
第8回	5月19日(金) 11:00~12:00 CSセンター	奈良県教育委員会からの説明会 【講師】奈良県教育委員会 参加者 4名
第9回	5月19日(金) 13:20~14:50 CSセンター	滋賀県教育委員会からの説明会 【講師】滋賀県教育委員会 参加者 1名
第10回	5月23日(火) 13:20~16:00 大会議室	2017年夏受験対策 教員採用セミナー 【講師】東京アカデミー 参加者 38名
第11回	5月30日(火) 13:20~14:50 大会議室	教員志望者セミナー 【講師】中井 博之氏(学校法人 共栄学園理事長) 参加者 7名
第12回	5月31日(水) 13:30~16:00 大会議室	先輩からうかがう面接試験ポイント 【講師】佐谷 章子氏(紫陽会副会長) 参加者 15名
第13回	6月1日(木) 13:30~17:30 大会議室	先輩からうかがう面接試験ポイント (集団面接・集団討論練習) 【講師】佐谷 章子氏(紫陽会副会長) 参加者 7名

第14回	6月8日(木) 13:30~17:30 大会議室	先輩からうかがう面接試験ポイント (集団面接・個人面接練習) 【講師】佐谷 章子氏(紫陽会副会長) 参加者 10名
第15回	6月12日(月) 13:30~17:30 大会議室	先輩からうかがう面接試験ポイント (集団面接・個人面接練習) 【講師】佐谷 章子氏(紫陽会副会長) ※先生のご都合により中止
第16回	6月21日(水) 13:30~17:30 大会議室	先輩からうかがう面接試験ポイント (一次試験対策総仕上げ) 【講師】佐谷 章子氏(紫陽会副会長) 参加者 7名
第17回	7月7日(金) 13:30~17:30 B208 教室	先輩からうかがう面接試験ポイント 【講師】佐谷 章子氏(紫陽会副会長) 参加者 10名
第18回	7月14日(金) 13:30~17:30 B208 教室	先輩からうかがう面接試験ポイント 【講師】佐谷 章子氏(紫陽会副会長) 参加者 12名
第19回	8月17日(木) 9:00~17:00 B208 教室	先輩からうかがう面接試験ポイント 【講師】佐谷 章子氏(紫陽会副会長) 参加者 8名
第20回	8月18日(金) 9:00~17:00 B208 教室	先輩からうかがう面接試験ポイント 【講師】佐谷 章子氏(紫陽会副会長) 参加者 5名
第21回	10月20日(金) 13:20~14:50 中会議室B	教員志望者セミナー 【講師】中井 博之氏(学校法人共栄学園 理事長) 参加者 10名
第22回	11月10日(金) 13:20~14:50 B208 教室	教員採用試験対策スタートガイダンス 【講師】伊藤 憲司氏(東京アカデミー) 参加者 32名
第23回	11月13日(月) 12:30~13:10 中会議室B	私立小中高教員 知られざる私立学校の魅力! 【講師】株式会社ブレインアカデミー 参加者 18名
第24回	11月24日(金) 13:00~15:00 国文LC	教員採用試験合格者との座談会 【講師】笹倉 孝之氏(CSセンター) 参加者 20名

第 25 回	12月6日(水) 12:30~13:30 中会議室 B	大阪府豊能地区公立小・中学校教員採用選考に関する説明会 【講師】大阪府豊能地区教職員人事協議会事務局 参加者 2名
第 26 回	12月8日(金) 13:20~14:50 大会議室	教員採用試験対策チャレンジ模試&出題傾向開設ガイダンス 【講師】共同出版株式会社 参加者 27名
第 27 回	2月16日(金) 13:00~14:30 B101 教室	教員採用試験対策面接ガイダンス 【講師】伊藤 憲司氏(東京アカデミー) 参加者 26名
第 28 回	3月23日(金) 13:00~15:40 B104 教室	集団討論練習会 【講師】伊藤 憲司氏(東京アカデミー)

平成 29 年度 就職活動支援セミナー

第 1 回	4月18日(火) 12:20~13:10 D-Room	1st Step 「企業の採用担当者の考え方を知る」 【講師】降矢 一朋氏 (ダイヤモンド・ヒューマンリソース大阪支社) 参加者 22名
第 2 回	4月18日(火) 13:30~16:30 CSセンター	就活応援!あなたの為の就職活動相談会 【講師】降矢氏(ダイヤモンド・ヒューマンリソース大阪支社)・田中 美恵 参加者 8名
第 3 回	4月20日(木) 12:30~13:10 大会議室	進路選択 or 両立のためのスタートアップ講座 第1部 【講師】東海 裕介氏(株式会社 マイナビ) 参加者 17名
第 4 回	4月20日(木) 13:20~14:50 大会議室	進路選択 or 両立のためのスタートアップ講座 第2部 【講師】東海 裕介氏(株式会社 マイナビ) 参加者 4名
第 5 回	4月21日(金) 14:00~15:00 D-Room	OB・OG 訪問会 ~株式会社 MBS 企画~ 【講師】株式会社 MBS 企画 参加者 7名

第6回	5月12日(金) 12:30~13:10 大会議室	採用氷河期の就活論 第1部 【講師】福士 敦士 (株式会社ダイヤモンド・ヒューマンリソース) 参加者 1名
第7回	5月12日(金) 13:20~14:50 大会議室	採用氷河期の就活論 第2部 【講師】福士 敦士 (株式会社ダイヤモンド・ヒューマンリソース) 参加者 2名
第8回	5月18日(木) 12:20~13:10 大会議室	選択軸のを見つけ方講座 第1部 【講師】芳山 美礼氏 (株式会社リクルートキャリア) 参加者 8名
第9回	5月18日(木) 13:20~14:50 大会議室	選択軸のを見つけ方講座 第2部 【講師】芳山 美礼氏 (株式会社リクルートキャリア) 参加者 7名
第10回	7月20日(木) 12:20~13:10 D-Room	クリエイティブ職/デザイナー職業界・企業説明会 【講師】株式会社MC&P マッチングデザインセンター 参加者 5名
第11回	10月10日(火) 17:00~17:30 B104 教室	留学生向け説明会 (奥山先生) 【講師】笹倉 孝之氏 (CSセンター) 参加者 9名
第12回	10月24日(火) 13:20~14:50 大会議室	「公務員・教員」向け就職準備講座 【講師】金谷 隆太郎氏 (株式会社リクルートキャリア) 参加者 21名
第13回	10月26日(木) 15:10~16:40 大会議室	業界・企業説明会 クリエイティブ職/デザイナー職 【講師】MC&P マッチングデザインセンター 参加者 6名
第14回	11月1日(水) 13:20~14:50 中会議室B	グループディスカッション練習会 【講師】笹倉 孝之氏 (CSセンター) 参加者 11名
第15回	11月2日(木) 12:30~13:10 大会議室	進路選択/就活戦略の先へ「志望動機」を考える講座 【講師】東海 裕介氏 (株式会社 マイナビ) 参加者 3名

第 16 回	11 月 2 日(木) 13:20～14:50 大会議室	進路選択/就活戦略の先へ「志望動機」を考える講座 【講師】東海 裕介氏 (株式会社 マイナビ) 参加者 1 名
第 17 回	11 月 7 日(火) 13:20～14:50 大会議室	はじめての業界・企業「発見!!」セミナー 【講師】棚木 留美氏 (株式会社ディスコ) 参加者 13 名
第 18 回	11 月 8 日(水) 12:30～13:10 大会議室	体育会就活スタート講座 【講師】東海 裕介氏 (株式会社 マイナビ) 参加者 66 名
第 19 回	11 月 9 日(木) 12:20～14:50 大会議室	プレゼンテーション入門講座 【講師】林田 雄太氏 (株式会社リクルートキャリア) 参加者 4 名
第 20 回	11 月 14 日(火) 13:20～14:50 中会議室 B	国立大学職員として働くことを考える！ 【講師】辻 誠氏 (国立大学法人神戸大学企画部企画課 企画法規グループ) 参加者 11 名
第 21 回	11 月 16 日(木) 13:20～14:50 大会議室	OBOG による業界説明会～損害保険業界～ 【講師】損保ジャパン日本興亜株式会社 参加者 2 名
第 22 回	11 月 20 日(月) 13:20～14:50 中会議室 B	グループディスカッション練習会 【講師】笹倉 孝之氏 (CSセンター) 参加者 7 名
第 23 回	11 月 21 日(火) 17:00～18:30 B104 教室	自己分析&企業研究 【講師】東海 裕介氏 (株式会社 マイナビ) 参加者 9 名
第 24 回	11 月 22 日(水) 12:30～14:50 国文 LC	実践で学ぶ業界研究セミナー ～銀行業界～ 【講師】間瀬 清吾氏 (株式会社 マイナビ) , 株式会社三菱東京 UFJ 銀行 参加者 16 名
第 25 回	12 月 7 日(木) 13:20～14:50 大会議室	採用担当者は「そんなところ」見ていない。 【講師】福重 敦士 (株式会社ダイヤモンド・ヒューマンリソース) 参加者 12 名

第 26 回	12月8日(木) 17:00～19:00 国文 B109 教室	実践で学ぶ業界研究セミナー ～医療機器/機械～ 1 部医療機器 【講師】シスメックス株式会社, ヤンマー株式会社, 株式会社マイナビ 参加者 7 名
第 27 回	12月8日(木) 17:00～19:00 国文 B109 教室	実践で学ぶ業界研究セミナー ～医療機器/機械～ 2 部機械 【講師】シスメックス株式会社, ヤンマー株式会社, 株式会社マイナビ 参加者 4 名
第 28 回	12月11日(月) 13:20～14:50 中会議室 B	グループディスカッション練習会 【講師】笹倉 孝之氏 (CSセンター) 参加者 9 名
第 29 回	12月12日(火) 12:20～13:10 大会議室	体育会の経験で作る自己 PR 講座 【講師】東海 裕介氏 (株式会社マイナビ) 参加者 6 名
第 30 回	12月12日(火) 12:30～13:30 中会議室 B	家庭裁判所調査官の仕事を知る ～発達科学部 OG がお話しします～ 【講師】現役家庭裁判所調査官 (神戸家庭裁判所尼崎支部) 参加者 7 名
第 31 回	12月12日(火) 17:00～19:00 国文 B109 教室	実践で学ぶ業界研究セミナー ～ゲームソフト/鉄道～ 1 部ゲームソフト 【講師】株式会社カプコン, 京阪ホールディングス株式会社 参加者 17 名
第 32 回	12月12日(火) 17:00～19:00 国文 B109 教室	実践で学ぶ業界研究セミナー ～ゲームソフト/鉄道～ 2 部鉄道 【講師】株式会社カプコン, 京阪ホールディングス株式会社 参加者 11 名
第 33 回	12月18日(月) 13:20～14:50 中会議室 B	グループディスカッション練習会 【講師】笹倉 孝之氏 (CSセンター) 参加者 7 名

第 34 回	12 月 19 日 (火) 13:00～15:00 D-Room	就職活動体験談 ～民間企業編～ 【講師】笹倉 孝之氏 (CS セクター) 参加者 5 名
第 35 回	12 月 20 日 (水) 15:00～17:00 D-Room	就職活動体験談 ～大学院生編～ 【講師】笹倉 孝之氏 (CS セクター) 参加者 2 名
第 36 回	1 月 15 日 (月) 12:20～13:10 F 棟 1 階会議室	企業が求める人材とは？ 【講師】株式会社オースビー 参加者 4 名
第 37 回	1 月 16 日 (火) 12:30～13:10 大会議室	体育会だからこそ考えたい！志望動機講座 【講師】東海 裕介氏 (株式会社マイナビ) 参加者 14 名
第 38 回	1 月 17 日 (水) 12:30～13:10 大会議室	面接&プレゼン講座 第 1 部 【講師】林田 雄太氏 (グッドライフキャリア) 参加者 35 名
第 39 回	1 月 17 日 (水) 13:20～14:50 大会議室	面接&プレゼン講座 第 2 部 【講師】林田 雄太氏 (グッドライフキャリア) 参加者 22 名
第 40 回	1 月 19 日 (金) 12:30～13:30 中会議室 B	社会福祉系の心理職の仕事を知る 【講師】渡辺 葉一氏 (児童養護施設あおぞら 臨床心理士) 参加者 4 名
第 41 回	2 月 19 日 (月) 13:30～15:00 D-Room	業界研究セミナー・IT 業界 神戸大学 OB 訪問会 【講師】谷川能章氏 (富士通開発職, 人間発達環境学研究科 2013 年卒) 参加者 5 名
第 42 回	2 月 22 日 (木) 13:00～14:30 大会議室	就活総まとめと合説活用講座 【講師】株式会社リクルートキャリア 参加者 24 名
第 43 回	2 月 23 日 (金) 13:00～14:30 D-Room	業界研究会 (電子部品メーカー) 神戸大学 OB 訪問会 【講師】葉山 浩樹氏 (村田製作所, 人間発達環境学研究科 2016 年卒) 参加者 14 名

第44回	2月26日(月) 13:00~14:30 大会議室	「志望動機」作成に役立つ 自分だけの企業研究セミナー 【講師】 棚木 留美氏 (株式会社ディスコ) 参加者 10名
第45回	2月27日(火) 13:00~15:00 CSセンター	エントリーシート講座 学生同士で相互添削 【講師】 笹倉 孝之氏 (CSセンター) 参加者 1名
第46回	2月28日(水) 13:00~15:00 CSセンター	エントリーシート講座 学生同士で相互添削 【講師】 笹倉 孝之氏 (CSセンター) 参加者 1名
第47回	3月9日(金) 13:00~15:00 中会議室C	企業説明会(神戸大学OB訪問会) ～三菱日立パワーシステムズ(株)～ 【講師】 笹倉 孝之氏 (CSセンター) 参加者 2名

平成29年度 公務員対策セミナー

第1回	6月22日(木) 15:10~16:40 B203 教室	心理・福祉系公務員, 家庭調査官を指そう! 【講師】 忠峯 輝政氏 (LEC 専任講師) 参加者 3名
第2回	10月27日(金) 12:00~15:00 中会議室B	公務員受験相談会 【講師】 東京アカデミー 参加者 3名
第3回	12月5日(火) 15:10~16:40 中会議室B	心理・福祉系公務員, 家裁調査官を指そう! 【講師】 LEC 東京リーガルマインド 参加者 7名
第4回	12月21日(木) 13:00~15:00 D-Room	就職活動体験談 ～公務員編～ 【講師】 笹倉 孝之氏 (CSセンター) 参加者 5名
第5回	3月16日(金) 13:00~14:30 B104 教室	国家公務員・地方上級スタートガイダンス 【講師】 東京アカデミー 参加者

(キャリアサポートセンター運営委員会委員長 澤 宗則)

6.1.2. 学振特別研究員申請支援

学生委員会の主催により、「学振特別研究員への応募のススメ」と題したセミナーを平成29年4月5日(水)に開催した。

まずは、副研究科長・青木茂樹教授より特別研究員制度の概要についての説明、ついで稲垣成哲教授から審査委員経験を踏まえた申請書作成やヒアリングなどに関するアドバイスがなされた。その後、人間発達環境学研究科で採用されている特別研究員2名(DC1およびDC2)による採用に至る経験談やヒアリング時の留意点などの紹介がなされた。説明会には約30名の学生が参加した。参加者のモチベーションは非常に高く、特に申請書の書き方やヒアリング時の自己PRの方法に関して活発な質疑応答が行われ、予定時刻を大幅に超過した。なお、平成29年度特別研究員採用者は、新規で4名(DC1が2名、DC2が2名)であった。

○「学振特別研究員への応募のススメ」

・日時：4月5日(水) 14時00分～16時00分

・場所：発達科学部 大会議室

14:00 - 14:10 開会の辞(学生委員長 中村晴信 教授)

プログラムの説明と講師紹介(学生委員長 中村晴信 教授)

14:10 - 14:30 特別研究員制度の概要と本研究科の現状
(副研究科長 青木茂樹 教授)

14:30 - 14:35 質疑応答

14:35 - 14:55 審査・選考の実際－審査経験者の立場から(稲垣成哲 教授)

14:55 - 15:00 質疑応答

15:00 - 15:20 申請の実際－応募者の立場から(1)(人間環境学専攻自然環境コース)

15:20 - 15:40 申請の実際－応募者の立場から(2)(人間発達専攻学び系講座)

15:40 - 16:00 質疑応答

16:00 閉会の辞

(学生委員会委員長 中村晴信)

6.2. 卒業・修了後の進路

平成29年度の発達科学部卒業生の就職状況はほぼ例年通りであり、概ね良好であった。博士課程前期課程修了生も企業や公務員への就職者はほぼ例年通りであり、また、進学者数が若干増加した。博士課程後期課程は学部や博士課程前期課程と異なり、公募による就職が主となるため年度毎に様相が異なるが、平成29年度は就職者が60%超と多くの者が就職した。なお、進路状況、産業別就職者数、大学院進学者数などの詳細は『資料編』に記載した。

(学生委員会委員長 中村晴信)

7. 研究

7.1. 今年度の特徴

7.1.1. 研究動向

(1) 本研究科教員の研究活動

本研究科における過去6年間の研究活動の実績は、下表のとおり、概ね順調に推移してきている。平成29年度の活動（KUIDをもとに調査）は、「論文」396、「著書」67、「研究発表等」432となっており、特に論文は昨年度から増加しており、確実に本研究科の研究活動は活性化しているといえる。

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
論文	206	218	328	311	371	396
著書数	38	73	83	75	73	67
研究発表等	287	311	488	419	547	432

(2) 本研究科の共同研究

こうした個々の研究活動とは別に、研究科として推進する組織的共同研究もまた、これまで以上に活発な活動を展開している。詳細は後述にゆだねるが、ここでは大まかな動きのみ紹介しておく。

1. プロジェクト研究

科学研究費補助金（A）（平成24年度～26年度）「多世代共生型コミュニティの創成に資するアクティブ・エイジング支援プログラムの開発」を受けて進められた「多世代共生型コミュニティの創成研究」は、基盤研究（B）「都市部高齢化地域における住民ネットワーク形成過程の実験的検討」（平成27年度～平成29年度、研究代表者：増本康平准教授）に引き継がれ、現在システム情報学研究科との共同の学際研究として進行中である。

（独）新エネルギー・産業技術総合開発機構の戦略的次世代バイオマスエネルギー利用技術開発事業として採択された「藻類バイオ燃料事業に関する共同開発」は、高速増殖型ボトリオコッカス藻「榎本藻」からのオイル生産の実用化をとおしてバイオマスエネルギー利用技術にかかるベンチャー創成型産学共同プログラムを開発するものであるが、航空機向けバイオ燃料の量産に向けた社会的期待がますます高まっている。

高度教員養成プロジェクトは、知識基盤社会をリードする高度な能力を備えた教員の養成という現代的課題の解決に資するため、附属校園を活用したアクションリサーチ等実証的研究をとおして修士レベルでの高度教員養成プログラムを開発するもので、今年度も、優れた研究者を招聘したセミナーを多数開催し研究内容を深化させると同時に、国内外の諸学会での報告を積極的に行いその成果の発信を行った。

2. 研究科ミッションの実現に向けた共同研究への支援

平成29年度の研究支援経費は、ヒューマンコミュニティ創成を目指した学際的研究の推進・発展をめざし、地域や多様なコミュニティと、それらを取巻き、支える環境に焦点を当て、社会関係資本の構築を目指すコミュニティプログラム及び環境形成プログラムの開発・検証に関わる挑戦的、萌芽的、独創的、学際的研究やプロジェクト研究、国際共同研究に重点的に配分を行った。研究推進委員会にて選定した共同研究は、以下のとおりである。

①研究課題：社会的分断を越境する「ごちゃまぜ新喜劇」の開発ーインクルーシブ・コミュニティの構築に向けて

研究代表者：赤木和重

共同研究者：津田英二，岡崎香奈

決 定 額：1,000 千円

②研究課題：現代社会の学習者に求められる科学情報の読解・活用能力を育成する科学教育の国際共同研究

研究代表者：山口悦司

共同研究者：Clark A. Chinn, Randi M. Zimmerman

決 定 額：1,000 千円

③研究課題：森林・植物資源の利活用による六甲山系地域循環圏創出に資するビッグデータの構築

研究代表者：田畑智博

共同研究者：平山洋介，片桐恵子，大野朋子，井口克郎，古川文美子

決 定 額：1,500 千円

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一)

7.1.2. 学生の受賞

平成29年度における学部生の受賞は以下の通りである。

1) 受賞者：小木曾湧（人間行動学科）

受賞名：学生優秀発表賞

受賞発表題目：ツール・ド・おきなわ2016参加者の大会参加における重要度に関する研究ー属性と参加種目による比較ー

受賞年月日：2017年6月3日

受賞理由：平成29年度兵庫体育・スポーツ科学学会第28回大会学部生ポスター発表での発表が優秀であると評価されたため。

- 2) 受賞者：上枝千明（人間環境学科）澤邊久美子，池田勝，大野朋子
受賞名：平成 29 年度日本造園学会関西支部賞
受賞発表題目：人工展示物と野外体験活動が幼児教育に与える影響
受賞年月日：2017 年 10 月 15 日
受賞理由：研究・事例報告発表セッションにおける発表が優秀であると認められ，今後の発展を期待されたため。
- 3) 受賞者氏名：小池貴之（人間環境学科），小林徹哉，上森真広，大野朋子
受賞名：平成 29 年度日本造園学会関西支部賞
受賞発表題目：近畿地方における企業の森づくり制度の現状と課題
受賞年月日：2017 年 10 月 15 日
受賞理由：研究・事例報告発表セッションにおける発表が優秀であると認められ，今後の発展を期待されたため。
- 4) 受賞者：門井美香（人間環境学科），森本幸太郎，高見泰興
受賞名：Journal of Ethology 論文賞（日本動物行動学会）
受賞論文：Male mate choice in a sexually cannibalistic species: Male escapes from hungry females in the praying mantid *Tenodera angustipennis*.
Journal of Ethology, 35: 177-185
受賞年月日：2017 年 12 月 4 日
受賞理由：当該論文が 2017 年の最も優れた論文として評価された。
- 5) 受賞者：小木曾湧（人間行動学科）
受賞名：笹川スポーツ財団賞
受賞発表題目：B. LEAGUE 観戦における知覚経験が再観戦意図に及ぼす影響
受賞年月日：2018 年 2 月 18 日
受賞理由：リサーチカンファレンス 2018 における卒論セッションでの発表が優秀であると評価されたため。
- 6) 受章者：縄井あゆみ（人間環境学科）
受賞名：「神戸みどりの夢基金 神戸市の緑に関する普及・啓発に寄与する調査・研究」
優秀賞
受賞対象：アジサイの形態的多様性および利用に関する民族植物学的研究
受賞日：平成 30 年 3 月 22 日
受賞理由：神戸市の緑に関する普及・啓発に関してアジサイの種の形態がよく調べられ，質の高い論文であったこと。

平成 29 年度における大学院生の受賞は以下の通りである。

- 1) 受賞者氏名：久保雄一郎（人間発達専攻）
受賞名：スポーツ庁長官賞
受賞年月日：2017 年 7 月 15 日
受賞理由：「VR 映像（仮想現実）」と「EMS」による筋肉への電気刺激を活用した新しいトレーニング法を提案し、その着想が評価された。

- 2) 受賞者：国宗 翔（人間発達専攻）
受賞名：「学術奨励賞」日本体力医学会近畿地方会第 32 回大会
受賞発表題目：歩行中の障害物跨ぎ動作における 3 軸加速度計を利用した姿勢安定性評価
受賞年月日：2018 年 2 月 17 日
受賞理由：研究の新規性、結果の妥当性及び結果の応用展開の観点から優秀な研究と評価される。

- 3) 受賞者：青山将己（人間発達専攻）
受賞名：日本スポーツ産業学会賞
受賞発表題目：質的データの可視化による東京 2020 ホストタウン事業の事例研究
受賞年月日：2018 年 2 月 18 日
受賞理由：リサーチカンファレンス 2018 における若手研究者育成セッションでの発表が優秀であると評価されたため。

- 4) 受賞者：勝原光希（人間環境学専攻）
受賞名：日本生態学会近畿地区会 第 23 回奨励賞
受賞発表題目：繁殖干渉下の在来近縁植物 2 品種の共存機構—ツユクサ・ケツユクサ系を用いて
受賞年月日：2017 年 6 月 3 日
受賞理由：近畿地区会における口頭発表が優秀と評価された

- 5) 受賞者：舟木千尋（人間環境学専攻）
受賞名：エクセレントポスター賞受賞
受賞発表題目：テラヘルツ分光法によるポリカプロラクトンの紫外線劣化と高次構造の相関
受賞年月日：2017 年 7 月 14 日
受賞理由：第 63 回高分子研究発表会（神戸）における発表が優秀であると評価された。

- 6) 受賞者氏名：藤村日向子（人間環境学専攻）
受賞名：2017 年日本建築学会優秀卒業論文賞
受賞年月日：2017 年 8 月 31 日
受賞理由：「子どもの貧困」問題に対し、居住する住宅種別を軸とした家族と就労、生活の時系列的変化の視点から分析を行った、社会的意義の高い研究である。また、貧困という建築学の枠外の概念を対象とするため、語の定義や貧困をめぐる社会的動向を丹念に検討したうえで、住宅・土地統計調査マイクロデータを独自集計した分析や詳細なインタビュー調査を行い、「子どもの貧困」を住宅所有形態の類型から説明したことは大変興味深い。居住実態の表現として建築学的図面などの分析が不十分ではあったが、対象となる世帯を絞り込んでいく過程、居住変遷の過程を描き出す分析も理路整然としており、完成度の高い卒業論文として評価できる。
- 7) 受賞者氏名：坂田雅之（人間環境学専攻）・真木伸隆・杉山秀樹・源利文
受賞名：優秀口頭発表賞（日本陸水学会第 82 回大会）
受賞発表題目：雄物川本流における絶滅危惧種ゼニタナゴの再発見と繁殖地特定
受賞年月日：2017 年 9 月 30 日
受賞理由：日本陸水学会第 82 回大会における発表が優秀であると評価された。
- 8) 受賞者：藤村日向子（人間環境学専攻）
受賞名：平成 29 年度学生表彰（学内）
受賞論文：子どもの貧困と住宅一低所得子育て世帯の住まい選択と実態—
受賞年月日：2018 年 3 月 13 日
受賞理由：本学生が卒業論文として執筆した「子どもの貧困と住宅」に関する論文は、独創的で社会的意義が高いものと評価され、2017 年日本建築学会優秀卒業論文賞を受賞した。また、本学生は上記の論文にとどまらず、専門誌に依頼原稿を書いたり、自身の研究を国際比較分析に発展させるためイタリアに留学する等、活発に学術研究活動をしていることを評価された。
(学生委員会委員長 中村晴信)

7.2. 学術 WEEKS

学術 WEEKS は、2008 年より大学院 GP（正課外活動の充実による大学院教育の実質化）を契機とし、本研究科の国際交流推進の一環として実施されている。学術 WEEKS 2017 にあっても、これまでの基本方針を継承し、国内外の学術交流活動を通して、大学院生・学部学生の視野を広げ、研究会の企画・運営・発表などの技能習得に資することを目的とした。

また、多様な研究領域を擁する本研究科の特色を生かし、教員・大学院生・学部学生をまじえた領域横断的な学術交流の場を提供するものである。本年度は、前年より5企画増えた昨年度よりもさらに6企画増え、計21企画について実施された(企画が増えた背景としては、例年に比べて応募期間を繰り下げ8月上旬まで企画を募集したことも一因と考えられる)。特に今年度は、これまで応募の少なかった若手教員の関わる企画が増え、学部改組も踏まえ多様な企画が実施された。各企画では教員、院生及び学部生が立案、準備、運営を自主的に行い、外部の専門家を交えて専門性を深化させる一方で、よりグローバルな視点で物事を考えることができる良い機会となった。

なお、例年は11月にレセプションを行い、各企画者・参加者の交流を図る機会としてきたが、今年度は予算上の制約の中で企画の採択を優先事項とした結果として、レセプションの開催を見送ることとした。予算の制約についてはやむを得ないとはいえ、レセプションは自らの研究活動をより広い視点から見直し、また異分野との協同や融合の可能性につながる企画でもある。これを実施できなかったことは今年度の反省点であり、次年度以降さらに検討したうえで対応・工夫が求められる点である。

個別の企画内容に関しては以下を参照していただきたい。

(学術 WEEKS2017 ワーキンググループ主査 橋本直人)

7.2.1 学術 WEEKS の各事業・セミナー

(1) 「アリ」をたべてみる：環境教育・ESD・子どもの発達を問いなおす

企画者：清野未恵子（准教授）・赤木和重（准教授）

日 程：2017年10月27日（金）15:00～18:00

参加者：約15名

概 要：

15時にDホールに集合し、企画趣旨を説明した。次に、それぞれの参加者が、なぜこの特異な企画に参加したという動機を含めて自己紹介を行った。中には、「虫を食べる」ことに興味があるという筋金入りの学生もいたが、その多くは、「なんとなく面白そう」という動機であった。アリを食べた参加者は感想を聞く限りいなかった。

清野先生から、簡単にアリの生態について説明がなされた後、発達生協近辺に生息するアリを捕獲し、食べた。恐る恐る食べる参加者もいれば、躊躇なく食べる参加者もいた。「イチゴ味だ」と感想を述べる学生もいた。

その後、Dホールにも戻り、感想を語り合いつつ、清野先生から、アリの生態を中心に、ご自身の研究歴と重ねながら「アリを食べる」経験について語っていただいた。「アリを食べる」根本には、チンパンジーから学ぶという「超人類的自然体験」があり、そのことが環境教育を考える1つの重要な視点になることを提起いただいた。

赤木からは、清野先生が、「見えてくる」という用語を頻出されることに注目し、アフォー

ダンスの概念をもとに、環境の中で動的に生活することの意味を論じた。

(人間発達専攻 赤木和重)

(2) 日本の教育からアメリカの教育を考える

企画者：赤木和重 (准教授)

日 程：12月21日 (木) 15:00～18:30

参加者：約50名

概 要：

12月21日に、高知県土佐町のNPO法人SORAで副理事長をつとめる鈴木大裕氏による講演会を行った。発達科学部・国際人間科学部の学生、および、人間発達環境学研究科の院生が参加した。外部からも、他大学の院生、小中学校教員、マスコミ関係者などが参加した。総勢50名の参加であった。

鈴木氏からは、アメリカの公教育の「崩壊」ともいえる実態が話されたうえで、土佐町で実践されている教育について話された。活発なディスカッションも行われ、現在の日本の公教育の位置づけについて検討する貴重な機会になった。

(人間発達専攻 赤木和重)

(3) 「同年齢」保育・教育をちょっと疑ってみる：異年齢保育・教育&多世代交流の可能性

企画者：赤木和重 (准教授)

日 程：10月13日 (金) 18:00～20:30

参加者：約50名

概 要：

10月13日に行われたシンポでは、本学部・研究科の学部生・院生をはじめとして、教育委員会の指導主事、小学校教員、保育者、自治体の心理職員などおよそ50名が参加した。

最初に、川田 学先生 (北海道大学) が「異年齢・多世代の実践から発達を考える」として幼児と高齢者の交流が、子どもの発達に与える影響に関して講演が行われた。続いて、伊藤 崇 (北海道大学) 先生が「児童期の発達と異年齢教育」と題する講演を、異年齢教育を行っている小学校での観察データをもとに発表を行った。ディスカッションも活発に行われ、異年齢教育の重要性を子どもの発達の視点から考える機会となった。

(人間発達専攻 赤木和重)

(4) 高校生・私の科学研究発表会 2017

日 程：2017年11月23日 (木・祝)

場 所：神戸大学人間発達環境学研究科 B202, B棟1階ピロティ

企画者：伊藤真之 (サイエンスショップ/人間環境学専攻)

参加者：184名 (内訳：高校生129名, 高校教員23名, 大学生・大学院生8名, 大学教職

員 4 名, その他 20 名)。

概要: 兵庫県および周辺地域で科学課題研究に取り組む高校生に対して, サイエンスショップと兵庫県生物学会との共催により, 研究発表・交流会を開催した。この取り組みは, 高等学校における研究・探求活動の発展を支援するとともに, サイエンスショップの理念である市民の科学に関わる活動の広がりにつなげることを目的としている。

今年度は, 高校生による口頭発表 13 件とポスター発表 27 件があり, 口頭発表は午前と午後の 2 部に分けて行われ, その間にポスター発表と交流会が行われた。兵庫県から 11 校のほか, 大阪府 3 校, 京都府 1 校, 岡山県 1 校, 和歌山県 1 校からの参加があった。発表内容は, 生物, 地学, 物理, 化学, 環境など多領域にわたり, 発表に対して高校生同士の活発な質疑応答や, 高校・大学の教員, 大学生などから質問や助言がなされ, 上記の目的に添った成果を収めた。

なお, サイエンスショップより, 生物分野以外の領域の優れた発表として, 兵庫県立西脇高等学校 地学部 化石班の「加東市で発見したヒカゲノカズラ科植物の化石から推定する古神戸湖の堆積環境」に優秀賞が授与された(生物分野については兵庫県生物学会が表彰した)。

(人間環境学専攻 伊藤真之)

(5) Expression of Pain and Self-directed Studies + 国際シンポジウム: 痛みの表現と当事者研究

本企画は, 言語化できない症状(疼痛)を抱えた当事者の視点から既存の当事者研究の有効性を問い始めた。そして, 今回のワークショップやシンポジウムを通して, アート表現と当事者研究を融合させ, その可能性を示唆した。まず, 2017 年 11 月 17~19 日に造形制作ワークショップを 3 回開催した。参加者は異なる疼痛を抱えた 3 名の当事者, それぞれの痛みをアート化する試みを Deborah Padfield 氏(ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン, スレイド美術学校)とともに実践した。3 名はそれぞれの疼痛について Padfield 氏と語り合い, それぞれが疼痛をイメージした造形を制作し, 氏がそれらの造形作品を写真にした。その後, 氏と参加者全員でそれらの写真を見ながら, 再度自らの疼痛について考え, 語り直した。

11 月 21 日に開催されたシンポジウムでは, まず, Padfield 氏にご自身のロンドンのセント・トーマス病院での疼痛患者たちとのアートコラボレーション(痛みを表現化し, その後, それぞれの作品について語るという実践)の取り組みなどについて基調講演をして頂き, その後, ワorkshopの参加者 3 名が制作した造形作品を PowerPoint のプレゼンテーションで披露し, それらの作品について説明し, Padfield 氏とともにそれぞれの疼痛について対談をした。そして, 東京で当事者研究の活動を行っている水谷みつる氏(こまば当事者研究会)に今までの当事者研究の経験や, どのようにアート表現が当事者の経験を言葉にするためのツールになり得るのかについてお話して下さった。その後, 全体討論の時間を持つ

た。本企画は、哲学とアートの知見を取り入れ、疼痛に苦しむ当事者の支援プログラムを構築することを目的としていた。シンポジウムの参加者は31名、（うち、神戸大学の院生3名ほど、歯科医師や他大学歯学部 of 学生、他大学のダンス研究者、慢性疼痛の当事者、音楽学者、心理学者、哲学者、支援のあり方を考えている研究者など）が集まり、痛みの表現、その伝え方について非常に奥深い、そして意味のあるディスカッションを持つことができた。

科研費研究の一環として実施した。

（人間発達専攻 稲原美苗）

(6) 動植物を取り巻く環境変化と共生

A: 2017年11月7日(火) 10:30-12:00 神戸市立森林植物園

B: 2017年11月10日(金) 10:40-12:10 学術セミナー

大学院生: Aqwin Polosolo (人間環境科学・生活環境論・博士課程前期1年)

概要

A: 11月7日に学術調査として、神戸市立森林植物園の小林徹哉氏を訪問した。神戸市のアジサイのコレクションならびにドレスデンのコレクションについて議論し、その知見を交換した。今後は植物材料の交換を行い、国際的に研究交流を進めていくことについて合意し、この訪問は大変有意義であった。

B: 11月10日に、協定校のドレスデン工科大学との上記企画の学術セミナーを行った。2人の講演者と内容は以下の通りである。

Dr. Stefan Wanke "200 years of Hydrangea cultivation and breeding in Saxonia and the establishment of a German Genebank" (200年にわたるアジサイの育成の歴史とドイツの遺伝資源バンクの設立)

アジサイは日本ならびに中国の自生種であり、学名は、*Hydrangea macrophylla*であり、ドイツ語では、Hortensia と呼ばれる。ドイツをはじめとするヨーロッパでも、自生種であるタマアジサイ、ガクアジサイをもとに、育成品種のセイヨウアジサイへの改良が行われている。日本ならびにヨーロッパのアジサイ遺伝資源は、自然破壊や外来種の台頭によって失われつつある。今後も遺伝的多様性を保全するためには、植物遺伝資源を収集、保存、利用する活動が積極的に行われる必要がある。ドレスデン工科大学のアジサイの遺伝資源バンクでは植物種を調査し、長期保存するための取り組みを行っている。遺伝資源の利用は、暮らしに直接関わる問題であり、ジーンバンクを基盤にした研究は広く認知されることが求められる。

Dr. Oliver Zierau "Testing plant substances and extracts for their effectiveness and safety" (植物由来の代謝産物を用いた環境安全性試験)

Zierau 博士の研究は自然界に存在するタンニンと霊長類の食の嗜好について考察したものである。タンニンを含む物質の受容度は動物によって異なり、自然界でタンニンを多く摂

取している霊長類動物ほど、タンニンを含む食物に対して嗜好性を示す。タンニンを含む食物に対する反射反応は、それぞれの自然生活における食生活を反映していることを証明した。植物由来の天然ホルモン類似物質であるフィトエストロゲンの利用について、薬事効果と食生活の関連性について議論した。フィトエストロゲンの役割は、植物においては、環境ストレスから植物自身を防御するという防御機構として推測されている。人間の摂取による細胞応答遺伝子についての事例を紹介した。

受講生からは、「論理的に動植物を取り巻く環境変化と共生について、初めての知見に触れ、多くの気づきがあった。植物環境分野の国際研究交流の重要性を感じた。」という意見があった。参加者 A: 4名, B: 28人 (うち、学生は22名)

(人間環境学専攻 近江戸伸子)

(7) 企画名:17世紀後半のウィーンイエズス会ドラマ「Mulier Fortis 気丈な婦人・細川ガラシャ」の起源 -その音楽と歴史的背景

企画者:大田美佐子 (人間発達専攻・表現系教員)

日時: 10月10日 火曜日,

参加者 35名 (学生 25名, 外部者 10名 (研究者や宮津市関係者など))

概要:17世紀を中心に栄えたいわゆるバロック音楽、特に劇音楽としてのイタリア・バロックについては、日本では洋楽受容の経緯から、いまだにその重要性への理解が乏しい分野である。そこで、今回の講演では、講演者にイタリアのバロック音楽の研究者、アンジェラ・ロマニョーリ教授、ウィーン在住の音楽学者で、この作品の歴史資料を発掘した功績のある新山カリツキ富美子先生をお迎えし、今回は特にウィーンのエイズス会ドラマについて、日本と深い関わりのある「《DTÖ. 第152巻 “Mulier Fortis-気丈な貴婦人、細川ガラシャ》-作品の起源、特質、歴史的背景、音楽」を取り上げた。当時のウィーンのプロスブルク家は、神聖ローマ皇帝であるレオポルドI世が君臨していたが、政治のみならず文化芸術にも長けていた。彼の宮廷へ抱えられ活躍した作曲家も多かった。后妃エレオノーレの美貌、才気、信仰の深さゆえに、ガラシャの殉教への関心と、二人を比較対象して描いた点も重要である。1698年の初演は、后妃の零名の祝日でもあった。

講演者のアンジェラ・ロマニョーリはパヴィア大学の音楽史の教授。ウィーン大学やプラハなどからも招聘される、現在のイタリア・バロックの第一人者である。劇音楽を発掘研究し、「気丈な婦人」についても2004年にクレモナで復活上演をしている。今回はピエトロ・プロッサー教授のテオルバの演奏を交え、この劇音楽を発掘研究し出版したウィーン在住の音楽学者、新山富美子氏にも講演して頂いた。

17世紀後半のウィーンのイエズス会ドラマの宗教的、教育的背景、明智光秀の娘、細川ガラシャのテーマとハプスブルク帝国の深い関係性について、眠っていたその作品を発掘した新山先生ご自身の体験談は、歴史研究の醍醐味そのものであった。アフェクテンレーレの時代背景と、フェンシングまでも組み入れたイエズス会ドラマのダイナミクス、イタリアオペラにおけるアフェクテンレーレと、単なる記号論に終始するレトリックの間にある大きな違いなど、刺激的な講演内容であった。また、プロッサー先生のテオルバ・ラウテの深く繊細な音色は、まさにこの時代の「アフェクト」を存分に感じさせる響きであった。

また、「音楽文化のトランスボーダー」を考えるうえでも、細川ガラシャを題材にした、ウィーンのイエズス会劇と、「リオデジャネイロからサンクトペテルブルクまでを席卷していた」イタリア音楽の越境的な魅力に、豊かな学術的な刺激を受けた1時間半となった。このような企画の実現を可能にしてくれた研究科の学術 WEEKS にも感謝したい。





(人間発達専攻 大田美佐子)

(8) 実践交流会，オーストラリアと日本の保育施設見学フィールドワークと意見交換会

企画名：オーストラリアと日本の乳幼児教育学交流会 ワークショップ・交流会・フィールドワーク

企画者：人間発達環境学研究科：北野幸子

人間発達環境学研究科 人間発達専攻 院生：清山莉奈，古賀志津香，沼田祥子
発達科学部人間形成学科 伊藤菜々子

日 程：2017年12月5日(火)，6日(水)

参加者：オーストラリア大学教員2名，院生・学部生8名，
日本の教員1名，日本の院生・学生，のべ30名程度

概 要：

将来保育者を目指す本学とオーストラリア・ニューイングランド大学の大学生・院生が講義・演習・保育施設見学フィールドワーク・意見交換会を通じて，知見を深めた。

12月5日は，本学にて，オーストラリアと日本の乳幼児教育について講義から学んだ。加えて，オーストラリアの乳幼児教育学を学ぶ学生と，絵本，手遊び，伝承おもちゃ（福笑い，けん玉，折り紙，あやとり），椅子取りゲームなど，保育実践の交流会を院生・学生主体で企画・実施した。

12月6日は，日本の乳幼児教育施設の訪問し，実践について園長・副園長からの講義を聴き，園を見学した。子どもたちとの交流も行った。加えて，昼食や大阪城の訪問などで，文化交流を行った。将来，乳幼児教育およびその研究に携わる学生・院生の興味・関心の広が

りを促すことができた。また英語を使ったコミュニケーション力の向上を図る機会となった。

なお、オーストラリアからの大学生の訪問については、先方は、オーストラリアのコロンバス計画のもと、本事業を実施している。この事業は、昨年から3年間依頼されておりその2年目であり、来年度も交流事業を実施する予定である。

(人間発達専攻 北野幸子)

(9)韓国済州大学との国際交流プログラム

11月24日に神戸大学鶴甲第2キャンパス A棟2階大会議室にて、韓国済州大学の先生3名をお招きし、国際交流プログラムを開催した。このシンポジウムは、韓国と日本の教育の状況や環境を紹介し、文化多様性をもふくめて状況をどのように改善するかを相互に理解することを目的とした。参加者は大学院生、学生ならびに教員あわせておよそ50名であった。

シンポジウム1 日本と韓国の教育事情 (13:20~14:50)

座長：山下晃一（神戸大学人間発達環境学研究科准教授）

倫理教育・道徳教育の立場から（張承姫：済州大学教育学部教授）

家庭科教育の立場から（金孝心：済州大学教育学部教授）

子どもの権利保障の立場から（渡部昭男：神戸大学人間発達環境学研究科教授）

張承姫先生は、韓国の道徳教育や倫理教育について、社会や国家を批判することを教えること、道徳は教科書があること、哲学的知識の評価が行われるなど日本と比較しても先進的な取り組みを実施していることを報告した。金孝心先生は、韓国では、「実科」として、日本の家庭科教育並びに技術科教育が行われており、教科内容としては類似しているが、韓国社会の問題として、家庭で家事を行わない子ども達のための教科であることなど、日本とは異なる概念で教科が構成されていることを報告した。渡部昭男教授は、障がい児の権利保障と教育政策的観点からの子どもの権利保障の観点から、子どもの学びの権利保障について報告した。

シンポジウム2 教育的側面から見た多文化理解 (15:10~16:40)

座長：國土将平（神戸大学人間発達環境学研究科教授）

韓国における多文化理解、生涯教育（金民浩：済州大学教育学部教授）

日本における多文化理解（奥山和子：神戸大学人間発達環境学研究科講師）

金民浩先生は、韓国の多文化理解の教育事例として、済州の海女の教育について、伝統的文化を守ることと、変容していく文化や価値観をどの様に受け入れるかについて報告した。奥山和子講師は、日本に住むJSL (Japanese as a second language) 児童の実態とその教育支援の必要性について触れ、この様な状況における教員がどの様な資質を求められるかについて報告した。

また、このシンポジウムに先立ち、韓国済州大学校とのGSPに関わる交流の詳細につい

でも打ち合わせを行った。参加する学生の教育的な興味関心に沿ってテーマを設定し、済州大学校附属小学校や近隣の公立小学校を訪問し、さらに、済州大学校の学生とのディスカッションや交流をふまえて、教育的理解、多文化理解を深化できるようなプログラムを計画している。

(人間発達専攻 國土将平)

(10) Toward Co-existence of Human and the Environment in Urban area

シンガポール社会科学大学(Singapore University of Social Sciences)からチャン・ヨンホ氏をゲストスピーカーとして招き、経済的な枠組みを用いての生態系管理をテーマとした研究集会を行った。企画を行った教員と学生は環境経済学を専門とするが、集会当日には生態学をはじめとする他の分野の研究者も聴衆として招き、学際的な議論を行った。また、チャン氏に加え、教員として佐藤真行准教授、博士課程前期課程の学生として青島一平とパウラ・アンドレア・カノもそれぞれ研究発表を行い、活発な議論を行った。

チャン氏は、「Sustainability for economists and ecologists」という発表題目のもと、持続可能性という概念の捉え方が、経済学者と生態学者との間で必ずしも一致しないことを指摘した。経済学者は自然資本の減少・劣化・枯渇が人工資本により補完できると考えがちである一方で、生態学者は自然資本の人工資本による代替を認めない場合が多い。チャン氏は、どちらか一方の考え方に偏ることなく、両者の間でうまく折り合いをつけることが必要であると指摘した。佐藤准教授は、「Ecosystem Service Accounting in Japan」という発表題目のもと、国の豊かさを示す国民経済計算の中に、生態系サービスのストック価値を計上することの必要性と、そのための方法論を提示した。学生である青島は、「Recognition and Valuation of Urban Green Spaces: Using Life Satisfaction Data」という題目で研究発表を行った。この発表では、緑地の貨幣価値を評価するにあたり、物理的な緑地面積を評価対象とするのか、それとも、住民が主観的に認識している緑地の量を評価対象とするのかで、同じ面積の緑地でもその評価額が異なりうることが指摘された。同じく学生であるパウラ・アンドレア・カノは、「Ecosystem Damage in Mining Industry of Colombia: Guajira Case Desert and Wetland Ecosystems」という研究題目のもとで、コロンビアにおける採炭業・金鉱業が、生態系に与えるダメージを可視化するための方法論について研究成果を発表した。

いずれの発表も非常に興味深いトピックを扱っており、聴衆からはたくさんの意見や質問が出され、活発な議論が行われた。

(人間環境学専攻 佐藤真行)

(11) インスタレーション・パフォーマンス 関典子×竹谷嘉人 dance×paint 『ヒ°ク。』

【企画名】関典子×竹谷嘉人 dance×paint workshop 『ヒ°ク。』

【企画者】関典子（人間発達専攻 表現系 准教授）

【日 程】2017年12月22日（金）13:20～14:50

【参加者】45名（学外18名，学生27名）および企画者3名（関・竹谷 ほか）

※ 神戸大学広報部より取材，映像作家より撮影の申し出があり，参加された。

【概要】

◆ 趣旨

2018年3月17～18日，デザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）でのインスタレーション・パフォーマンス『ヒ°ク。』のプレ企画として，ワークショップを实践。『ヒ°ク。』に込めた意味は，「痙攣」に象徴される「生の実感」。参加者と共に「踊り／描く行為」が「物質化／空間化」していくような方法を探る。プロの絵描きと舞踊家の創造的行為を共有することで，参加者の視野の拡大，芸術の振興，本学の広報を図ると共に，創造性に満ちた人材の育成を図る。

◆ 内容

1. はじめに：関・竹谷による趣旨説明，活動紹介，デモンストレーション。
2. ワークショップ：約6名×8組に分かれ，紙とペンを渡し「描く／動く」をルールに制作。
3. ショーイング：各グループによる作品（パフォーマンス）披露・講評。
4. まとめ：総評・質疑応答・記念写真・アンケート。終了時刻後も闊達なディスカッション。

◆ 成果

終了後に実施したアンケートでは，全員が「大変良かった」「良かった」と答えられ，自由記述では，「dance×paint を融合した表現が刺激的だった」「ワークショップというものの自体，初めて参加したが，とても多くの発見があった」「関さん・竹谷さんによるデモンストレーション，参加者のショーイングも見応えがあった」などのコメントが寄せられた。

アンケートや事後のディスカッションを通して，来年3月にデザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）にて開催するインスタレーション・パフォーマンス『ヒ°ク。』に対する期待や要望なども調査できた。何より，参加者の発想力や表現力には驚かされ，3月公演のクリエーションのための有益な材料ともなり，当初の趣旨に適う成果が得られた。

ワークショップ，公演共に，本学広報部から取材の申し出があり，以下のように動画が公開された。公演は神戸新聞（2018年5月10日朝刊）にも掲載され，趣旨の一つに掲げていた「本学の広報」の面にも，資することができたと考える。

【Twitter】

https://twitter.com/KobeU_PR/status/996919740093247489

https://twitter.com/KobeU_PR/status/948839719072251905

【YouTube】

<https://youtu.be/fD60yvupdyY>

<https://youtu.be/SaAg3obVPi0>

(人間発達専攻 関 典子)

(12)アレクサンダー・テクニックの実践と研究 バジル・クリツァー氏を招いて

2018年3月21日(水)

動きと思考の両者を不可分なものとして捉えるセルフコントロール法の一種であるアレクサンダー・テクニックは現在、歌や楽器演奏・演劇などの分野では世界の芸術大学や演劇学校で必須の授業として取り入れられている。本イベントは、神戸大学として初めて、このメソッドによるセミナーをバジル・クリツァー氏を招いて開催した。

公開レッスンを受講したのは音楽2名、ダンス1名の大学院前期課程生で、一般向けのセミナーとは違った、教師目線からの解説も含めた、大変示唆に富むものであった。また受講学生のパフォーマンス向上のみならず、フロアともその効果や教育手法を学術的に研究するための場を設けた。(終了後の懇親会にも多くの参加があった)

神戸大学交響楽団員からの参加も多く、結果として他学部他研究科の比率が多い、あるいはアレクサンダー・テクニック教師を目指す学外からの参加者も多いイベントとなった。

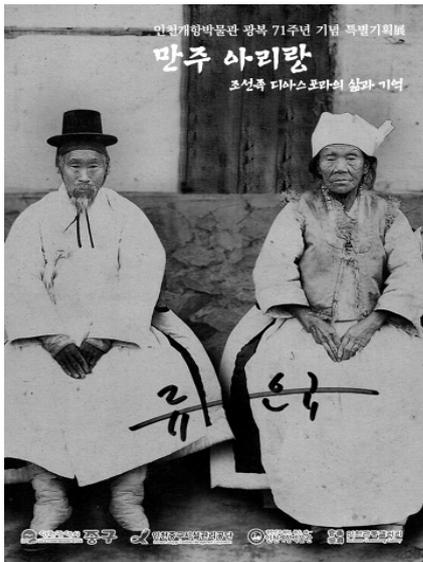
参加者25名

(人間発達専攻 谷 正人)

(13)神戸仁川芸術交流プロジェクト

開催日平成30年2月6日、発達科学部Dルーム、参加者約40名(学外からの参加者約10名) 担当者、塚脇淳・立体造形ゼミ学生。

昨年始動した神戸仁川芸術交流事業の第2弾として、韓国の写真家柳銀珪さん、仁川官洞ギャラリーを運営しながら日中韓交流を構想する戸田郁子さん、韓国伝統服作家尹炳玉さんの3名を神戸に招聘し、日中韓三国で普遍的に存在する「現代人の暮らしと伝統」をテーマとし、伝統文化の継承への取り組みや葛藤について、それぞれの立場で考え交流を深める講演会を行いました。以下は招聘者の略歴と参考写真資料



写真家 柳銀珪

韓中修交直後の1993年に中国黒竜江省ハルビンに渡り、朝鮮族の生活や抗日独立運動の末裔たちの姿を撮影してきました。また、旧満洲地域を回って、朝鮮族の記念写真や史料写真などを収集し、中国朝鮮族の移住と定着の歴史について、写真を通じて視覚的に証明する作業を行ってきました。これまでに、『忘れられた痕跡 独立運動の後裔たち』『忘れられた痕跡 写真で見る朝鮮族100年史』『延辺文化大革命』などの写真集を発表してきました。

文筆家 (仁川官洞ギャラリー) 戸田郁子

愛知県豊橋市生まれ。学習院女子短期大学卒業。1983年より韓国に留学、延世大学韓国語学堂、高麗大学史学科で学ぶ。編集者。1991年韓国人写真家と結婚。国際結婚にいたるまでの顛末、韓国大家族主義との遭遇を描いたエッセイ『ソウルは今日も快晴』が韓国でベストセラーとなりました。

韓国伝統服作家 尹炳玉

大韓民国重要無形文化財針線匠の具恵子(グ・ヘジャ)先生から伝統韓服を学び、現在も習っています。大韓民国重要無形文化財ヌビ匠の金海子(キム・ヘジャ)先生から伝統ヌビを習いました。大韓民国伝承工芸大展において天然染色部門の大統領賞を受賞した李炳瓚(イ・ビョンチャン)先生から染色工芸を習いました。2008年大阪にて、伝統ヌビのワークショップを行いました。2015年大阪府箕面市で日本の教え子さんたちと、韓服、閨房工芸、ヌビの展示会とワークショップを行いました。

[출처] 冬の日のヌビ 尹炳玉作品



(人間発達専攻 塚脇 淳)

(14) 障害学生の「学び」から見るインクルーシヴな大学教育の意義と課題

12月23日に、人間発達環境学研究科大会議室において、韓国ナザレ大学との共同研究の成果として刊行した同名の研究論文を題材としたシンポジウムを実施した(金丸彰寿, 大

山正博，川手さえ子，張主善，和田仁美，岩崎陽，塩田愛里，高寅慶，金明淑，金英淑，金栄喆，津田英二「障害学生の「学び」から見るインクルーシブな大学教育の意義と課題～韓国ナザレ大学卒業生のインタビュー調査を踏まえて～」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第11巻1号，2017年9月，pp.19-36）。本シンポジウムは，韓国ナザレ大学・ソウル市立知的障害人福祉館との協定に基づき，毎年交互に実施している学術研究交流の一環として実施したものである。午前中は金丸彰寿氏，大山正博氏，金英淑氏が共同研究の概要を報告し，午後は研究対象となったナム・ボラム氏を囲んで河合翔氏，稲原美苗准教授が鼎談を行い，ウ・ジュヒョン教授がコメンテーターとして登壇した。高等教育における障害学生支援に，障害者の生き様という観点から迫ることができる機会となった。参加者は，韓国ナザレ大学関係者30名を含め，国内の研究者や学生などで60名余りであった。

（人間発達専攻 津田英二）

(15) 音楽教育シンポジウム 音楽は競い合うもの？分かち合うもの？

1. 企画概要

内容：音楽教育シンポジウム 室井摩耶子 ピアノに生きる

あなたはどのように人生を享受し，年を重ねていますか？という問いに始まり，日本が西洋文化を受容して150年，その音楽に育まれた豊かな人生とは，どのようなものなのか？について，世界を舞台に活躍してこられ，現在96歳の現役最高齢ピアニストとして，人生の先達として，各方面に大きな感動を巻き起こされている室井摩耶子氏に基調講演を依頼し討議した。室井氏は，東京音楽学校（現東京芸大）を首席で卒業以来，日本のみならず，長く欧州を拠点に，13カ国で演奏活動され，帰国後も日本を代表する名演奏家としてご活躍。その円熟した芸術とチャーミングなお人柄がマスコミにも注目され，多くの人に勇気と希望をもたらしている。パネリストにも，日本と欧米の音楽・文化事情に精通された方々をお迎えし，音楽と共に生きる，真の幸福について考えたい。

本シンポジウムでは，西洋音楽の本場であるドイツでの数十年にわたる研鑽を重ね，円熟の境地にある演奏家自身が，それでも尚日々新しい発見と感動に満ちた芸術人生を送っている実践報告を基に，人生と共に芸術を確立・成熟・円熟させていくプロセスについて，企業経営者や音楽家，文化サロン主宰者と共に議論し，人生と音楽の相関について再考する。

成果：96歳を超えて尚，現役最高齢の演奏家として活躍する基調講演者の講演内容を踏まえ，音楽家及び地域サロン主宰者並びに企業経営者が討議。シンポジウム参加者全員が世代や各分野の立場を超えて本音で語り合える場を設けることが出来，人生と芸術の切っても切れない関係の一端を明らかにすることが出来た。

参加人数：約60人

（人間発達専攻 坂東肇）

(16)神戸大学発達科学部 タイムスリップコンサート～躍動する生命のリズム～

1. 企画概要

内容：タイムスリップコンサート～心躍る時，心憂う時，生命輝く～

多くの人が，何の疑問も抱かずインターネットで手軽に音楽を視聴するだけでわかった気になり，音楽を真に理解する意味を見失っている現代。19世紀ヨーロッパにおいては演奏録音など存在せず，心身の能力を総動員して自らの手で音楽を創造せざるを得なかった。しかしそうであるからこそ，その時代は現代には見られない，豊饒な生命力あふれる表現が，音楽のあらゆる分野で繰り広げられていた。このような時代の，音楽に向き合う姿勢を現代によみがえらせ，もう一度原点に帰って見つめ直そうとするのが，このコンサートの趣旨。演奏する楽曲の背景及び音楽のみならず，音楽家が芸術を深めていく実例を踏まえて人生の成熟について話し，神戸大学教育学部卒業生との演奏や神戸大学発達科学3年及び大学院研究生のゼミ生並びに医学研究科2年のゼミ参加学生の演奏を通して，音楽本来の楽しみや音楽が示唆する真の幸福を地域や家庭で共有する，新たな希望の源を探求する。

成果：終演後に回収出来たアンケート用紙は34枚。「とてもよかった」に○をつけた人が20名「よかった」に○をつけた人が5名，「普通・よくなかった・よく分からない」のいずれかに○をつけた人は皆無，来場者の多くが次回開催を希望していた。

アンケートの自由記述欄には，「先生のお話も楽しく聞け，耳慣れた曲も知らない曲も楽しく聴けた」「最後の演奏が素晴らしい響きでとてもよかった」「お話楽しかった。連弾 deep emotion!」「とても感動，来てよかった。貴重なお話を聞けてとても良かった」「素晴らしいピアノ良かった。いつも素晴らしい音楽会ありがとう」「とても良かった，とまらない素晴らしいお話に引き込まれ楽しい時間をありがとうございました。ピアノの音色最高。」「音楽の説明等良かった。どれも大変良かった。優雅な時間をありがとう。」「クラシック音楽から離れた生活をしているが，やっぱり私は音楽がないとダメだと実感。楽しかった。」「先生方の演奏，お話し，学生さん方の一生懸命な演奏，たいへん楽しませて頂いた」「先生からしっかり説明されて曲を楽しむ事が出来た。小さな会場でじっくり聴かせていただくことが出来た。」「とても楽しいひととき」「初めてでしたが，素晴らしくてびっくり。ダイナミックで深いショパン良かった！シューマンは反対に寛いだ。久々に近くでの生音に震えた。また来たい。」「私も沸点に達した。」「人間表現学科についてあまり知らなかったが，色々なジャンルがある事に驚いた。又，曲の数学的分解（確かにありうる）というものもあり，音楽を多方面から捉えることに興味を持った」「最後の連弾大迫力，素晴らしかった。」「ベートーヴェンの力強さ，すごいエネルギーを感じることができて良かった。シューマンの曲をまた聴きたくなった。」「初めて伺い，こちらの魂まで届く演奏に鳥肌立ちウルウルした。昨年こちらに転居，このような催しがあり幸せに思う。」「お話，すごく興味深く面白かった。とてもステキで刺激のある演奏ありがとう。次回も楽しみ。」「素晴らしい演奏に感謝，余韻を持って帰ります。」「音楽は慣れ親しむことが重要。このような無料の機会に感謝。自分たち

の若い時代と違って階級社会が際立ってきたような気がしてならない。無料で生の演奏に触れられる機会の提供により、少しでも打破する方向に進んで欲しい。(この演奏会は)一つの確実な一歩と思う。」等の感想が寄せられ、来場者に音楽の喜びを伝えることが出来たと同時に、今後への期待の大きさも実感できた。

参加人数：約 60 人

(人間発達専攻 坂東 肇)

(17) 環境を守る物語の力：東北タイの伝承と開発

学術 WEEKS の助成を頂き、人間発達環境学研究科博士課程 加戸友佳子と共に、NPO メコンウォッチと共催で 2017 年 10 月 13 日に「環境を守る物語の力-東北タイの伝承と開発」というセミナー企画を行い、翌 10 月 14 日には、エクスカージョンとして赤穂市立海洋科学館・塩の国に訪れ、日本における塩作りの文化や歴史を学んだ。

「環境を守る物語の力-東北タイの伝承と開発」のセミナーでは、ゲスト講師として、バンペン・チャイラック氏とメコン・ウォッチ事務局長の木口由香氏をお招きし、それぞれ「タイの民話『バーデーとナンアイ』を通じた環境保全」と「東北タイの伝説と環境問題」というタイトルで講演をして頂いた。また、メコン・ウォッチが作成した東北タイのドキュメンタリー映像「塩を作る村の暮らしと物語を伝えるもの」の上映会を行った。タイ・メコン河流域では、川や森が育む自然資源に根ざした生活が営まれており、自然にまつわる伝説・昔話・諺などが現在でも数多く伝えられている。これらの地域に根ざした「人びとの物語」が、自然資源と暮らしをつなぎ、次世代に環境保全の大切さを語り継ぐ上で大きな役割を果たしてきた。しかし、現在、急激な開発によって環境が変わってゆく中で、これらの物語も危機に瀕している。今回の物語の舞台である東北タイでは長年、外部から「持続可能な資源利用」や「生物多様性保全」をうたう活動が導入されているが、その実施の際、地域の自然の特性や元々あったコミュニティの資源管理に気づかず、生態系や村の協力関係を壊し、却って環境を悪化させている現状を知ることができた。さらに本セミナーでは、タイの事例だけではなく日本、パラオ、インドネシアの各地域に根ざした自然資源利用の知恵や、口承文学等の事例を次の 3 名が報告を行った。加戸友佳子（神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 博士課程）「原発と聖地-福井県大飯原発とニソの杜の事例から-」、紺屋あかり氏（お茶の水女子大学 プロジェクト教育研究院）「ジュゴンの伝説と保護活動-マイクロネシア・パラオの事例から-」、古川文美子（神戸大学大学院 人間発達環境学研究科）「伝承と防災-インドネシアと日本の事例から-」

これらの話題提供を通して、地域に根ざした「人びとの物語」を活用した環境保全、資源管理及び防災の可能性に関して議論し、地域が自立的かつ持続的な資源管理を行うためには、そこで暮らす人々の環境認識を再評価し、人々が自分たち自身の言葉で資源管理について語り、環境保全を担う必要があることを再認識できた。さらに、本セミナー企画を通して、新たな研究者のネットワーク構築、及び次の研究会の開催につなぐ機会となり得

た。

(人間環境学専攻 古川文美子)

(18) 2017年第2回ESD実践研究集会

2017年9月23日(土)、24日(日)、本研究科において「第2回ESD実践研究集会」を開催した。1日目は、「マイライフ・アワライフ・コモンフューチャー: My Life Our Life Common Future」をテーマとした、学生主体のESDカフェ・ワークショップで幕開けし、「地域社会に立ち現れるESDの特徴とは?」というテーマで、RCE中部・RCE岡山・RCE兵庫神戸の実務者をパネリストに向かえ、基調討議をおこなった。2日目は、い・しょく・じゅうのアプローチ別分科会をおこない、今年度新たな取り組みとして、実践的研究・研究的実践の個別発表の時間を設けた。最後に、「ESD推進の実践的・研究的課題」というテーマで2日間を締めくくるシンポジウムをおこなった。今年は延べ145人を超える参加者が集まった。今後も、学会活動へと発展することを企図して継続していく予定である。

(人間発達専攻 清野未恵子)

(19) 脳神経科学と心理療法の対話

日 時: 2017年12月1日(金)

講演者: 瀧澤悠(クイーンズランド大学)、松本拓真(岐阜大学教育学部)

参加者: 約60名(学内外の研究者、臨床心理士、大学院生、学生)

概要: 本企画は、脳科学や神経科学と心理療法との接点や、その心理療法への応用可能性について実際的な課題を検討することを目的とした。瀧澤悠氏を講師に招き、脳科学や神経科学の知見をいかにして心理療法に応用していくかについて、事例を交えてご講演をいただいた。瀧澤氏の講演からは、ニューラルネットワークという視点から心理療法を見る観点や、心理療法における身体や生活習慣に注目する重要性について理解を深めることができた。次に松本拓真氏をお招きし、精神分析的な心理療法の観点から指定討論を行っていただいた。松本氏の講演からは、脳科学や神経科学の知見に心理療法のエビデンスを求めていくことの危険性や、心理療法側の学問的な準備の不十分さなどについて理解を深めることができた。後半の質疑応答ではフロアを交えた活発な質疑や議論が展開された。またアンケートからは、多くの参加者が次回の企画を期待するとの意見があり、本企画のテーマに対する関心の高さが伺えた。なお、企画の段階から大学院生に関わってもらい、当日の運営についても中心的な役割を担ってもらった。

(人間発達専攻 山根隆宏)

(20) 子どもの心の声を聞く～様々な表現活動から～

【企画名】子どもの心の声を聴く～様々な表現活動から～

【企画者】渡部昭男，川地亜弥子

【日 程】2018年2月17日(土) 13:00～17:00

【参加者】学内学部生135名，その他12名(学内院生，他大学院生，現職教員，阪神地区住民など)

【概 要】

今日教育実践の現場では，子どもの内面の要求や願い，或いは本人さえ自覚していないニーズに，指導者や支援者や保育者は，いかにして向き合っていくのかということ，つまり“子どもの心の声を聴く”ことについて，考察を行う機会が必要とされている。さらに“子どもの心の声を聴く”ことは，現代の実践的課題であると同時に，生活指導研究においても長きにわたり探究されてきたテーマである。こうした状況に鑑み，“子どもの心の声を聴く”ことと密接な関わりのある表現活動がもつ可能性を学ぶとともに，これらの表現活動に通底する“子どもの心の声を聴く”ことの本質に迫ることを目的として，本企画に取り組んだ。

今回は表現活動のなかでも作文と描画に注目し，小学校で生活綴方・絵綴方の実践に取り組まれてきた土佐いく子氏，上中良子氏をお招きした。進行は以下の通りであった。

1) 土佐 いく子 (講演)「子どもたちに表現のよろこびと生きる希望を～子どもの心の声を聴く～」

2) 上中 良子 氏 (講演)「『私』をどこかに預けないで！～子どもの心の声に耳を傾けたい～」

3) 対談／質疑応答

なお，本企画は「子どもと一緒に参加できる講演会」として開催し，7名の子どもの参加があった。子どもの安全確保や予算上の問題等から今回は別室保育を実施せず，子どもも保護者と一緒に参加する方法を採用し，会場内で絵本やぬり絵等をしながら過ごす子どもの姿が見られた。しかし，会場に入りたがらない子どももおり，そのためにほとんど講演をきくことのできない参加者や，頻繁に出入りを余儀なくされる参加者もいた。今後，参加者と子どもの両方に負担とならない方法を考えていきたい。

(人間発達専攻 川地亜也子)

(21) 「共生教育」を考える 2—「加害者教育」の視点から考える

人間発達環境学において，多様な人間相互の「共生」や「共生教育」の具体化は重要な課題である。この課題意識に基づき，2015年度はスウェーデンにおける「共生教育」をテーマとした学術講演会を開き，議論を深めた。2017年度学術WEEKSでは，教育哲学の観点から「共生教育」を研究されている高橋舞氏をお招きした。高橋氏は，「共生教育の理論研究—「被害者教育」の観点から「加害者教育」の観点へ」で，2006年に博士学位を取得するとともに，2009年には著書『人間成長を阻害しないことに焦点化する教育学—いま必要な共生教育と

は』(ココ出版)を出版している。「共生」を営む現実で起こり得る加害者性(暴力性)を自覚する「共生教育」の在り方について理解を深めた。

日 時:2018年1月27日(土曜日)13:30~16:30

場 所:神戸大学発達科学部A棟4階「427室」

講 師:高橋 舞(立教女学院短期大学)

演 題:共生教育の理論研究——「被害者教育」の観点から「加害者教育」の観点へ

参加者数:院生を中心に約10名

(人間発達専攻 渡部昭男)

7.3. 研究科支援プロジェクト研究

(1)社会的分断を超境する「ごちゃまぜ新喜劇」の開発—インクルーシブ・コミュニティの構築に向けて—

本研究の目的は、障害児者、学生、乳幼児やその保護者など様々な参加者が集って行われる、即興的な要素の強い「ごちゃまぜ新喜劇」が、インクルーシブなコミュニティの形成に寄与することを明らかにすることである。

本研究科の施設である「あーち」において、11月17日、12月1日、12月15日、1月19日、2月2日の計5回「ごちゃまぜ新喜劇」を実施した。実施にあたっては、放送作家の砂川一茂さんらに協力いただいた。幼児から成人まで、障害のある人からない人まで、毎回10名から15名の参加者が「ごちゃまぜ新喜劇」に参加した。

結果は分析中であるが、現時点で、興味深い現象の1つに「能力差の肯定的機能」が見出された。「話すことができない」「セリフを忘れてしまう」「話しすぎてしまう」といった、一般的には「できない」とされる能力の問題が、即興的な新喜劇の中では、肯定的な受け手がいることで、その「できなさこそが面白い」という評価に反転していくことが明らかになった。

この事実は、インクルーシブなコミュニティを構想していくうえで重要な視座を提供するものと思われる。なぜなら、「できない」ことを「できる」ようにするのではなく、それぞれが、それぞれの存在・表現のまま、かつ、相互依存することで、創造的なパフォーマンスを生み出すことが可能になるからである。

本研究の結果は、2018年4月13日から15日にかけてギリシャで行われる「PLAY, PERFORM, LEARN, GROW」学会において発表する。また、赤木和重・岡崎香奈ほか(印刷中:今春出版予定)『ユーモア的即興による表現の創発:発達障害・新喜劇・ノリツッコミ』クリエイツかもがわとして出版する予定である。

(研究代表者 赤木和重)

(2) 現代社会の学習者に求められる科学情報の読解・活用能力を育成する科学教育の国際

共同研究

1. 研究の目的

情報技術の急進的な進展に伴い、社会全体には様々な科学情報が溢れている。したがって、現代社会を生きる市民一人ひとりに求められる科学情報の読解・活用能力は、個々の科学情報を正しく理解できるだけに留まらず、科学情報の信頼性・妥当性を評価できること、信頼・妥当性のある科学情報から必要な情報を抽出すること、問題解決のために編集・加工・統合できることというような新しい科学情報の読解・活用能力が必要となる。

しかしながら、将来の市民となる現代社会の学習者が獲得すべきこのような新しい科学情報の読解・活用能力の全体像はいまだ明確に定義されておらず、その育成方法も明らかになっていない。

本研究では、世界的にみても未開拓のテーマへ取り組むために、国際的に活躍する科学教育と学習科学の研究者で構成される学際的な研究体制を構築し、次の3点に取り組む。

(1) 現代社会の学習者に求められる科学情報の読解・活用能力育成に関する教育理論と学習理論を確立する。

(2) 現代社会の学習者に求められる科学情報の読解・活用能力育成を実現するための科学教育プログラムを開発する。

(3) 社会実装型実証実験を行い、理論の妥当性と教育プログラムの効果を検証する。

2. 研究実績の概要

(1) 科学情報の読解・活用能力育成に関する教育理論と学習理論の確立

科学情報の読解・活用能力に関する文献資料や国内外の関連事例を収集し、データベース化した。科学教育および学習科学の観点からの分析結果を統合し、科学情報の読解・活用能力育成に関する教育理論と学習理論を確立した。

(2) 科学情報の読解・活用能力育成を実現するための科学教育プログラム開発

上記の成果をベースとして、科学教育プログラムを開発した。教員用ハンドブック、学習者用ワークブック、学習リソース集、評価テストとルーブリックなどを作成した。

(3) 社会実装型実証実験の実施

上記の研究成果を社会実装し、大学生を対象とした実証実験を行った。質問紙法を併用して、実証実験において対象者が獲得した科学情報の読解・活用能力やその獲得メカニズムに関するデータを収集した。

(4) 実証実験データ分析

収集したデータを統合・解析して、本研究の理論の妥当性と教育プログラムの効果を検証した。

(5) 研究成果の公表

科学教育・学習科学関連の国際会議において、中間的な報告を行った。また、本研究の理

論と実践について、日本科学教育学会第41回年会において招待講演を行った。

(6) 大型科研費の申請

本研究の共同研究者に海外研究協力者として参画を依頼し、山口が研究代表者として、本研究課題に関する大型科研費（基盤研究（A）（一般））を申請した。

（研究代表者 山口悦司）

(3) 森林・植物資源の利活用による六甲山系地域循環圏創出に資するビッグデータの構築

1. 研究の目的

地方創生は、産業や雇用の創出により地域を活性化することを目的としている。地域の特徴を活かした産業の創出には、地域に存在する地域資源（例：森林・植物資源）を地産地消することが欠かせない。このとき、地域住民が地産地消による恩恵を感じ取ることで、地域の魅力を再発見するとともに、地域への愛着を更に高めることができると考えられる。そのため、地域住民の満足度と地方創生の成否は連関しているといえる。

代表者らは、内閣府の地方創生推進に係る都市・地域づくり構想の一つである環境モデル都市に制定されている神戸市を事例とし、六甲山の森林・植物資源を活かした地方創生のあり方を提案することを目指している。六甲山は都市近郊に位置するいわゆる里山として、様々な生態系サービス（食料・燃料の供給、レクリエーション等）を地域コミュニティに提供してきた。また、地域住民は里山の手入れをすることで、生態系サービスを維持してきた。これにより、六甲山においてヒト・モノ・カネの循環を促す地域循環圏が構築されていたが、戦後の高度経済成長に伴い、関係性が分断されるに至っている。

本プロジェクトは、森林・植物資源を利活用する事業を通じて、地域コミュニティと六甲山の間での地域循環圏を創出することを目的とする。これを実施するため、環境・経済・社会の各手法を用いて、地域資源の利用や地域住民の満足度等を考慮した都市・地域づくりの評価方法論を開発すること、評価に用いる環境・経済・社会データ群（ビッグデータ）の整備を通じて、国内外での自然共生型都市・地域づくりに資する政策提案パッケージを作成することが最終目標である。

2. 研究の実施内容

(i) 六甲山ビッグデータの構築

都市・地域づくりを検討する際には、環境・経済・社会の各側面から、六甲山と地域住民との関係性を組み合わせて体系的かつ網羅的に評価することが求められる。そのため、環境・経済・社会など多分野に渡る量的・質的な情報から構成される六甲山ビッグデータを構築する。ビッグデータを構成するデータは、統計資料・文献調査、アンケート調査などを通じて収集し整理する。対象とするデータは、六甲山に関する情報（標高・斜度等の地理情報、森林・植物資源の植生分布や蓄積量、森林・植物種の数、土地所有者、年間観光客数等）、

地域コミュニティに関する情報(経済状況, 就業構造, 世帯数, 人口, 高齢化率, 自治会・町内会加入率, 生活の満足感, 六甲山系を含む地域への愛着・親近感, 自助・共助の状況等), ボランティアに関する情報(活動数, 活動状況等), 環境・エネルギーに関する情報(年間バイオマス生産量, エネルギーポテンシャル)等である。

六甲山ビッグデータは六甲山および六甲山に位置する4市(神戸市, 芦屋市, 西宮市, 宝塚市)を網羅しており, 地理情報システムを用いて小地域単位でのデータの可視化が可能である。

(ii) 森林資源のエネルギー利用に対する住民意識の分析

スギ・ヒノキ等の人工林は森林整備の観点から適宜間伐することが必要であるが, 六甲山では十分な間伐が進んでいない。そこで, 間伐で発生する木材を温浴施設の熱源として利用する事業を想定し, 地域住民が温浴施設の利用を検討する際に, 入場料に加えて六甲山の森林整備に係る負担金をどれだけ支払う意思があるか, 負担金の許容にどのような要因(性別, 年齢, 家族形態, 環境へのやさしさ, 六甲山・地域への愛着, 防災意識等)があるかについて, 神戸市在住の地域住民を対象としてアンケート調査を行う。調査結果は, 仮想評価法, 共分散構造分析等の手法を用いて分析し, 許容可能な負担金額や地域住民の意識を考察する。これらの分析を通じて得られた結果は, 六甲山, 地域コミュニティ, エネルギーに関する情報として, 六甲山ビッグデータに組み込まれる。

また, 間伐材や竹の伐採や熱利用に係る事業化の可能性を検討するため, 六甲山系で活動するボランティアを中心に聞き取り調査を行う。

(iii) 観光振興を目的とした六甲山固有の植物種の同定

六甲山には約1700種の植物が自生しており, 固有種も多く存在している。しかし, 固有種の中には種の同定が明瞭化させていないものもあり, 資源としての価値が十分に把握されていない。

神戸市民の花として指定されているアジサイは, 六甲山にも多く自生している。特にヤマアジサイの一種であるシチダンカは六甲山固有とも言われ, 地域資源, 観光資源としての価値が期待されている。そこで, 本研究ではこのシチダンカをはじめ, アジサイ品種の形態分析を行って種の同定や育成・保存方法さらには園芸利用の検討を行う。ここでは神戸市立森林植物園の協力のもと, 植物園で保存育成されているシチダンカを含む多種多様なアジサイについて, 葉や花卉, 樹高等の測定を行う。得られた成果をもとに, 植物資源を用いた六甲山の観光振興の方法を提案する。これらの検討を通じて得られた結果は, 六甲山に関する情報として, 六甲山ビッグデータに組み込まれる。

3. 研究成果の発信

本プロジェクトで得られた学術的成果は学会等で適宜発表(ポスター賞を1件受賞)しており, 学術論文としての公開も予定している。また, 本研究成果をもとに, 研究成果を自治

体に発信することで、森林・植物資源を活かした都市・地域づくりへの社会的貢献も行っている。

(研究代表者 田畑智博)

7.4. 高度教員養成プログラム

教育連携推進室の新設により、その研究開発部門において、高度教員養成プログラムの企画運営を引き継ぎ、例年通り実施した。年間6回のセミナーを企画・実施した(セミナー報告は、次のサイトにある。<http://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/4869>)。参加者は、研究科において専修免許取得を目指す7名の院生であり、附属学校と連携しながらアクションリサーチを主たる研究方法として採用し、研究に取り組んだものである。参加院生には、不十分ながら国内学会等への参加発表支援を当該プログラム予算から行った。参加院生の研究業績は、次の通りである(参加学生の業績 <https://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/4868>)。主に、学術論文審査なし1編、学会発表7件であり、そのうち審査付きの国際会議(ESERA2017)が1件であった。その他は、すべて審査のない発表であった。今年度の課題としては、参加者は一定数維持できたものの、その中に国際的な研究活動がほとんど見受けられないことである。今後、この方面の指導・支援などの充実が一層求められるであろう。

なお、2017年度における本プログラムの活動は、次のページにすべて記載され、公表している。<http://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/4566>

高度教員養成プログラム参加院生の業績

●学術論文(1件)

若林和也・山口悦司(2017)「中学校理科の教師用指導書を対象とした教師の学習支援に関する分析:第1分野「電流とその利用」の事例」『日本科学教育学会研究会研究報告』第32号,第5巻,1-6. [審査なし]

●学会発表(11件)

清山莉奈・北野幸子(2017)「行政による保育情報の公開に関する比較研究」日本保育学会第27回大会,川崎医療大学. [審査なし]

Seiyama, R. & Kitano, S., How can we share information on the quality of ECEC services with parents? Comparing the cases of New Zealand, England, and Japan. 環太平洋乳幼児教育学会第18回大会セブ島 [審査あり]

Seiyama, R. & Kitano, S., How can we share information about the quality of ECEC services with parents? Comparing the cases of the US and Japan. ヨーロッパ乳幼児教育学会第27回大会, ボローニャ. [審査あり]

清山莉奈・北野幸子（2017）「行政による保護者への保育情報の公開に関する研究」日本乳幼児教育学会第27回大会，西南学院大学．〔審査なし〕

清山莉奈・北野幸子（2017）「行政による保護者への保育情報の公開に関する研究」日本乳幼児教育学会第27回大会，西南学院大学．〔審査なし〕

古賀志津香・北野幸子（2018）「家庭との連携を深める園内研修の工夫：養成教育とつながりのある初任者研修の検討を中心に」第2回日本保育者養成教育学会研究大会，共立女子大学．〔審査なし〕

佐野孝（2017）「潜在クラス分析を用いた跳び箱運動繰り返し系技の出来栄を評価する動作パターンの検討」第68回日本体育学会，静岡大学．〔審査なし〕

佐野孝・国土将平（2017）「小学生における開脚跳び動作の熟達度評価とそれに合わせた指導観点の検討」日本発育発達学会第16回大会，明治大学．〔審査なし〕

Wakabayashi, K., & Yamaguchi, E. (2017, August). Teacher learning supports in Japanese science curriculum materials for secondary school. Poster presented at the 12th biannual conference of the European Science Education Research Association (ESERA2017). Dublin, Ireland. [審査あり]

若林和也・山口悦司・坂本美紀・山本智一・稲垣成哲（2017）「科学技術の社会問題を扱った授業デザインの基礎的研究（1）：Friedrichsenらの教授モデル」『日本理科教育学会全国大会発表論文集』第15号，p.471. [審査なし]

若林和也・山口悦司・坂本美紀・山本智一・稲垣成哲（2017）「科学技術の社会問題を扱った授業デザインの基礎的研究（2）：Presleyらの授業フレームワーク」『日本科学教育学会第41回年会論文集』pp.469-470. [審査なし]

（教育連携推進室長 稲垣成哲）

7.5. 研究推進

7.5.1. 研究推進委員会

本委員会は研究科長，副研究科長，専攻長，学科長の7名で構成され，研究科における共同研究の推進，研究シーズの発見と育成，外部資金の獲得に向けた組織的対応等について議論を行った。

本委員会の検討事項は以下のとおりである。

	検討事項
第1回 (4月7日)	1. 平成29年度研究支援経費について 2. 平成30年度概算要求について 3. 研究科の研究活動の見せる化 4. その他 (1) 平成29年度科研採択数 (新規のみ) (2) 科学技術振興機構 (JST) 「グローバルサイエンスキャンパス」面接審査実施 (4月13日: JST 東京本部別館) (3) 第2中期目標期間の教育研究に関する評価報告書 (案) について
第2回 (4月28日)	1. 28年度研究支援経費報告書について <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト研究支援経費 (4件) ・国際共同研究支援経費 (3件)
第3回 (6月2日)	1. 平成27年度「研究支援経費」実績報告書について <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト研究支援経費 (3件) ・若手研究推進支援経費 (2件) 2. 平成30年度「研究推進支援経費」応募に対する審査について
第4回 (9月1日)	1. 平成30年度科研費申請に向けて FDの実施 2. 研究科における研究指標等の目標値の設定について <ul style="list-style-type: none"> ・top 10% 論文数 (5年間、WoS) ・科研費基盤 (S)・(A) の採択数 ・特別研究員 (DC, PD, SPD)、外国人特別研究員の採用人数 ・国際共著論文数 (5年間、WoS)
第5回 (10月6日)	1. 平成30年度科研費申請に向けて <ul style="list-style-type: none"> ・大型科研への申請: 基盤研究(C) → (B) → (A) ・科研申請率: 平成29年度申請率は前年度比2%程度低下し100%を下回った。 2. 科研申請率の増加 <ul style="list-style-type: none"> ・e-Rad登録のある研究者 (学術研究員、研究科研究員、名誉教授) の科研申請状況の確認を行う。 ・10月末までにe-Rad登録のある研究者に対し申請の有無について確認の上、応募資格「有り」「無し」の事務的対応を取ることによって、申請率算出の分母を確定させる。

(研究推進委員会委員長 岡田修一)

7.5.2. 研究倫理審査委員会

本年度は72件の新規申請があり、64件が承認、6件が条件付承認、2件が不承認であった。

一昨年度の新規申請が48件、昨年度は71件であり、本年度は昨年度とほぼ同じ件数で、引き続き申請が多かった。平成27年4月1日から「疫学研究に関する倫理指針」及び「臨床研究に関する倫理指針」に代わり、新たに「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」が施行された。また、平成29年には「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」の一部改正、「個人情報保護法等の改正に伴う研究倫理指針」の改正、「個人情報保護法等の改正に伴う研究倫理指針」の改正もなされている。本審査委員会の手続きおよび審査については、昨年度に引き続き、新倫理指針を踏まえた対応を心がけた。

(研究倫理審査委員会委員長 井上真理)

7.5.3 研究紀要編集委員会

平成29年度研究紀要編集委員会は、11回の会議を開催し、「神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要」第11巻第1号、第2号の編集・刊行を行った。2017年9月30日付けで刊行した第11巻第1号は、特集「環境とは何か」に関する論文2編(査読なし)、研究論文711編(査読あり)、研究報告6編(査読なし)を掲載した。2018年3月31日付けで刊行予定の第10巻第2号は、研究論文8編(査読あり)、研究報告8編(査読なし)を掲載予定である。

(研究紀要編集委員会委員長 田畑暁生)

7.6. 各専攻の研究

7.6.1. 人間発達専攻

人間発達専攻の研究は、多分野多方面に及んでおり、それは本専攻の総合的・学際的な性格を示すものである。原則、各系の中で研究が遂行されているが、系を横断する研究も試みられており、その方向性は今後も継続・拡大するものと考えられる。それらのほとんどは科学研究費補助金によるものである。またその中で、国際共同研究がまだ数は少ないが展開されている。今後、研究の国際的な展開が期待される。以下、各系の研究について、その代表的なものを列挙する。

●こころ系

本専攻研究者：赤木和重

共同研究者：小淵隆司、戸田竜也

研究課題：異年齢教育による障害の「不可視化」機能：インクルーシヴ教育の新次元

研究資金：科学研究費補助金・基盤C

研究概要：本研究では、異年齢教育に注目してインクルーシヴ教育を検討している。とくに

異年齢教育が、障害の「見えにくさ（「不可視化」機能）」に寄与することを明らかにすることを目的としている。障害のある子を含めた異年齢教育を実施している（1）アメリカ、ニューヨーク州にある私立学校、（2）北海道の釧路・根室管内にあるへき地・複式学級において、教師・保護者に聞き取りおよび参与観察を行っている。

本専攻研究者：赤木和重

共同研究者：津田英二，岡崎香奈

研究課題：社会的分断を越境する「ごちやませ新喜劇」の開発：インクルーシヴ・コミュニティの構築に向けて

研究資金：平成 29 年度 人間発達環境学研究科「研究推進支援経費」

研究概要：本研究の目的は「ごちやませ新喜劇」が、様々な属性をもつ他者が能力差を越え、対等な関係でコミュニティの形成に寄与することを明らかにすることである。すでに「あーち」で、障害のあるもしくはない、子ども・青年・成人を対象に実施し、現在分析を行っている。

本専攻研究者：赤木和重

共同研究者：三木裕和

研究課題：自閉症児の授業づくりにおける教育目標・教育評価に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤(C)

研究概要：以下の三点について検討を行っている。①自閉症児を中心とした発達障害児の教育実践における教育目標・教育評価の構造を明らかにすること。その際、「人と共鳴し共感すること」「創造的に考えること」の内容と方法に研究の視点を置く。②社会性の障害に対して「社会適応的行動の獲得」だけでなく、社会性そのものの発達を教育目標として設定可能であるかどうかの研究の視点を置く。③特別支援学校における個別の教育支援計画、個別の指導計画、年間指導計画、成績表、通知表などを分析検討する。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：小島亜未（滋賀県立大学），永野和美（神戸大学附属中等教育学校），西敦子（山口大学），佐藤眞一（千葉県衛生研究所・大阪府立大学），黒川通典（大阪樟蔭女子大学）

研究課題：健康を創出する生きいき食教育プログラム評価指標の開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(C)（代表：加藤佳子）

研究概要：中学生以上を対象に健康生成モデルに基づき、健康な食行動を規定する要因について検討した。得られた結果に基づき、食教育プログラムおよびその評価指標を作成中である。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：小島亜未（滋賀県立大学）

研究課題：食に焦点をあてた健康寿命環境促進要因指標の開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(C)（代表：小島亜未）

研究概要：食生活に焦点をあて、健康寿命環境促進要因指標の開発に取り組んでいる。

本専攻研究者：河崎佳子

研究課題：聴覚障害児の早期支援に関する研究

研究資金：日本財団助成事業

研究概況：大阪府手話言語条例に基づき、大阪府と公益社団法人大阪聴力障害者協会が協定を結んで実施する「乳幼児期手話言語獲得支援事業」のスーパーヴァイザーとして、発達臨床心理学の視点から手話言語発達と親-乳幼児関係支援の実践研究を展開してきた。

本専攻研究者：齊藤誠一

共同研究者：松河理子

研究課題：子が思春期にあるときの子及び親の発達性認知・相互交渉が子及び親の発達に与える影響

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（一般）

研究概要：思春期の子及びその親が相手の発達性をどのように認知し、どのように相互交渉するかに着目して、こうした発達性認知と相互交渉が子の思春期の発達課題の解決や精神的健康性に、親の中年期の発達課題の解決や精神的健康性にどのように影響しているかを明らかにし、子の思春期と親の中年期が発達上重層的な相互作用を有することを明らかにする。

本専攻研究者：坂本美紀

共同研究者：稲垣成哲（本専攻）、山口悦司（本専攻）、山本智一（兵庫教育大学）、西垣順子（大阪市立大学）、益川弘如（静岡大学）

研究課題：トランス・サイエンス問題の解決に資する知識共創型アーギュメンテーションの教師教育

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：坂本美紀）

研究概要：トランス・サイエンス問題のひとつである科学・技術に関する公共的な問題（SSI）の教育利用に着目して、科学教育における指導理論・指導法・評価法を体系化し、それらを踏まえた教師教育プログラムを、科学教育の専門家と学習科学等の研究者による学際的な共同研究によって、開発・検証することを目指した。

本専攻研究者：谷 冬彦

研究課題：地域差を考慮した若者の「甘え」と友人関係に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(C)(一般)(代表：谷 冬彦)

研究概要：「甘え」は日本人の対人関係を捉える上で有効であるとされながらも、日本国内における地域差については看過されてきた。例えば、民俗学的には、関西の若者は同年齢の気の合う者同士に限定して「ツレ」の関係を結ぶとされる。本研究は若者の「甘え」や友人関係のあり方について、心理学的な調査に民俗学的視点を取り入れつつ、関東と関西で比較検討することによって、若者心理の地域差について、その一端を明らかにした。

本専攻研究者：鳥居深雪

研究課題：高校における発達障害へのスティグマ改善プログラムの開発 ―生徒の教育と教員の研修―

研究資金：科学研究費基盤研究(C)(代表：鳥居深雪)

研究概要：近年、障害を社会における様々な障壁との関係でとらえる「社会モデル」の考え方が主流となっている。社会における障壁の一つとして、「スティグマ」の問題がある。本研究は、高校教育における発達障害に対するスティグマの実態を調査するとともに、高校生を対象とした「障害理解教育プログラム」及び教員を対象とした「高校での特別支援研修プログラム」を開発し、発達障害に対するスティグマの改善を目指すものである。

本専攻研究者：中村晴信

共同研究者：甲田勝康(近畿大学)、伊木雅之(近畿大学)、藤田裕規(近畿大学)

研究課題：体脂肪分布の多様性の形成と代謝循環機能：日本人小児一般集団の大規模追跡研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(B)(代表：甲田勝康)

研究概要：体幹や四肢における体脂肪分布の多様性が形成される過程と代謝循環機能との関係について、日本人小児を対象に大規模追跡研究を行う。

本専攻研究者：林 創

研究課題：場に応じた柔軟な欺き行動と道徳判断による社会性の発達

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(C)(代表：林 創)

研究概要：幼児期から児童期の子どもを対象に、うそと道徳性の発達の両面に実証的な視点から着目することで、これらが人間の社会性の発達に重要な意味をもつことを明らかにする。

本専攻研究者：古谷真樹

研究課題：幼児期から学童期の保護者への健康教育支援プログラムの考案と効果検証

研究資金：科学研究補助金・若手研究（B）および独立基盤形成支援（代表：古谷真樹）
研究概要：幼児期から児童期の保護者が子どもの生活リズムを確立させ、心身の健康を維持・増進させていくことを支援する簡便な健康教育支援プログラムを考案し、その効果を検証する。

本専攻研究者：古谷真樹

研究課題：小・中学生の睡眠・心身健康を確保するためのストレスコーピング有用性の証的研究

研究資金：科学研究補助金・若手研究（B）（代表：古谷真樹）

研究概要：ストレスコーピングを応用し、小・中学生の規則的な生活リズムと良質な睡眠の確保、心身健康を維持・増進するための健康教育プログラムを考案し、その効果を実証する。

本専攻研究者：古谷真樹

共同研究者：岡靖哲（愛媛大学）、林光緒（広島大学）、田中秀樹（広島国際大学）、笹澤吉明（琉球大学）、堀内史枝（愛媛大学）、山本隆一郎（江戸川大学）

研究課題：睡眠教育パッケージの開発と教育現場における改善効果の検証

研究資金：科学研究補助金・基盤研究（B）（代表：岡靖哲）

研究概要：幼児から大学生を対象として、各年齢層に特徴的な睡眠の問題点を把握し、継続的な睡眠の知識の普及と睡眠行動改善を図るための睡眠改善プログラムを開発し、その効果を検証する。

本専攻研究者：村山留美子

共同研究者：藤長愛一郎（大阪産業大学）、岸川洋紀（武庫川女子大学）、内山巖雄（（財）ルイ・パストゥール医学研究センター）

研究課題：3.11後の市民のリスク対応行動と認知の構造、その変動に関する研究

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究（B）

研究概要：市民の環境リスク対応とそれに係わる各種認知の現状と構造を明らかにし、特に福島第一原子力発電所後の新たな合意形成に係わるリスクコミュニケーションに資する情報収集を行う

本専攻研究者：山根隆宏

研究課題：発達障害児の親の援助要請促進に関する基礎研究

研究資金：科学研究費補助金・若手研究（B）（代表：山根隆宏）

研究概要：発達障害児の親の援助要請を促進・抑制する要因について、援助要請困難感やオンライン行動の観点から明らかにすることを目的とした。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：石本雄真（鳥取大学）、松本有貴（徳島文理大学）

研究課題：教員・指導員による発達障害児の不安への CBT を用いた支援

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（一般）（代表：石本雄真）

研究概要：不安の問題を抱える発達障害児を対象に、かつ特別支援学級や放課後等児童デイサービス等で非心理学専門家が実施できる心理教育的プログラムを開発し、その効果を検証することを目的とした。

国際共同研究

本専攻研究者：齋藤誠一 吉田圭吾 加藤佳子

共同研究者：Rigó Adrien（Eötvös Loránd Tudományegyetem, Hungary）、Urbán Róbert（Eötvös Loránd Tudományegyetem, Hungary）、Ágoston Schmelowszky（Eötvös Loránd Tudományegyetem, Hungary）、Roswith Roth（Graz University, Austria）、Ursula Athenstaedt（Graz University, Austria）、Elfried Greimel（Graz Medical University, Austria）

研究課題：健康生成機序の解明と心理臨床教育への応用に関する国際共同研究

研究資金：国際共同研究支援経費

研究概要：本研究の目的は、グローバルな視点から健康生成機序の解明を行い、健康領域における心理臨床教育への応用を提案することである。2016 年度より継続的に本研究課題に取り組んでいる。今年度の研究成果として、国際共著論文（Hu et al. 2017）を発表した。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：Katja Beesdo-Baum（Technical University of Dresden, Germany）

研究課題：生きがい(well-being)の文化比較研究

研究資金：ERASMUS+

研究概要：健康科学領域で検討されている生きがい意識を日本発祥の well-being として位置づけ、生きがい(well-being)の文化比較を行う。本年度は、生きがい意識尺度のドイツ語版尺度の開発に着手した。

受賞

鳥居深雪 一般社団法人日本 LD 学会 学会発表奨励賞

著書

赤木和重・岡村由紀子・金子明子・馬飼野陽美（2018）どの子にもあ～楽しかった！の毎日を：発達の視点と保育の手立てをむすぶ ひとなる書房

- 赤木和重 (2018) 発達・学習の障害と支援 子安増生・明和政子 (編) 『教職教養講座 第9巻 発達と学習』 協同出版 (pp137-155)
- 赤木和重・山本真帆 (印刷中) 発達障害: 「特別な配慮」をめぐって 牧 郁子・大久保智生 (編) 教師として考えつづけるための教育心理学: 多角的な視点から学校の現実を考える ナカニシヤ出版
- 林 創 (2017). 学童期から青年期 (「学童期」を担当) 開 一夫・齋藤慈子 (編) 『ベーシック発達心理学』 東京大学出版会 pp. 265-274.
- 林 創 (2017). 知りたい情報に適した情報収集の手法を選択する, 量的な情報を適切に整理・分析・加工する 黒上晴夫 (監修) ベネッセコーポレーション (編集) 『未来を拓く探究 実践編』, 32-35.
- 林 創 (2017). 「知能の発達」, 「心の理論」 人工知能学会 (編) 『人工知能学大事典』 共立出版 pp. 168-169, 172-173.
- 林 創 (印刷中) 「児童期以降の社会的認知」 尾崎康子・森口佑介 (編) 『発達科学ハンドブック第9巻 社会的認知の発達科学』 新曜社 pp. 195-206.
- 林 創 (印刷中) 「探究的な学習・課題研究」 楠見 孝 (編) 『教職教養講座 第8巻 教育心理学』 共同出版 pp. 149-165.
- 山根隆宏 (訳) (2017) 第5章会話から抜けること 辻井正次・山田智子 (監訳) 友だち作りの科学—社会性に課題のある思春期・青年期のための SST ガイドブック. 金剛出版
- 山根隆宏 (訳) (2017) 第12章うわさやゴシップを最小限にとどめる 辻井正次・山田智子 (監訳) 友だち作りの科学—社会性に課題のある思春期・青年期のための SST ガイドブック. 金剛出版

国際共著論文

Hu C, Kojima A, Athenstaedt U, Kato Y (2017). Psychometric validation of exercise motivation for health scale (EMHS). *Open Journal of Social Sciences* 5 (10), Article ID:80076, 14 pages [10.4236/jss.2017.510024](https://doi.org/10.4236/jss.2017.510024).

NCD Risk Factor Collaboration (NCD-RisC) (including Nakamura H). (2017) Worldwide trends in body-mass index, underweight, overweight, and obesity from 1975 to 2016: a pooled analysis of 2416 population-based measurement studies in 128.9 million children, adolescents, and adults. *Lancet*. 390(10113):2627-2642

Web of Science 収録誌掲載論文

NCD Risk Factor Collaboration (NCD-RisC) (including Nakamura H). (2017) Worldwide trends in body-mass index, underweight, overweight, and obesity from 1975 to 2016: a pooled analysis of 2416 population-based measurement studies in 128.9 million

children, adolescents, and adults. *Lancet*. 390(10113):2627-2642 (再掲)

Kouda K, Ohara K, Nakamura H, Fujita Y, Jaalkhorol M, Iki M. (2017) Fat mass is positively associated with bone mass acquisition in children with small or normal lean mass: A three-year follow-up study. *Bone* 107:222-227

Kouda K, Ohara K, Fujita Y, Nakamura H, Tachiki T, Iki M. (2018) Relationships between serum leptin levels and bone mineral parameters in school-aged children: a 3-year follow-up study. *J Bone Miner Metab.* [Epub ahead of print]

Fujita Y, Kouda K, Nakamura H, Iki M. Relationship between maternal pre-pregnancy weight and offspring weight strengthens as children develop: a population-based retrospective cohort study. *J Epidemiol* (in press).

Hayashi, H. (2017). Children's understanding of lies in elementary school years. *The Journal of Genetic Psychology*, 178, 229-237.

Hayashi, H. (in press). Preference for distribution by equal outcome in 5- and 6-year-old children. *European Journal of Developmental Psychology*

論文 (Web of Science 収録誌掲載論文以外)

山本真帆・赤木和重 (2017) 個別支援を必要とする児童に対する同学級児童の意識：他者からの受容感と授業場面に着目して 神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要 10 , 2 , 221- 230.

赤木和重 (2017) ユニバーサルデザインの授業づくり再考 教育, 853 , 73-80.

赤木和重 (2017) ユニバーサルデザインに基づく授業づくり：注目される背景とその問題点 みんなのねがい 612 , 29.

赤木和重 (2018) わが国のインクルーシヴ教育の進展と排除 教育, 864, 67-73.

赤木和重 (2018) インクルーシヴ教育を組みかえる 指導と評価, 758 , 21-23.

赤木和重 (2018) インクルーシヴ授業・クラスのためのはじめの一步：「違い」をとらえる・ひきだす・つなげる 授業づくりネットワーク, 29, 18-23.

赤木和重 (2018) 書評：崩壊するアメリカの公教育 新英語教育 581 , 45.

赤木和重・安藤友里・山本真帆・小淵隆司・戸田竜也 (印刷中) 複式学級における教育可能性の再発見：授業づくり・インクルーシヴ教育・自尊感情の視点から へき地教育研究

伊藤俊樹 博士論文 「『自我のための退行』に関する心理臨床学的研究～ロールシャッハ法 及び なぐり描き (Mess Painting) 法を通して～」 教育学博士 (京都大学) 1月 23

日授与

小島亜未・加藤佳子 (2017) 健康診査受診者の生きがいと首尾一貫感覚 (Sense of coherence: SOC) およびソーシャル・サポートとの関係. . 日本看護科学会誌 37 , 18-25

王 一然・加藤佳子 (印刷中) インターネット依存と心理社会的要因との関連 -

Sense of Coherence, ソーシャル・サポート, Well-being, 自己制御に注目して-. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要

松木太郎・齊藤誠一. (2017). ネガティブな切迫性および刺激欲求が青年の自己破壊的行動欲求に及ぼす影響. 青年心理学研究, 29(1), 17-28.

田中美帆・齊藤誠一. (2016). 成人期の生と死に対する態度尺度の構成. カウンセリング研究, 49(3・4), 160-169.

鳥居深雪・藤本優子 (2017) 5歳児スクリーニングは就学後の適応状態を予測できるか? -担任による用紙エンド評価の追跡調査-, LD研究 26(3), 357-368, 一般社団法人日本LD学会

宮崎 総一郎 ; 古谷 真樹(2017), 子どもへの睡眠指導, 小児内科 49, 8, 1106-1109

Fujitani T, Ohara K, Kouda K, Mase T, Miyawaki C, Momoi K, Okita Y, Furutani M, Nakamura H. (2017) Association of social support with gratitude and sense of coherence in Japanese young women: a cross-sectional study. Psychol Res Behav Manag 10:195-200

Fujitani T, Ohara K, Kouda K, Mase T, Miyawaki C, Momoi K, Okita Y, Nakamura H. (2017) Gratitude predicts well-being mediated by social support and sense of coherence in women. Health Behav Policy Rev 4(6):562-569

林 創 (2017). 特別寄稿:“発達”からみる子どもたちの今 「現場に出て実践にふれる大切さ」 発達 (ミネルヴァ書房) , 150号, 6.

石本雄真・山根隆宏・松本有貴 (印刷中) 心理教育プログラム実施者の実施前後での心理的適応および効力感の変化—発達障害児を対象とする CBT プログラム PEACE の放課後等デイサービスでの実践に関して—. 鳥取大学教育研究論集, 8

総括および課題

こころ系講座では、心理学と健康科学を総合した観点から研究が進められている。具体的には、心身の発達や健康、その促進・阻害要因を探求したり、これらの複雑な相互関係を把握しようとする実証研究や実践研究が活発に展開されている。

今後の課題として、国内での研究課題をグローバルな立場からも俯瞰し、国外の研究者とのつながりも活発化させ、国際共同研究を推進することが考えられる。

●表現系講座の研究

本専攻研究者：坂東肇

研究課題：人間的成長と芸術的円熟の相関についての研究

研究資金：構成員の個人研究費

本専攻研究者：坂東肇

研究課題：ベートーヴェンの交響曲についての研究

研究資金：構成員の個人研究費

本専攻研究者：坂東肇

研究課題：AMEROPA と MUSIC CAMP PRAGUE における芸術教育

研究資金：構成員の個人研究費

研究概要：プラハの二つのサマーアカデミーAMEROPA と MUSIC CAMP PRAGUE における芸術教育及びグローバル教育の可能性。

本専攻研究者：坂東肇

研究課題：Casa di Riposo per Musicisti Giuseppe Verdi における芸術教育

研究資金：構成員の個人研究費

研究概要：ミラノの Casa di Riposo per Musicisti Giuseppe Verdi における芸術教育及びグローバル教育の可能性。

本専攻研究者：梅宮弘光

共同研究者：矢代眞己（日本大学）、野沢正光（野沢正光設計工房）、大川三雄（日本大学）、堀越哲美（愛知産業大学）、川嶋勝（鹿島出版会）

研究課題：山越邦彦の事跡とそのモダニズム建築思想に関する研究

研究資金：山越悠子基金

研究概要：戦前期日本の先鋭的モダニズム建築家・山越邦彦の遺品資料の調査研究とアーカイブ化を通じて、日本におけるモダニズム建築思想の戦前・戦中・戦後の展開過程を明らかにする。

本専攻研究者：梅宮弘光

研究課題：川喜田煉七郎におけるモダニズム思想の展開過程

研究資金：構成員の個人研究費

研究概要：昭和初期における建築計画案の制作からデザイン教育の実践を経て建築施設の能率研究に至る川喜田煉七郎の事跡をモダニズム思想の展開過程として日本近代建築史に位置づけることを目指す。

本専攻研究者：梅宮弘光

研究課題：坂本鹿名夫による円形校舎の戦後建築史における意味

研究資金：構成員の個人研究費

研究概要：昭和 30 年代に流行をみた円形校舎を日本の戦後建築史において位置づける研究。

本専攻研究者：岡崎香奈

共同研究者：三井和子（東北音楽療法推進プロジェクト）、寺田静江（日本音楽療法学会認定音楽療法士）

研究課題：東日本大震災の被災者のための音楽療法：音楽活動を通じたアイデンティティとコミュニティの再生

研究資金：構成員の個人研究費

研究概要：東日本大震災後の岩手県大槌町吉里吉里地区にて、コミュニティ音楽療法を行った。地域の伝統音楽を再現することを通して、被災者のアイデンティティとコミュニティの再生に音楽療法が重要な役割をはたした。

本専攻研究者：大田美佐子

共同研究者：宮本直美（研究代表者：立命館大学大学院 人文学研究科 教授）

白井史人（京都大学学振 PD）

研究課題：ポピュラー音楽と劇音楽

研究資金：構成員の個人研究費

研究概要：今年度はミュージカル研究の立ち上げの一環として、日本ポピュラー音楽学会第 29 回年次大会（於関西大学）のワークショップで学会発表を行なった。

問題提起者に宮本直美氏，映画音楽研究の白井史人氏と私が発表者，討論者は「ネットワーク・ミュージッキング - 参照の時代の音楽文化」の井手口彰典氏。宮本氏の発表は「劇場から音楽シーンへ/音楽シーンから劇場へ」，白井氏は「ポピュラー音楽の劇的効果と流通，視覚メディアの境界で- 《ムーン・リヴァー》を例に」。大田は，「モダニスト，クルト・ヴァイルのアメリカ時代--作品にみる大衆性とポリティクス」という題で，大衆性とポリティクスの問題を，劇と「ソング」の役割を軸に発表した。今後は，この研究課題を軸にしてミュージカル研究会の立ち上げを行う予定である。

本専攻研究者：岸本吉弘

共同研究者：石川裕敏（大阪府内公立中学校美術教諭），圓城寺繁誉（大阪府内公立高校美術教諭），河合美和（大手前大学非常勤講師），善住芳枝（親和学園教諭），中島一平，渡辺信明（京都市立芸術大学教授），コーディネーター：尾崎信一郎（鳥取県立博物館副

館長)

研究課題：ペインタリネスな抽象絵画の有様について

研究資金：ギャラリー白（民間企業）

研究概要：関西近県の活動する抽象画家が集い、拠点であるギャラリー白（大阪・西天満）において大型作品の展示と同時に、トークイベントも併載し、抽象絵画における現状とその可能性を探る試みを実施した。（2017年9月開催。リーフレットも作成し、テキスト「ペインタリネスの力」を尾崎信一郎が執筆した。）

本専攻研究者：岸本吉弘

共同研究者：細川貴司（武蔵野美術大学非常勤講師）、河村正之（東京学芸大学名誉教授）、吉川民仁（武蔵野美術大学教授）コーディネーター：武居利史（府中美術館学芸員）

研究課題：制作者からみた絵画表現の可能性について

研究資金：数寄和（民間企業）

研究概要：絵画表現に対する画家4名の創作姿勢そのものを個別に紹介し（個展形式）、その方法論等の差異を浮き彫りにする中で、トークイベントも併催し、絵画表現における現状とその可能性を探る試みを実施した。（2017年9月10月開催。リーフレットも作成し、テキストを武居利史が執筆した。）

本専攻研究者：谷正人

共同研究者：寺田吉孝（研究代表者）

研究課題：国立民族学博物館企画展「旅する音楽—南アジア、弦の響き」展示プロジェクト

研究資金：国立民族学博物館

研究概要：2018年秋に予定されている上記企画展のために、国立民族学博物館所蔵の楽器の選定や展示方法に関する研究を行っている。

本専攻研究者：関典子（研究代表者）

共同研究者：竹谷嘉人（絵描き）

研究課題：神戸大学 KIITO プロジェクト（大学のアトリソースの地域連携活用に関する実践研究2）

研究資金：神戸文化支援基金

研究概要：昨年度2016年12月に開催し、多くの反響を集めた「神戸大学 KIITO プロジェクト」第二弾。今回は、神戸大学准教授／舞踊家の関典子と東京在住の絵描き竹谷嘉人によるインスタレーション・パフォーマンスを通して、KIITOの魅力の再発見を試みる。

●表現系講座の科研費などによる研究

本専攻研究者：田畑暁生（研究代表者）

研究課題：条件不利地域の地域情報化政策

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究(C)

研究概要：条件不利地域における地域情報化政策の現状および課題についてフィールドワークによって探るもの

本専攻研究者：平芳裕子（研究代表者）

共同研究者：川村由仁夜

研究課題：ミュージアムにおけるファッション展の国際的展開に関する総合研究

研究資金：科学研究費補助金(国際共同研究強化)12,480千円（直接経費：9,600千円，間接経費：2,880千円）

研究概要：本研究は、ファッション展の歴史と現代社会におけるその意義について考察するものである。芸術と産業、身体と環境という境界領域に位置するファッションが、近代社会においていかに文化的価値を有するものとして承認されることになったのか、その歴史的・社会的プロセスを解明する。

本専攻研究者：平芳裕子（研究代表者）

研究課題：「見るもの」としてのファッション—表象装置としてのミュージアムとの関係から

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究(C)4,550千円（直接経費：3,500千円，間接経費：1,050千円）

研究概要：本研究は、20世紀におけるファッションとミュージアムの近接関係において、ファッションがいかにして「見るもの」として構築され、表象装置としてのミュージアムのもとに制度化されたのか、その歴史的プロセスを明らかにするものである。

本専攻研究者：谷正人（研究代表者 単独）

研究課題：イラン音楽における身体性の研究—各楽器固有の身体感覚・語法、その交差—

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究(C)

研究概要：音楽を担当する楽器の身体感覚の差から解明しようとするもので、イラン国内では様々な楽器の伝授過程の参与観察、国内ではアレクサンダー・テクニークの現場の参与観察を行い、総合的に音楽と身体との関りを探求している。

本専攻研究者：谷正人（共同研究者）

共同研究者：田中 多佳子（研究代表者）

研究課題：インド音楽とペルシア音楽の交流-ヒンドウスターニー音楽の形成過程に関する研究

研究資金：科研費 基盤研究(C)

研究概要：インド音楽とイラン音楽との関連性を調査する研究課題であり，谷は特に両者に共通して存在する弦楽器サントールの類似性や差異性に関して研究を行っている。

●表現系講座の国際共著論文

Kana Okazaki-Sakaue, et. al: Colloquium: The Creative and Expressive Arts in Education, Research and Therapy-Focus on Japan

Creative Arts in Education and Therapy, Volume 3, Issue 1 (2017)

pp. 57 - 68

Nonaka, T., & Goldfield, E. C. (2018). Mother-infant interaction in the emergence of a tool-using skill at mealtime: A process of affordance selection. *Ecological Psychology*. DOI: 10.1080/10407413.2018.1438199 (Web of Science 収録誌 掲載論文)

●表現系講座の Web of Science 収録論文

Nonaka, T., & Goldfield, E. C. (2018). Mother-infant interaction in the emergence of a tool-using skill at mealtime: A process of affordance selection. *Ecological Psychology*. DOI: 10.1080/10407413.2018.1438199

Nonaka, T. (2017). Cultural entrainment of motor skill development: Learning to write hiragana in Japanese primary school. *Developmental Psychobiology*, 59(6), 749-766. DOI: 10.1002/dev.21536

Yoshida, I., Hirao, K., & Nonaka, T. (2018). Adjusting Challenge-Skill Balance to Improve Quality of Life in Older Adults: A Randomized Controlled Trial. *American Journal of Occupational Therapy*, 72(1), 7201205030p1-7201205030p8. DOI: 10.5014/ajot.2018.020982

●表現系講座の国際共同研究

本専攻研究者：塚脇淳

研究課題：神戸仁川芸術交流プロジェクト

研究資金：日韓文化交流基金

研究概要：神戸のアート NPO 芸術と計画会議 C. A. P. の拠点である CAP Y3 において韓国の

作家3名を招聘し、神戸と仁川との芸術交流を目指して国際展覧会・シンポジウムの開催
(平成30年2月3-25日)

本専攻研究者：梅宮弘光

共同研究者：Marion von Osten (curator, organizer-facilitator, Berlin), Grant Watson (Royal College of Art, London), Helena Capkova (早稲田大学), 池田祐子 (国立西洋美術館), 本橋仁 (京都国立近代美術館), Ulrike Hennecke (Goethe-Institut Tokyo)

研究課題：bauhaus imaginista: Corresponding With

研究資金：Der Bundesregierung für Kultur und Medien (BKM), Der Kulturstiftung des Bundes (KSB), Des Auswärtigen Amtes

研究概要：バウハウスが日本やロシアなど各地の20世紀の様々な運動と共有する国際的な関係性に焦点を当てる。

本専攻研究者：岡崎香奈(筆頭)

共同研究者：Krzysztof Stachyra (Maria Curie Skłodowska University, Poland), Amy Clements-Cortes (University of Toronto, Canada)

研究課題：Global Equivalency Certificate For Music Therapists Part II: Professional Identity and Competencies

研究資金：個人研究費

研究概要：音楽療法士の資格制度と内容について、世界各国の現状を把握および比較し、職業的アイデンティティとコンピテンシーという観点から、今後の展望を考察した。

本専攻研究者：岡崎香奈

共同研究者：生野里花(筆頭), Brynjulf Stige (Norway), Katrina McFerran (Australia), Brian Abrams (USA)

研究課題：Knowing/Communicating the Clinical Process in Music Therapy Practice

研究資金：個人研究費

研究概要：「臨床の知」として、音楽療法実践におけるプロセスの内容を知ることと伝えることを、多文化的視点を交えながら考察した。

本専攻研究者：大田美佐子 (2018年2月よりハーバード大学ライシャワー日本研究所 Associate in Research)

共同研究者：Professor Carol Oja (研究代表者：ハーバード大学音楽学部教授), Katie Callam (ハーバード大学大学院音楽学研究科 博士課程在学中), 木本麻希子 (神戸大学大学院人間発達環境学研究科 博士課程修了, 元神戸大学大学院人間発達環境学研究

科研究支援推進員)

研究課題：Marian Anderson in Japan

研究資金：ハーバード大学ライシャワー日本研究所（2月5日から14日までのハーバード大での研究資金，大田美佐子の Associate in Research など）

研究概要：日米の一時資料，二次資料を駆使して，対話的に資料の解釈を行いつつ，歴史研究を行うプロジェクト。2016年度のJSPSによるオジャ教授招聘事業(2017年1月9日から25日まで)を契機に，2017年6月からスカイプを通じて毎月会議を行い，投稿論文執筆するため研究を進めている。2018年2月5日から14日まで，ハーバード大学で約9日間の共同研究の作業を集中して行った。今年度中に論文を完成する予定である。

本専攻研究者：平芳裕子

共同研究者：川村由仁夜

研究課題：ミュージアムにおけるファッション展の国際的展開に関する総合研究

●表現系講座の学術論文

本専攻研究者：平芳裕子（単著）

論文題目（査読付）：The Representation of Sewing Women in Godey's Lady's Book

掲載誌：Aesthetics, (20), 50-61, 2017年7月

本専攻研究者：平芳裕子（単著）

論文題目（査読付）：モデルに倣うファッションにおけるパターンの出現

掲載誌：表象, (11), 254-269, 2017年5月

本専攻研究者：平芳裕子（単著）

論文題目：近代アメリカ女性の服作り—針仕事・パターン・通信教育—

掲載誌：Fashion Talks... , (6), 2-11, 2017年10月

本専攻研究者：平芳裕子（単著）

論文題目（査読付）：神戸大学に見る衣服史の諸相—師範学校・教育学部・発達科学部から国際人間科学部へ

掲載誌：神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 10(2), 211-219, 2017年8月

本専攻研究者：平芳裕子（単著）

論文題目：近代アメリカのメディアに見る表象としてのファッションと女性—雑誌・パターン・ディスプレイ—

神戸大学大学院人間発達環境学研究科学位論文（論文博士号）

本専攻研究者：平芳裕子（単著）

論文題目：ファッションとコスチューム—ソフィア・コッポラの『ビガイルド』から眺める

掲載誌：ユリイカ，2018年3月号（招待有）

本専攻研究者：野中哲士

論文題目：たのしいからだ：地上環境の身体論（第10回）見るからだ

掲載誌：『臨床心理学』，18(1)．pp.113-119．（2018）

本専攻研究者：野中哲士

論文題目：たのしいからだ：地上環境の身体論（第9回）視点とナビゲーション

掲載誌：『臨床心理学』，17(6)．pp.851-857．（2018）

本専攻研究者：野中哲士

論文題目：たのしいからだ：地上環境の身体論（第8回）生あるものの運動法則

掲載誌：『臨床心理学』，17(6)．pp.715-721．（2017）

本専攻研究者：野中哲士

論文題目：たのしいからだ：地上環境の身体論（第7回）天使主義的虚偽

掲載誌：『臨床心理学』，17(3)．pp.381-390．（2017）

●表現系講座の著書出版

本専攻研究者：梅宮弘光（分担執筆）

共著者：伊藤公文ほか

書名：百書百冊

出版社：鹿島出版会

出版年月：2017年12月

本専攻研究者：岸本吉弘（単著）

書名：絵画 新たなる物語のために

出版社：晃洋書房

出版年月：2018年1月

本専攻研究者：野中哲士（共著）

論文名：パフォーマンスの生態学（pp. 295-320）

書名：鹿毛雅治（編）『パフォーマンスがわかる 12 の理論』

出版社：金剛出版

出版年月：2017 年

●表現系講座の国際会議・国際学会等における研究発表

本専攻研究者：岡崎香奈

発表題目：Music Therapy for Earthquake Survivors：Restoration of Identity and Community through Musicking

発表学会：The 15th World Congress of Music Therapy

発表時期：2017 年 7 月 4-8 日

発表場所：つくば国際会議場

本専攻研究者：岡崎香奈

共同発表者：Krzysztof Stachyra (Poland), Amy Clements-Cortes (Canada), Angela Harrison (UK), Nuria Escude (Spain), Aksana Kavaliyova-Moussi (Bahrain), Gabriel Federico (Argentina), Katrina McFerran (Australia)

発表題目：Global Equivalency Certificate For Music Therapists Part II: Professional Identity and Competencies

発表学会：The 15th World Congress of Music Therapy

発表時期：2017 年 7 月 5 日

発表場所：つくば国際会議場

本専攻研究者：岡崎香奈

共同発表者：Rika Ikuno (Japan), Kana Okazaki-Sakaue (Japan), Brynjulf Stige (Norway), Katrina McFerran (Australia), Brian Abrams (USA)

発表題目：Knowing/Communicating the Clinical Process in Music Therapy Practice: Thinking about Process

発表学会：The 15th World Congress of Music Therapy

発表時期：2017 年 7 月 5 日

発表場所：つくば国際会議場

本専攻研究者：田村文生

発表題目：On artistry and writing for wind orchestra—in relation to own work and avant-gardism

発表場所：上海大学音楽院（学部）

発表概要：上海大学音楽院（学部）による招待講演。作曲・音楽理論を専攻する学生，お

よび教員に対し、20世紀以降の芸術的動向と自作品との関連、また、音楽の創造と聴取について作曲家の立場からの講義。

本専攻研究者：田村文生

発表題目：アジア作曲家連盟・韓国 国際会議・音楽祭招待指揮

発表場所：韓国ソウルアーツセンター

発表概要：韓国ソウルアーツセンターにおいて開催された公演に招待され、韓国の作曲家の作品4曲を指揮。

●表現系講座の作品発表等

本専攻研究者：塚脇淳

共同研究者：植松奎二，榎忠

展覧会：塚脇淳展覧会—拓がる彫刻—熱き男たちによるドローイング展

展覧会概要：彫刻とドローイングの関係をテーマに、3人の彫刻家（植松奎二，JUN TAMBA，榎忠）の作品から検証する、3人連続個展形式の大規模展覧会（BBプラザ美術館 平成29年7月4日-9月28日）。

本専攻研究者：田村文生

作品名：コンポラプンクトゥスX，Ensemble Contemporary α

作品概要：コンポラプンクトゥスX，Ensemble Contemporary α，三菱UFJ信託芸術文化財団，Ensemble Contemporary α20周年記念演奏会（東京オペラシティ）において初演された室内楽作品。

本専攻研究者：田村文生

作品名：コルヌコピア～豊饒の角（ティード出版）

作品概要：1995年にイギリス・ロンドンにて行われたHorn Day<CORNUCOPIA>のために作曲されたフレンチホルン16重奏の出版。

本専攻研究者：田村文生

作品名：レスピーギ：交響詩「ローマの噴水」（ブレーン株式会社）

作品概要：1996年にヤマハ吹奏楽団の委嘱による同名の管弦楽作品の吹奏楽編曲の出版。

本専攻研究者：田村文生

作品名：L. ヴィエルヌ：交響曲第4番（ブレーン株式会社）

作品概要：高知県立岡豊高等学校・長崎県立佐世保東翔高等学校・静岡大学・長野県立長野吉田高等学校各吹奏楽部（団）2017年度委嘱作品，ヴィエルヌのオルガン作品の吹奏楽

編曲，全日本吹奏楽コンクールにて演奏された。

本専攻研究者：田村文生

作品名：R. シュトラウス：交響詩「アラベラ」（ブレーン株式会社）

作品概要：愛媛県立伊予高等学校・札幌日大高等学校各吹奏楽部（団）2017 年度委嘱作品，同名のオペラからの抜粋の吹奏楽編曲，全日本吹奏楽コンクールにて演奏された。

本専攻研究者：田村文生

作品名：波の戯れ—都賀川を下って

作品概要：ピアノ独奏作品。神戸市灘区民ホール開催レクチャーコンサート「水にまつわるエトセトラ」においてフランスのピアニスト，オリヴィエ・ムランにより初演された。また同公演で，ドビュッシー，ラベル，リスト，ガニュー，クーブラン，宮城の作品を解説。

●表現系講座の教員の受賞

本専攻研究者：平芳裕子

受賞名：意匠学会論文賞

受賞理由：意匠学会学会誌『デザイン理論』掲載論文「パターンによる流行受容—初期『ハーパース・バザー』の重要性に対して

本専攻研究者：野中哲士

受賞名：第 14 回（平成 29 年）日本学術振興会賞

受賞理由：野中哲士「身体-環境系における柔軟な行為制御の研究」

●表現系講座の学生の研究活動

木本麻希子（博士課程後期課程修了，神戸大学研究支援員）

「S. プロコフィエフの音の暗号化と芸術的理念 - 《ピアノ・ソナタ》におけるコード略号の音型分析」2018 年 10 月 28 日，日本音楽学会第 68 回全国大会

井手佑佳子（卒業生，ケルン在住）

「ドイツの音楽プログラム『Jedem Kind ein Instrument』を対象としたアンサンブルにおける相互行為と音楽の変容過程の調査」2018 年 10 月 29 日，日本音楽学会第 68 回全国大会

木本麻希子（博士課程後期課程修了，神戸大学研究支援員）

国際共同研究“Marian Anderson in Japan”（ハーバード大学音楽学部教授 キャロル・

オジャ教授, ハーバード大学ライシャワー日本研究所) 参加 (2018年2月5~14日)

能勢晶子 (博士課程前期課程1年 岡崎香奈研究室)

"Songwriting Focusing on Process and its Implications for the Clients as a Social Being" The 15th World Congress of Music Therapy, 2017年7月5日

妹尾輝枝 (博士課程前期課程3年 岡崎香奈研究室)

"Music Therapy for Dementia:Therapeutic Use of Lyric Writing to Reconstruct Self-esteem" The 15th World Congress of Music Therapy, 2017年7月6日

石原興子 (博士課程後期課程2年 岡崎香奈研究室)

"How are Changes in Repetitive Drumming Patterns Experienced in Psychiatric Music Therapy?" The 15th World Congress of Music Therapy, 2017年7月7日

石原興子 (博士課程後期課程2年 岡崎香奈研究室)

"The Use of Japanese Calligraphy and Percussion Improvisation in Psychiatric Music Therapy : Focusing on Expressive Qualities of 'Simplicity' " British Association for Music Therapy Conference 2018, 2018. 2. 17, The Barbican Centre, London UK

岡元ひかる (博士課程後期課程 関典子研究室)

「舞踊における「身体の分節化」再考～オハッド・ナハリンのGAGAと舞踏譜に着目して～」, 第69回舞踊学会大会

坂東肇ゼミ

学術 WEEKS 2017 音楽教育シンポジウム 室井摩耶子 ピアノに生きる
2017年12月17日 神戸大学発達科学部 C111 ホール

坂東肇ゼミ

学術 WEEKS 2017 タイムスリップコンサート 心躍る時心憂う時
2018年3月18日 神戸大学発達科学部 C111 ホール

●からだ系

【科研費による研究】

1. 平成29年度科学研究費補助金・若手研究B
研究代表者：木村哲也

研究課題：循環・立位バランス両調節システムの協働効果の解明（平成 29～31 年度）

研究概要：静的二足立位姿勢における，立位バランス調節システムと循環調節システムの関連について検討した。

2. 平成 29 年度科学研究費補助金・基盤研究 C（一般）

研究代表者：秋元 忍

研究課題：1914 年以前のイギリスにおける女性のホッケーの普及過程に関する研究.

研究概要：1914 年以前のイギリスにおける女性のホッケーのゲーム普及過程を，新出史料に基づいて，女性スポーツ史の視角から新たな近代スポーツ史像を提示する。

3. 平成 29 年度科学研究費補助金・若手研究（A）

研究代表者：原田和弘

研究課題：心理学的要因が退職に伴う高齢夫婦の健康変化に及ぼす影響

研究概要：健康心理学と老年心理学の理論に基づき，どのような心理学的要因が，退職に伴う高齢夫婦の生活習慣・健康状態の変化に影響を及ぼしているのかを明らかにする。

4. 平成 29 年度科学研究費補助金基盤研究（B）

研究代表者：片桐恵子

研究課題：マイクロとマクロからみた新たなサードエイジ発達モデルの構築

5. 平成 29 年度科学研究費補助金・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究代表者：増本康平

研究課題：高齢期の意思決定バイアスの国際比較：多様な価値観に応じた自律支援を目指して

研究概要：文化的価値観の違いが高齢期の意思決定プロセスと選択後の後悔や満足度に及ぼす影響を明らかにし，多様な価値基準に応じた意思決定支援方法の確立を目指す。

6. 科学研究費補助金・基盤研究（C）

研究代表者：増本康平

研究課題：高齢期の意思決定バイアスの解明と自律に向けた生涯学習プログラムの開発
共同研究者：塩崎麻里子（近畿大学），太子のぞみ（大阪大学）

研究概要：高齢者の意思決定バイアスの特徴を明らかにし，高齢者に適した意思決定の支援方法を明確にする。

7. 科学研究費補助金・基盤研究 (B)

研究代表者：増本康平

研究課題：住民ネットワーク形成の客観的検証方法の確立

共同研究者：岡田修一，近藤徳彦，長ヶ原誠，片桐恵子，木村哲也，原田和弘，大川 剛直，太田 能，貝原 俊也，谷口 隆晴

研究概要：ウェアラブルセンサデバイスによって対面コミュニケーション行動データを自動収集し，ネットワーク解析を行うことで住民交流の現状や変化を把握する。

【その他の助成金】

1. 笹川スポーツ財団・笹川スポーツ研究助成

研究代表者：原田和弘

共同研究者：近藤徳彦，増本康平

研究課題：運動・スポーツの実践が高齢夫婦の精神的健康と夫婦関係に及ぼす影響

研究概要：運動・スポーツや身体活動の実践が，高齢者本人および配偶者の精神的健康と夫婦関係に及ぼす影響を明らかにする。

2. 花王健康科学研究会・研究助成

研究代表者：原田和弘

共同研究者：高田義弘，谷口真澄，戸田公久，パウロ・ドス・サントス

研究課題：健康体操の実施による人工都市居住 60 歳以上男女高齢者に対する健康増進効果

研究概要：健康体操の実施が，高齢者の体力・日常身体活動・活動範囲などに及ぼす影響を明らかにする。

3. 損保ジャパン日本興亜福祉財団委託研究

研究代表者：片桐恵子

共同研究者：秋山弘子（東京大学），グライナー智恵子（神戸大学），白瀬由美香（一橋大学）

研究課題：フレイルな高齢者の社会的役割と健康

研究概要：フレイルな高齢者の住まいとしてのサービス付き高齢者住宅の居住者の現状把握，地域や多世代交流を促す仕組みと健康への効果の検討

4. 損保ジャパン日本興亜福祉財団委託研究

研究代表者：片桐恵子

共同研究者：秋山弘子（東京大学），権藤恭之（大阪大学），増井幸恵（東京都健康長寿医療センター）

研究課題：世代間の認識ギャップからみたシニア就労の現状と課題：ダイバーシティ雇用環境の実現にむけて

研究概要：高年齢者雇用安定法は改正されたものの、いまだ60歳代のシニア就労者がどういう働き方をすべきなのかはみえない。シニア就労者のイメージやその実態を明らかにし、彼らの有効な働かせ方を検討する。

【教員の受賞】

受賞者：原田和弘

Best Reviewer Award, Environmental Health and Preventive Medicine (2017年度日本衛生学会)

【著書】

片桐恵子, 「サードエイジ」をどう生きるか：シニアと拓く高齢先端社会 (全208頁) 東京大学出版会 2017. (単著)

河辺章子, 筋力発揮の脳・神経科学 —その基礎から臨床まで— 市村出版, pp34-46, 2017. (分担執筆)

【国際共著論文】

1. Lee S, Shimada H, Makizako H, Doi T, Harada K, Bae S, Harada K, Hotta R, Tsutsumimoto K, Yoshida D, Nakakubo S, Anan Y, Park H, Suzuki T. Association between sedentary time and kidney function in community-dwelling elderly Japanese people. *Geriatrics and Gerontology International*, 2017; 17: 730-736.
2. Lee S, Lee S, Harada K, Bae S, Makizako H, Doi T, Tsutsumimoto K, Hotta R, Nakakubo S, Park H, Suzuki T, Shimada H. Relationship between chronic kidney disease with diabetes or hypertension and frailty in community-dwelling Japanese older adults. *Geriatrics and Gerontology International*, 2017; 17: 730-736.
3. Makizako H, Shimada H, Doi T, Tsutsumimoto K, Lee S, Lee S, Harada K, Hotta R, Nakakubo S, Bae S, Harada K, Yoshida D, Uemura K, Anan Y, Park H, Suzuki T. Age-dependent changes in physical performance and body composition in community-dwelling Japanese older adults. *Journal of Cachexia, Sarcopenia and Muscle*, 2017; 8: 607-614.
4. Bae S, Shimada H, Lee S, Makizako H, Lee S, Harada K, Doi T, Tsutsumimoto K,

Hotta R, Nakakubo S, Park H, Suzuki T. The relationships between components of metabolic syndrome and mild cognitive impairment subtypes: A cross-sectional of Japanese older adults. *Journal of Alzheimer's Disease*, 2017; 60: 913-921.

5. Loo, B., Lam, W., Mahendran, R., & Katagiri, K. How Is the Neighborhood Environment Related to the Health of Seniors Living in Hong Kong, Singapore, and Tokyo? Some Insights for Promoting Aging in Place. *Annals of the American Association of Geographers* 107(4):812-828. 2017.

6. Loo, B., Mahendran, R., Katagiri, K., & Lam, W. Walking, neighbourhood environment and quality of life among older people. *Current Opinion in Environmental Sustainability* 25, pp. 8-13, 2017.

【論文】 (Web of Science 収録誌掲載論文)

1. Taki C, Shiozawa N, Kimura T. Application of Minute Electrical Noise to Muscle Proprioception Modulates Excitability of Alpha Motor Neuron Group. *Advanced Biomedical Engineering* 6, 37-41, 2017.

2. Matsumoto T, Kimura T., Hayashi T. Does Japanese citrus fruit yuzu (*Citrus junos* Sieb. ex Tanaka) fragrance have lavender-like therapeutic effects that alleviate premenstrual emotional symptoms? A single-blind randomized crossover study. *Journal of Alternative and Complementary Medicine* 23(6), 461-470, 2017.

3. Konishi K, Kimura T., Yuhaku A, Kurihara T, Fujimoto M, Hamaoka T, Sanada K. Mouth rinsing with a carbohydrate solution attenuates exercise-induced decline in executive function. *Journal of the International Society of Sports Nutrition* 14(45), 1-8, 2017.

4. Sato K., Fujita S, Iemitsu M. *Dioscorea esculenta*-induced increase in muscle sex steroid hormones is associated with enhanced insulin sensitivity in a type 2 diabetes rat model. *FASEB J*, 31: 793-801, 2017.

5. Sato K., Nishijima T, Yokokawa T, Fujita S. Acute bout of exercise induced prolonged muscle glucose transporter-4 translocation and delayed counter-regulatory hormone response in type 1 diabetes. *PLoS One*. 12:e0178505, 2017.

6. Matsuo K, Sato K, Suemoto K, Miyamoto-Mikami E, Fuku N, Higashida K, Tsuji K, Xu Y, Liu X, Iemitsu M, Tabata I. A Mechanism Underlying Preventive Effect of High-Intensity Training on Colon Cancer. *Med Sci Sports Exerc.* 49:1805–1816, 2017.
7. Hamaguchi K, Fujimoto M, Kurihara T, Iemitsu M, Sato K, Hamaoka T, Sanada K. The effects of low-repetition and light-load power training on bone mineral density in postmenopausal women with sarcopenia: a pilot study. *BMC Geriatr* 17:102, 2017.
8. Kido K, Yokokawa T, Ato S, Sato K, Fujita S. Effect of resistance exercise under conditions of reduced blood insulin on AMPK α Ser485/491 inhibitory phosphorylation and AMPK pathway activation. *Am J Physiol Regul Integr Comp Physiol.* 313:R110–R119, 2017.
9. Yoshii N, Sato K, Ogasawara R, Kurihara T, Hamaoka T, Fujita S. Relationship between Dietary Protein or Essential Amino Acid Intake and Training-Induced Muscle Hypertrophy among Older Individuals. *Journal of Nutritional Science and Vitaminology*, 63:379–388, 2018.
10. Kido K, Ato S, Yokokawa T, Sato K, Fujita S. Resistance training recovers attenuated APPL1 expression and improves insulin-induced Akt signal activation in skeletal muscle of type 2 diabetic rats. *Am J Physiol Endocrinol Metab*, in press.
11. Lee S, Shimada H, Lee S, Bae S, Anan Y, Harada K, Suzuki T. Psychological predictors of participation in screening for cognitive impairment among community-dwelling older adults. *Geriatrics and Gerontology International*, 17: 1197–1204, 2017.
12. Harada K, Lee S, Lee S, Bae S, Harada K, Suzuki T, Shimada H. Objectively-measured outdoor time and physical and psychological function among older adults. *Geriatrics and Gerontology International*, 17: 1455–1462, 2017.
13. Harada K, Lee S, Lee S, Bae S, Anan Y, Harada K, Shimada H. Expectation for physical activity to minimize dementia risk and physical activity level among older adults. *Journal of Aging and Physical Activity*, 26: 146–154, 2018.
14. Harada K, Lee S, Shimada H, Lee S, Bae S, Anan Y, Harada K, Suzuki T. Distance

to screening site and older adults' participation in cognitive impairment screening. *Geriatrics and Gerontology International*, 18: 146-153, 2018.

15. Nakamura S, Inayama T, Harada K, Arao T. Reduction in vegetable intake disparities with a web-based nutrition education intervention among lower-income adults: a randomized-controlled trial. *Journal of Medical Internet Research*, 19: e377, 2017.

16. Matsushita M, Harada K, Arao T. Communicative health literacy and critical health literacy related to physical activity in Japanese adults: A cross-sectional study. *The Journal of Physical Fitness and Sports Medicine*, 7: 75-80, 2018.

17. Harada K, Masumoto K, Katagiri K, Fukuzawa A, Chogahara M, Kondo N, Okada S. Community intervention to increase neighborhood social network among Japanese older adults. *Geriatrics and Gerontology International* 2017. 11. 28 DOI: 10.1111/ggi.13208

18. Harada K, Masumoto K, Katagiri K, Fukuzawa, A, Chogahara M, Kondo N, Okada S. Frequency of going outdoors and health-related quality of life among older adults: Examining the moderating role of living alone and employment status. *Geriatrics and Gerontology International*, 2017. 12. 7 DOI: 10.1111/ggi.13222.

【論文】(国内誌)

1. 松下宗洋, 原田和弘, 荒尾孝. 身体活動量増加の動機づけに効果的なインセンティブプログラム: コンジョイント分析. *日本公衆衛生雑誌*, 64: 197-206, 2017.
2. 高泉佳苗, 原田和弘, 中村好男. 食生活リテラシーと食情報検索バリアおよび食情報源との関連. *日本健康教育学会誌*, 25: 63-73, 2017.
3. 原田和弘, 増本康平, 近藤徳彦. 外向性が運動ソーシャルサポートと運動行動との関連に及ぼす影響. *日本健康教育学会誌*, 25: 258-268. 2017.
4. 片桐恵子 サクセスフル・エイジング. *児童心理学の進歩*, 56:72-94, 2017.

【国際共同研究】

共同研究者：佐藤幸治

McMaster University (Canada)

Prof. Stuart Phillips (Director, Physical Activity Centre of Excellence (PACE).

Director, McMaster Centre for Nutrition, Exercise, and Health Research)

現在, Med Sci Sports Exerc に論文を投稿中

共同研究者：佐藤幸治

University of Jyväskylä (Finland)

Dr. Eija Katariina Laakkonen (Sport and Health Sciences Staff)

Estrogenic Regulation of Muscle Apoptosis (ERMA) project

からだ系講座の院生の活動

【学生が獲得した研究助成】

1. 公益財団法人倶進会研究助成

研究代表者：山本健太（博士後期課程）

指導教員：増本康平

研究課題：成人発達障害者の生活上の問題解決とその対処法～後悔からみえてくるもの～

2. 日本職業リハビリテーション学会 若手研究者の促進事業に係る助成

研究代表者：山本健太（博士後期課程）

指導教員：増本康平

研究課題：発達障害者の就労問題の解決とその対処法

【院生の受賞】

○スポーツ庁長官賞

受賞者：久保雄一郎（からだ系講座 M2）

授賞理由：スポーツ庁長官が審査員となった「スポーツ産業活性化会議 2017」でのアイデア発表セッションにおいて、日本のスポーツ市場規模拡大に向けた「VR 映像（仮想現実）」と「EMS」による筋肉への電気刺激を活用した新しいトレーニング法を提案し、その着想が高く評価された。

【院生の論文執筆】

1. Taki C, Shiozawa N, Kimura T. Application of Minute Electrical Noise to Muscle Proprioception Modulates Excitability of Alpha Motor Neuron Group. Advanced

Biomedical Engineering 6, 37-41, 2017. (Web of Science 収録誌掲載論文)

【院生の招待講演】

1. 瀧千波, 塩澤成弘, 木村哲也. ウェアラブルセンサのスポーツ健康科学分野での応用可能性
In: オーガナイズドセッション「ウェアラブルセンサのアプリケーション探索」, 第 56 回日本生体医工学会大会, 東北大学, 2017.

【学生の学会発表】

1. 山本健太・増本康平 成人 ASD 者の自己の記憶に関する研究：後悔に着目して 日本特殊教育学会第 55 回大会, 2017.
2. 山本健太・増本康平 成人 ASD 者の感情調節と抑うつ・主観的幸福感との関連性 第 52 回日本発達障害学会研究大会, 2017.
3. 成瀬亮, 瀧千波, 木村哲也. 静的二足立位における身体動揺が血液循環に及ぼす効果. 日本体育学会第 68 回大会, 静岡大学, 2017.
4. 瀧千波, 木村哲也. 最大筋出力誤差における自律神経活動の影響. 日本体育学会第 68 回大会, 静岡大学, 2017.
5. 藤井まりあ, 瀧千波, 木村哲也. 20%最大筋力弾性負荷に対する関節トルク制御の特徴. 生体医工学シンポジウム 2017, 信州大学, 2017. (ポスター発表)
6. Chinami Taki, Naruhiro Shiozawa, Tetsuya Kimura. Time-course changes of alpha motor neurons excitabilities in synergistic muscles. 生体医工学シンポジウム 2017, 信州大学, 2017. (ポスター発表)

●学び系

科研費などによる研究

本専攻研究者：川地亜弥子

共同研究者：赤木和重（神戸大学）、勅使河原君江（神戸大学）

研究課題：日英における「意味深さの評価」の理論と実践に関する研究

研究資金：平成 29～31 年度 科学研究費補助金・基盤研究（C）（課題番号 17K04549）

研究概要：本研究では、日本とイングランドにおける教育評価の理論と実践について、意味

深さの評価論及びその系譜に連なる評価論の解明に取り組んでいる。今年度は主としてイングランド調査を遂行し、ケンブリッジ、ロンドン・カムデン地区、イプスウィッチの学校・施設に焦点をあてて調査を行い、大規模学力評価や学校評価と意味深さの評価の整合性、学校内部での議論について調査を行った。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：山下晃一

研究課題：地方創生に資する若手教員支援・育成システムの存立要件に関する米英調査研究
研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：山下晃一），2017年度：1,560千円（直接経費：1,200千円，間接経費：360千円）

研究概要：本研究は、近年の米国と英国で展開される“地域に根ざした若手教員の支援・育成”を目指した制度の構築・運用の実態分析を通じて、地方創生に資する若手教員の支援・育成システムの存立をめぐる理論的・実践的示唆を得ることを目的とする。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：小野田正利

共同研究者：野田正人（立命館大学），小林正幸（東京学芸大学），他15名

研究課題：対応困難な保護者とのトラブル事例分析と紛争化の防止及び解決支援に関する学際的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）（代表：小野田正利），2017年度：分担経費325千円（直接経費：250千円，間接経費：75千円）

研究概要：本研究は、教育学・心理学・精神医学・社会福祉学・法律学などの学際的観点から、学校と地域をめぐる対応困難なトラブルの緩和と解決のためにケース分析を行い、学校管理職に焦点化したトラブルアセスメント・対応プランニングの開発を目指す。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：白石陽一（熊本大学）

共同研究者：望月一枝（日本女子大学・研究員）

研究課題：高校の教科外活動に着目したグローバルなアクティブ・シティズンシップ教育モデル開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：白石陽一），2017年度：分担経費195千円（直接経費：150千円，間接経費：45千円）

研究概要：本研究の目的は、教科外活動を中心としたグローバルなアクティブ・シティズンシップ高校教育モデルの開発・評価である。EU生徒会連合やイギリス・アメリカのシティズンシップ研究の理論・実践をふまえ、日本の異なるタイプの教科外教育実践から、高校生のアクティブ・シティズンシップ育成をはかる教育モデルを析出する。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：浜田博文（筑波大学）

共同研究者：安藤知子（上越教育大学），加藤崇英（茨城大学），他4名

研究課題：新たな学校ガバナンスにおける「教育の専門性」の再定位

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：浜田博文），2017年度：分担経費なし

研究概要：本研究は、近年の日本の教育改革論議と学校ガバナンス改革において「教育の専門性」が劣位に置かれていることの問題性に着目し、新たに構築されるべき学校ガバナンスにおけるその再定位のあり方を日米比較の視点から追究することを目的とする。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：古田薫（兵庫大学）

共同研究者：大野裕己（滋賀大学），大谷基道（獨協大学）

研究課題：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表：古田薫）

研究資金：教育エコシステムによる教育制度再編と教育行政の役割変容に関する研究，2017年度：分担経費156千円（直接経費：120千円，間接経費：36千円）

研究概要：本研究は、米国の官民連携・民間委託の新しい潮流である「教育イノベーション・クラスター」の理念的基盤である「教育エコシステム」の構造と意義を考察し、多様な主体が相互作用しながら教育を創造する新しいあり方を探求する。

本専攻研究者：渡部昭男

研究課題：後期中等・高等教育における「無償教育の漸進的導入」の原理と具体策に係る総合的研究

研究資金：科研費基盤研究（B）2017年度：5,850千円（直接経費：4,500千円，間接経費：1,350千円）

本専攻研究者：渡部昭男

研究課題：公教育の共同統治を推進する分散型リーダーシップシステムと学習環境調査票の開発研究（研究代表者 坪井由実）

研究資金：科研費基盤研究（B）分担経費 300千円

本専攻研究者：渡邊隆信

研究課題：「新教育運動における「国際化」の進展と「郷土」形成論の相克に関する比較史的研究」（科学研究費補助金基盤研究（C），研究代表者：渡邊隆信），2017年度：1,820千円（直接経費：1,400千円，間接経費：420千円），

本専攻研究者：渡邊隆信，稲垣哲成，國土将平，岡部恭幸，北野幸子，目黒強

研究課題：保幼小接続期教育推進のための研修プログラム開発－「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」からみた発達の連続性－

研究資金：独立行政法人教職員支援機構 教員の資質向上のための研修プログラム開発支援事業，2017年度：2,000千円

研究概要：神戸市教育委員会と連携して，保幼小接続期教育に関する教員研修プログラムを企画・実施した。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に着目した接続期研修の開発研究。

本専攻研究者：渡邊隆信

研究課題：「教育行政専門職の養成，研修に関する比較研究－システムとカリキュラム・方法を中心に」（科学研究費補助金基盤研究（B）海外学術，研究代表者：日渡円），2017年度：455千円（直接経費：350千円，間接経費：105千円）

研究概要：ドイツにおける教育行政専門職の養成と研修について，ミュンスター大学を主たる対象としてインタビュー調査を行った。

本専攻研究者：山口悦司

共同研究者：坂本美紀（神戸大学），稲垣成哲（神戸大学），大島純（静岡大学），益川弘如（聖心女子大学），大島律子（静岡大学），村山功（静岡大学），望月俊男（専修大学），北澤武（東京学芸大学），大浦弘樹（東京工業大学），河崎美保（静岡大学），河野麻沙美（上越教育大学）

研究課題：学習科学を応用したイノベーティブな教育の理論と方法に関する国際調査研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（海外学術調査）（代表・山口悦司）

研究概要：教育工学，認知科学，教育心理学，教育方法学等とともに学習科学を専門とする研究者からなる研究チームを組織して，世界各国における学習科学の研究拠点の海外学術調査に取り組んでいる。

本専攻研究者：山口悦司

共同研究者：増本康平（神戸大学），坂本美紀（神戸大学），中原淳（東京大学）

研究課題：大量退職時代における熟練教師から初任者教師への理科授業実践知識・技能の伝承モデル

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表・山口悦司）

研究概要：高齢者心理学，発達心理学，職場学習・企業人材育成と科学教育の研究者が学際的に共同し，熟練教師から初任者教師への実践知識・技能の伝承メカニズムを解明するための理論の確立，伝承を支援する方法論の提案に取り組んでいる。

本専攻研究者：稲垣成哲

研究課題：科学系博物館における情報アクセシビリティ・ガイドラインと実践モデルの提案

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表・稲垣成哲）

研究概要：ミュージアムにおけるユニバーサルデザインの研究

本専攻研究者：稲垣成哲

研究課題：知識構築型アーギュメンテーションの指導と評価を可能にする教師教育プログラムの開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(B)（一般）（代表・稲垣成哲）

研究概要：アーギュメンテーションのための教師教育プログラムの開発研究

本専攻研究者：木下孝司

研究課題：文化伝達からみた幼児の仲間集団の発達：実験的アプローチの試み

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表・木下孝司）

研究概要：幼児間での文化伝達の過程を測定する実験的方法を開発して、幼児期における集団の発達を検討した研究。

本専攻研究者：目黒強

共同研究者：稲垣恭子(京都大学), 竹内洋(関西大学)他3名

研究課題：戦後日本における政治家・財界人の教育観に関する教育社会学的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(B)（一般）（代表：稲垣恭子）

研究概要：戦後日本の教育界に影響力を行使してきた政治家および財界人の教育観や教育政策との関係を明らかにする。

本専攻研究者：目黒強

共同研究者：土居安子(大阪国際児童文学振興財団), 酒井晶代(愛知淑徳大学)他5名

研究課題：大正期における児童出版文化史の研究－実業之日本社の果たした役割

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(C)（一般）（代表：土居安子）

研究概要：実業之日本社が大正期の児童出版文化の発展に果たした役割を明らかにする。

本専攻研究者：中谷奈津子

共同研究者：関川芳孝（大阪府立大学），鶴宏史（武庫川女子大学）

研究課題：生活課題を抱える保護者への保育所の組織的支援と研修プログラムの開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：中谷奈津子）

研究概要：保育所における生活課題を抱える保護者への組織的支援について、生活課題の早

期発見から他機関連携に至る保育所内外の支援プロセスと組織的要因の検討，保育士研修プログラムの開発を行うものである。

本専攻研究者：北野幸子

研究課題：幼保連携型認定こども園 2・3 歳児クラス接続期教育における保育者の専門性

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表・北野幸子）

研究概要：幼保連携型認定こども園 2・3 歳児クラスを対象に，接続期教育における園児の特徴と，あらたに創出した保育者の専門性について検討した研究。

本専攻研究者：北野幸子，國土将平，岡部恭幸

研究課題：幼児教育評価指標作成及び評価分析に関する研究

研究資金：堺市受託研究（代表・北野幸子）

研究概要：幼児期の育ちと学びの姿を保育者が振り返る上で活用できる資料の開発と，保育者の幼児理解とその可視化の分析を試みた研究。

本専攻研究者：北野幸子

研究課題：教科の基盤となる資質能力を育成するための幼小接続期教育に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（代表・三村真弓（広島大学））

研究概要：21 世紀型スキルの検討とその育ちを促す，幼小接続期教育実践を検討した研究。

本専攻研究者：北野幸子

研究課題：幼保連携型認定こども園の現状における 3 歳未満児の教育の質の在り方に関する研究

研究資金：厚生労働省 日本保育協会保育科学研究所指定（代表：福澤紀子）

研究概要：3 歳未満児の保育実践データの解析と保育の質の要件について検討した研究。

本専攻研究者：北野幸子

研究課題：保育実習の効果的な実施方法に関する調査研究

研究資金：厚生労働省 平成 29 年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業（代表：網野武博）

研究概要：保育実習に関する有効な実施方法・内容について，実態のデータを収集，分析し，実習の効果的な実施方法について検討した研究。

本専攻研究者：津田英二

共同研究者：伊藤篤・寺村ゆかの・松岡広路・渋谷篤男・中島真紀

研究課題：脆弱性をもつ子どもを見守るボランティアな組織の形成過程に関する実践的研

究

研究資金：ニッセイ財団（代表：津田英二）

研究概要：子どもの貧困への社会的関心の高まりによって生まれてきている市民の自発的な行動が、貧困のもつ多義的な性質の認知を深めながら、社会連帯を強め、市民協働による福祉社会を形成していく可能性とその過程を探求する実践的共同研究である。

本専攻研究者：伊藤篤

共同研究者：伊藤篤・久木津文・南憲治

研究課題：今日の親の親性形成と親子関係の質の向上を促す支援プログラムの開発

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究（C）（代表：寺見陽子）

研究概要：過去の親子間の相互作用と現代のそれとの比較を通して、親子関係の質の向上を促す学習プログラムを開発しようとする研究である。

本専攻研究者：稲原美苗

共同研究者 津田英二・浜渦辰二（大阪大学大学院文学研究科教授）・池田喬（明治大学文学部准教授）・村上旬平（大阪大学歯学部附属病院講師）

研究課題：哲学的当事者研究の展開：重度・重複障害者と慢性疼痛患者のコミュニケーション再考

研究資金：科学研究補助金 基盤研究（C）（代表・稲原美苗）

研究概要：哲学の知見を取り入れ、重度・重複障害児（者）や慢性疼痛患者の支援プログラムを構築することを目的とする研究である。

本専攻研究者：稲原美苗

共同研究者：稲原美苗・池田喬（明治大学文学部准教授）・石原孝二（東京大学大学院総合文化研究科准教授）・小手川正二郎（國學院大学文学部准教授）・筒井晴香（東京大学大学院医学系研究科医療倫理学分野特任研究員）・中真生（神戸大学大学院人文学研究科准教授）・中澤瞳（日本大学通信教育部助教）

研究課題：北欧現象学者との共同研究に基づく人間の傷つきやすさと有限性の現象学的研究

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究（B）（代表：浜渦辰二）

研究概要：誕生，老い，病，死，障がい，痛み，性といった問題の広がりを現象学的に考察する共同研究である。

Web of Science 収録誌掲載論文

Sakai, T., Tamaki, H., Ota, Y., Egusa, R., Inagaki, S., Kusunoki, F., Sugimoto, M., & Mizoguchi, H. (2017). EDA-based Estimation of Visual Attention by Observation of Eye Blink Frequency. *International Journal on Smart Sensing and*

Intelligent Systems (S2IS), Vol. 10, No. 2, pp. 296-307.

国際共同研究・国際共著書・国際共著論文

本専攻研究者：川地亜弥子

共同研究者：Meritxell Simon-Martin (Roehampton University, UK), Glòria Jové Monclús (Lleida University)

研究課題：現代における Ego Writing, Life Writing の学校教育における活用と人間形成に関する国際共同研究

研究概要：その一環として、ローハンプトン大学（英国）、レリダ大学（スペイン）の共同セミナーの第1回講師として招聘され、以下の講演を行った。

Kawaji, A. (2017) How we research Daily Life Writing in Japan, in Roehampton-Lleida Seminar Series, at Lleida University, Catalunya, Spain (10.00-11.30, 20th Dec).

Kawaji, A. (2017) Practices: Writing, reading and sharing essays in Japanese schools, in Roehampton-Lleida Seminar Series, at Lleida University, Catalunya, Spain, (12.00-13.00, 20th Dec).

講演の記録および使用スライドは以下の website にアップされている。

<https://meritxellsimonmartin.wordpress.com/2018/01/04/first-education-and-life-writing-seminar-2/>

本専攻研究者：北野幸子

共同研究者：Waller, T., ÅrlemalmHagsér, Sandseter, E. E. B. H., Lee-Hammond, L., Lekies, K., & Wyver, S.

研究概要：次の著書を執筆。Kitano, S. (2017) “The Benefits of Children’s Outdoor Free Play Activities: Examining Physical Activity in Japan” (pp.645-654) (審査有) in Waller, T., ÅrlemalmHagsér, Sandseter, E. E. B. H., Lee-Hammond, L., Lekies, K., & Wyver, S. eds., (2017) SAGE Handbook on Outdoor Play and Learning

本専攻研究者：津田英二

共同研究者：金丸彰寿・大山正博・川手さえ子・張主善・和田仁美・岩崎陽・塩田愛里・高寅慶・金明淑・金英淑・金栄喆・津田英二

研究概要：次の論文を執筆。論文テーマ：「障害学生の『学び』から見るインクルーシブな大学教育の意義と課題～韓国ナザレ大学卒業生のインタビュー調査を踏まえて～」、『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第11巻1号 pp.19-36（査読あり）2017年9月

院生による研究活動

本専攻研究者：西野倫世（博士後期課程・院生 DC1）

研究課題：現代アメリカ学力政策にみる伸長度評価の可能性 —「正義」と「排除」の相克から—

研究資金：科学研究費補助金・特別研究員奨励費，2017年度：900千円（直接経費：900千円）（代表・西野倫世）

研究概要：本研究は現代教育に内在する「排除」の力学に着目しつつ，教育上の「正義」の実現に向けた萌芽的方策として，「伸長度評価」と呼ばれる米国の最新動向の意義と課題について分析を行う。成果の一端は『教育制度学研究（日本教育制度学会）』に査読付論文として掲載されるに至った。

本専攻研究者：江草遼平（博士後期課程・院生 DC1）

研究課題：聴覚障害児と健常児が共に創り，鑑賞できる人形劇システムの開発と評価

研究資金：特別研究員奨励費（代表・江草遼平）

研究概要：聴覚障害児に対応したインタフェースを持つ人形劇システムを開発する研究である。

本専攻研究者：大塚穂波（博士課程後期課程，日本学術振興会特別研究員 DC2）

研究課題：幼児期におけるふりの理解の発達的变化：人形—大人の関係性に着目して

研究資金：科学研究費補助金・特別研究員奨励費（代表・大塚穂波）

研究概要：ふり遊びに用いられる人形の影響を検討し，幼児期におけるふりの理解の発達的变化を検討した研究。

本専攻研究者：古見文一（日本学術振興会特別研究員 PD）

研究課題：幼児期の一般的他者と特殊的他者の心の理解—マインドリーディングの発達モデルの構築

研究資金：科学研究費補助金・特別研究員奨励費（代表・古見文一）

研究概要：幼児期における様々な背景の特殊的他者の心の理解について検討した研究。

本専攻研究者：古見文一（日本学術振興会特別研究員 PD）

研究課題：幼児期における関係性構築動機の発達的变化

研究資金：平成29年度発達科学研究奨励賞（代表・古見文一）

研究概要：幼児期における他者との関係性を構築する際の要因について検討した研究。

学び系の総括と課題

本年度も，研究資金獲得を伴う研究の進展と，その成果の産出には多くの成果が見られた。

また、国際共同研究が着実の増加しており、その成果が国際共著著作となって表れている。今後は、①各研究分野における単著・共著著作による研究成果の社会的還元増進、②新学部教育の加速とも対応した国際的な共同研究と発信の増進、③大学院生の研究活動に対する指導・支援の一層の充実、が今後の課題となると考える。

(人間発達専攻長 稲垣成哲)

7.6.2. 人間環境学専攻

本専攻では、多分野の教員が自身のテーマを発展させ、多彩な研究プロジェクトに従事することで、人間環境学とその研究ネットワークの発展に貢献してきた。以下では、本専攻研究者が展開する研究の概要と成果を紹介する。

まず、(1) 本専攻研究者は、今年度時点で、計 16 件の研究プロジェクト（研究費総額 200 万円以上）の代表者として、人間環境学に関する多様なプロジェクトを走らせ、統括する役割をはたしている。さらに、(2) 本専攻研究者は、計 44 本の WoS 論文を発表し、それ以外に、多彩な (3) 審査付き論文、(4) 著書を公表した。なお、(1) (2) については全て、(3) (4) については主な成果を掲載している。

1. 研究プロジェクト（専攻研究者が代表者で、研究費総額 200 万円以上）

研究代表者（本専攻教員）：青木茂樹

研究分担者：中野敏行（名古屋大学）、六條宏紀（名古屋大学）連携研究者：高橋覚（本専攻教員）

研究課題：気球搭載型エマルジョン望遠鏡による宇宙ガンマ線未解決課題の解明

研究資金：科学研究費補助金・基盤（S）、2017-2021 年度、総額（直接経費）15,390 万円

研究概要：気球搭載型のエマルジョン望遠鏡を開発し、天体などからのガンマ線観測を行う。

研究代表者（本専攻教員）：浅野慎一

研究課題：戦後日本の夜間中学とその生徒の史的変遷：ポスト・コロニアリズムの視座から

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B）、2017-2020 年度、総額（直接経費）330 万円

研究概要：戦後日本の夜間中学とその生徒の変遷を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：平山洋介

研究課題：超高齢社会における複数住宅所有の実態と役割

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B）、2016-2018 年度、総額（直接経費）380 万円

研究概要：複数住宅所有の実態を高齢者の経済セキュリティと住宅市場へのインパクトという観点から解明する。

研究代表者（本専攻教員）：井上真理

研究課題：自動車，家電製品，日用雑貨等の人の手に触れる部材の触感評価の体型化

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2017-2019年度，総額（直接経費）350万円

研究概要：自動車，家電製品，日用雑貨等の人の手に触れて用いられる材料の触感を，それらの材料特性を用いて定量的に評価し，最終用途における触感の指標を作成する。

研究代表者（本専攻教員）：桑村雅隆

連携研究者：栄伸一郎（北海道大学）小川知之（明治大学）

研究課題：保存量をもつ反応拡散方程式とその摂動系—シンプレクティック構造と生物学への応用

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2016-2020年度，総額（直接経費）310万円

研究概要：細胞の極性化現象を記述するモデル方程式を解析し生物の形態形成に関する知見を得る。

研究代表者（本専攻教員）：源利文

共同研究者：山中裕樹（龍谷大学）

研究課題：環境DNA/RNAを利用した生物調査の新展開：水を汲んで生物の行動や状態を知る
研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2017-2019年度，総額（直接経費）1,690万円

研究概要：環境中の核酸を用いた生物調査手法を用いて生物の行動や状態を知ることのできる新たな手法を開発する。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

研究課題：折りたたみ構造を有しない低分子量ポリヒドロキシ酪酸による結晶構造と水素結合の研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2015-2017年度，総額（直接経費）400万円

研究概要：分子量が小さく分子鎖長がラメラ厚程度の高分子を用いて，結晶構造形成における水素結合の役割を解明する。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤真行

共同研究者：丑丸敦史（本専攻），片桐恵子（本専攻）

研究課題：生活の質を考慮した生態系サービスの評価手法に関する学際研究

研究資金：科学研究費補助金・萌芽，2015-2017年度，総額（直接経費）377万円

研究概要：経済学，生態学，心理学を統合した生態系サービス評価方法の開発，適用。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤真行

共同研究者：栗山浩一（京都大学），馬奈木俊介（九州大学），藤井秀道（長崎大学），林岳（農林水産政策研究所）

研究課題：生態系サービスの定量的評価及び生態勘定フレームワーク構築に向けた研究

研究資金：環境経済の政策研究（環境省受託研究），2015-2017年度，総額（直接経費）10,216,527円

研究概要：愛知目標の達成に向け，我が国における生態勘定のフレームワークの開発および生態系価値の経済評価を行う。

研究代表者（本専攻教員）：澤 宗則

共同研究者：南埜 猛（兵庫教育大学）

研究課題：空間的实践とエスニシティからみた在日インド人と在日ネパール人——戦術から戦略へ

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C）・2016-2019年度。総額（直接経費）330万円

研究概要：在日インド人移民とネパール人移民を比較しながら，「空間的实践」（「戦術」から「戦略」への移行プロセスと「戦術」の多様化や変化）を分析することにより，エスニシティと空間との関係性を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：田畑智博

共同研究者：片桐恵子（本専攻）

研究課題：超高齢化社会の進行とごみ分別行動の関係性評価

研究資金：科研・挑戦的萌芽研究，2016-2018年度，総額（直接経費）260万円

研究概要：高齢者の増加がゴミ分別及び自治体のゴミ処理に及ぼす環境的影響を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：高見泰興

共同研究者：曾田貞滋（京都大学），小薮太輔（東京大学）

研究課題：機械的生殖隔離による種分化：交尾器形態分化の要因と帰結

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2016-2019年度，総額（直接経費）1300万円

研究概要：交尾器形態の多様化をもたらす進化機構と，多様化した形態をもたらす種分化機構を解明する。

研究代表者（本専攻教員）：高見泰興

共同研究者：久保田耕平（東京大学），山平寿智（琉球大学）

研究課題：性的形質の緯度クラインをもたらす性淘汰の環境依存性の解明

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2017-2020年度，総額（直接経費）990万円

研究概要：交尾器形態の緯度クラインをもたらす，性淘汰と環境要因，それらの関連性を解明する。

研究代表者：(本専攻教員) 丑丸敦史

研究課題：メガシティにおける生物多様性減少メカニズム——機能群多様性減少の影響評価

研究資金：科学研究費補助金・基盤 (B)，2016-2018 年度，総額 (直接経費) 970 万円

研究概要：都市拡大に伴う土地利用の変化が水田生態系における生物多様性を減少させるメカニズムを植物・植食性昆虫の機能群多様性の減少とそれによる相互作用系への影響に着目して解明する。

研究代表者：(本専攻教員) 丑丸敦史

研究課題：伊豆諸島における長口吻送粉者の不在が植物の繁殖に与える影響

研究資金：植物研究助成，2017-2018 年度，総額 (直接経費) 300 万円

研究概要：都市拡大に伴う土地利用の変化が水田生態系における生物多様性を減少させるメカニズムを植物・植食性昆虫の機能群多様性の減少とそれによる相互作用系への影響に着目して解明する。

研究代表者：(本専攻教員) 山崎 健

共同研究者：岩佐卓也・井口克郎・太田和宏・岡田章宏・浅野慎一・澤 宗則・橋本直人
(すべて本専攻)

研究課題：東アジアにおける越境的社会圏の展開と課題

研究資金：科学研究費補助金・基盤 (C)・2015-2018 年度，総額 (直接経費) 360 万円

研究概要：多様な制度・文化・背景をもつ東アジアが 1 つの越境的社会圏を構築する可能性と課題を学術的に検討する。

2. WOS 論文

K. Abe et al. (Aoki, S.を含む) (2017) Combined Analysis of Neutrino and Antineutrino Oscillations at T2K, Phys. Rev. Lett., 118(15), 151801

A. Akmete et al. (Aoki, S.を含む) (2017) The active muon shield in the SHiP experiment, JINST, 12(5), P05011

T. Fukuda et al. (Aoki, S.を含む) (2017) First neutrino event detection with nuclear emulsion at J-PARC neutrino beamline, Prog. Theor. Exp. Phys., 2017(6), 063C02

- K. Yamada et al. (Aoki, S.を含む) (2017) First demonstration of an emulsion multi-stage shifter for accelerator neutrino experiments in J-PARC T60, Prog. Theor. Exp. Phys., 2017(6), 063H02
- K. Abe et al. (Aoki, S.を含む) (2017) Search for Lorentz and CPT violation using sidereal time dependence of neutrino flavor transitions over a short baseline, Phys. Rev. D, 95(11), 111101
- K. Abe et al. (Aoki, S.を含む) (2017) Updated T2K measurements of muon neutrino and antineutrino disappearance using 1.5×10^{21} protons on target, Phys. Rev. D, 96(1), 011102
- K. Abe et al. (Aoki, S.を含む) (2017) Measurement of $\bar{\nu}_\mu$ and ν_μ charged current inclusive cross sections and their ratio with the T2K off-axis near detector, Phys. Rev. D, 96(5), 052001
- K. Abe et al. (Aoki, S.を含む) (2017) Measurement of neutrino and antineutrino oscillations by the T2K experiment including a new additional sample of νe interactions at the far detector, Phys. Rev. D, 96(9), 092006
- K. Abe et al. (Aoki, S.を含む) (2018) First measurement of the ν_μ charged-current cross section on a water target without pions in the final state, Phys. Rev. D, 97(1), 012001
- N. Agafonova et al. (Aoki, S.を含む) (2018) Study of charged hadron multiplicities in charged-current neutrino-lead interactions in the OPERA detector, Eur. Phys. J. C, 78(1), 62
- K. Abe et al. (Aoki, S.を含む) (2018) Measurement of the single π^0 production rate in neutral current neutrino interactions on water, Phys. Rev. D, 97(3), 032002
- Hirayama, Y. (2017) Individualisation and familisation in Japan's home-owning democracy, International Journal of Housing Policy, 17 (2), 296-313.

Hitomi collaboration (Itoh, M.を含む) (2017) Hitomi Constraints on the 3.5 keV Line in the Perseus Galaxy Cluster, *Astrophysical Journal Letters*, 837 (1), L15, 1-9

Kudoh, T., Takahashi, M., Osabe, T., Toyoda, A., Hirakawa, H., Suzuki, Y., Ohmido, N., Onodera, Y. (2017) Molecular insights into the non-recombining nature of the spinach male-determining region, *Molecular Genetics and Genomics*, Dec 8. doi: 10.1007/s00438-017-1405-2.

Kuwamura, M. and Izuhara, H. (2017) Diffusion-driven destabilization of spatially homogeneous limit cycles in reaction-diffusion systems, *Chaos*, 27, 033112.

Yamanaka, H., Minamoto, T., Matsuura, J., Sakurai, S., Tsui, S., Motozawa, H., Hongo, M., Sogo, Y., Kakimi, N., Teramura, I., Sugita, M., Baba, M., Kondo, A. (2017) A simple method for preserving environmental DNA in water samples at ambient temperature by addition of cationic surfactant. *Limnology*, 17 (2), 233-241.

Hashizume, H., Sato, M., Sato, M. O., Ikeda, S., Yoounan, T., Sanguankiat, S., Pongvongsa, T., Moji, K., Minamoto, T. (2017) Application of environmental DNA analysis for the detection of *Opisthorchis viverrini* DNA in water samples. *Acta Tropica*, 169, 1-7.

Tsuji, S., Ushio, M., Sakurai, S., Minamoto, T. Yamanaka, H. (2017) Water temperature-dependent degradation of environmental DNA and its relation to bacterial abundance. *PLOS ONE*, 12 (4), e0176608.

Katano, I., Harada, K., Doi, H., Souma, R., Minamoto, T. (2017) Environmental DNA method for estimating salamander distribution in headwater streams, and a comparison of water sampling methods. *PLOS ONE*, 12 (5), e0176541.

Uchii, K., Doi, H., Yamanaka, H., Minamoto, T. (2017) Distinct seasonal migration patterns of Japanese native and non-native genotypes of common carp estimated by environmental DNA. *Ecology and Evolution*, 7 (20), 8515-8522.

- Jo, T., Murakami, H., Masuda, R., Sakata, M. K., Yamamoto, S., Minamoto, T. (2017) Rapid degradation of longer DNA fragments enables the improved estimation of distribution and biomass using environmental DNA. *Molecular Ecology Resources*, 17 (6), e25–e33.
- Sakata, M. K., Maki, N., Sugiyama, H., Minamoto, T. (2017) Identifying a breeding habitat of a critically endangered fish, *Acheilognathus typus*, in a natural river in Japan. *The Science of Nature - Naturwissenschaften*, 104, 100.
- Doi, H., Akamatsu, Y., Watanabe, Y., Goto, M., Inui, R., Katano, I., Nagano, M., Takahara, T., Minamoto, T. (2017) Water sampling for environmental DNA surveys by using an unmanned aerial vehicle. *Limnology and Oceanography: Methods*, 15, 939–944.
- Miyata, T. (2017) Approximate maps characterizing injectivity and surjectivity of maps, *Glasnik Matematički*, 52, 185–203.
- Brela, M. Z., Wójcik, M. J., Boczar, M., Onishi, E., Sato, H., Nakajima, T. and Ozaki, Y. (2018) Study of Hydrogen Bond Dynamics in Nylon 6 Crystals Using IR Spectroscopy and Molecular Dynamics Focusing on the Differences Between α and γ Crystal Forms, *Int. J. Quantum Chem.* e25595.
- Funaki, C., Yamamoto, S., Hoshina, H., Ozaki, Y. and Sato, H. (2018) Three different kinds of weak C-H \cdots O=C inter- and intramolecular interactions in poly(ϵ -caprolactone) studied by using terahertz spectroscopy, infrared spectroscopy and quantum chemical calculations, *Polymer*, 137, 245–254.
- Marlina, D., Sato, H., Hoshina, H. and Ozaki, Y. (2018) Intermolecular Interactions of Poly(3-hydroxybutyrate-co-3-hydroxyvalerate) (P(HB-co-HV)) with PHB-Type Crystal Structure and PHV-Type Crystal Structure Studied by Low-Frequency Raman and Terahertz Spectroscopies, *Polymer*, 135, 331–337.
- Terasaki, M., Khasanah, Ozaki, Y., Takahashi, I. and Sato, H. (2018) Study on phase separation in an ultra-thin poly(methyl methacrylate)/poly(4-vinyl phenol) film by infrared reflection absorption spectroscopy, *Polymer*, 135, 69–75.

Iwasaki, H., Nakamura, M., Komatsubara, N., Okano, M., Nakasako, M., Sato, H. and Watanabe, S. (2017) Controlled Terahertz Birefringence in Stretched Poly(lactic acid) Films Investigated by Terahertz Time-Domain Spectroscopy and Wide-Angle X-ray Scattering, *J. Phys. Chem. B*, 121 (28), 6951-6957.

Wang, M., Vantasin, S., Wang, J., Sato, H., Zhang, J. and Ozaki, Y. (2017) Distribution of polymorphic crystals in the ring-banded spherulites of poly(butylene adipate) studied using high-resolution raman imaging, *Macromolecules*, 50 (8), 3377-3387.

Brela, M. Z., Boczar, M., Wójcik, M. J., Sato, H., Nakajima, T. and Ozaki, Y. (2017) The Born - Oppenheimer Molecular Simulations of Infrared Spectra of Crystalline Poly-(R)-3-hydroxybutyrate with Analysis of Weak C-H...O=C Hydrogen Bonds, *Chem. Phys. Lett.* 678, 112-118(2017).

Yamamoto, S., Miyada, M., Sato, H., Hoshina, H. and Ozaki, Y. (2017) Low-Frequency Vibrational Modes of Poly(glycolic acid) and Thermal Expansion of Crystal Lattice Assigned On the Basis of DFT-Spectral Simulation Aided with a Fragment Method, *J. Phys. Chem. B*, 121, 1128-1138.

Funaki, C., Toyouchi, T., Hoshina, H., Ozaki, Y. and Sato, H. (2017) Terahertz imaging of the distribution of crystallinity and crystalline orientation in a poly (ϵ -caprolactone) film, *Applied Spectroscopy*, 71, 1537-1542.

Fujii, H., Sato, M. and Managi, S. (2017), Decomposition analysis of forest ecosystem services values, *Sustainability*, 9(687), 1-14.

Sato, M., Samreth, S. and Sasaki, K. (2018), The Impact of Institutional Factors on the Performance of Genuine Savings, *International Journal of Sustainable Development & World Ecology*, 25(1), pp.56-68.

Hara, M., Masuda, H., Horie, T., Honda, S., Kataoka-Shirasugi, N. and Ohmura, N. (2018) Using Motion Analysis to Evaluate Techniques for Whipping Heavy Cream by Hand, *Journal of Chemical Engineering of Japan*, 51(2), 180-184.

Inaba, T., Tabata, T., Tsai, P. (2017) Development of a basic rate of household

energy consumption considering usage time and quantity of consumer durables, *Journal of Sustainable Development of Energy, Water and Environment Systems*, 5, 533-545.

Wakabayashi, Y., Tsai, P., Tabata, T., Saeki, T. (2017) Life cycle assessment and life cycle costs for pre-disaster waste management systems, *Waste Management*, 68, 688-700.

Tabata, T., Wakabayashi, Y., Tsai, P., Saeki, T. (2017) Environmental and Economic Evaluation of Disaster Waste Management, *Chemical Engineering Transactions*, 61, 31-36.

Kadoi, M., Morimoto, K. and Takami, Y. 2017. Male mate choice in a sexually cannibalistic species: Male escapes from hungry females in the praying mantid *Tenodera angustipennis*. *Journal of Ethology*, 35: 177-185.

Park, Y. H., Kim, J. K., Jang, T. W., Chae, H. M. and Takami, Y. 2017. Local climate mediates spatial and temporal variation in carabid beetle communities in three forests in Mount Odaesan, Korea. *Ecological Entomology*, 42: 184-194.

Nakahama N, Uchida K, Ushimaru A and Isagi Y (2018) Historical changes in grassland area determined the demography of semi-natural grassland butterflies in Japan. *Heredity* doi:10.1038/s41437-018-0057-2

Katsuhara KR Kitamura S and Ushimaru A (2017) Functional significance of petals as landing sites in fungus-gnat-pollinated flowers of *Mitella pauciflora* (Saxifragaceae). *Functional Ecology* 31:1193-1200.

Oshita, K., Yano, S. (2017) Effect of haptic sensory input through a fluttering cloth on tandem gait performance, *Human Movement Science*, 55, 94-99.

3. その他審査付き論文

浅野慎一：佐藤彰彦（2018）：国土のグランドデザインと地域社会—「生活圏」の危機と再発見『地域社会学会年報』第59集，5-12.

蘆田弘樹（2018）「メタン生成アーキアにおける RuBisCO を利用した新規 CO₂ 固定経路」

『酵素工学ニュース』78, 14-18.

平山洋介 (2018) 「富か、無駄か——付加住宅所有の階層化について」『日本建築学会計画系論文集』(83) 745, 483-492.

Miyata, T. (2017) Metrization in small and large scale structures, *Bulletin of the Polish Academy of Sciences*, 65, 81-92.

Ohkushi, K., Uchida, M. and Shibata, Y. (2017) Radiocarbon age differences between benthic-planktonic foraminifera in sediment cores from the Shatsky Rise, central North Pacific, *Journal of the Sedimentological Society of Japan*, 76 (1), 17-27.

澤 宗則・森日出樹・中條暁仁 (2018) 「都市近郊農村からアーバンビレッジへの変容——インド・デリー首都圏の1農村を事例に」『広島大学現代インド研究——空間と社会』(8), 17-41.

蔡 佩宜, 田畑智博, 白川博章 (2017) 「将来発生しうる災害廃棄物の広域処理受け入れに関する住民意識の分析: リスクコミュニケーション実施時における判断材料としての利用を想定して」『都市清掃』(70) 337, 275-284.

Shinohara, T. and Takami, Y. 2017. Adult leaf beetles of the subfamily Cassidinae (Coleoptera: Chrysomelidae) preyed on by the digger wasp *Cerceris albofasciata* (Hymenoptera: Crabronidae) in Japan. *Entomologische Blätter und Coleoptera*, 113(1): 213-218.

4. 著書

単著

太田和宏 (2018) 『貧困の社会構造分析——なぜフィリピンは貧困を克服できないのか』法律文化社

澤 宗則 (2018) 『インドのグローバル化と空間的再編成』古今書院

共著

Hirayama, Y. and Izuhara, M. (2018) *Housing in Post-Growth Society: Japan on the Edge of Social Transition*, New York: Routledge.

分担執筆

井上真理 (2017) ; 「第9章: 不織布の物性測定」シーエムシー出版編集部 (編) 『不織布の技術と市場』シーエムシー出版, 102-115.

Ohmido, N., Makigano, E., Tsuchimoto, S., Fukui, K. (2017) Flowering genes and homeotic floral genes analysis in *Jatropha*, in Tsuchimoto, S. (ed.) *The Jatropha Genome*, São Paulo: Springer International Publishing AG, 149-158.

佐藤真行, 林岳, 蒲谷景, 馬奈木俊介 (2017) 「生態系サービスと勘定体系」馬奈木俊介 (編著) 『豊かさの価値評価—新国富指標の構築』中央経済社, 161-174.

Tabata, T. (2018) Environmental impacts of utilizing woody biomass for energy: A case study in Japan, Pandey, A., Bhaskar, T., Mohan, S. V., Lee, D. J., Khanal, S. K. (eds.) *Waste Biorefinery: Potential and Perspectives*, Oxford: Elsevier.

(人間環境学専攻長 平山洋介)

8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動

8.1. 産官学共同プロジェクト

(1) パナソニック株式会社アプライアンス社 洗濯後おしゃれ着の風合いの定量化等に関する研究

絹の素材を使ったブラウスは、優雅な肌触りと美しい光沢感で人気が高いおしゃれ着の一つである。絹製品はドライクリーニングが一般的であるが、コストがかかる。最近では、洗濯機に手洗いコースもあるので、自宅で手入れ・洗濯することを望んでいる人も多であろう。しかし、絹製品は洗濯によりトラブルを起こしやすいという問題点も抱えている。この研究では、市販の絹ブラウスを試料として、主観評価と基本物理特性の変化から洗濯方法の違いによる風合いの変化と洗濯耐久性をとらえることを目的とした。力学特性をはじめとする特性値と主観評価の変化から、絹ブラウスの洗濯耐久性をとらえた。絹ブラウスを標準コースで洗うと負担が大きく、見た目も大きく劣化する。これらのデータをもとに、本研究では、絹ブラウスの洗濯による風合い変化を捉えることのできる評価式を開発することができた。

(人間環境学専攻 井上真理)

(2) 株式会社カネカとの共同研究

生分解性プラスチックであるポリヒドロキシアルカン酸 (PHA) 系の結晶構造の解析を、株式会社カネカとの共同研究で行った。この生分解性プラスチックは微生物によって

生産・分解されるため、従来のプラスチック材料に比べて環境への負荷が小さい。しかしながら、PHA の結晶化速度が遅いため成形加工性が悪く、実用化に向けて課題が残っている。この問題を解決するために種々の添加剤を使って PHA の結晶化速度を上げることが試みられているが、そのメカニズムについてはよく分かっていない。本研究では添加剤がどのように PHA の結晶化速度に作用しているかを官能基レベルで調べ、そのメカニズムを明らかにすることを試みた。PHA が熔融状態から結晶構造を形成する過程において、添加剤と PHA との水素結合の有無や添加剤の運動性が PHA の結晶化速度に大きく関係していることが分かった。

(人間環境学専攻 佐藤春実)

(3)株式会社 ホンダ・リサーチ・インスティテュート・ジャパンとの共同型協力研究

ホンダ・リサーチ・インスティテュート・ジャパンは自動車技術を超えた新しい領域に挑戦するための組織として 2003 年日米欧に設立され、Innovation through Science をもとに人や地球環境と知能化システムが調和・共存するハイブリッド社会の実現にむけ、人工知能、ロボット工学、システム科学、脳科学、材料科学、心理学、社会倫理学などからの多面的アプローチにより Cooperative Intelligence と Cooperative Devices の研究に取り組んでいる。今回の共同型協力研究では、運動中の疲労を検出するために、リアルタイムに運動中の汗成分を定量するセンサーを構築するもので、この構築にあたり、センサー開発の助言、センサーの妥当性検討を行う。また、それに関連する身体調節機能の研究の助言やデータ解析を環境整備も含め実施する。

(人間発達専攻 近藤徳彦)

(4)株式会社トータルブレインケアとの共同研究

神戸大学では高齢化社会での大きな課題である認知症を予防する事業を全学的に展開しようとしている。本研究科ではアクティブエイジング研究センターが中心になり、この事業に参画している。本共同研究はその一環で、神戸大学の OB を中心に人間発達環境学研究科と保健管理センターの施設を利用し、認知症予防の介入実験を行うものであり、認知症予防のための運動・認知介入方法の確立を目指した先行研究である。本研究の目的は神戸大学の OB あるいは地域在住高齢者に対して筋力・有酸素運動、認知課題の複合トレーニングが身体機能・認知機能をどのように改善するかを検証することである。

(人間発達専攻 近藤徳彦)

(5)JST 海洋における環境 DNA 定量による対象種の空間分布推定に必要な分子生物学的手法の開発

我が国は四方を海に囲まれており、その近海は生物多様性のホットスポットとしても注目される。本研究科では、海洋の生物多様性および生態系を把握するための先進的な計測技

術と将来予測に資するモデルの研究開発を目的とする、科学技術振興機構の CREST 研究領域「海洋生物多様性および生態系の保全・再生に資する基盤技術の創出」における研究課題「環境 DNA 分析に基づく魚類群集の定量モニタリングと生態系評価手法の開発」の分担課題「海洋における環境 DNA 定量による対象種の空間分布推定に必要な分子生物学的手法の開発」の研究に平成 25 年度より取り組んでいる。平成 29 年度には主に舞鶴湾で行った定量魚探-環境 DNA 共同実験のデータ解析および、環境 DNA の動態の研究に取り組んだ。定量魚探-環境 DNA 共同実験では、2014 年度および 2016 年度に実施した舞鶴湾における環境 DNA 定量と定量魚探による調査の結果をまとめ、マアジとカタクチイワシでは環境 DNA の水中における局在が異なることなどを明らかにした。環境 DNA の動態の研究では、マアジを用いた水槽実験によって、環境 DNA の分解速度が水温および生物密度に依存すること、環境 DNA の放出速度が水温には依存せず、生物密度に依存することなどを明らかにした。これらの研究成果は、環境 DNA を用いて資源魚種の量を推定することなどさまざまな応用可能性があり、今後のさらなる展開が期待される。

(人間環境学専攻 源利文)

(6) 堺市 幼児教育評価指標作成及び評価分析に関する研究業務

堺市より研究を受託し、「幼児教育評価指標作成及び評価分析に関する研究」を実施した。本研究では、新しい指針・要領が示す資質・能力の三つの柱を意識し、これまで園の現場においてなされてきた「環境を通して行う保育」による主体的な遊びや生活の中での子どもの育ちの姿を保育者がみとり、小学校等に伝える上で、活用ができる、①10 の育ちの姿を振り返る資料を作成した。また、研究の趣旨についての賛同を得た 43 園の協力を得て、5 歳児 1,214 名の子どもデータの得て、①で作成した資料の活用モデルの開発を行った。

研究体制

研究代表者：北野幸子

研究分担者：國土将平・岡部恭幸

研究協力：神戸大学 乳幼児教育学（北野）研究室，神戸大学附属幼稚園

研究補佐員：長谷川諒，若林絵美

受託研究費：400 万円

(人間発達専攻 北野幸子)

(7) NEDO 高速増殖型ボツリオコッカスを使った純バイオジェット燃料生産一貫プロセスの開発

地球規模の温暖化阻止に向け世界的な取り組みの 1 つとして、国際線を運航する航空会社、またその関連企業から成る業界団体である国際航空運送協会 International Air Transport Association(IATA)は、航空機に関わる CO2 排出量を 2050 年までに 50%削減(2005 年比)することを掲げている。目標達成のためには、航空機の技術革新や運航方

法の改善に加え、バイオジェット燃料の導入が不可欠であるとしており、2020年からのバイオ燃料の導入を目指している。我々は、NEDO委託事業：「バイオジェット燃料生産技術開発事業／一貫製造プロセスに関するパイロットスケール試験」において、研究開発テーマ：「高速増殖型ボツリオコッカスを使ったバイオジェット燃料生産一貫プロセスの開発」において、株式会社IHIとの共同研究としてボツリオコッカスからのバイオジェット燃料製造実用化・商用化を目指し、パイロットスケール試験、コスト低減、課題の抽出と対策の検討などを進めた。

(人間環境学専攻 蘆田弘樹)

(8)独立行政法人教職員支援機構 教員の資質向上のための研修プログラム開発支援事業 神戸市教育委員会との連携により、「保幼小接続期教育推進のための研修プログラム開発—「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」からみた発達の連続性—」というテーマのもと、全7回の研修講座を開発・実施した。研修対象は、神戸市内の公立及び私立の幼稚園・保育園等に勤務する教員・保育士と、神戸市立小学校で主に低学年の担任をする教員である。研修内容については、神戸大学教員とベテランの学校園教員等が講師となり、アクティブラーニングを含む理論的・実践的な研修講座を開催した。その際、従来の幼稚園教育の内容(5領域)ではなく、新たに設定された10の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基準にして接続期教育の研修講座を実施した。実施後は、インターネット上で各回の講座内容の概要を掲載するとともに、それをもとに「研修テキスト」を作成し市内の学校園に配布した。

(人間発達専攻 渡邊隆信)

(9) 公益財団法人日本生命財団 脆弱性をもつ子どもを見守るボランティアな組織の形成過程に関する実践的研究

本件は、特に地域社会において子どもを見守ろうとして勃興しつつあるボランティアな団体の実践に着目して、次世代の貧困化に直結するような脆弱性をもった子どもに対する社会的実践を対象とする委託研究(2017-2019年度)である。具体的には、各地で広がっている学習支援、子ども食堂や、子どもの居場所づくり、フリースクールなどを行うボランティアな組織について、①それらの形成や発展の過程、②それらの地域展開・定着に対する支援のあり方、③それらが脆弱性をもつ子どもや地域の状況を改善させる可能性と限界に焦点を当てる。実践的研究にあたっては、本研究科サテライト施設「のびやかスペースあーち」における「子どもの居場所づくり事業」を拠点として、ここに集まる人々を共同研究に巻き込む参加型研究を指向する。実践的研究の遂行にあたって、「合理的配慮からの学び」による、個と集団の相互変容の過程に着目して、ボランティアな組織の発展について検討する。

(人間発達専攻 津田英二)

(10) JST 遺伝物質の構造および初期感染過程のナノ可視化法の開発によるバイオナノテクノロジーの新たな展開

本研究課題は、2018年1月から開始された。生物材料に適応可能なナノレベルでの標準的な可視化法及び操作法の開発により、バイオナノテクノロジーの新しい展開をもたらす技術開発を行い、関係3国（日本、タイ、ベトナム）でその技術を共有し、発展させる。日本側チーム(大阪大、産総研、農研機構が協同研究)は、ヒトおよび植物染色体の構造解析を担当する。タイ側チーム(カセサート大)は、日本チームと協力して、鳥類および爬虫類に特有のマクロ及びミクロ染色体の構造解析を行う。これらの共同研究を進めるために、アジアに広く分布する多彩な生物試料を用いた集束イオンビーム/走査型電子顕微鏡(FIB/SEM)ならびに走査型透過電子顕微鏡(FIB/STEM)技術および新しい生物試料調整法の開発を行う。

(人間環境学専攻 近江戸伸子)

(11) Toward Co-existence of Human and the Environment in Urban area

シンガポール社会科学大学(Singapore University of Social Sciences)からチャン・ヨンホ氏をゲストスピーカーとして招き、経済的な枠組みを用いての生態系管理をテーマとした研究集会を行った。企画を行った教員と学生は環境経済学を専門とするが、集会当日には生態学をはじめとする他の分野の研究者も聴衆として招き、学際的な議論を行った。また、チャン氏に加え、教員として佐藤真行准教授、博士課程前期課程の学生として青島一平とパウラ・アンドレア・カノもそれぞれ研究発表を行い、活発な議論を行った。

チャン氏は、「Sustainability for economists and ecologists」という発表題目のもと、持続可能性という概念の捉え方が、経済学者と生態学者との間で必ずしも一致しないことを指摘した。経済学者は自然資本の減少・劣化・枯渇が人工資本により補完できると考えがちである一方で、生態学者は自然資本の人工資本による代替を認めない場合が多い。チャン氏は、どちらか一方の考え方に偏ることなく、両者の間でうまく折り合いをつけることが必要であると指摘した。佐藤准教授は、「Ecosystem Service Accounting in Japan」という発表題目のもと、国の豊かさを示す国民経済計算の中に、生態系サービスのストック価値を計上することの必要性と、そのための方法論を提示した。学生である青島は、「Recognition and Valuation of Urban Green Spaces: Using Life Satisfaction Data」という題目で研究発表を行った。この発表では、緑地の貨幣価値を評価するにあたり、物理的な緑地面積を評価対象とするのか、それとも、住民が主観的に認識している緑地の量を評価対象とするのかで、同じ面積の緑地でもその評価額が異なりうることが指摘された。同じく学生であるパウラ・アンドレア・カノは、「Ecosystem Damage in Mining Industry of Colombia: Guajira Case Desert and Wetland Ecosystems」という研究題目のもとで、コロンビアにおける採炭業・金鉱業が、生態系に与えるダメージを可視化するための方法論について研究成果を発表した。いずれの発表も非常に興味深いトピックを扱っており、聴衆からはたくさんの意見や質問

が出され、活発な議論が行われた。

(人間環境学専攻 佐藤真行)

8.2. 地域連携プロジェクト

(1) 「神戸マラソン 2017」

神戸マラソンの基本構想を審議する「フルマラソン検討委員会」(2009)の委員長を務めてから、「第1回神戸マラソン 2011」から「第7回神戸マラソン 2017」と継続して、兵庫県と神戸市が主催する都市型市民マラソン大会の運営をサポートしてきた。今年度は、神戸マラソン 2017 実行委員会委員、新コース検討委員会委員長を務め、大会参加者のイベント評価に関するランナー調査、ボランティア調査のコーディネート等を行った。

ランナー調査においては、発達科学部人間行動学科生涯スポーツゼミを中心に、1回生から4回生、院生及びOB・OGの合計15名が、フルマラソンのフィニッシュ地点において、ランナーに対する質問紙調査を実施した。回収した1,186票のデータ分析により、大会満足度や大会参加の決定要因、大会の魅力、大会参加支出等を調べ、性別、種目別、ランナータイプ別、および居住地別に比較した。調査結果は、ホームページ上に公開されている。大会の満足度について、満足群の割合は、「スタッフの対応」(98.6%)、「大会の運営全体」(98.1%)、「大会全体の満足度」(97.4%)、「沿道の応援(演奏を含む)」(98.5%)となっていた。「大会の広報(ホームページを含む)」、「大会の時期」、「トイレ」、「沿道の応援(演奏を含む)」、「参加賞」に関して満足群の増加がみられた。「大会全体の満足度」、「コース」については満足群の割合がやや減少したが、ほとんどの項目において前回大会よりも今回の満足群が増加していた。

大会参加における支出について、「交通費」が平均8,736円、「宿泊費」が平均6,433円、「飲食費」が平均3,738円、「おみやげ代」が平均2,262円、「その他(観光費など)の費用」が平均1,810円となり、総費用の平均は20,321円であった。これらのデータを基にした「ひょうご経済研究所」の分析により、神戸マラソン 2017の経済効果が算出された。調査報告書と要約版は、実行委員会等において配布され、次年度の大会におけるPDCAサイクルのエビデンスとして活用されている。また、「神戸マラソン新コース検討委員会委員長」を務め、第10回大会(2020年)に向けての新コース案を検討し、報告した。

第1回大会から第5回大会までのランナー、ボランティア、沿道観客などの調査データをまとめ、兵庫県立大学政策科学研究叢書「神戸マラソンの社会経済的影響の把握と評価」が出版された。筆者は、第2章「ランナーの動向と特徴」、第5章「今後の課題(今後のあるべき姿)」を執筆した。

(人間発達専攻 山口泰雄)

(2) マスターズ甲子園プロジェクト

「マスターズ甲子園」は、全国の高校野球OB/OGが、性別、世代、甲子園出場・非出場、

元プロ・アマチュア等のキャリアの壁を越えて出身校別に同窓会チームを結成し、全員共通の憧れであり野球の原点でもあった「甲子園球場」で白球を追いかける夢の舞台を目指そうとするものである。全国 200 万人と推計される元高校球児による各地域での OB/OG 野球クラブの活性化、生涯スポーツとしての野球文化の発展、熟年（マスターズ）世代と共に高校球児を含めたユース世代にも応援メッセージを発信しながら、活力と夢に満ちた個人・地域・社会・未来への創造と発展に寄与していくことを開催目的とし、神戸大学発達科学部の教員、職員、学生が中心となって産官学民の連携体制により 2004 年に第 1 回大会を始動した。大会事務局と主催団体である全国高校野球 OB クラブ連合の事務局を神戸大学発達科学部内のスポーツプロモーション研究室に併設し、神戸大学による後援のもと、大学による社会貢献活動とアクションリサーチを展開すると共に、スポーツ振興や生涯教育、老年学等のテーマに興味を持つ大学生が、成人・中高年のスポーツ活動支援や生きがい創造支援への直接的関与を可能にしていくための、学内外における学習機会として機能していくことを目指している。今年度の事務局運営は、大会開催日（11 月 11 日・12 日）が正式決定する 3 月下旬から始動し、その後、平均して週 1 回の大会運営委員会を開催し、2 月から 9 月までの期間で開催された各都道府県における地方予選大会支援と並行しながら、甲子園本大会に向けてのプログラム立案、出場者受付、PR・広報事業、財源の確保、ボランティアマネジメント等の準備作業を進め、大会前日の総会運営、大会当日運営、大会終了後の事後処理を行った。マスターズ甲子園 2017（第 14 回大会）には、16 都府県の地方予選大会から代表 16 チーム（計 756 名）が出場し、また、甲子園キャッチボール（元高校野球関係者、親子、夫婦、過去のボランティア参加者によるペアによる自由参加プログラム）に 272 ペアが参加した。神戸大学学部生・院生を中心とした全国の学生ボランティア、成人・中高年ボランティア、近畿圏の高校生を含めた計 640 名のボランティアがスポーツプロモーションの一環として大会運営を支え、本学部からは、教員 2 名、大学院生 7 名、学部生 39 名、本学部卒業生 37 名が参加した。現在、大会事務局が運営する全国高校野球 OB クラブ連合には 40 都道府県が登録し、各地方組織と本大会を支える民間団体や行政組織との連携事業として本プロジェクトを進めていく。

（人間発達専攻 長ヶ原誠）

(3) 兵庫県三木市との連携事業

兵庫県三木市と神戸大学とが協定を結んで連携事業を行っているが、その一環として、三木市の掲げる「次世代育成プロジェクト事業」に本研究科が参加して、2012 年度から「確かな学力向上プロジェクト」がスタートした。2017 年度には、「三木市学力向上推進委員会」の開催（2012 年度から継続／渡部：委員長，山下：副委員長）、「三木市学力向上サポート事業」（市立 8 中学校の校区を順次指定。2016-17 年度指定＝自由が丘中学校区の 1 中 2 小の 3 校が 2 年次を迎えて研究発表会を開催，2017-18 年度指定＝は吉川

中学校区の1中4小が初年次の研究に着手)、「ひょうごがんばりタイム(放課後における補充学習等推進事業)」(2015:4校→16:8校→17:10校)、「重点指導資料の活用」,「学習指導案データベースの運用」,「家庭学習啓発リーフレットの配布」などがなされた。

(人間発達専攻 渡部昭男・山下晃一)

(4)「兵庫障害児放課後ネットワーク」

兵庫障害児放課後ネットワークは、障害児の放課後活動を進める学童保育、放課後等デイサービスの情報交換や研修の発信役を兵庫県内で担っている自主的団体である。今年度は、2017年4月16日に第12回総会(神戸市勤労会館)を開催し、実践報告と講演会(中村隆一・立命館大学教授)を行った。また、2017年11月26日には「放課後活動にかかわる人のための学習会」を開催し、講演会と実践交流会を行い、障害のある子どもの放課後保障の取り組みについて、日々の実践に有益な意見交換ができた。今後も、発達研究の成果を地域での発達保障ネットワークづくりに生かしていきたい。

(人間発達専攻 木下孝司)

(5) 千種川流域の環境保全活動

神戸大学サイエンスショップは、平成25年度より兵庫県の千種川水系佐用川流域の市民グループ「佐用川のオオサンショウウオを守る会」の環境保全、啓発活動等への協力を行ってきた。平成27年度より、サイエンスショップがコーディネートを行い、千種川流域圏で活動するグループ「千種川圏域清流づくり委員会」による環境モニタリングの取組「千種川一斉水温調査」(8月)への総合地球環境学研究所および神戸大学人間発達環境学研究所の研究者の参画・協力が始まり、平成29年度も実施した。この調査は、同委員会が16年間にわたり継続してきた河川における多様な生物種の重要な生息要件の一つとなる夏季の水温等の市民による多地点同時調査であるが、専門家との協働により、様々な溶存イオンや安定同位体の分析等、より多くの項目の調査・分析を行う形に発展した。

平成29年の調査には、神戸大学から本研究科教員3名の他、学生5名(発達科学部人間環境学科)と大学院生1名が参加し、採取試料の集約・処理などを補助した。これまでの研究結果が、人間発達環境学研究所研究紀要の他、第7回 同位体環境学シンポジウム(平成29年12月、総合地球環境学研究所)、および第13回 共生のひろば(平成30年2月、兵庫県立人と自然の博物館)において報告された。

地域の人々への分析結果のフィードバックに関して、千種川流域のライオンズクラブのネットワークとの間でフォーラムの開催について協議を行い、平成30年度に実施する方向で企画の検討を進めた。なお、この取組は、神戸大学教育研究活性化支援経費の支援を受けた地域連携事業の一環として実施されている。また、千種川流域の市民によ

る環境調査・保全活動とそれに対するサイエンスショップ等の支援に関して、平成 29 年 7 月から 8 月にかけて、ひょうご環境体験館（佐用郡佐用町光都）において特別展示「千種川の環境を見守る地域の人々の取組みと専門家の支援」を行った。展示期間中の 7 月 23 日には、源利文特命助教による特別講演「DNA を使って水中の生き物をしらべる」が実施された。

（人間環境学専攻／サイエンスショップ 伊藤真之・大串健一）

8.3 高大連携

学部・研究科として、高大連携の取り組みを推進した。主に全学の高大連携推進事業に基づいて、兵庫下県下の指定校からの大学訪問、公開授業、出前授業などの要請に精力的に対応した。学部・研究科が当該事業を統括できたことで、学部・専攻での講師派遣の決定などが円滑に行われたといえる。

平成 29 年度高大連携事業実績調査票

高校名	実施日	対応教員名	事業内容		人数
			事業内容	詳細	
兵庫県立 加古川東高等学校	5/16	林 創	出前授業	講義	41 人
奈良県立 青翔高等学校	6/10	谷 篤史	講師派遣	指導助言	
兵庫県立 豊岡高等学校	6/23	伊藤 真之	その他	指導助言	
岐阜県立 岐阜高等学校	6/23	源 利文	講師派遣	講演 指導助言	
神戸市立 六甲アイランド 高等学校	6~2月	津田 英二	その他	カフェ・ア ゴラにて実 習	6 人
大阪府立 高津高等学校	7/11	伊藤 篤 小澤 卓也	その他	学科説明 実習体験	9 人 10 人
大阪府立 茨木高等学校	7/15	林 創	出前授業	講義	
武庫川女子大学附属 中学校 高等学校	7/24~25	伊藤 真之 源 利文 谷 篤史	その他	実験 実習	23 人
兵庫県立 龍野高等学校	7/31	伊藤 真之 青木 茂樹 蘆田 弘樹	その他	講義 実験	15 人
西宮市立 西宮東高等学校	7/31	源 利文	その他	講義 研究室見学	41 人
長崎県立 長崎東高等学校	7/14	林 創	講師派遣	講演	
岡山県立 倉敷青陵高等学校	8/2	林 創	出前授業	講義	

兵庫県立 豊岡高等学校	8/22～23	伊藤 真之	その他	実験	
兵庫県立 但馬農業高等学校	8/30	鳥居 深雪	講師派遣	教職員研修会	35 人
兵庫県立 三田祥雲高等学校	9/28	伊藤 真之	講師派遣	講評	
島根県立 松江南高等学校	10/5	山根 隆宏	その他	学科説明	6 名
沖縄県 高校生	10/19	江原 靖人	その他	講義 研究室見学	20 名
奈良県立 青翔高等学校	10/20	谷 篤史	その他	講義 研究室見学	40 名
兵庫県立 夢野台高等学校	10/24	山崎 健	その他	講義	35 名
兵庫県立 星陵高等学校	10/27	前田 正登 秋元 忍	大学体験	講義	22 名
和歌山県立 向陽高等学校	11/8	坂本 美紀	出前授業	講義	67 名
大阪府立 春日丘高等学校	11/9	丑丸 敦史 谷 篤史 江原 靖人	大学体験	学科説明 模擬授業	50 名
兵庫県立 兵庫高等学校	11/9	吉 永 潤 渡邊 隆信	大学体験	講義 施設見学	47 名
兵庫県立 長田高等学校	11/10	桑村 雅隆	出前授業	講義	78 名
神戸海星女子学院高等学校	11/16	近江戸 伸子	出前授業	講義	50 名
鳥取県 鳥取東高等学校	11/16	山口 悦司	講師派遣	指導助言	
沖縄県 高校生	11/16	蘆田 弘樹	その他	講義 研究室見学	20 名
福山誠之館高等学校	11/22	林 創	出前授業	講義	278 人
兵庫県立 星陵高等学校	11/27	江原 靖人	講師派遣	講義 発表会講評	41 人
大阪府立 大手前高等学校	12/8	河崎 佳子	出前授業	講義	30 人
兵庫県立 星陵高等学校	1/24	伊藤 真之	講師派遣	講評	30 人
清心女子高等学校	1/26	源 利文	出前授業	講義	

(発達科学部長・人間発達環境学研究科長 岡田修一)

9. 社会的活動・震災復興支援

9.1 メンタルケア関係

(1)心のケア事業

神戸大学平成 29 年度震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費として採択され

た「東日本大震災の心理的影響と支援のあり方に関する継続的研究」の一部資金を活用して、福島県中通り地区などで以下の事業を行った。

①教員等に対するセミナー・助言指導

福島県県北養護教諭部会の夏季研修会（8月3日／福島県立福島南高校）：被災経験のある高校生を理解するために、思春期の発達的特質と発達課題／発達の危機についてレクチャーを行い、質疑に応じた。あわせて、各教員が相談に応じている具体的な事例に関する発表の後、助言指導を行った。

(2)情報発信活動

これまでの事業や調査で得られた成果を以下の学会などで発信した。

①ECDP(ヨーロッパ発達心理学会)第18回大会(8月29日-9月1日／オランダ・ユトレヒト)

②神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進室第6回シンポジウム(12月1日／神戸)

③日本発達心理学会第29回大会(3月23日-25日／仙台)

東日本大震災における津波被害や原発事故の心理的影響について、福島・宮城県と大阪府のサンプルを比較しながら検討を行い、ネガティブな影響を減じるためのレジリエンス、PTG、生き方の意味について情報発信をした。なお、③では現在も福島県で被災者支援を行っているサイコロジストとソーシャルスクールワーカーの参加を得て、福島の現状と今後について参加者とともに議論を行った。

(人間発達専攻 齊藤誠一)

9.2. 災害地への支援活動

東日本大震災復興支援 岩手県大船渡市赤崎町

2011(平成23)年3月11日に津波によって大きな被害を受けた大船渡市への復興支援は、今年度で7年になる。阪神淡路大震災後の復興のプロセスと比較するまでもなく、その復興の速度は遅く、ようやく防災集団移転、災害公営住宅移転が進み始めてきた。もちろん、住環境や防潮堤建設に力点が置かれてきたため、第三次産業の復活は遅く、商店街不在、社会福祉・医療などの社会サービスの低下といった状況は、いまだ改善できていない。

とりわけ、中心街のほとんどを津波で失った同市赤崎町は、そのいずれにおいても、もっとも大船渡で遅れている地域である。2017年度段階で、まだ被災跡地をどのように活用するかが定まっていない。また、新たにバイオマス発電所建設問題も浮上してきた。住民の合意ができないまま、県・市が被災地の埋め立て地の活用計画を実行に移そうとしたため、住民から反対運動が起きている。

いまだ、出口の見えないトンネルの中に居る感が強いが、本学の支援で運営されている「赤崎復興隊」(中赤崎復興委員会・赤崎地区公民館主催事業)は、今年度も精力的に活動した。赤崎復興隊は、平成24年10月に赤崎町民の有志と、本学の学生・教職員によって構成される「まちづくり推進共同体」である。本学学生たちは、平成24年11月以後、月に一度、赤崎地区公民館(平成24年5月1日に、本研究科と連携協定と締結)で5人~20人

が、現地に赴き、ボランティアとして活動をしてきた。

本年度も、跡地を活用した赤崎復興市の企画・運営、現地の中学生・高校生による「赤崎復興隊ユース」の活動支援を中心に、月に一度、現地の復興隊メンバーとともに活動した。それに加え、災害公営住宅や仮設住宅での便利屋ボランティアなども継続的に行い、現地の人たちからは「おらがまちの若衆」と呼ばれている。

また、学生たちは、ほぼ毎月、赤崎地区公民館（平成24年5月1日、本研究科とのあいだで連携協定締結）で開催される「復興隊のつどい」にメンバーとして参加し、復興に即した具体的な事業の立案に貢献している。

さらに、平成23年7月からほぼ5年間続いている「11えん募金」も、いまだ継続している。毎月、「11日」に、3・11と1・17のご縁を紡ぐことを目的に、六甲道駅前朝・昼・夜の3回にわたり、募金活動をおこなっている。月によってばらつきがあるが、本学学生のみならず、神戸市民の参画を得ながら、10名内外の学生が、思いを込めて活動している。この活動は、多くの神戸市民から、直接励ましの声をいただくとともに、赤崎の人たちからも感謝の言葉をいただいている。今年度、中赤崎復興基金（被災住民の基金）に20万円を寄付した。また、この募金は、今年度高台に再建された赤崎小学校の登下校道路に桜を植樹する際の資金としても活用された。

学生の活動同様、教職員の支援活動も活発である。ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの松岡広路は、大船渡市復興局との活動調整や外部団体の活動を組み入れるコーディネーターとしての役割も果たしている。ESDのまちづくりと公民館活動の活性化を連動させる方策を提示してきた。同センターの井口克郎准教授も、たびたび現地を訪問し、「赤崎復興隊」のアドバイザーを務めている。跡地の土地利用計画に資する提言やバイオマス発電所建設反対運動に関する助言もしている。

赤崎町のまちづくりが順調に進むには、まだまだ時間が必要である。そして、外部からの資本（人的・物的・アイデア・社会関係）なしには、その継続的な発展は、到底、望めない。いかに、被災地と外部地域の関係を切り結ぶのか、あるいは、ESD（持続可能な開発のための教育）が被災地支援のなかに立ち現れるには、どのような取組が求められるのかをテーマとしたアクションリサーチを、今後も続けていく。また、このアクションリサーチは、朴木佳緒留の科研『女性被災者の実感を活かした被災者支援の方法再構築』の取得につながった。

（人間発達専攻 松岡広路）

10. 附属施設

10.1. 発達支援インスティテュート

10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会

本委員会は岡田修一発達支援インスティテュート長（研究科長）、松岡ヒューマンコミュニティ創成研究副センター長、相澤直樹心理教育相談室長、伊藤真之サイエンスショップ室長、稲垣成哲教育連携推進室長、及び近藤徳彦アクティブ・エイジング研究センター長で

構成される。

今年度も本委員会を毎月 1 回のペースで開催し、研究科としての研究基盤の強化を図ると同時に、毎回各室・センターの活動報告を定例化し相互の連携を強めた。特に、平成 28 年度研究科の中期計画に記述した発達支援インスティテュートの拡充・改組に係る検討を行った。

なお、本委員会の検討事項は以下のとおり。

	検討事項
第 1 回 (4 月 13 日)	第 3 期中期目標期間前半の構想について－アクション・リサーチ型共同研究プロジェクトについて検討－ 発達支援インスティテュート報告会について
第 2 回 (5 月 25 日)	第 3 期中期目標期間前半の構想について 発達支援インスティテュートの報告会について ヒューマン・コミュニティ創成研究センター規程の一部改正について
第 3 回 (6 月 29 日)	第 3 期中期目標期間前半の構想について 発達支援インスティテュートの見える化について
第 4 回 (7 月 27 日)	第 3 期中期目標期間前半の構想について 発達支援インスティテュートの見える化について
第 5 回 (9 月 13 日)	第 3 期中期目標期間前半の構想について 発達支援インスティテュートの見える化について
第 6 回 (10 月 20 日)	発達支援インスティテュートに関する部局年次計画と平成 28 年度上半期の進捗状況について 人間の発達及びそれを支える環境に関わる実践型共同研究プロジェクト 発達支援インスティテュートの機能強化をめざした体制の再構築について
第 7 回 (11 月 17 日)	研究科における研究のヤマ→研究科の教育研究活動の見える化 発達支援インスティテュートの機能強化をめざした体制の再構築について
第 8 回 (12 月 26 日)	先端融合研究環プロジェクトにかかる報告について 平成 30 年度概算要求について
第 9 回 (1 月 31 日)	平成 30 年度概算要求について 発達支援インスティテュートの拡充・改組について
第 10 回 (2 月 30 日)	平成 30 年度概算要求について 発達支援インスティテュートの拡充・改組について
第 11 回 (3 月 8 日)	ヒューマン・コミュニティ創成研究センター規定の改正について 発達支援インスティテュートの拡充・改組について

(発達支援インスティテュート長 岡田修一)

10.1.2. 心理教育相談室

心理教育相談室は、市民を対象とし、地域に開かれた相談室である。臨床心理学や心理療法に関する知見を生かして、地域の人々の心の健康に貢献することを目的としている。同時に、当相談室は、本研究科人間発達専攻臨床心理学コースが臨床心理士養成第Ⅰ種指定校としての認可を維持するために必要な実習機関であり、コース所属の学生たちの臨床訓練の場として機能する目的を有している。平成12年度に、総合人間科学研究科の附属施設として設立され、平成17年度からは同研究科附属発達支援インスティテュートの一部門に位置づけられた。心理教育上のさまざまな問題について、臨床心理学の立場から専門的な援助を提供する活動を行っている。年間を通じて開室し（年末年始、お盆の大学の一斉休業期間を除く）、カウンセリング、プレイ・セラピーなどの心理療法を中心に、必要に応じて心理テストを実施するなどの心理臨床実践を行っている。相談は有料である。相談内容は、幼児期・児童期に家庭や学校でみられる発達教育上の問題、青年期のアイデンティティ形成に絡む課題、成人期のメンタルヘルス、熟年期の家族関係や生き方に関することなど、多岐にわたっている。

相談室は、心理教育相談室運営委員会により管理運営される。委員会の構成員は、運営委員会委員長の研究科長をはじめ、相談室長、副相談室長、ほか2名の委員からなる。また、本年度の相談室スタッフは、教員5名（臨床心理学コース担当、臨床心理士）、博士後期課程心理発達論講座院生4名、前期課程臨床心理学コース院生24名（M1：12名、M2：12名）、事務補佐員1名である。

新規の相談申込みは、基本的に電話受付によって行われている。この受付業務も、臨床心理学コースの授業「臨床心理基礎実習」の一環となっており、修士課程1年（M1）の学生たちが相談室スタッフの一員として交代で臨んでいる。受付時間は、月曜日の午後1時～2時45分、火曜日～金曜日の午後1時～6時（いずれも祝日は除く）である（年末年始の1週間、お盆前後の2週間ほどは閉室）。毎年30件弱の新規相談申込みがあり、受理面接、インタビューカンファレンスを経て面接受理、担当者、継続面接の形式等が決定される。年間相談件数は、平成22年度以降おおむね1000件程度で推移しており、地域住民の心の健康に貢献する心理相談機関として、ならびに、臨床心理士養成に関わる実習機関として適切な程度の活動実績を保持している。なお、詳細な面接受付件数、面接受理数、面接回数等は年次報告資料編に掲載するとおりである。

平成22年度より、『神戸大学大学院発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要』が年1回創刊され、院生たちが心理臨床の実践研究をまとめる場となっている。今年度の第8号は、事例研究論文1篇、研究報告1篇、相談室主催子育て支援セミナー報告九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター訪問報告、相談室活動報告、相談員・研修生活動報告から構成される。

また、平成28年度から、発達支援インスティテュートHCセンターサテライト施設のびやかスペース・あーち」との共同で一般の子育て中の保護者を対象に「心理教育相談室子育て

て支援セミナー」を開催している。2回目となる今回は、『夫婦のきずなと子どものこころ』と題して、心理教育相談室の臨床相談員4名が講師となり、「こらぼ・あーち」にて11、12月に4回開催され、延べ60名の参加があった。セミナーの担当講師、日時、講演内容は以下のとおりである。

心理教育相談室子育て支援セミナー『夫婦のきずなと子どものこころ』

コース①山根隆宏准教授 臨床相談員 10月28日（土）午前10時45分～12時15分

『発達障害のある子どもの育ちと夫婦の役割～気持ちの理解と調節を中心に～』

コース②吉田圭吾教授 臨床相談員 11月4日（土）午前10時45分～12時15分

『夫婦の成り立ちと発達～子どもから見た親夫婦，子どもにとっての結婚前の親との対話』

コース③伊藤俊樹准教授 臨床相談員 11月25日（土）午前10時45分～12時15分

『イメージでつながる夫婦と子どものこころ』

コース④相澤直樹准教授 臨床相談員12月2日（土）午前10時45分～12時15分

『夫婦で支える思春期の傷つきやすい子どもたち』

（心理教育相談室長 相澤直樹）

10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創造研究センター

(1) 子ども・家庭支援部門

2017年度は、以下の各事業を実施した。

◆ドロップイン事業「ふらっと」（2005年度より継続）

「あーち」の基盤サービスの一つである。子育てひろばの提供と利用者間の交流促進、相談援助、情報提供を実施している。親子の見守りや子育て相談にあたっては、灘区保健福祉部、灘区公立保育所、神戸市 地域子育て支援センター灘などの協力を得ている。

◆アウトリーチ事業「ペリネイタル・アウトリーチ・サービス」（2006年度より継続）

早期からの拠点（ひろば）利用を促す「あーち」のもう一つの基盤サービス。地域の産婦人科と連携し、その医師・助産師が「あーち」を紹介し、親子の利用を促す。

◆コネクション事業「ビギナーズ交流会」（2012年度より継続）

「あーち」の利用開始後間もない（主に月齢6か月未満児をもつ）親同士をつなぎ、その交流を促すコネクション・プログラムを実施。利用者が「孤立・依存」から脱し、自己をエンパワメントさせていく契機となる取組である。

◆ペアレンティング事業「0歳児のパパママセミナー」（2006年度より継続）

初めて赤ちゃんを育てる家庭への予防的な親教育および仲間づくりプログラム（5月～より12月・月1回第2土曜日・計7回）である。募集にあたって灘区保健福祉部の協力を得た。

◆次世代育成事業「中・高生の赤ちゃんふれあい体験学習」（2006年度より継続）

地域の中学生・高校生（西宮市の公立高校の生徒も含む）と、上記「0歳児のパパママセミナー」に参加する親と子（赤ちゃん）とのふれあい体験学習（5月～12月・月1回第2土曜日・計7回）を実施した。地域の中学生・高校生の参加については、灘区内のNPO法人S-

pace が運営するユースステーション灘の協力を得た。

◆専門職支援事業「保育士のためのステップアップ・セミナー」(2006年度より継続)

「あーち」と連携関係にある地域の保育士(灘区内公立・私立保育所)の資質向上を目的としたセミナーを11月22日に実施した(会場は灘区役所)。テーマは「いま、改めて地域の子育て支援を考える」であった。

(担当 伊藤篤)

(2)ジェンダー・コミュニティ支援部門

「ジェンダー」や「生きづらさ」について、一人一人が日常生活の中で抱えているさまざまな問題とともに考える対話のコミュニティ(一般的に「哲学カフェ」と呼ばれている)を創成する試みをしてきた。それらの問題を「マジョリティ」の立場ではなく、むしろ「マイノリティ」の立場に立って考えていこうとする哲学的実践を行い、多様な側面から一人一人の「語り」の地平を拓き、全ての支援にかかわる営みには欠かせない「生きづらさ」の哲学を探究する。社会のさまざまな場所で潜在的に問題となっていることを、社会の中で生きている人々との対話を通して掘り起こし、問いを作り、ゆっくりじっくり考察すること、つまり、哲学的実践に取り組んでいる。例えば、ジェンダーやセクシュアリティの問題をはじめ、医療、介護、福祉、教育、テクノロジー、環境などについて、それらの問題に常に関わっている人々との対話を行う中で「何が問題であるのか」を吟味することを重視してきた。2017年度中にジェンダー・コミュニティ支援部門が開催して3つの活動について報告する。

1. 「ジェンダーや身体の高様性について考えるメルロ＝ポンティ現象学研究会」

2017年度、当該研究会を計10回開催した。メルロ＝ポンティ現象学の研究者である松葉祥一氏(同志社大学)を招き、主に、『知覚の現象学』の輪読を行いながら、ジェンダー、看護、介護、生老病死をテーマに、参加者全員で対話をし、現象学的アプローチをしながら、さまざまな問題について探究してきた。学生、院生、教員、そして一般の方々も毎回参加し、ジェンダーや現象学を中心に掘り下げて研究を続けている。哲学書の深い読解に並行して、看護や介護、気功などの実践者や専門家たちと対話をするなかで、それぞれ日常経験、身体の高き方、感情を詳細に記述していく現象学的アプローチを行うことで、生老病死のステージにいる当事者の社会的・心理的な状態の理解と支援を促進しようとする。

2. 「WACCA女性やシングルマザーと子どもたちの居場所」(神戸市長田区)での哲学カフェ

NPO法人「女性と子ども支援センターウィメンズネット・こうべ」が運営しているWACCAの支援者(主にスタッフ・ボランティア)が対象の哲学カフェを隔月のペースで開催した(2017年度は6回開催した)。この哲学カフェプロジェクトは、WACCAのスタッフ

である茂木美知子氏と大阪大学 CO デザインセンターの教員をしている高橋綾氏と共に企画・運営している。最初は、WACCA という女性・子ども支援を行う場所で開催するということを考え、スタッフやボランティアなど支援者間のジェンダー意識を高めるのが目的だったが、徐々に、スタッフやボランティアの方々（参加者の大半が女性であり、WACCA の元利用者）が自らの問題（家庭や職場での生きづらさやジェンダー問題など）を他の参加者と共有し、語り合い、そして、ともに考える「居場所」へと変容してきた。支援者のエンパワメントが利用者のエンパワメントへつながり、女性、特に、シングルマザーとその子どもたちの居場所づくりや様々な支援を構築していくプロセスにとって、ピアサポート的な哲学カフェの果たした役割は大きかったと言えよう。今後も継続していく予定である。

3. 「のびやかスペースあーち」でのジェンダー・コミュニティを考える哲学カフェ

2018年2月3日に始めた新しいプロジェクトである。長年に亘って「神戸哲学カフェ」を主宰してきたカフェフィロの藤本啓子氏を招き、このジェンダー・コミュニティを考える哲学カフェを企画運営している。このプロジェクトは、大学院生や学生に開かれた環境を作り、ジェンダー問題を多角的に考える機会を提供すると同時に、哲学カフェのファシリテーションスキルを習得できる学びの場としても機能していくことを目標にしている。地域の住民の方々、「のびやかスペースあーち」を利用しているお母さん方が参加しやすいように、毎回、哲学カフェのテーマ設定に工夫をしている。（今後は院生や学生にも企画段階から入って、一緒に実践をしていく。）今年度は2回行った。1回目（2月3日）は「イクメン」、そして、2回目（3月10日）は「女子」という一般の方々に身近なテーマで対話を行った。このプロジェクトのてつがくカフェは、2のWACCAのものとは異なり、誰でも参加でき、日常生活の中にあふれている（普段あまり深く考えない）問いについて、少し立ち止まって考えてみようという試みであり、ジェンダーを考えるグローバルな視野をもてるように市民の学びの場を構築していくことを目的にしている。

4. 子どもたちの育ちについて考える講演会「親子の文化活動のきっかけ作り ―絵本の（魅）力の再考」

長年に亘り大阪の千里青山台団地で「青山台文庫」を主宰し、子どもたちへの絵本の読み聞かせ活動をしてきた絵本研究家の正置友子氏（絵本学研究所）の講演会を開催した。正置氏に主にこれまでの絵本の活動についてわかりやすく語っていただいた。講演会全体としては、子育て支援、ジェンダー、そして文化活動という大きなテーマを掲げて、総合芸術としての絵本がどのように子どもの育ちに影響しているのか、絵本の読み聞かせを通してどのような親子の気づきがあるのか、また保育所や幼稚園、学校、地域での絵本を読む会は、どのような意味をもつのか、などという問いを、参加者と共に探求し、対話を重ねた。教育心理学や子育て支援についての研究を続けてきた本研究科の伊藤篤氏に正置氏との対談をして頂いた。近年の子育ての問題点を浮き彫りにしつつ、絵本で文化を伝えた

り、ジェンダー観などを変えたりできるのではないかという示唆に富んだ話になったように思う。この講演会を共催していただいた WACCA の茂木美知子氏が司会を務め、WACCA での絵本の活動をお話していただいた。この講演会全体を通して、「絵本+子育て支援+ジェンダー」という関係性について深く考える良い機会になった。

5. Expression of Pain and Self-directed Studies + 国際シンポジウム：痛みの表現と当事者研究

学術 Weeks のプロジェクトのところで、報告を挙げたが、「ジェンダー・コミュニティ支援部門」として共催したので、ここでも報告しておく。

本企画は、言語化できない症状（疼痛）を抱えた当事者の視点から既存の当事者研究の有効性を問い始めた。そして、今回のワークショップやシンポジウムを通して、アート表現と当事者研究を融合させ、その可能性を示唆した。まず、2017年11月17～19日に造形制作ワークショップを3回開催した。参加者は異なる疼痛を抱えた3名の当事者、それぞれの痛みをアート化する試みを Deborah Padfield 氏(ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン、スレイド美術学校)とともに実践した。3名はそれぞれの疼痛について Padfield 氏と語り合い、それぞれが疼痛をイメージした造形を制作し、氏がそれらの造形作品を写真にした。その後、氏と参加者全員でそれらの写真を見ながら、再度自らの疼痛について考え、語り直した。

11月21日に開催されたシンポジウムでは、まず、Padfield 氏にご自身のロンドンのセント・トーマス病院での疼痛患者たちとのアートコラボレーション（痛みを表現化し、その後、それぞれの作品について語るという実践）の取り組みなどについて基調講演をして頂き、その後、ワークショップの参加者3名が制作した造形作品を PowerPoint のプレゼンテーションで披露し、それらの作品について説明し、Padfield 氏とともにそれぞれの疼痛について対談をした。そして、東京で当事者研究の活動を続けている水谷みつる氏（こまば当事者研究会）に今までの当事者研究の経験や、どのようにアート表現が当事者の経験を言葉にするためのツールになり得るのかについてお話して下さった。その後、全体討論の時間を持った。本企画は、哲学とアートの知見を取り入れ、疼痛に苦しむ当事者の支援プログラムを構築することを目的としていた。シンポジウムの参加者は31名、（うち、神戸大学の院生3名ほど、歯科医師や他大学歯学部の学生、他大学のダンス研究者、慢性疼痛の当事者、音楽学者、心理学者、哲学者、支援のあり方を考えている研究者など）が集まり、痛みの表現、その伝え方について非常に奥深い、そして意味のあるディスカッションを持つことができた。

科研費研究の一環として実施した。

(担当 稲原美苗)

(3) 社会教育・サービスラーニング支援部門

2017年4月のヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下、HCセンター）の組織変更によって、新たに「社会教育・サービスラーニング支援部門」が創設された。この部門は、文字通り、学校教育以外のノンフォーマルな教育（社会教育）の教育原理・方法の探究と、ノンフォーマル教育だからこそもつ開拓性・斬新性・柔軟性・実際性を学校教育と連動させる「サービスラーニング」の在り方の探究を、実践研究のターゲットにおく部門である。

一般に、社会教育は、学校教育以外の組織的な教育活動と理解されるが、本部門では、制度化されていない幅広い教育的な活動（インフォーマル・エデュケーション）を視野に入れ、「いかに新しい教育が立ち現れるのか？」を問いとする実践的な研究も課題とする。すなわち、社会的活動のなかで「教育らしきもの＝学び」が立ち現れ、ノンフォーマル教育として輪郭をもち、その過程で制度化された教育（フォーマル教育）としての学校教育と連動して教育的効果が高まっていく、という教育生成の流れを、全体構図とする。

それゆえ、「ボランティア」「エンパワメント」「インクルージョン」「アンラーニング」「対話」「共生」「ネットワークング」「ソーシャルアクション」「持続可能な開発」など、他の部門で注視されるキーワードは、本部門においても重要となる。教育生成の全体の流れを意識したうえで、多様な領域を視野にいれながら、各キーワードを基盤とした実践・研究の連環の様態を探究することが、本部門の使命である。

現在は、こうした全体構図を否が応でも意識することになる「ESD（持続可能な開発のための教育）」をターゲットに、HCセンターの他部門との連携・協力のなかで研究的実践を展開している。ESDは、持続可能な開発という理想を実現するうえで生起する、さまざまな社会的課題間の葛藤・矛盾を教材とする新しい教育である。「ESDがいかに立ち現れるか」を問いとしてモデル実践を組み立て、ESD実践の理論化を図ることを目標としている。

具体的には、以下の5つの実践フィールドをもつ。

1. ESD ネットワーキング支援事業

国連大学認証組織（RCE 兵庫 - 神戸：「ESD 推進ネットひょうご神戸」）の組織化・企画創出の過程におけるアクションリサーチ（参与観察・関与観察など）を主とする。「自然共生地域支援部門」「インクルーシヴ社会支援部門」「国際開発実践支援部門」などのHCセンターの他の部門及び発達支援インスティテュート「サイエンスショップ」と連携しつつ、環境系・福祉系・国際開発系・まちづくり系などの多様な市民・企業・行政組織が互いの活動ベクトルを接近・交差させる過程や、協働的活動のコーディネート の在り方、及び、その過程での学習プロセスの特徴を解明する。

本年度のRCEの主な活動は、ESD グローカルスタディーツアープログラム、ESD カフェ、第2回 ESD 実践研究集会の実施であった※。

※「(5) 自然共生地域支援部門」参照

2. ESD プラットフォーム創成事業

HCセンターが主催・支援する高校生・大学を中心とする ESD 関連事業（「ESD ボラン

ティアぼらばん」「大船渡 ESD プロジェクト」「ESD 学び隊」など) の人的・物的資源の流動化を促進する時空間づくり, すなわち, プラットフォーム創成の過程におけるアクションリサーチを主とする。「大船渡 ESD プロジェクト」は, その支援母体が「ボランティア社会・学習支援部門」から「社会保障・ソーシャルアクション支援部門」へと移り, 「ESD 学び隊」は, 「自然共生地域支援部門」が主たる支援母体となっているが※, これらと本部門が所管する「ESD ボランティアぼらばん」が, 実質的に一元的な動きするようになることを企図する事業である。2017 年度末に 3 部門の間で協議され, 2018 年度より本格実施されることとなる。こうしたプラットフォーム化のなかで, あるいは, その結果として, 学生などの若者だけではなく関係者すべてに ESD が立ち現れることが期待される。このプロセスから ESD 実践に必要な条件を輪郭化しようとするものである。

※「(5) 自然共生地域支援部門」「(7) 社会保障・ソーシャルアクション支援部門」参照。

3. ESD ボランティア育成事業

2006 年に創設された「ESD ボランティアぼらばんプロジェクト」は, 当初, 新しい福祉教育・ボランティア学習の場として構想された。ワークキャンプ方式の意味をさぐるなかで, フィールドワーク・ワークショップを実験的な組み合わせで配置し, 参加者のエンパワメント・アンラーニングのプロセスとその生成条件を探究するアクションリサーチである。

本年度は, 5 月のイニシャルプログラムからはじまり, 福島被災家族支援活動, ハンセン病療養所ボランティア活動, ワークキャンプ, 1 月のスタディツアープログラムなどを実施し, 学習者の学びのプロセスについてのデータ収集を行った。

4. ESD フォーマル教育推進事業 (フォーマル教育×ノンフォーマル教育)

神戸大学のフォーマルカリキュラムとして 2006 年に設立された ESD サブコースのカリキュラム・授業内容を実験的にデザインすることを主とするアクションリサーチ。

第 1 学年に配当される「ESD 基礎 A」「ESD ボランティア論」は, 上記のノンフォーマルな ESD 事業との連動の中でデザインされている。ESD が立ち現れるサービ斯拉ーニングの在り方, および, その教育が ESD を推進する実践者育成に及ぼす効果を, 比較的自由度の高い高等教育において探究することをめざしている。ESD 総合コーディネーターの協力の元, 学習者の学びのプロセスをデータ化した。

5. ESD 社会教育・生涯学習支援促進事業

これまでも神戸市・堺市の生涯学習に関する施策策定に ESD を位置づける活動を行ってきたが, さらに, 岸和田市生涯学習基本方針※, いなみ野学園 (高齢者大学校) のカリキュラムの変更のなかで ESD を位置づけるために指導助言を行った。

※岸和田市生涯学習基本計画は, 以下の URL を参照のこと。

<https://www.city.kishiwada.osaka.jp/uploaded/attachment/57760.pdf>

以上の5つの活動を通して、ESDとしての教育形成の過程研究、すなわち、教育哲学論、学習論、主体論、方法論の各視座からESDとは何かを探究する研究を行ってきた。本年度は、約言すると、新たな取組みであるESDプラットフォーム創成事業を構想する準備を行った、ということになるだろう。

(担当 松岡広路)

(4) インクルーシブ社会支援部門

A. 2005年度よりヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設として開設している「のびやかスペースあーち」において、「子育て支援をきっかけにした共に生きるまちづくり」の実践を継続して行った。特に力を入れて実施したのは①毎週金曜日の夕方から夜にかけて実施している「よる・あーち」、②2度にわたって実施した「あーち博物館」である。

「よる・あーち」は、2006年度より実施している「あーち居場所づくり」を基盤として、2016年秋から開始したプログラムである。神戸市の「子どもの居場所づくり事業」の助成を受け、灘区連合婦人会との連携で、学習支援、子ども食堂、遊び、交流の4つの活動を柱とした複合的な場づくりである。さまざまな困難（主に社会性の問題、学力の問題、障害の問題など）をもつ子どもや家庭の支援に関心の中心に置き、その他にも障害のある青年や成人など、多様な課題を抱える人たちが、市民や学生と相互に学び合う状況を創出している。教育・研究・社会的実践の三つ巴の活動で、毎週60名前後の人たちが集まる。この実践をフィールドとした実践的研究としては、津田英二「都市型中間施設の効果と課題～「のびやかスペースあーち」10周年調査の質的データ分析から～」(『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第11巻1号、2017年9月、PP.111-119)を刊行した他、日本生命財団の委託研究を受託し、「よる・あーち」に集う市民や学生と共に参加型調査研究チームを発足させた。また、「よる・あーち」をフィールドとして、赤木和重准教授との共同研究「ユーモア的即興から生まれる表現の創発：発達障害・新喜劇・ノリツッコミ」を実施した。

「あーち博物館」は、多様な住民が地域文化創成を介して関係形成する実践として、「のびやかスペースあーち」開設当初から実施しているプログラムである。また、本プログラムは発達科学部の博物館学芸員課程の「学内実習」に位置づけ、実習生が展示の方法や展示の社会的意義などを学ぶ機会となっている。本年度は、9月に社会福祉法人たんぼぼ、彫刻家・舞台芸術家の脇谷紘氏との協働で「Bird」(空間アートの世界)を実施し、3月に大田美佐子准教授、勅使河原君江講師、稲原美苗准教授と協働して「対話を生み出す空間」(平和をテーマとした写真作品の制作・展示)を実施した。

B. 韓国ナザレ大学、ソウル市立知的障害人福祉館との協定に基づく共同研究を実施した。共同研究は、障害学生支援に優れた実績のある韓国ナザレ大学をフィールドとして、障害学生や障害学生とかかわる一般学生の学びをテーマとする。今年度は、これまでの共同研究の成果として以下の論文を上梓した。金丸彰寿、大山正博、川手さえ子、張主善、和田仁美、

岩崎陽, 塩田愛里, 高寅慶, 金明淑, 金英淑, 金榮喆, 津田英二「障害学生の「学び」から見るインクルーシブな大学教育の意義と課題～韓国ナザレ大学卒業生のインタビュー調査を踏まえて～」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第11巻1号, 2017年9月, pp.19-36。また, 12月23日に, この研究成果を報告し, さらにそれを発展させて障害者の高等教育にかかわる課題を提起する日韓学術シンポジウムを開催した。

C 学内の交流ルームに2008年度に設置されたカフェ・アゴラの運営に携わり, 障害者雇用及び実習のモデル開発を継続した。特に今年度は, 一般の寄付金を元手として, 実習生1名の短時間雇用と実習を組み合わせた活動支援に取り組んだ。

D 障害児の放課後保障の観点から2008年度から開始したインクルーシブな学童保育の支援を継続して行った。

E 知的障害者のセルフ・アドボカシーグループの支援として, 新聞編集支援を継続的に実施した。毎月1回の編集活動を支援し, 12月に第19号「フレンド新聞」を発行した。

(担当 津田英二)

(5) 自然共生地域支援部門

本部門では, 自然と共生した社会の実現を目指し, 地域住民とともに課題解決に資する研究および実践活動をおこなっている。本年度は主に以下の4つの内容を中心に活動した。

1) 農村部における自然共生社会の探求

兵庫県篠山市で, 野生動物との共生, 生物多様性保全のため農業の推進に関するアクションリサーチを行った。野生動物との共生では, 篠山市畑地区で5年前から取り組んでいる, 都市農村交流による柿収穫イベント「さる×はた合戦」を企画段階から支援した。イベント自体は雨で中止になってしまったが, コープこうべなどの若手企業人材らを対象に, 柿取りや, 獣害対策に負けない農業の実態を紹介するプログラムを実施し, 都市農村交流としての獣害対策の可能性を検討した。次に, 生物多様性保全のため農業の推進では, 篠山市エコツアー推進協議会の一員としてエコツアーの企画実施に関わった。今年度は, 地域住民と都市住民とが一緒になって行う「ホテル調査」や, 耕畜連携(米等を生産している農家に畜産農家が堆肥を提供したり, 米等農家が餌を畜産農家に提供するなどの耕種サイドと畜産サイドの連携)をテーマとしたエコツアーの実施を支援した。また, 昨年度に引き続き, 矢代集落の農家と共同で, 柿酢を用いた山の芋の減農薬栽培に取り組み, 青カビを抑制することに成功した。柿酢は, 先述した「さる×はた合戦」で昨年度収穫した柿を用いて制作したものであり, 柿は獣害問題を地域振興につなげるツールとして多様な展開が可能であることが明らかになった。

2) 自然を生かした子育て・子育て拠点施設の運営支援

兵庫県篠山市の「おとわの森子育てママフィールド～petit prix」は, 2016年7月に閉

園になった旧味間認定こども園おとわ園舎を活用して設立された地域子育て支援施設である。当施設の周囲には、子どもたちのために地域住民がボランティアに整備を行ってきた森林がある。こうした自然を生かした子育て拠点としての可能性も期待されている。そこで、自然環境を生かした子育て・子育ての環境づくりのための学びの場として「ツキイチ勉強会」をコーディネートした。今年度は、勉強会の講師に神戸大学人間発達環境学研究科の教員らを招き、この拠点でどういった学びの場を構築するのが適しているかを考える1年とした。

ツキイチ勉強会のラインナップ

	講師	参加者	タイトル
第1回			
8/30	伊藤篤	16人	子ども少しずつ大人に、親も少しずつ大人になっていきます
第2回			
9/12	津田英二	18人	「みんな違ってみんないい」のための環境づくり
第3回			
10/17	赤木和重	29人	障害のある子どもに対する「楽しい」保育・教育:素敵な実践から学ぶ
第4回			
11/17	岡崎香奈	24組	子どもの成長と音楽—参加型コンサートとワークショップ
第5回			
12/2	寺村ゆかの	8組	こどものこころに寄り添う
第6回			
1/24	松岡広路	5組	多様な世代がつながる地域づくり—ボランティアの可能性
第7回			
2/5	金坂尚人	9組	子育てにおける自然環境の役割
第8回			
3/14	清野未恵子	12人	篠山に必要な子育て・子育て環境を考えるワークショップ

3) 高校生と連携した生物多様性モニタリング

篠山市では、2013年（平成25年）に生物多様性篠山戦略（森の学校復活大作戦）を策定し、生物多様性を保全する取り組みを始めた。農業を基幹産業とする篠山市では、生物多様性に配慮した農業、また地域づくりに取り組むことが課題とされたが、篠山市内の生物多様性のホットスポットや、希少種の分布の実態は明らかにされておらず、また、それらをモニタリングする仕組みも整っていなかった。そこで、2014年に篠山市内の高校と大学と篠山市とで連携して地域の生物調査を行うチームを結成した（地域いきものラボラトリー）。地域いきものラボラトリーは、篠山産業高等学校丹南校（2016年度まで）、篠山東

雲高等学校（2017年度以降）、篠山鳳鳴高等学校、神戸大学、京都学園大学、篠山市民などが中心となっている。今年度は、2017年4/22、5/27、7/21、8/26、10/8、11/26に、篠山川を中心に河川の生物調査を行った。また、環境DNA分析と捕獲を並行して行い、希少種の分布状況から、保全活動における環境DNA分析と捕獲の各手法の利用可能性について検討した。

4) 都市部の登山者と連携したイノシシモニタリング手法の開発

六甲山系の南側斜面は狩猟禁止区域であり、イノシシ目撃頻度が算出できず、個体数推定ができていない。今年度は、昨年度に引き続き、兵庫県森林動物研究センターと共同で、西宮明昭山の会の協力を得て、イノシシの目撃情報収集システムの開発を行った。撮影した写真のメール送信によるイノシシ出没情報収集システムは構築できたが、スマホの種類が多様な分、写真アプリ多様で、写真にGPS情報を付与することが困難なこと、またスマホが思ったよりも普及していないため、いまのシステムでは、イノシシの個体数密度を推定可能な情報量を集めることが難しいことが明らかになった。

(担当 清野未恵子)

(6) ヘルスプロモーション・健康行動支援部門

ヘルスプロモーションの理論的枠組みとされる健康生成モデルの立場から、生きがい意識を日本固有のWell-beingとしてとらえ、アクション・リサーチを展開している。そして、Well-beingを中核に据えたヘルスプロモーション・健康行動支援事業をすすめている。

今年度は、地域における保健活動の支援と神戸大学附属学校園でのヘルスプロモーション部会の立ち上げが中心的な事業であった。

1) 地域における保健活動の支援

メタボリック・シンドロームの改善に注目した特定健康診査および特定保健指導について、実態調査を行い課題を明らかにし、保健指導担当者を対象とした事業を展開した。

- ① 兵庫県および滋賀県において、保健指導者を対象とし、ヘルスプロモーション・行動変容に関わる理論や実践に関する研修を行った。
- ② 大阪府泉南郡田尻町で行った調査の分析結果を踏まえ、保健指導担当者と意見交換を行った。また、ヘルスプロモーション・行動変容に関わる理論や実践に関する研修も行った。最終的に、これまで使用されていた保健指導アセスメントツールの見直しを行い、新たなアセスメントツールの開発を開始した。
- ③ 兵庫県明石市における特定健診および特定保健指導について、保健指導担当者とともに分析をした。特定健診受診率の向上を旨とした取り組みについて検討し、特定健診受診促進の活動を支援した。

2) 学校教育における活動

神戸大学附属学校園との共同体制の確立をめざし、ヘルスプロモーション部会を立ち上

げ、2回の会議を行った。

具体的な活動として、中等教育校で行った全数調査をもとに、附属学校園のヘルスプロモーションについて検討を行った。また、中等教育における食育プログラムの作成を開始した。

事業で取り組んだ成果の一部

黒川通典 小島亜未 加藤佳子 Sense of Coherence と健康な食生活を送る動機づけとの関連 日本公衆衛生雑誌 60(10) 453 2017

加藤佳子 小島亜未 黒川通典 クロノタイプと健康な食生活を送る動機づけおよび社会心理的要因との関連 日本公衆衛生雑誌 60(10) 453 2017

加藤佳子 小島亜未 永野和美 日本語版 Dutch eating behavior questionnaire for children (DEBQ-C) の妥当性と信頼性の検証 学校保健研究 59 Suppl. 39 2017

永野和美 小島亜未 加藤佳子 中高生の健康な食生活に関する行動変容ステージ別の食行動の特徴 学校保健研究 59 Suppl. 39 2017

(担当 加藤佳子)

(7) 社会保障・ソーシャルアクション支援部門

「震災復興支援プロジェクト」の企画・実施支援

2011年3月11日に津波によって大きな被害を受けた大船渡市赤崎地区への復興支援は、7年になる。赤崎地区は、防災集団移転による高台移転、災害公営住宅移転が進められつつあるが、防潮堤建設等に力点が置かれてきたため、住民生活の復興はハード、ソフトの両面において未だ道半ばである。

被災後、自宅を失った方々の多くはこの間、仮設住宅などの仮の住処での生活を余儀なくされている。2017年段階では、同地区にある仮設住宅に入居している人はいまだ多い。また、高台移転をして仮設住宅等から転居した住民についても、新しい地域におけるコミュニティづくりや、生活基盤の整備には相当の時間がかかることが予想される。高台での生活が軌道に乗るためには、様々な課題が山積しており、いっそうの支援が求められる状況である。

震災から7年が経とうとする中で目立ってきたのは、被災者の方々の疲弊である。震災後、一定の時期までは復興に取り組む機運が盛り上がったものの、長引く仮設避難生活と復興の遅れの中で、地域の方々が復興活動に取り組む余力の低下がやや見られる。こうした中で、まちづくりの意欲を喪失させないために、震災後から本学の支援で運営されている「赤崎復興隊」(中赤崎復興委員会・赤崎地区公民館主催事業。赤崎復興隊は、2012年10月に赤崎町民の有志と、本学の学生・教職員によって構成される「まちづくり推進共同体」である)の活動のあり方を、できるだけ無理せず復興に取り組めるよう工夫を試みつつ、今年度も精力的に活動した。この点に関しては、次年度も改善を試みる予定である。本年度の活動の概要は以下である。

◇「赤崎復興市」等の活動支援

本学学生たちは、2012年11月以後、月に一度、5人～20人が赤崎地区公民館（2012年5月1日に、本研究科と連携協定と締結）に赴き、支援活動をしてきた。本年度も学生ボランティアの協力を得て、津波の跡地を活用して開催された年4回（5月、6月、9月、11月）の赤崎町の復興市の企画・運営、そのほか地域の祭事行事や運動会等の開催支援を行った。現地の中学生・高校生による「赤崎復興隊ユース」や、現地の復興隊メンバーとともに復興に向けた様々な活動および交流を行った。

◇「11 えん募金」による復興支援

本学学生らが2011年7月から続けている「11 えん募金」から、今年度、赤崎復興隊に10万円、中赤崎復興基金（被災住民の基金）に10万円を寄付した。

また、2017年7月には赤崎中学校に「11 えん募金文庫」の贈呈を行った。これは、神戸大学生が選んだ図書100冊以上を、11 えん募金を基に被災地の生徒に寄贈するものである。また、2018年3月には、津波で桜並木が失われた赤崎小学校に、記念樹（桜各種）の贈呈を行った。

◇津波跡地、高台移転先におけるまちづくり支援

先述のように、赤崎町のまちづくりが順調に進むには、まだまだ様々な課題が存在する。今年度も先述の諸活動の他、赤崎地区公民館で開催される「復興隊のつどい」にメンバーとして参加し、住民ニーズに即した具体的な地域づくり構想の立案に貢献した。

一方、2017年に入り、赤崎地区では地区内にある永浜・山口地区埋め立て地における外来企業による開発計画が浮上した。同計画は地域の自然・生活環境の悪化をもたらす危険性があるほか、地域住民の合意形成プロセスを全く欠いており、住民の生活復興とかけ離れた震災後の地域開発のあり方に多くの住民が疑問を抱いている。住民の生活ニーズに基づいたまちづくりの実現のために、この問題への対応の支援も今後求められてくるであろう。

（担当 井口克郎）

(8)国際開発実践支援部門

部門立ち上げの初年度となった2017年度は、研究会の開催を通じて部門の方向性について検討を行った。2018年2月に、草の根の観点から国際協力に長年携わってこられた西島恵氏（ワールド・ビジョン・ジャパン）を招き研究会を行った。草の根国際協力の実践と課題についての情報提供を受け、参加者とともに議論を行った。今後、学外部門研究員として協力を依頼している関西圏の国際NGO職員、国際理解教育を実践する教育現場教師、および学生らの参加を得た。徐々に研究者、実践家のつながりを広げながら、実際の活動現場、組織運営、アドボカシー活動の過程で生じる諸課題について、理論的・実践的に検討する方向性を確認した。

10.1.4. のびやかスペース あーち

1. 「のびやかスペース あーち」全体の取組について

本研究科のヒューマン・コミュニティ創成研究センターは、2005（平成17）年9月より、神戸市との連携の下、灘区役所旧庁舎（現 灘消防署2階）において、サテライト施設「のびやかスペース あーち（以下、「あーち」とする）」の運営を開始した。以来、今年度末で12年半が経過する。本施設は、開設当初より「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」の拠点となることを目指して、様々な取組（プログラム等の提供）をおこなうとともに、実践的研究の場や学生・院生の実践の場（研究フィールド）を提供してきている

多様な人々や団体・組織などが「あーち」で出会うような働きかけを通して、「あーち」は徐々に地域のあらゆる立場の人々の居場所やプラットフォームとして機能するようになった。言い換えれば、互いの立場や境遇の違いを認め合い・理解し合える場、あるいは、互いに暮らしやすい地域を創っていくためにどのような活動ができるのかを考え・共有する場となってきているのである。これが「あーち」の大きな特徴であるが、その他にも、地域のボランティアに支えられた多様なプログラムのほとんどが開設当初から現在まで継続しており、多くの人々がそのプログラムを楽しんでいる点、また、新規のボランティアによる新しいプログラムも年々増えている点なども「あーち」の特徴と言える。以上のことから、「あーち」が大学の果たすべき役割のひとつである「社会貢献」を着実に果たしていると判断できよう。なお、これまでに「あーち」は次のような受賞歴がある：兵庫県「ユニバーサルまちづくり賞」平成19年度 神戸市「市民福祉奨励賞（児童福祉）」平成21年度／神戸大学「学長表彰」平成22年度／兵庫県「ひょうご子育て応援賞」平成27年度。

昨年度は、これまでの神戸市からの「*地域子育て支援拠点事業」の委託運営に加え、新たに神戸市から「**子どもの居場所づくり事業（学習支援・子ども食堂）」の委託を受けた。後者の事業は、灘区連合婦人会による協力のもと、金曜日の夜間に開催している。また、運営場所として、これまで市から無償貸与されていた灘区旧庁舎が老朽化し使用に適さなくなったため、新たな実践の場所として旧庁舎から徒歩5分程度の距離にある「灘区民ホール（3階）」の無償貸与を受け、上記の「子どもの居場所づくり事業」は先行して2016年10月より実施、2016年度末には「あーち」全体が移転し、そこで「新生 あーち」として本格稼働している。

「*地域子育て支援拠点事業」とは 地域に暮らす子育て中の親子の交流促進や育児相談等を実施し、子育ての孤立感、負担感の解消を図り、全ての子育て家庭を地域で支えるという目的のもとに2007年度より予算化された国事業である。全国で約7,063箇所（2016年度現在）ある。「あーち」では、主に「子ども家庭支援部門」が本事業の委託を受け、基本4事業（① 交流の場の提供・交流促進 ② 子育てに関する相談・援助 ③ 地域の子育て関連情報提供 ④ 子育て・子育て支援に関する講習等）を週5日実施している

「**子どもの居場所づくり事業」は、その背景として「子どもの貧困対策の推進に関する法律（2003 年成立）」がある。貧困対策のひとつとして、国が地方自治体に予算を配分し、各地域の実情に応じた多様な取り組みを促すのがこの事業である。具体的には、「子ども食堂」や「学習支援」がそれに相当する。事業の対象者としては、例えば、ひとり親であったり経済的に困難であったりするため食事面で何らかの支援が必要な子ども、学習面においては、学校の授業についていくことが困難であったり、学習の機会が乏しいといった子どもとその保護者らである。「あーち」では、主に「インクルーシヴ社会支援部門」が運営している。これまで、この部門がおこなってきた「居場所づくり」実践と「子どもの居場所づくり事業」を統合させ、プログラム名を「よる・あーち」と命名し、週 1 回（金曜日の午後 4 時～9 時）開催している。毎回、多くの未就学児・小学生・中学生・高校生および青年とその保護者、そして市民ボランティア、学生（他大学含む）・院生らが集まってくる。子ども・青年たちは学習支援を受けたり、ボランティアや保護者と夕食を共にしたり、遊びのプログラムに参加したりして、それぞれが自分のニーズに合わせて自由に過ごしている。市民ボランティアや学生らは、子どもの学習支援を担当したり保護者と交流したりしながら互いに親睦を深めている。毎回のプログラム終了後には、学生が主体となって、その日の振り返りをおこない、学生や市民ボランティア同士で意見交換をおこなっている。また、本事業の運営においては、高齢者給食に関する豊富な実績のある「灘区連合婦人会」との協働事業となっており、灘区の婦人会会員が 50 余名登録し、シフト制で調理を担当している。

「あーち」の年間利用者数（月別は後述の表 1 で提示する）は、26,096 人（延べ）であった。例年に比して、年間の利用者数の減少の理由のひとつとして、本来週 5 日の運営であるが、灘区民ホールが第 2 火曜日に休館日を設けており、「あーち」もその日に合わせて月 1 回、休館日を増やさざるを得なかったことがある。特に火曜日は、灘区公立保育所から保育士が来館しておこなう人気のプログラム「おひさまひろば あーち」（1 回につき 50～60 名の参加）があるため、年間で考えればこのプログラムだけでも約 700 名の減少となる。また本年度は 12 月に入り急激に気温が低くなったこと、またインフルエンザの流行等で来館を控えたため、冬季の乳幼児の利用者数が少なくなっていること等も考えられる。ただ、年間の利用者数を開館日数の 188 日で割ると一日平均、約 126 人（昨年度 122 人）が利用していることになり、昨年度と比べて同程度の利用である。一日の利用者数が平均して 100 名／日を超えるという実績は 2007 年度より 11 年間続いている。

本年度のプログラム開催状況を集計（2 月末日現在）すると、教員・一般ボランティアが主催するプログラムの実施回数（延べ数）は 338 回、大学の正規教育プログラムの実施回数（延べ数）は 35 回である。例年どおり、資格関連科目である博物館実習も 2 回開催された。また、2008 年度より毎年継続して ESD サブコースの授業（前期：ESD ボランティア論および ESD 基礎、後期：ESD 論および ESD 生涯学習論）に協力し、学部生が実践活動をおこなう場を提供している。このように、本年度も、「あーち」は学生の教育・実践を支援する機能を果たした。また、学部生・院生が卒業研究・修士研究の場として「あーち」を活用すること

も多く、発達支援論コース在籍生に限っても、これまで、卒業論文8編・修士論文12編・博士論文3編が提出されている(2006～2017年度)。

大学に設置されている「のびやかスペース あーち 運営委員会」とは別に、日常的に「あーち」のプログラム等にかかわっているメンバーが参加する「あーち 連絡協議会」が、例年どおり、5月・7月・9月・11月・1月・3月に開催された。この会では、「あーち」の利用者、プログラムリーダーとそのスタッフ、「ふらっと」相談員、一般のボランティア、学生、灘区まちづくり課、灘区連合婦人会 灘区社会福祉協議会、教職員が一同に会して、「あーち」の現状・プログラムの近況・新しいプログラム等に関する報告や検討がおこなわれている。また、学生などによる研究の場として「あーち」が活用されるので、この協議会は、学生からの研究依頼・計画を承認・検討する場にもなっている。

プログラム予定表、学生や利用者による絵本の紹介、利用者が担当する取材記事・コラム等を掲載する月刊広報誌を編集するために、毎月1回「あーち 通信編集会議」が開催されている。開設以来、「あーち 通信」は一度も発刊を欠いておらず、「あーち」のホームページ上で順次公開されている。「あーち 通信」は、これまで同様、利用者に配布されているだけでなく、灘区役所や灘社会福祉協議会および各児童館、さらに連携先の産婦人科クリニックにも配布・設置している。本年度末で「あーち 通信」は150号になった。

2. 「あーち」運営の主たる部門の活動について

「あーち」の日常的な運営は、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの「子ども・家庭支援部門」と「インクルーシヴ社会支援部門」が担っている。2つの部門の実践内容を以下に整理する。

<子ども・家庭支援部門>

従来から実施してきた「ドロップイン・サービス(地域子育て支援拠点事業)」「ペアレントィング・セミナー」「赤ちゃんふれあい体験学習」などを引き続き実施した。また、「赤ちゃんふれあい体験学習」に関しては、県内の高校生に加え、2012年度からは、六甲道児童館のユースステーションを通じて、灘区内の中学校・高等学校から有志の生徒を迎え、赤ちゃんやその保護者とふれあう機会を設けている。地域における連携活動として、以前から近隣の産婦人科クリニックでも「あーち」の広報をおこなっている。そのため、乳児期とその親による早期からの「あーち」利用は安定的に継続している。また、この産科施設に通院しているハイリスク家庭を「あーち」の相談員につなぐなどの協働関係も継続している。

2006年度より、地域子育て応援プラザ灘および灘区公立保育所とは、①保育士による「おひさまひろば あーち」での見守り・相談・親子遊び、②地域子育て応援プラザ灘の保育士による乳幼児健診時における「あーち」の広報、③当部門による灘区内の公立・私立保育所の保育士向けの子育て支援に関する研修会(11月に実施)の提供、④当部門による地域子育て応援プラザ灘および公立・私立保育所の主催事業に関する広報、といった形で連携・協働

体制を継続している。

「ふらっと」の相談体制については、昨年度から助産師・保育士の資格を持つ相談員を引き続き雇用、この他に、従前からの保育士・助産師・NPOからのボランティアらが相談対応を担当している。2015年度から開始した灘区歯科医師会との連携相談事業（隔月1回の歯科医師による相談日）も順調に継続している。なお、2005年開設以来継続してきた相談対応（地域子育て支援拠点事業の4事業のひとつでもある）で扱われた相談内容は毎年、整理・分類され、神戸市にも報告されているが、主な相談内容は、子どもの発育・発達（身体機能・行動・言葉・情緒・認知面等）、子どもの生活に関する事、離乳食・幼児食に関する事、親自身では育児不安、地域の子育て支援資源に関するものが多い。

2013年度より開始した「ビギナーズ交流会」は、「あーち」を初めて利用する、もしくは利用して日が浅い母親を対象としたコネクション・プログラム（利用者どうしを結びつける機会の提供）であるが、これは、2010年度に実施した「あーち」利用者対象の悉皆調査の分析結果を受けて構想・実施（月1回）している取組である。交流会の対象者は生後6か月未満の子を持つ母親であり、今年度も、毎回8～12組前後の親子が参加するプログラムとして根付いてきている。また、このプログラムは、「あーち」の教育研究補佐員（博士後期課程修了生）による実践研究の一環になっており、母親のエンパワメントがどのように導かれるかが、インタビュー調査や質問紙調査を通して探求されている。

「あーち」は、他大学からの見学や実習の場としての役割も果たしてきているが、正規カリキュラムとして協力してきているのは、園田学園女子大学の「地域育成連携実習」「経験価値統合実習」であり、本年度で4年目を迎えた。また、当部門の教員が担当する発達科学部2年生対象の授業「子どもの発達支援」では、兵庫県健康福祉部少子高齢局こども政策課と神戸新聞社地域総研企画調査部とが県内7大学の協力を得て実施する「一日パパママ体験～大学生の子育て家庭訪問～」に受講生が参加したが、訪問家庭と大学生をマッチングする場・事前の子育て体験の場として「あーち」のひろばを活用した。10月25日から12月8日の間に、24名の学生が2人1組となって乳幼児を育てている家庭を訪問した。

<インクルーシヴ社会支援部門>

インクルーシヴ社会支援部門では、「のびやかスペース あーち」が、利用者の多様性の確保と相互コミュニケーションを促進することを主旨とする試みを行っている。

基幹プログラムとして「あーち」設立初期から毎週金曜日に実施してきた「居場所づくり」プログラムを再編し、神戸市の「子どもの居場所づくり事業」を組み込んだ。「学習支援」「子ども食堂」を機能として加えて「よる・あーち」と総称し、さまざまな意味での貧困の問題をはじめとした課題に取り組んだ。市民や学生の参加も活発で、相互学習に基づくエンパワメント実践の場となっている。研究面では、「あーち」10周年調査（2015年度）として実施したインタビューをデータとした論文を発表した（津田英二「都市型中間施設の効果と課題～「のびやかスペースあーち」10周年調査の質的データ分析から～」『神戸大学大学院人

間発達環境学研究科研究紀要』第11巻1号, 2017年9月, 111~119ページ)。また, 10月から日本生命財団の研究委託を受け, 参加者から希望者を募って研究チームを組織し研究会も重ねている。

プログラム内容は, 学習支援や子ども食堂の他, 音楽プログラム, 造形プログラム, 季節ごとのイベントも行った。外部団体との相互連携も発展しており, 「子ども食堂」は神戸市連合婦人会と共同で取り組んだ。その他, 社会福祉法人かがやき神戸のクラウンパフォーマンス, 赤木和重准教授との共同研究「ユーモア的即興から生まれる表現の創発: 発達障害・新喜劇・ノリツッコミ」の実践フィールドとしての新喜劇プログラムなどにも取り組んだ。なお, このプログラムには, 神戸大学「ボランティアと社会貢献」, 「ESD論」のフィールドワーク先として多くの学生を受け入れ, また神戸大学以外にも, 神戸薬科大学, 大阪府立大学, 和歌山大学などの学生が課外学習の場として活用した。

その他, 子どもの発達に不安をもつ親を対象とした「ドーナッツ」, 音楽を通して住民の社会関係を広げることを目的とした「音楽の広場」など, 市民主体で実施するプログラムの支援を行った。また, 本年度も博物館学芸員課程との連携で博物館展示(あいち博物館)を行った。2017年9月~10月「Bird」(社会福祉法人たんぼぼ, 版画家脇谷紘氏との連携), 2018年2月~3月「対話が生まれる空間」(大田美佐子准教授, 勅使河原君江講師, 稲原美苗准教授との共同企画)であった。

3. プログラム概要・その他

ここでは, ①プログラム概要, ②見学・視察数, ③月別年間利用者数(表1), ④プログラム数とそれに対応するボランティア数(表2), ⑤「よる・あいち」利用者数・ボランティア数とその内訳(表3), ⑥連携・協力関係にある組織・団体(表4)を示す。

①プログラムの概要

子どもとその保護者を主な対象にしたプログラム

<★は本年度から開始したプログラム>

- ・ふらっと: 地域子育て支援拠点事業(ドロップイン・サービス)として週5日開設
- ・おひさまひろば あいち: 神戸市地域子育て支援センター灘の保育士・灘区公立保育所の保育士がドロップイン・サービスの利用者に対し, 見守り・相談と親子遊び(ショートプログラム)を提供
- ・ベビーマッサージ: 「あいち」利用者である母親がリーダーとなっておこなう交流プログラム
- ・あいち ビギナーズ交流会: 「あいち」を初めて利用する, または利用して日が浅い母親対象の仲間づくりプログラム(子どもの月齢6か月未満対象)
- ・ほのぼの音ランド: 音楽療法士によるリズム遊びプログラム
- ・おはなしの国: ボランティアによるストーリー・テリングと絵本の読みきかせ

- ・おはなしエプロン：ボランティアによる絵本の読み聞かせ
- ・めだか親子クラブ：退職教員が中心となった手作りおもちゃのプログラム
- ・おりがみ遊び：「あーち」の利用者である母親が子どもや保護者に楽しいおりがみを伝えるプログラム
- ・らくがきおばさんがやってきた：地域の画家が展開する自由なアート空間
- ・アートセラピー：草木などの自然のものなどを用いてアートを展開するワークショップ
- ・人形劇団 むー：「あーち」支援者や利用者が立ち上げた人形劇団
- ・おもちゃ病院：地域住民の有志によるグループが、壊れたおもちゃなどを修理してくれるプログラム

★親子のびのび体操：フリーランスで活躍する保育士による親子あそび

★リフレッシュ YOGA：「あーち」利用者による産後の母親の体調改善をめざすプログラム

★えいごであそぼう！：「あーち」利用者による幼児を対象とした英語あそび

発達障害のある子どもとその親を対象にしたプログラム

- ・ピーナッツ：発達障害児をもつ親の交流会
- ・家族教室：発達障害児をもつ親支援プログラム
- ・ぽつとらっく：発達障害児を持つ親の学習会と発達障害児の遊び場

おとなを主な対象としたプログラム

- ・筆をもとう：地域の書家による書の初歩を気軽に学ぶプログラム
- ・0歳児のパパママセミナー：子育て中の親を対象にした学習・交流プログラム
- ・中・高校生の赤ちゃんのふれあい体験学習：中・高校生が0歳児とその保護者が毎月1回交流する

○保育士のための子育て支援研修会（1回）

その他

- ・よる・あーち（居場所づくり/学習支援+子ども食堂）：多様な立場にある人たちが交流し、その時々々のプログラムを企画し実践する/子どもや青年に対して学生や市民ボランティアが個別に学習支援を実施した後、子どもや保護者、ボランティアなどが、灘区連合婦人会が調理した夕食を一緒に楽しむ
- ・音楽の広場：本研究科の院生や教員・ボランティアが主催する、誰でも楽しめる自由な音楽プログラム
- ・みんなで歌おう！：地域の作業所スタッフや実習生によるゴスペル

博物館実習

○博物館実習：2017年9月26日～10月5日「Bird」（社会福祉法人たんぽぽ、版画家脇谷紘氏との連携）

2018年2月27日～3月8日「対話が生まれる空間」（研究科教員による共同企画）

- ・あーち 通信編集会議：利用者や学生を交えて「あーち」通信をつくる場

- ・あーち 連絡協議会：プログラムリーダー、利用者、教職員等による「あーち」運営に関する会議

②「あーち」への見学・視察数

大学のサテライト施設として、社会的責任や地域貢献をはたし、アクション・リサーチの成果を社会に対してモデル提示したり発信したりする手段として、見学者やメディア取材の受け入れをおこなっている。以下は、2017年4月以降、2018年2月末日までの「見学者数」「視察者数」を機関・組織別に整理したものである。

◎「あーち」見学者など

<見学（総数 92名）>

尼崎市役所子ども政策課 3名 灘区総務課 1名 神戸市子ども家庭局 1名
ソロプチミスト六甲 4名 日本生命財団 1名 神戸市シルバーカレッジ 1名
NPO 法人やんちゃんこ 2名 東北福祉大学 1名 神戸市外国語大学 1名
海星女子学院大学 学生 16名 教員 1名 神戸松蔭女子学院大学 学生 9名
園田学園女子大学 学生 2名 兵庫大学 1名 県立西宮甲山高等学校 生徒 28名 教諭 2名 原田中学校 生徒 10名 事務 1名 神戸大学学生 5名 個人 2名

<視察・ヒアリング等（総数 40名）>

香港 Lutheran Philip House 幼稚園運営委員会 8名 韓国幼児教育視察団 20名 オリックス財団 3名 調布市議会厚生委員会 7名 兵庫教育大学大学院生 2名

<参考「よる・あーち」見学者>

神戸市こども家庭局 4名 灘区区長 1名 灘区総務長 1名 灘区まちづくり課 1名
灘区地域活動支援コーディネーター 1名 神戸市市会議員 名 砂川商店 1名
なだ障害者地域生活支援センター 2名 NPO 法人マブイ六甲 1名 NPO 法人和雅まま倶楽部 1名 高羽 cocoro 保育園 1名 ソロプチミスト 3名 社会主事講習受講者 11名
兵庫大学 1名 ナザレ大学 8名 その他個人 多数

<取材・撮影> 神戸新聞 神戸市灘まちづくり課

③2017年度「あーち」利用者数とその内訳

今年度の「あーち」の年間利用者数は、子ども 12,851人・おとな 13,245人であり、合計 26,096人（延べ数）である。この人数を今年度の開館日数である 207日で割ると、一日平均約 126人が利用していることになる。ただし、2018年3月分のデータは含まれていない。

表1 月別年間利用者数

2017年度利用者数		ふらっと		こらぼ/ゆーす		一日の利用者数		
月	開館日数	子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	合計
4	19	1066	1060	134	246	1200	1306	2506
5	18	846	821	184	284	1030	1105	2135
6	21	1137	1123	278	361	1415	1484	2899
7	20	974	908	187	299	1161	1207	2368
8	17	954	852	101	100	1055	952	2007
9	20	876	816	161	268	1037	1084	2121
10	20	1018	948	185	277	1203	1225	2428
11	19	1071	1029	226	315	1297	1344	2641
12	17	868	807	250	375	1118	1182	2300
1	18	918	836	173	253	1091	1089	2180
2	18	1032	971	212	296	1244	1267	2511
3	21	1266	1133	217	296	1483	1429	2912
合計	228	12026	11304	2308	3370	14334	14674	29008

④2017年度「あーち」プログラム数およびボランティア数

表2は、今年度に「あーち」で提供されたプログラム数およびそれにかかわったボランティア（リーダー、スタッフ、一般、学生・院生）の数である。ただし、2018年3月分のデータは含まれていない。

表2 プログラム数およびボランティア数（延べ数）

2017	月	開館日数	プログラム数				ボランティア数			プログラム見学者
			一般のプログラム	大学の授業&正規教育プログラム(実習)	プログラム総数	プログラム数一日平均	プログラムリーダー&スタッフ数	一般	学生院生	
	4	19	32	1	33	1.74	66	68	33	19
	5	18	28	3	31	1.72	81	46	30	18
	6	21	37	3	40	1.90	111	80	79	18
	7	20	32	3	35	1.75	97	58	84	24

8	17	22	3	25	1.47	61	50	24	41
9	20	32	4	36	1.80	116	106	59	20
10	20	32	4	36	1.80	103	53	84	25
11	19	28	4	32	1.68	85	43	53	14
12	17	36	3	39	2.29	119	52	74	31
1	18	28	3	31	1.72	87	47	41	8
2	18	31	3	34	1.89	86	47	33	5
3	21	38	3	41	1.95	119	88	47	22
合計	228	376	38	414	1.82	1131	738	641	245

* 基盤プログラムである「ふらっと」は毎日開催しているが、プログラム数に入れていない

* 「あーち」通信編集会議・連絡協議会・他の会議などは入れていない

* 比較的ボランティア参加の多いプログラム（順不同）

：ぼっとらっく・居場所づくり・アートセラピー・らくがきおばさん・人形劇・パパママセミナー

⑤2017年度「よる・あーち」利用者・ボランティア数とその内訳

表3は、今年度に「よる・あーち」に参加した利用者（子ども・おとな・保護者）、一般のボランティア、学生ボランティア、スタッフの数（月別年間数）である。ただし、2018年3月分のデータは含まれていない。

表3 「よる・あーち」利用数・ボランティア数（一般・学生等）・内訳（延べ数）

月		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
利用者	未就学児	12	6	8	5	6	8	8	4	13	7	9		86	
	小学生	1年	5	5	7	3	1	1	1	3	6	5	4		41
		2年	7	16	18	10	4	11	6	6	5	2	7		92
		3年	6	8	4	6	3	8	9	6	6	6	6		68
		4年	5	3	4	4	2	3	6	5	7	1	6		46
		5年	6	7	11	6	5	2	5	5	13	14	14		88
		6年	3	0	0	1	2	5	4	3	3	2	3		26
	小計	32	39	44	30	17	30	31	28	40	30	40		361	
	中学生	1年	2	4	3	4	3	4	4	3	3	3	4		37
		2年	0	0	0	0	0	2	2	2	3	4	4		17
		3年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0
	小計	0	4	3	4	3	6	6	5	6	7	8		52	
	高校生	1年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		1

	2年	1	0	2	3	1	4	3	1	5	3	5	28
	3年	6	4	9	6	2	9	8	6	8	8	6	72
	小計	7	4	11	9	3	13	11	7	13	11	12	101
	保護者	38	45	60	49	24	46	43	37	67	49	60	518
	おとな	46	38	56	44	28	49	34	24	42	45	46	452
	小計	84	83	116	93	52	95	77	61	109	94	106	970
ボランティア	一般	38	38	62	43	35	70	38	35	57	44	42	502
	学部生	28	25	57	51	19	25	39	23	40	33	26	366
	院生/研究生	5	3	3	0	1	1	3	3	3	3	1	26
	小計	71	66	122	94	55	96	80	61	100	80	69	894
スタッフ	教職員	16	13	20	16	13	20	16	12	17	16	16	175
	灘区婦人会	23	16	28	22	15	28	21	18	29	23	22	245
	小計	39	29	48	38	28	48	37	30	46	39	38	420
合計（人）		246	231	352	273	164	296	250	196	327	268	282	2885

⑥2017年度 連携・協力関係にある団体など

以下の表4は、今年度の「あーち」の運営にあたって、連携・協力を得た組織や団体名を整理したものである。

表4 連携・協力関係にある組織・団体など

団体名	連携協力の内容
神戸市市民参画推進局	運営協力
神戸市灘区保健福祉部こども家庭支援課こども保健係	0歳児のパパママセミナー&中・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習
神戸市灘区まちづくり推進部	なだ桜まつり/地域コーディネーター
灘消防署	消防訓練
神戸市地域子育て支援センター灘	ふらっと相談員/おひさまひろば あーち
灘区民ホール	運営協力/情報交換
灘区公立保育所（7か所）	ふらっと相談員/おひさまひろば あーち
灘区地域コーディネーター（元幼稚園教諭）	ふらっと相談員
灘区社会福祉協議会	ボランティアコーディネーター
灘区内児童館（10か所）	情報交換
六甲道児童館	情報交換
六甲道児童館ユースセンター	中学・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習
灘区連合婦人会	よる・あーち（子ども食堂）

社会福祉法人たんぽぽ	博物館実習／みんなで歌おう！
学童保育つむぎ	居場所づくり
カフェ「アゴラ」	居場所づくり
社会福祉法人かがやき神戸	居場所づくり
神戸ユニバーサルツーリズムセンター	居場所づくり
NPO 法人神戸子どもと教育ネットワーク	めだか親子クラブ
チャレンジひがしなだ	筆をもとう
クエスト総合研究所	アートセラピー
NPO 法人マザーズサポーター協会	おしゃべりほっとタイム
亀田マタニティ・レディース・クリニック	アウトリーチ・サービス
灘区歯科医師会	ふらっと相談員／パパママセミナー
兵庫県歯科衛生士会 神戸東支部	おくちをあへん
ママ・リッシュ トマト	0歳児のパパママセミナー
おもちゃ病院（地域の有志）	おもちゃ病院
兵庫県立西宮甲山高等学校	高校生の赤ちゃんふれあい体験学習／人形劇
園田学園女子大学	育成連携支援実習／経験値統合実習の場として提供
神戸海星女子学院大学	供
神戸大学医学部保健学科地域連携センター	ボランティア論（授業）の場として提供
	ぼっとらっく

他に個人による協力も多数あり

（のびやかスペースあーち運営委員会委員長 赤木和重）

10.1.5. サイエンスショップ

1. 概要等

サイエンスショップは、(a) 地域社会における広義の科学教育を含む市民の科学に関わる諸活動への支援、および (b) 神戸大学学生の主体的研究活動等への支援を行うことを目的とする。上記 (a) については、科学者等の専門家と市民の対話と協働を通じて、環境問題など科学に関わる地域課題への市民の取組や、社会における科学技術の進展とそれに関する政策形成過程などへの市民の参画を促す仕組づくりと実践を目指しており、実践研究として行われている。

平成 29 年度の新たな取組として、サイエンスショップが中心となって企画し、神戸大学を実施機関として提案した、優れた資質を持つ高校生を対象とした科学教育プログラムが国立研究開発法人科学技術振興機構のグローバルサイエンスキャンパスの企画として採択され、サイエンスショップが事務局としてその運営を行った。

平成 29 年度は、研究科専任教員（室長、副室長、及びその他の室員若干名（特命助教 1 名を含む））と、学術研究員 1 名（非常勤職員）^(注1)、事務補佐員 1 名（非常勤職員）の体制

で運営された。上記のグローバルサイエンスキャンパス事業に関しては、学術研究員 1 名、事務補佐員 2 名（いずれも非常勤）を配置した。

2. 平成 29 年度の主な取組

(1) グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムの企画・運営

サイエンスショップが中心となり、神戸大学計算科学教育センター等とともに企画・立案し、神戸大学を実施機関、兵庫県立大学、関西学院大学、甲南大学を共同機関として、科学技術振興機構の次世代人材育成事業の一環である「グローバルサイエンスキャンパス」に提案した企画「根源を問い革新を生む国際的科学技術人材育成挑戦プログラム」（略称 ROOT プログラム： ROOT は、Research-Oriented On-site Training Program for future innovative scientists より）が採択され、取組を開始した。サイエンスショップ室長が企画の実施主担当者を務めている。

神戸大学では、本研究科、計算科学教育センターの他、国際文化科学研究科、大学教育推進機構が主体となり、全学の理系部局の参画のもとで企画が進められる。その全学的推進のために、大学教育推進機構に「グローバルサイエンスキャンパス委員会」が設置された。また、地域の幅広い連携のもとで人材育成を推進するために、兵庫県および周辺府県等の教育委員会や、兵庫県下の先端研究機関（高輝度光科学研究センター、理化学研究所計算科学研究機構、同多細胞システム形成研究センター、兵庫県立人と自然の博物館、西はりま天文台）や、公益財団法人兵庫工業会などが連携機関として協力し、実施機関である神戸大学、共同機関を含めて GSC ひょうご神戸コンソーシアムが形成された。

このプログラムでは、毎年、科学分野で優れた資質をもつ受講生を募集、40 名程度を選抜する。大学教員による講義・実習、先端的研究機関の見学などを含む約半年間の「基礎ステージ」を経て、受講生が研究課題を提案し、評価を受けて選抜された約 8 名が大学等において研究を行なう「実践ステージ」に取組む。科学的課題設定力・探究力を培うプログラムと並行して、科学英語など国際性を高めるプログラムも展開し、実践ステージ受講生に対しては、ワシントン大学での研究成果発表を含む米国シアトルへの海外研修も実施される。初年度にあたる平成 29 年度には、6 月に実施した募集に対して 56 名の応募があり（応募者の所属学校所在地：兵庫県 46 名、奈良県 4 名、岡山県 4 名、大阪府 1 名、徳島県 1 名）、選抜された 45 名が基礎ステージを受講した。平成 30 年 1 月には実践ステージ受講生 8 名を選抜し、4 大学の研究室での研究を開始した。

なお、科学技術振興機構による支援は平成 29-32 年度の 4 年間で、支援終了後の取組みの継続が求められている。

(2) 地域社会における市民の科学活動および科学コミュニケーション支援

サイエンスショップのこれまでの取組を通じて、伊丹市（「サイエンスカフェ伊丹」）、姫路市を中心とした播磨地域（「サイエンスカフェはりま」）、南あわじ市など兵庫県内の各地

域で、サイエンスカフェをはじめとした科学に関わる活動を主体的に進める市民グループが立ち上がって着実な活動を展開し、サイエンスショップがこれを継続的に支援している。平成 29 年度神戸大学地域連携事業（課題名：「人間の発達」の実現をめざす市民活動への支援事業」、事業主体：発達支援インスティテュート）の一環として学内支援も受けて取組を進めた。

以下に本年度の主な取組等をまとめる。なお、サイエンスカフェの開催リストについては年次報告書資料編に掲載する。

(a) 千種川流域における環境モニタリング活動への協力・支援

千種川流域圏で活動するグループ「千種川圏域清流づくり委員会」による河川環境モニタリング「千種川一斉水温調査」への、総合地球環境学研究所および神戸大学人間発達環境学研究所の研究者および学生の参加・協力をコーディネートした。この調査は、同委員会が 16 年間にわたり継続してきた、河川において多様な生物種の重要な生息要件の一つとなる夏季水温等の市民による多地点同時調査であるが、専門家との新たな協働により、同位体分析等、より多くの項目の測定・分析を行う形に展開されている。

平成 29 年 7 月から 8 月には、ひょうご環境体験館（佐用郡佐用町光都）において特別展示「千種川の環境を見守る地域の人々の取組みと専門家の支援」を行った。展示期間中の 7 月 23 日には、源利文特命助教による特別講演「DNA を使って水中の生き物をしらべる」が実施された。（詳細は、「8.2. 地域連携プロジェクト、(5) 千種川流域の環境保全活動」の項に記した。）

(b) Hyogo Science E-cafe （英語によるサイエンスカフェ）

兵庫県において外国語指導助手（ALT）を務める人々を中心として発足した、科学教育と国際理解の推進を目的とするグループ Hyogo Science Coalition との共同で、英語によるサイエンスカフェの企画・開催を開始し、神戸市において 10 回を実施した。このうち、平成 29 年 7 月開催分については、複数の高校生グループが、自らの取組んだ科学研究について英語で紹介する企画を実施した。

(c) サイエンスカフェ伊丹

伊丹市を中心にサイエンスカフェの開催に取り組む市民グループ「サイエンスカフェ伊丹」によるサイエンスカフェ等の開催（10 回）を支援した。

(d) サイエンスカフェはりま

姫路市を中心とした播磨地域において、サイエンスカフェ等を開催する市民グループ「サイエンスカフェはりま」によるサイエンスカフェ開催を支援した（2 回）。

(e) サイエンスカフェ*SODA

淡路島でコミュニティ活動やその担い手の育成等に取り組む NPO 法人 ソーシャルデザインセンター淡路（SODA）によるサイエンスカフェの企画・開催に協力した（1 回）。

(f) サイエンスカフェにしのみや

西宮市の大型商業施設 阪急西宮ガーデンズ内に設置されたコミュニティ・スペース「スタジモにしのみや」で開催される「サイエンスカフェにしのみや」の開催に協力した（1回）。

この他、公益財団法人ひょうご科学技術協会及び大学コンソーシアムひょうご神戸が主催する「サイエンスカフェひょうご」の企画・運営を担い、神戸市、南あわじ市、西脇市で計3回を開催した。このうち神戸市でのサイエンスカフェでは、人間発達環境学研究科の研究者をゲストとして、将来のエネルギー資源としてのメタンハイドレートについてとりあげた。また、南あわじ市でも、人間発達環境学研究科の研究者がゲストを務め、地球型の太陽系外惑星探査の進展など宇宙科学の最新の話題を紹介した。

平成19年以降実施している、市民が科学者とともに IPCC（Intergovernmental Panel on Climate Change：気候変動に関する政府間パネル）の報告書を読み解く会「市民のための、IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」を16回開催した（第2期、第49回から第64回）。

(3) 学部・大学院教育

大学院博士前期課程の授業科目「サイエンスコミュニケーション演習」においては、履修者である大学院生が演習の一環として東大阪市立繩手中学校における「星空観望会」に参加・支援し、放射線を可視化する桐箱や、宇宙をシミュレートするバーチャルリアリティのデモンストレーションなどを行った。

また、学部授業科目「ESD論」のフィールドワークとして行われた、南あわじ市におけるため池の掻い掘りに協力した。

この他、学部学生を中心とした正課外の実践活動として、地域の小学校等で天体観望会の開催に取り組む「天文ボランティアグループ アストロノミア」も、学部、学科の壁を越えて学生が参加し、地域の児童と保護者などを対象として2回の観望会（場所：神戸大学鶴甲第2キャンパス（対象は神戸市立鶴甲小学校児童および保護者）、神戸市立なぎさ小学校）を開催した。この他、鶴甲小学校の児童を対象とした「理科実験教室」（後述）での実験1テーマの企画・実施、大阪市立科学館で開催された科学コミュニケーションイベント「サイエンスリンク in 大阪」において望遠鏡製作のコーナーを企画・担当した。

このように、サイエンスショップは、大学・大学院におけるアクティブ・ラーニング／サービス・ラーニングの場やそれを促す仕組みとしても機能している。

また、平成27年度に神戸大学全学の取組として文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）」に採択された「神戸グローバルチャレンジプログラム」について、サイエンスショップ関係教員がアジアの研究フィールドを活かす形で、発達科学部が提供する「アジア・フィールドワークコース」を実施した。平成29年度は、中国・上海および近郊の都市圏お

よび富栄養化の進む代表的な湖沼である太湖において、環境問題にかかるフィールドワークを行った。（詳細は、「5.1.7. 神戸グローバルチャレンジプログラム」の項に記載）

(4) 地域科学教育への支援と科学技術系人材育成の取組

グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムについては、項目（1）に記したが、それ以外の取組について記載する。

平成 29 年 11 月には、兵庫県生物学会と共同で「高校生私の科学研究発表会 2017」を開催した。高校生 129 名を含む 184 名の参加者があり、活発な発表、交流が行われた。優れた研究に対して、サイエンスショップより優秀賞を授与した。（詳細は、「7.2.1. 学術 WEEKS の各事業・セミナー、(3)」の項に記載）

平成 30 年 3 月には、「第 5 回 未来社会を担う人材育成のための多角連携フォーラム ～アジア太平洋価値創造ワークショップ～」を、神戸大学大学院工学研究科道場「未来社会創造研究会」、神戸大学次世代エコプロダクション創生研究プロジェクト、神戸大学学術・産業イノベーション創造本部との共同で開催した。

平成 30 年 1 月には、スーパーサイエンスハイスクール (SSH) 事業成果の地域への普及と兵庫県下の理数教育の発展を目的として活動する兵庫「咲いテク (Science & Technology)」事業推進委員会主催の「第 10 回 サイエンスフェア in 兵庫」の開催に協力し（神戸大学が共催）、グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラム紹介のポスターを出展した。このイベントは、平成 27 年度までポートアイランドの神戸国際展示場を会場として開催されてきたが、平成 28 年度以降は、神戸大学、兵庫県立大学、甲南大学、理化学研究所計算科学研究機構が共催し、神戸大学統合研究拠点をはじめとしたこれらの大学・研究機関の施設を会場として実施されている。また、同委員会による取組として平成 29 年 7 月神戸大学統合研究拠点において開催された、高校生による英語での課題研究発表会“第 3 回 Science Conference in Hyogo”の開催に協力した（神戸大学が共催）。

兵庫県立兵庫高等学校の課題探求型授業への人間発達環境学研究科大学院生の協力（平成 29 年 9 月から平成 30 年 2 月）のコーディネートを行った。同高等学校からは、大学院生による高校生への指導の教育効果が高く評価されている。

鶴甲小学校 PTA の要請を受けて、平成 19 年度以降毎年開催している「理科実験教室」を平成 29 年 7 月に実施した。また、サイエンスショップ研究員の新井敏夫氏により、成人を対象とした「つるかぶと科学教室」（平成 30 年 2-3 月に 3 回）が企画・実施された。

3. 成果発表等 （サイエンスショップの活動に直接に関わるもののみを掲載する）

(1) 論文等

- 山本雄大，陀安一郎，中野孝教，藪崎志穂，横山正，三橋弘宗，大串健一，伊藤真之，蛭名邦禎，「兵庫県千種川の河川水の水素・酸素同位体比の特徴（2015 年度）」，神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要，第 11 巻，1 号，105-109，2017

(2) 研究発表等

- 藤吉麗, 大串健一, 山本雄大, 陀安一郎, 横山正, 三橋弘宗, 古川文美子, 伊藤真之「兵庫県千種川における硫酸イオンの硫黄安定同位体比の空間分布」, 同位体環境学シンポジウム (2017年12月)
- Masayuki Itoh, “Some attempts to promote public engagement in science and technology policy in Japan”, ジョナサン・ウルフ オクスフォード大学ブラバトニック公共政策大学院教授 国際シンポ・ワークショップ (2018年1月)
- 伊藤真之, 「コミュニティにおける科学と Well-being」, 発達支援インスティテュート・シンポジウム 「Well-Being の新たな地平を拓く」 (2018年3月)

表 神戸大学サイエンスショップ 平成 29 年度の主な取組

市民科学活動支援
<ul style="list-style-type: none"> ・千種川流域における環境モニタリング活動への協力・支援 ・サイエンスカフェの開催・開催支援(サイエンスカフェ神戸(1 回)および Hyogo Science E-cafe(10 回)開催, サイエンスカフェひょうご ほかに 県下各地のサイエンスカフェ開催等支援(総計 22 件)) ・市民と研究者が協力して気候変動に関する IPCC レポートを精読する会「市民のための, IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」の定期開催(16 回) ・つるかぶと科学教室開催(3 回: 学外研究員による企画) 他
地域の科学教育支援
<ul style="list-style-type: none"> ・神戸市立鶴甲小学校 PTA からの依頼を受けた児童と保護者を対象とした理科実験教室の開催 ・兵庫県立兵庫高等学校における課題探求型授業「創造基礎」への協力(大学院生による研究・実習等指導) ほかに ・第 3 回 Science Conference in Hyogo 開催協力(神戸大学が共催)
大学教育・学生の活動
<ul style="list-style-type: none"> ・サイエンスコミュニケーション演習, ヒューマンコミュニティ創成研究(大学院)等の授業支援 ・天文ボランティアグループ「アストロミア」による天体観望会の開催(神戸市立なぎさ小学校他) ・神戸グローバルチャレンジプログラム 発達科学部「アジア・フィールドワークコース」運営
研究会等の主催・共催
<ul style="list-style-type: none"> ・「高校生・私の科学研究発表会 2017/兵庫県生物学会 2017 研究発表会」開催(主催: 兵庫県生物学会, 神戸大学サイエンスショップ) ・第 5 回 未来社会を担う人材育成のための多角連携フォーラム～アジア太平洋価値創造ワークショップ～ (5th Multi-stakeholder Forum on Human Development toward Future Society: Asia-Pacific Workshop on Value Creation 2018)
イベント等開催協力
<ul style="list-style-type: none"> ・サイエンスカフェひょうご(主催: 大学コンソーシアムひょうご神戸社会連携委員会, (公財)ひょうご科学技術協会) 神戸市, 南あわじ市, 西脇市で開催・開催支援 ・サイエンスカフェはりま(主催: サイエンスカフェはりま) 姫路市他 ・サイエンスカフェ伊丹(主催: サイエンスカフェ伊丹) 伊丹市 ・サイエンスカフェ*SODA(主催: ソーシャルデザインセンター淡路)南あわじ市
研究・開発等

- ・「メタ科学技術研究プロジェクト:方法・倫理・政策の総合的研究」(神戸大学先端融合研究環 人文・社会科学系融合研究領域:人文学研究科等との共同)
 - ・日本学術振興会「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」(領域開拓プログラム)」(人文学研究科等との共同:分担)
 - ・市民環境活動への専門家の参画・支援に関する実践研究(総合地球環境学研究所等との共同)
- 他

(サイエンスショップ室長 伊藤真之)

10.1.6. 教育連携推進室

教育連携推進室では、教育連携部門、研究開発部門、拠点形成部門においてそれぞれの活動を行った。

まず、教育連携部門では、神戸市教育委員会との連携をすすめた。特に、神戸市立葺合高等学校のSGH事業に関して、生徒の課題研究に関する支援をすすめていくための事業を、大学生・大学院生の組織を作り、取り組んだ。次に、研究開発部門では、高度教員養成プログラムを実施し、6回のセミナーと神戸大学の附属学校園や地域の学校や教育施設等をフィールドとした教育実践のアクション・リサーチを含む理論的・実践的研究の推進に寄与した。本年度の認定証発行は7名であった。また、教育連携推進室としては、独立行政法人教職員支援機構による「教員の資質向上のための研修プログラム開発支援事業」に採択され、神戸市教育委員会との連携により教員・保育士向け自己啓発研修「つばめセミナー」のプログラムを開発した。その他、室員の個人研究では、堺市による「幼児教育評価指標作成及び評価分析に関する研究」が受託され、振り返り資料とその活用モデルが開発された。また同様に、尼崎大学・学びと育ち研究所との連携も着手されている。最後に拠点形成部門では、国内外の拠点形成を目指して、調査活動に従事した。2017年9月には、ドレスデン工科大学教職センターより3名の教員が研究交流のために来学された。今後の連携の深化が期待される場所である。

なお、教育連携推進室は、教育連携を推進することがその使命とされているが、連携の内容が新学部の教務的な内容であることが多く、研究科の研究・教育組織としての立ち位置はかなり難しいものとなっている。この状況を解消し、今後、名称及び規程の改訂も含め、発展的な方向にいかにより体制を立て直すかが課題である。

(教育連携推進室長 稲垣成哲)

10.1.7. アクティブエイジング研究センター

1. 運営・活動体制

(1) 運営委員会の審議内容等

メール審議も含め、8回の運営委員会を開催し、予算執行、学内・学外研究員、プロジェク

ト支援, 国際共同研究, 報告会, セミナー等に関して, 報告・審議を行った。

(2) 運営委員

2018 年度運営体制の審議を行い (2018 年 3 月 16 日), 以下のように決定した。
長ヶ原誠 (センター長), 片桐恵子 (副センター長), 岡田修一, 近藤徳彦, 増本康平,
平山洋介, 井上真理, 田畑智博, 齊藤誠一, 木村哲也, 古谷真樹, 岡崎香奈, 原田和弘

(3) 専門教員

2016 年度と同様に運営・研究に携わる教員の協力を得た (原田和弘特命助教)。

(4) 教務補佐員

2017 年度, 教務補佐員 1 名を雇用した (西谷今日子)。なお, 2018 年度は八木倫子氏を
雇用予定。

(5) 学外研究員

プロジェクト 1) の学外研究員を受け入れた。

Ms Maytiya Changcharoen (Faculty of Science, Kasetsart University, Thailand)

2. プロジェクトの推進

(1) プロジェクトメンバーと内容

2017 年度は 13 のプロジェクトに 2 つのプロジェクトが加わり (14, 15), 研究活動を行
った。

1) 鶴甲いきいきまちづくり-アクティブエイジングを目指して

メンバー: 岡田修一, 近藤徳彦, 長ヶ原誠, 片桐恵子, 増本康平, 学外研究者

期間: 2010 年度~2020 年度

内容: オールドニュータウンである鶴甲地区を対象に, 多世代が心身ともに健やかで
将来の希望に満ちた, 安全に暮らせるまちづくりを支援するものである。アカデミッ
ク・サロン (大学内で行うイベント) を鶴甲地区の住民の学びと活動の場の基礎とし,
大学をコミュニティの中心に位置付け, このサロンを通して, 住民同士のネットワー
クを形成するとともに, サロンの継続に必要なファシリテーターを養成し, 住民が企
画・運営するコミュニティ活動を支援する。

2) 住民ネットワーク形成の客観的検証方法の確立

メンバー: 増本康平, 岡田修一, 近藤徳彦, 長ヶ原誠, 片桐恵子, 木村哲也, 古谷真
樹, 研究科共同研究者 4 名

期間: 2015 年度~2017 年度

内容：ウェアラブルセンサデバイスによって対面コミュニケーション行動データを自動収集し、ネットワーク解析を行うことで住民交流の現状や変化，キーパーソンを把握し，支え合い・助け合いの基盤となる住民ネットワークの活性化につなげる。

3) 男女の違いや個人差を考慮した健康増進支援プロジェクト

メンバー：近藤徳彦，岡田修一，中村晴信，古谷真樹，井上真理，齊藤誠一，木村哲也，佐藤幸治

期間：2015年度～2019年度

内容：健康行動（食・睡眠・運動）を支援するため，これらに関する環境を工夫することにより健康を支援する方法を提案する。その際，これまで十分な情報が得られていない男女の違いや個人差からアプローチする。

4) 高齢者の身体システム機能維持・向上への学際的プロジェクト

メンバー：木村哲也，佐藤幸治，学外研究者

期間：2015年度～2017年度

内容：高齢者の身体システム機能の維持・向上に対して，基礎研究及びその成果に基づいた社会実装を，応用生理学，運動生理・生化学，バイオメカニクス，生体工学の各観点を統合して学際的に実施する。現在取り組み中の具体的課題は，立位バランス神経制御則の解明や高齢者の筋機能の向上である。

5) 都市住居高齢者の日常活動の国際比較

メンバー：片桐恵子，原田和弘，福沢愛，学外研究者1名，海外研究者2名

期間：2015年度～2018年度

内容：都市に居住する高齢者がどのような日常活動を行っているのか，その活動量はどの程度か，活動がどのように気分や健康に関連しているか，などの実態の解明とそれらの関連を，日本（神戸）と韓国（ソウル）との国際比較から検討する。

6) 超高齢化社会を見据えた持続可能なごみ処理施策の提案

メンバー：田畑智博，片桐恵子

期間：2015年度～2018年度

内容：高齢者世帯の増加が将来の自治体のごみ処理施策に及ぼす環境的・経済的影響を，シミュレーション分析により明らかにする。ごみ分別等の住民負担の限界と対策の検討を通じて，超高齢化社会に相応しい持続可能な自治体のごみ処理施策を提案する。

- 7) 関西ワールドマスターズゲームズ 2021 レガシー創造支援研究
メンバー：長ヶ原誠，岡田修一，近藤徳彦，片桐恵子，増本康平，学外研究者 3 名
期間：2015 年度～2022 年度
内容：2021 年に関西広域で開催が決定した生涯スポーツの国際大会がもたらすレガシー（遺産）創造に向けた振興事業アクションリサーチの展開と効果検証のモニタリング評価を実施し，成人・中高年者を対象とした参加型のスポーツメガイイベント開催が個人と地域の活性化に及ぼす影響過程を検証する。
- 8) 高齢期の意思決定バイアスの解明と自律に向けた生涯学習プログラムの開発
メンバー：増本康平，学外研究者 2 名
期間：2015 年度～2017 年度
内容：高齢者の意思決定バイアスの特徴を明らかにし，高齢者に適した意思決定の支援方法を明確にする。最終的には，高齢期の自律を目標とした「選び方を選ぶ」生涯学習プログラムを開発する。
- 9) マスターズ甲子園によるアクティブエイジング活性化の検証
メンバー：長ヶ原誠，学外研究者 3 名
期間：2015 年度～2017 年度
内容：高校野球部 OB クラブの拡大を目指して始動したマスターズ甲子園の各地方予選・全国大会の開催が及ぼすアクティブエイジングに関わる諸効果を検証し，スポーツ同窓会結成支援による活動的な加齢文化の推進に着目した生涯スポーツプロモーション事業の可能性と課題を提示する。
- 10) サードエイジ・プロジェクト
メンバー：片桐恵子，福沢愛，学外研究者 2
期間：2015 年度～2019 年度
内容：これまでの高齢者とは異なる新しいシニア層である団塊世代以降の人のライフスタイルや志向を把握し，定年後の社会参加や就労について検討し，新たなシニアの社会的な役割を提案する。
- 11) 異世代間交流のプロジェクト
メンバー：片桐恵子，学外研究者 1，海外研究者 1 名
期間：2015 年度～2019 年度
内容：家族や地域の絆の減衰が指摘されている中で，異世代間交流の実態と課題を検討する。異世代間交流を活発化するような age friendly university のあり方について，アイルランドとの国際比較を実施しながら探索する。

12) 超高齢社会における複数住宅所有の実態と役割

メンバー：平山洋介，学外研究員 1 名

期間：2017 年度～2019 年度

内容：高齢化が進む社会のなかで，複数の住宅を所有する世帯が増えている。付加的な住宅はレントアウト収入をもたらし，高齢者の経済セキュリティを形成するケースがある。ここでは，高齢社会の安定の維持における複数住宅所有の可能性と限界を明らかにする。

13) 活動的な生活習慣と健康増進プロジェクト

メンバー：原田和弘，近藤徳彦，学内・学外研究員

期間：2017 年度～2020 年度

内容：高齢者において，活動的な生活習慣が形成・維持されるプロセスには，どのような要因が関わっているのかを学際的な観点から明らかにする。また，その知見に基づき，活動的な生活習慣の効果的な支援方法を開発する。

14) アクティブライフ評価と健康寿命の延伸・認知症予防対策

メンバー：近藤徳彦，増本康平，木村哲也，佐藤幸治，原田和弘，学内研究員

期間：2017 年度～2022 年度

内容：中年期までの活動的な生活習慣（＝アクティブライフ）が，健康寿命の延伸や認知症発症を防ぐ効果があるかどうか注目が集まっている。本研究では幅広い年代のアクティブライフを，経年的に，かつ，正確に測定し，アクティブライフと健康・認知症に関するデータの構築を目指す。これにより健康寿命の延伸や認知症予防に効果的な生活習慣対策を検討する。

15) プロジェクト名：更年期女性の身体的変化と心理的適応

メンバー：齊藤誠一，田中美帆，学外研究員

期間：2017 年度～2020 年度

内容：40 歳代後半から閉経に向けて生じる女性の身体的変化の時期である更年期において，どのような身体的変化が生じ，その変化にどのように適応していくか，あるいは同時期の配偶者や子の発達の状況とどのように相互作用しているのかについて検討を行い，その後の中年期後期への望ましい発達のあり方を提案していく。

(2) プロジェクトに関わる外部資金

各プロジェクトはそれぞれ外部資金を獲得し，研究を推進している。また，学内予算によりプロジェクト推進支援を行ってきた。さらに，大学と連携したまちづくりチャレンジ事業助成（神戸市灘区）による活動，株式会社トータルブレインケアとの共同研究を開始した（ブ

ロジェクト14)。

3. セミナー

以下のセミナーをセンター主催・後援した。

(1) 2017年6月23日 15:00～17:00 中会議室B

講師: Dr. Toby Mündel (School of Sport and Exercise, Massey University, New Zealand)

演題: Sex, sweating and sports performance

(2) 2017年11月12日～17日 生田神社会館

第17回環境人間工学国際会議 (代表 近藤徳彦)

(3) 2018年3月9日 12:00～14:30

講師: Soondool Chung 教授 (梨花女子大学年齢統合研究所, 韓国)

演題: Age integration 研究について

(4) 2018年3月15日 10:00～11:30

講師: 国立台湾師範大学 廖崑准教授

Dr. Yung Liao, Associate Professor, Taiwan Normal University

演題: 台湾高齢者における自宅近隣環境と健康行動変容 Neighborhood environment and health behavior change among older adults in Taiwan

4. 連携活動と協定

(1) 連携活動

以下の学内プロジェクトと連携活動を実施した。

1) スマートシティプロジェクト (神戸市・神戸大学)

2) アクティブエイジングをIT人工知能により支援強化するプロジェクト (科学技術イノベーション研究科)

3) 認知症予防プロジェクト (神戸大学)

(2) 協定

人間発達環境学研究科の発達支援インスティテュートと Ewha Institute for Age Integration Research (EIAIR), Ewha Womans University との間に国際交流に関わる覚書が締結され (2018年1月), これをベースに EIAIR との共同研究の議論を始めた。

(センター長 近藤徳彦)

10.2. 実習観察園の運営利用状況

平成 29 年度の実習観察園の概要および活動内容は以下の通りである。

○実習観察園施設および概略図

実習観察園の概略は図 1 の通りで、前年と変わりはない。灰色で示した部分は、自然環境論コースの教員が研究のために設置したビニルハウスである。

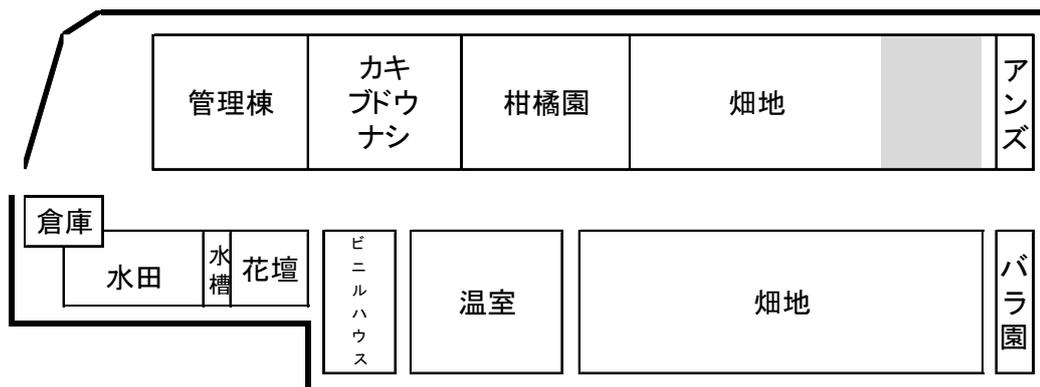


図 1 施設・作付概要

○作付面積および作付植物

作付面積および作付作物はそれぞれ表 1 および表 2 に示した通りである。

表 1 作付面積 (㎡)

種別	面積	備考
畑地	352	教材・実習用
果樹園	255	教材・実習用
水田	70	実習・研究用
バラ園	35	園内美化・実習用
花壇	25	園内美化・実習用
計	735	

表 2 作付植物

種類	植物
野菜	コマツナ、ホウレンソウ、キャベツ、キュウリ カボチャ、スイカ、トマト、オクラ、ピーマン
	イチゴ、ナス、ダイコン、カブ、タマネギ、ニンジン
マメ・穀類	ダイズ、ラッカセイ、ソラマメ、インゲンマメ ジャガイモ、サツマイモ、トウモロコシ、イネ
果樹	なつみかん、ハッサク、温州みかん、スタチ ユズ、キンカン、カキ(富有、サエフジ)、ブドウ (ビオーネ、デラウエア)、スモモ
	ナシ(長十郎、菊水)、イチジク
花卉	ペゴニア、マリーゴールド、ペチュニア、サルビア キンセンカ、バーベナ、トレニア、デモルフォセカ
	マツバボタン、スベリヒユ、ヒマワリ、アサガオ ハボタン、チューリップ、ナデシコ、バラ

春夏期 北

サツマイモ	花	花	サツマイモ	自然環境論コース 実験用ビニール									
-------	---	---	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	---------------------	--	--	--

園芸教室	園芸教室	園芸教室	植物環境学 実験実習	植物環境学 実験実習	幼児環境 指導法	幼児環境 指導法	幼児環境 指導法	トウモロコシ	ピーマン・ナス	ゴーヤ・キュウリ	トマト	サツマイモ	サツマイモ	サツマイモ	スイカ・カボチャ
------	------	------	---------------	---------------	-------------	-------------	-------------	--------	---------	----------	-----	-------	-------	-------	----------

秋冬期 北

ジャガイモ	ソラマメ・エンドウ	タマネギ	タマネギ	イチゴ	イチゴ	イチゴ	イチゴ	イチゴ	自然環境論コース 実験用ビニール ハウス			
-------	-----------	------	------	-----	-----	-----	-----	-----	----------------------------	--	--	--

付属吉 中学校	付属吉 中学校	ジャガイモ	ジャガイモ	ジャガイモ	園芸教室	園芸教室	園芸教室	ダイコン	チンゲンサイ	ハツカダイコン	ミズナ	ホウレンソウ	コマツナ	シュンギク		
------------	------------	-------	-------	-------	------	------	------	------	--------	---------	-----	--------	------	-------	--	--

図2 29年度畑地作付配置図

○教育（実習）活動

本年度も表3に示した授業で、学生・大学院生が活用している。

「植物環境学実験実習」での、利用の内容は、植物栽培に関すること、すなわち、畝立て、土作り、草花や野菜の種まき、育苗、鉢上げ、定植、誘引、かき、収穫、挿し芽繁殖、花壇・緑化設計と制作などである。これらの他に、プランターや鉢植え栽培による校内美化の指導も行っている。果樹類については、開花の観察、摘花、摘果、無核化处理などの説明に利用している。

「幼児環境指導法」において、履修者が実践的に“植物と子供の遊び”というテーマで、幼稚園児の指導をおこなうことを想定し、七夕飾り、ササのおもちゃ作成、草もちの作製をおこなった（図3）。タケ、ササの来歴、違い、利用法について、講義をおこなった。能動的に学修するアクティブ・ラーニングとして、五感を活用した実習をおこなった。

表3 授業としての学生利用数

授 業 名					
	2013	2014	2015	2016	2017
生活環境緑化論1	57	45	44	-	-
生活環境緑化論2	40	9	39	-	-
生活環境緑化論演習	11	8	11	-	-
幼児環境指導法	25	42	20	24	26
植物環境学実験実習	22	16	16	24	17
生活環境緑化特論演習	2	1	-	-	-
植物環境学特論I	21	12	2	-	-
計	178	133	132	48	43



図3 草遊び

○研究のための利用

人間発達環境学研究科および発達科学部の教員ならびに学生が研究と論文作成のため、本園を活用している。

1) アオキ *Aucuba japonica* の発芽実験

「観賞果実への鳥類等の干渉に関する研究」のために鳥類散布型植物であるアオキ *Aucuba japonica* を用いて発芽実験を行った。実習観察園の温室で園芸品種を含めたアオキの種子約4000粒を播種した。アオキは播種から発芽するまでに3か月以上必要で、22か月以上経過した現在も発芽する種子が見られる。埋土種子の発芽能力は1年以上あることが確認でき、発芽後の生育も極めて遅いため現在も生育観察中である。

利用者：大野朋子，学外共同研究者1名

2) マツの年輪計測

発達科学部4回生の卒業研究「大阪府浜寺公園におけるクロマツの年輪成長と環境要

因」(担当教員；大野朋子)のため、実習観察園内で枯死したマツの年輪計測を行った。計測した年輪は5サンプル(樹齢109年, 106年, 52年, 37年, 117年)である。10月に園内において年輪表面の研磨を行いながら写真撮影および年輪幅等の計測を行った。

利用者：学生(4回生)1名

3) ツユクサ・ケツユクサの栽培実験

人間発達研究科D1の「修士論文研究」とM1の「修士論文研究」(担当教員：丑丸敦史)として、人間発達環境学研究科の施設である実習観察園に設置した温室内で栽培したツユクサ属2品種、ツユクサおよびケツユクサを対象に、「花序の資源コントロール実験(苞除去実験)」を行い、実生の植え付け(4月下旬)から結実期(10月中旬)まで温室内での開花観察および実験操作を行った。研究補助として、発達科学部生数名の協力があった。

利用者：大学院生2名, 協力学部学生約3名

○他機関の利用

1) 田植え体験・稲刈り体験

神戸市灘区の鶴甲幼稚園の園児約80名と教諭が、人間発達環境学研究科の施設である実習観察園で田植えを実践し、実際に体を動かして五感を活用した体験を行った。発達科学部の授業科目「幼児環境指導法」(担当教員：近江戸伸子教授, 大野朋子准教授)において、履修者23名が実践的に幼稚園児の指導を行った。

田植え：2017年5月23日

参加者：鶴甲幼稚園5歳児約80名, 同園教諭等5名, 発達科学部学生23名

稲刈り：2017年10月25日

参加者：鶴甲幼稚園5歳児約80名, 同園教諭等5名, 発達科学部, 人間発達環境学学生4名



図4 大学生と幼稚園児の田植え実践学習



幼稚園児の稲刈り

2) 交流ルーム「カフェ・アゴラ」における知的障害のある実習生の実習活動への協力

交流ルーム「カフェ・アゴラ」では、知的障害のある青年・成人に対して多様な社会経験を提供する活動を行っている。その実習活動の一環に 農園での作業を組み込んだ。今年度は花壇の除草，農具の洗浄等に取り組んだ。

3) 鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト 園芸教室の開催

高齢化が進行している地域コミュニティにおいて、多世代が心身ともに健やかで希望に満ちた、安全な暮らしができるまちづくりは急務であり、住民が主体的に、多世代の交流を促進し、その中で課題を見つけ、学び、活動していく生涯学習の実践の場づくりが大事である。地域社会のこのような現状に対し、本研究科がもつ人的・物的・空間的リソースを活用して、どのような支援が可能か検討する、「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」を立ち上げた。実習観察園を活用した園芸教室はその一環の活動である。

春、秋ともに10歳代から80歳代までの多世代が参加し、参加者（春・秋、各30名）がグループに分かれ、それぞれのグループ毎に野菜や花の栽培を楽しんだ(図5)。

春の園芸教室 5月20日(土)、6月17日(土)、7月8日(土)

秋の園芸教室 9月23日(土)、10月14日(土)、11月25日(土)、12月16日(土)



図5 「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」園芸教室

4) 野菜探求プロジェクト～植と食の融合～ 神戸大学附属中等教育学校

テーマを「野菜探求プロジェクト～植と食の融合～」とし、ESD Food プロジェクトの活動の一環として行った。野菜の栽培、観察、収穫などを体験することを通して、野菜について探究し理解を深める。目的は、以下の知識やスキル等の獲得を目的としておこなった。

(1) 生産から消費まで食の循環を理解することができる。(2) 野菜について探究することができる。(3) 食べ物や食に関わる人々に感謝する心を育むことができる。(4) 地域の方々と交流することができる。

参加者 中等教育学校生10名、同校教員2名

利用期間：8月24日(木)，9月23日(土)，10月14日(土)，11月25日(土)，
12月16日(土)

5) アライグマによる生態系への被害検証に関する調査

アライグマによる都市部における被害の現状，および生態系への影響を明らかにし，環境保全及び，市街地での捕獲効率向上を目的とした調査をおこなう。神戸市灘区の住宅街におけるアライグマの生息実態調査のための動画撮影と学術研究捕獲により検証を目的とする。兵庫県立大学大学院院生1名による調査であった。

利用期間：2016年12月1日～2017年11月18日

今後も地域や学校等の要請等も積極的に受け入れ，授業ならびに研究で，利活用を図る予定である。

(実習観察園運営委員長 近江戸伸子)

